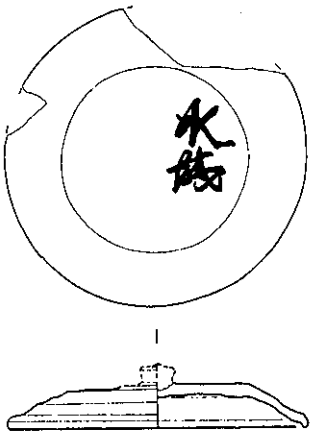
水　城　跡

－上　巻－



2009

九州歴史資料館

水　城　跡

－上　巻－

2009

九州歴史資料館

『水城跡』 正誤表

上巻

頁	行	誤		正	
15頁	19行	寛弘2年(1005)7月23日条には，…	→	寛弘2年(1005)7月10日条には，…	
87頁	Fig.70	下部中央南壁 28.80m	→	下部中央南壁 B B´28.80m	
87頁	Fig.70	下部中央北壁 B B´28.00m	→	下部中央北壁 C C´28.00m	
88頁	Fig.71	C東西土層 C´30.40m	→	D東西土層 D´30.40m	
88頁	Fig.71	D中央南北土層 D´30.00m	→	E中央南北土層 E´30.00m	
88頁	Fig.71	E東西土層 E´30.00m	→	F東側南北土層 F´30.00m	

下巻

頁	行	誤		正
333頁	8行	…を整備した(Fig. 1)。…	→	…を整備した(Fig. 257)。…
335頁	2行	上述の上墓土墨跡が…	→	上述の上津土墨跡が…
336頁	23行	…に当たる(Fig. 2)。…	→	…に当たる(Fig. 258)。…
386頁	7行	福岡懸罫紙に…福岡懸廳社寺兵事課…	→	福岡縣罫紙…福岡縣廳社寺兵事課…
		(以下，第Ⅷ章 (5) 4)における「懸」は「縣」の誤り)		
390頁	16行	鏡山 猛1974『大宰府遺跡』…	→	鏡山 猛1979『大宰府遺跡』…
PL.2	(2)	水城跡遠景(南上空から 昭和40年頃)	→	水城跡遠景(北上空から 昭和40年頃)

水城跡全景航空写真

(1) 大宰府政庁跡と水城跡

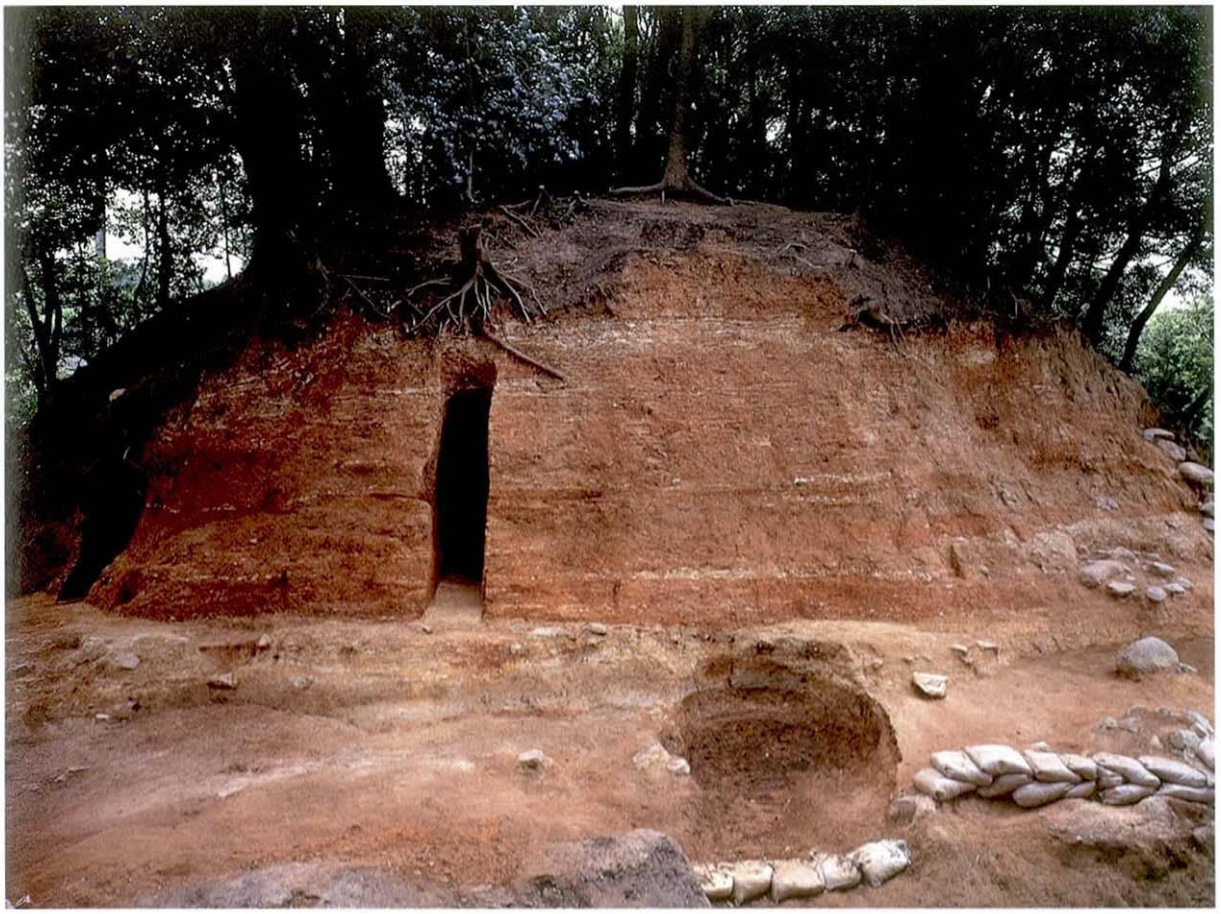
(2) 筑前大宰府水城の一部切掘図（久富寿年筆　東京大学日本史学研究室蔵）

(1) 西門全景（26次調査）

(2) 西門Ⅰ期遺構（26次調査）

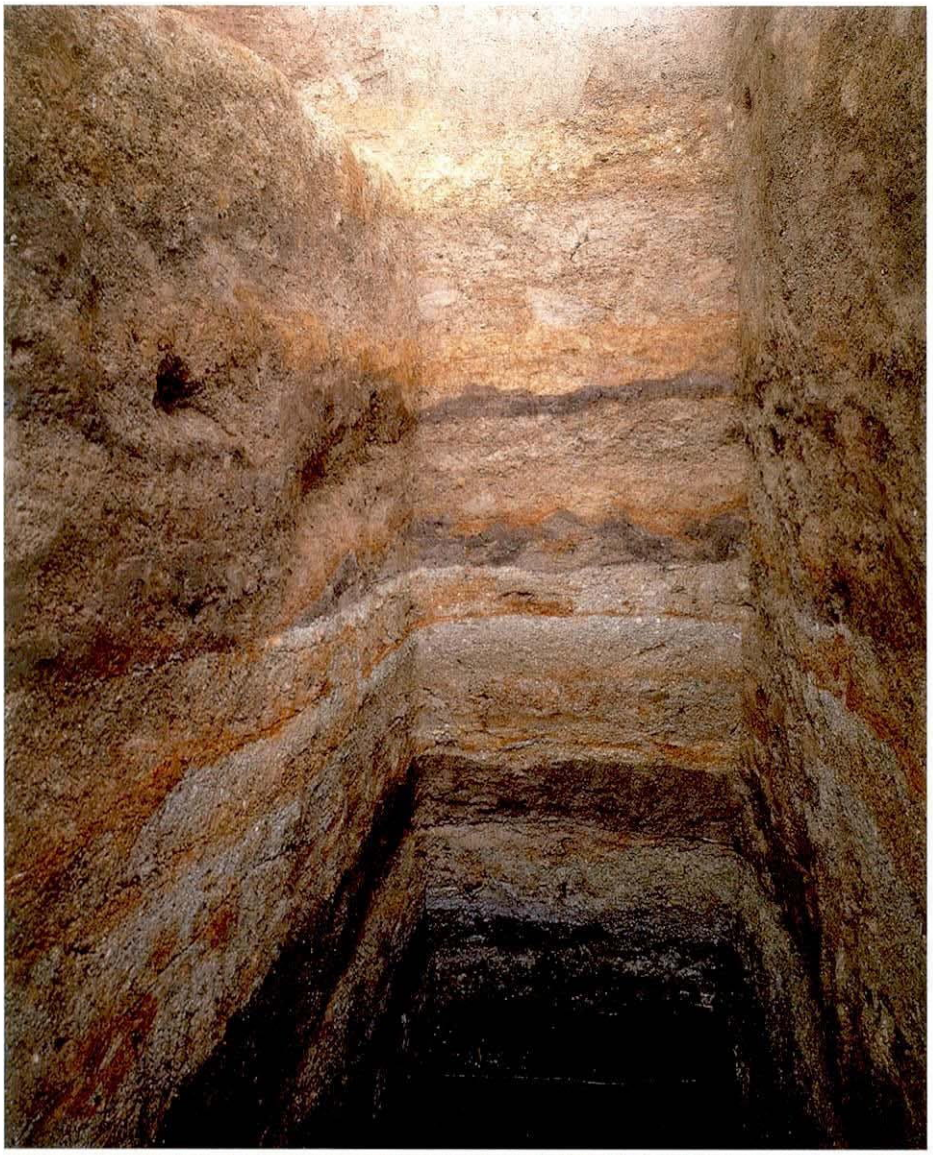
(1) 木樋全景（５次調査）

(2) 木樋取水部全景（８次調査）



(1) 土塁全景（26次調査）

(2) 上成土塁積土（26次調査）



(1) 下成土塁積土（24次調査）

(2) 敷粗朶出土状況（35次調査）

(1) 瓦暗渠（5次調査）

(2) 外濠堆積状況（39次調査）

(1) 水城銘墨書土器

(2) 木樋鋏

(3) 経筒・副納品

序

大宰府史跡のうち，『日本書紀』天智天皇３年(664)の条に記載される水城は，大宰府防衛の重要な施設として，その遺跡が現在までよく保存されてきました。日本はもとより東アジアでも稀有な防衛施設は，土塁と濠からなりますが，いわゆる「水城大堤」と数ヶ所の「小水城」がつながって防衛ラインを形成していました。

これらの水城群に対して，すでに早く戦前から注目され，多くの専門家によって調査と研究が進められてきました。戦後も1960年代末からは，主として南バイパス・九州縦貫道のような道路建設工事など，各種の開発工事に先立って発掘調査が実施されました。調査は福岡県教育委員会をはじめ，水城大堤が所在する太宰府市・大野城市や，小水城を擁する大野城市・春日市のそれぞれの教育委員会が担当し，調査報告書も刊行してきました。

ことに，昭和43年(1968)からは，福岡県教育委員会が大宰府史跡の本格的な学術調査に着手しました。これまでに，政庁・観世音寺をはじめ周辺の官衙・官人居住域のほか，平成５年(1993)からは，第５次５ヶ年計画に基づいて，水城大堤についても，17年間にわたって本格的な発掘調査を実施してきました。本書は，その報告書です。

さて本書では，これまでの発掘調査の内容を報告しておりますが，数多くの成果が上がっています。まず水城大堤本体の築造過程と，その構造の解明があります。土塁の構築に当たっては，最初に敷葉（敷粗朶）工法によって基礎工事を行い，その上で典型的な版築を行って土塁を完成しています。土塁の内側（太宰府側）と外側（博多側）に濠を設け，その間を３ヶ所の木樋によって連結していますが，その高度な土木技術が明らかになりました。そして，西門についても３時期にわたることや，その堅固な構造を知ることができました。

最後になりましたが，水城跡の発掘調査に当たりましては，大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁や太宰府市・大野城市・春日市の各教育委員会，そして地元の関係者各位からは多大な御指導と御協力をいただきました。ここに記して，深く感謝いたします。さらに今後は，水城跡の保存・整備・活用に関しましても，関係各位と密接に連携を計りながら万全を期したいと存じていますので，引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成21年３月31日

九州歴史資料館長　西谷　　正

『水城跡』の刊行にあたって

九州歴史資料館は，このたび『水城跡』を刊行することになった。大宰府史跡に関わる発掘調査正式報告書としては，『大宰府政庁跡』『観世音寺』に次ぐものである。

水城は大野城とともに大宰府北方の防衛線を形成するもので，『日本書紀』は天智天皇３年(664)の条に，「また筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ」と，その築造について記している。白村江の敗戦の後をうけ，唐・新羅の侵攻に備えて急遽築造された防衛施設で，当時の東アジアの緊迫した情勢を物語る遺跡であり，大宰府史跡の中でも重要な位置を占める遺跡である。

水城は大野城西方の尾根を起点に，御笠川を挟む平野の開口部を土塁（大堤）を築いて塞ぎ，さらにその西方に連なる尾根や丘陵を小規模な土塁（小水城）で結ぶかたちで形成されている。大堤は全長1.2km，高さ約７ｍで，東西両端に城門をもつ。大堤の博多湾側には幅約60ｍの巨大な濠が設けられ，大宰府側にも導水に用いられたと思われる濠や木樋が確認されている。

水城跡の発掘調査は1970年代以降，九州歴史資料館を中心に進められた。太宰府市・大野城市・春日市など各市教育委員会による発掘調査においても，貴重な成果が得られている。また水城の保存と活用のため，太宰府市・大野城市によって土地の公有化と史跡指定地の拡大が着実に進められ，不要樹木の伐採，修景，園路の設置など，親しみやすい遺跡としての環境を整備する事業が計画に従って進められている。

本報告書は水城跡について，九州歴史資料館による平成20年度までの発掘調査の成果に基づいて考究を加え，知りうるところをまとめたものである。水城跡は他に例を見ない規模と性格とをもつ遺跡であり，その構造や機能については未解明な点が数多い。その本質を究明するためには，より広い視野に立った調査が必要である。九州歴史資料館による水城跡の調査は，大宰府史跡調査の重要な一環として今後も長期にわたって行われるであろうが，本報告書は，現時点での調査研究の成果をまとめ，今後の調査に資することを目的として刊行するものである。

九州歴史資料館は，福岡県の文化財センター的機能を併せ持つ施設として近く小郡市に移転するが，大宰府史跡に関する調査研究の主体としての任務は，今後も変らず維持される。この報告書の刊行によって大宰府史跡の歴史的意義がより明らかにされ，今後の研究の進展に寄与することを期待したい。

平成21年３月31日

大宰府史跡調査研究指導委員会

委員長　笹山　晴生

例　　言

1．本書は，昭和50年度から福岡県が国庫補助を受け，福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した福岡県太宰府市・大野城市所在の特別史跡・水城跡の正式報告書である。

2．本書には，水城跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した水城跡第５～10次・20次・24次・26次・27次・29次・32次・33次・35～40次・44次・45次調査，及び国道３号線バイパス・九州縦貫自動車道建設にかかる緊急調査として実施された水城跡第１～４次調査の成果を掲載した。また，これらの調査以外でも，水城跡を報告する上で欠かせない資料については，過去に報告された内容について再録した。

3．発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。遺構検出及び出土遺物については，各指導委員の御指導と御教示を得た。

4．本書掲載の遺構実測図は，各調査の担当者もしくは補助員が実測したものである。

5．本書掲載の写真は，石丸洋(当館元参事)及び各次調査担当者，福岡県教育庁総務部文化財保護課北岡伸一が撮影したものである。

6．金属製品の保存修復作業は，横田義章(当館元参事)及び，加藤和歳が行ったものである。

7．出土遺物の整理・復元は，既に各概報報告時の整理作業員が行っているが，本書作成に際しての整理・復元については，Ⅰ章の調査組織の文中に記載するとおりである。

8．出土遺物の実測は，主として各概報報告時の調査員及び補助員が行っているが，本書作成に際し，新たに瓦・土器・陶磁器・鋳造鍛冶関連遺物については岡寺良が，木製品・土製品・弥生土器・その他特殊遺物については一瀬智が，金属製品については児玉真一・岡寺が，石製品・石器・縄文土器については杉原敏之が行った。

9．図面の浄書は，高田いく子が行ったが，石器については杉原が行った。

10．本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ章　杉原
Ⅱ・Ⅲ章　一瀬
Ⅳ章　岡寺
Ⅴ章（1）　杉原
（2）　1）小田和利
2）杉原
（3）・（4）小田（和）
（5）～（7）杉原
（8）　6）小田（和）
6）以外　岡寺
（9）　一瀬
Ⅵ章（1）・（2）岡寺
（3）　酒井芳司・一瀬
（4）　岡寺
（5）　小田（和）
（6）　一瀬
（7）　杉原
（8）　1～3）一瀬
4）岡寺
（9）　1）一瀬
2～4）杉原
Ⅶ章（1）　杉原
（2）下山正一・磯望
（3）　林重徳
（4）井上晋・パリノ・サーヴェイ
（5）牛島恵輔
（6）小田（和）
（7）杉原
（8）杉山真二
（9）小田（和）
（10）パリノ・サーヴェイ・加速器研究所
Ⅷ章（1）西谷　正
（2）小田富士雄
（3）加藤和歳
（4）酒井
（5）岡寺・下高大輔
（6）一瀬
Ⅸ章　杉原

11．本書の編集は，調査班員の協力を得て，杉原が行った。

目　　次

<上巻>　　頁

第Ⅰ章　緒言…… 1
（1）特別史跡水城跡 …… 1
（2）調査の経過 …… 2
（3）調査組織 …… 4
第Ⅱ章　位置と歴史的環境…… 9
第Ⅲ章　水城跡研究史 …… 16
（1）近世までの水城研究 …… 16
（2）近代的研究へ …… 18
第Ⅳ章　調査の記録方法と概要 …… 24
（1）調査の記録方法 …… 24
（2）調査の概要 …… 27
第Ⅴ章　調査遺構 …… 33
（1）遺構の概要 …… 33
（2）土塁 …… 33
1）下成土塁…… 33
2）上成土塁…… 51
3）丘陵部…… 58
（3）門…… 62
1）門…… 62
2）石垣・石列…… 67
3）暗渠…… 71
（4）官道 …… 73
（5）木樋 …… 77
1）取水部…… 77
2）吐水部…… 83
（6）濠…… 92
1）外濠部…… 92
2）内濠部……105
（7）欠堤部 ……115
（8）水城堤防内の遺構 ……118
1）掘立柱建物…… 118　2）柵 …… 126　3）溝……126
4）井戸…… 131　5）土坑 …… 131　6）経塚……142
7）墓…… 145　8）瓦窯 …… 146　9）その他の遺構……148
（9）水城築堤以前の遺構 ……150

<下巻>

第Ⅵ章　出土遺物
（1）瓦塼類
（2）土器・陶磁器類
（3）木製品
（4）金属製品
（5）経塚出土遺物
（6）土製品
（7）石製品
（8）特殊遺物
（9）水城築堤以前の遺物
第Ⅶ章　水城の構造に関する検討
（1）水城の自然科学分析について
（2）水城の地形・地質環境
（3）現代の土木技術者から見た水城の構造と築堤技術
（4）水城跡の敷粗朶の樹種同定
（5）水城土塁中の木樋の電気探査
（6）水城西門の変遷と古代山城の城門について
（7）水城の貯水施設
（8）水城外濠とその周辺の古環境
（9）水城の構造と修築
(10) 水城跡出土木片・炭化材の放射性炭素年代測定
第Ⅷ章　水城とその周辺
（1）大宰府都城制－とくに水城と条坊制の系譜－
（2）水城と大宰府都城
（3）水城跡出土金属製遺物の保存科学的調査
（4）文献史料から見た古代の水城
（5）その後の水城－後世の「水城」に対する認識－
（6）特別史跡水城跡の歩み
第Ⅸ章　総　括
出土掲載遺物一覧
水城跡主要遺構一覧

Fig. 目　次（上巻掲載分のみ）

頁

Fig. 1　水城跡調査地域図（1/5,000）…… 折込
Fig. 2　大宰府関連遺跡分布図（1/200,000）…… 10

Fig. 3　水城跡周辺主要遺跡分布図（1/62,500）…… 12
Fig. 4　『筑前名所図会』（西都図第四）（福岡市博物館蔵）…… 18
Fig. 5　『筑前名所図会』（鬼の硯石）（福岡市博物館蔵）…… 18
Fig. 6　『靖方遡源』（水城址図①）…… 19
Fig. 7　『靖方遡源』（水城址図②）…… 19
Fig. 8　水城大堤之碑 …… 21
Fig. 9　水城大堤之碑（碑文）…… 21
Fig.10　百済国都泗沘（扶余）附近築城要図…… 22
Fig.11　太宰府附近築城要図 …… 22
Fig.12　水城跡地区割図（1/6,000）…… 26
Fig.13　水城跡遺構概念図（1/8,000）・遺構分布略図 …… 32
Fig.14　東門地区北西側地形図（1/300）…… 34
Fig.15　東下成土塁東門地区西側前面積土・暗渠SX044実測図（1/30・1/60）…… 35
Fig.16　東土塁西端（３次C区）地形図（1/300）…… 36
Fig.17　東下成土塁西端前面（3次）積土土層図・杭列SX025実測図（1/60・1/80）… 37
Fig.18　東下成土塁後面東側（20次）積土土層図（1/60）…… 38
Fig.19　東下成土塁後面南側（10-2次）土層図（1/60）…… 38
Fig.20　東下成土塁後面（24次）積土土層図・敷粗朶SX088実測図（1/60）…… 折込
Fig.21　東下成土塁後面（６・10次）積土土層図（1/60）…… 40
Fig.22　東下成土塁後面（35次Ａ区）積土土層・敷粗朶SX172実測図（1/60）…… 折込
Fig.23　西下成土塁東端（39次）積土土層図（1/60）…… 折込
Fig.24　西下成土塁東端（39次）基底部周辺土層図（1/60）…… 42
Fig.25　西下成土塁前面（40次）積土土層図（１）（1/60）…… 43
Fig.26　西下成土塁前面（40次）積土土層図（２）（1/60）…… 44
Fig.27　西下成土塁前面（40次）積土土層図（３）（1/60）…… 46
Fig.28　西下成土塁西門地区東側前面（26次）積土土層図（1/60）…… 47
Fig.29　西下成土塁西門地区東側後面（33次）土層図（1/80）…… 48
Fig.30　不明遺構SX228実測図（1/60）…… 49
Fig.31　落ちSX063土層図（1/80）…… 50
Fig.32　不明遺構SX234実測図（1/20）…… 50
Fig.33　西上成土塁西門地区（26次D区）積土土層図（1/60）…… 52
Fig.34　西上成土塁西門地区西側頂部（26次）トレンチ実測図（1/60）…… 53
Fig.35　西上成土塁西門地区東側（33次）土塁積土土層図（1/60）…… 54
Fig.36　西上成土塁西門地区東側西端部（26次）土層図（1/60）…… 54
Fig.37　柱穴列SA128実測図（1/60）…… 55
Fig.38　西上成土塁西門地区西側中段テラス（26次）東壁土層図（1/60）…… 55
Fig.39　杭列SX181出土状況実測図（1/100）…… 56
Fig.40　西土塁西端（38次B区）土塁土層図（1/60）…… 57

Fig.41　東丘陵部（8次1地点）地形図（1/300）…… 58
Fig.42　西上成土塁西端・西丘陵部地形図（1/600）…… 折込
Fig.43　落ち込みSX176実測図（1/60）…… 59
Fig.44　西上成土塁西端崩落箇所SX179土層図（1/60）…… 60
Fig.45　東門地区周辺（20次）地形図（1/300）…… 62
Fig.46　門礎石実測図（1/30）…… 63
Fig.47　西門地区地形図（1/300）…… 折込
Fig.48　西門地区門建物SB110・120A・B実測図（1/120）…… 折込
Fig.49　門建物SB110土層図（1/60）…… 66
Fig.50　石垣SA115A・B，門建物SB120柱掘形土層図（1/60）…… 66
Fig.51　石垣SA103実測図（1/60）…… 68
Fig.52　石垣SA115A・B，溝SD109土層図（1/60）…… 69
Fig.53　石垣SA115A・B・C実測図（1/60）…… 70
Fig.54　石列SA104実測図（1/80）…… 折込
Fig.55　石組暗渠SX105・106実測図（1/60）…… 71
Fig.56　溝SD101・102土層図（1/60）…… 74
Fig.57　東門地区西側木樋部地形図（1/300）…… 78
Fig.58　木樋SX050実測図（1/60）…… 折込
Fig.59　木樋SX050取水口実測図（1/60）…… 79
Fig.60　木蓋接合状況と側板の調整痕（1/20・1/30）…… 80
Fig.61　木樋埋設掘形SX051土層図（1/60）…… 81
Fig.62　木樋17SX001取水口実測図（1/80）…… 82
Fig.63　木樋17SX001遺構配置図（1/300）…… 折込
Fig.64　木樋掘形SX150土層図（1/80）…… 84
Fig.65　32次調査区周辺地形図（1/300）…… 85
Fig.66　木樋抜き取りSX135枕木状木製品出土状況実測図（1/30）…… 85
Fig.67　木樋抜き取りSX135土層図（1/60）…… 86
Fig.68　西門地区東側木樋部地形図（1/300）…… 折込
Fig.69　木樋掘形SX250周辺実測図（1/80）…… 折込
Fig.70　木樋掘形SX250土層図（1）（1/60）…… 87
Fig.71　木樋掘形SX250土層図（2）（1/60）…… 88
Fig.72　敷粗朶SX252出土状況実測図（1/30）…… 89
Fig.73　土坑SK245実測図（1/30・1/60）…… 89
Fig.74　観世音寺所蔵木樋底板実測図（1/15）…… 91
Fig.75　東外濠西端（3次）土層略図（1/200）…… 92
Fig.76　東外濠（5次）土層図（1/80）…… 93
Fig.77　西外濠欠堤部西側（39次）地形図（1/300）…… 折込
Fig.78　西外濠欠堤部西側（39次）土層実測図（1）（1/80）…… 96

Fig.79　西外濠欠堤部西側（39次）土層実測図（2）（1/80）…… 97
Fig.80　西外濠SX221内最下層木材出土状況実測図（1/40）…… 98
Fig.81　西外濠欠堤部西側（39次）土層実測図（3）（1/80）…… 99
Fig.82　西外濠（32次）土層図（1）（1/80）……100
Fig.83　西外濠（40次）土層図（2）（1/80）…… 折込
Fig.84　西外濠（40次）土層図（3）（1/80）……101
Fig.85　西門地区西側溝SD122土層図（1/80）……101
Fig.86　杭列SX253・254実測図（1/40）……102
Fig.87　杭列SX256実測図（1/40）……103
Fig.88　木材集積SX138実測図（1/20）……104
Fig.89　溜まり状遺構SX137実測図（1/30）……104
Fig.90　東内濠（6次）地形図（1/300）……106
Fig.91　東内濠（6次）土層図（1）（1/80）……107
Fig.92　東内濠（10次）土層図（2）（1/80）……108
Fig.93　東内濠（27次）地形図（1/300）……109
Fig.94　東内濠（27次）土層図（3）（1/80）……109
Fig.95　西内濠（7次）地形図（1/300）……109
Fig.96　西内濠欠堤部西側（44次）土層図（1）（1/80）……110
Fig.97　西内濠欠堤部西側（44次）地形図（1/300）…… 折込
Fig.98　西内濠欠堤部西側（44次）土層図（2）（1/80）…… 折込
Fig.99　西内濠（7次）土層図（1）（1/80）……111
Fig.100　西内濠（45次）地形図（1/300）……111
Fig.101　西内濠（45次）土層図（2）（1/80）……112
Fig.102　西内濠（45次）土層図（3）（1/60）……113
Fig.103　欠堤部（1次）土層図（1/100）……116
Fig.104　欠堤部地形図（1/300）…… 折込
Fig.105　石敷遺構SX014・132，瓦溜まりSX133実測図（1/80）…… 折込
Fig.106　掘立柱建物SB021・022・080・090実測図（1/80）……119
Fig.107　掘立柱建物SB100実測図（1/80）……120
Fig.108　掘立柱建物SB141・142・143実測図（1/80）……121
Fig.109　西下成土塁西端（33次）地形図（1/300）……122
Fig.110　掘立柱建物SB144・145・146実測図（1/80）……123
Fig.111　掘立柱建物SB173実測図（1/80）……124
Fig.112　掘立柱建物SB175実測図（1/80）……125
Fig.113　柵SA147・208・209・212・214実測図（1/80）……127
Fig.114　溝SD160～163・168～171・285，落ち込みSX164土層図（1/60）……129
Fig.115　井戸・土坑実測図（1）（1/40）……132
Fig.116　土坑実測図（2）（1/40・1/80）……134

Fig.117　土坑実測図（3）（1/40・1/80）……136
Fig.118　土坑実測図（4）（1/40）……137
Fig.119　土坑実測図（5）（1/40）……139
Fig.120　土坑実測図（6）（1/40・1/80）……140
Fig.121　土坑実測図（7）（1/40）……141
Fig.122　経塚SX111・112・113配置図（1/100）……142
Fig.123　経塚SX111実測図（1/40）……143
Fig.124　経塚SX111・112・113実測図（1/30）……144
Fig.125　墓SX148・149実測図（1/30）……145
Fig.126　東下成土塁後面（31・35次B区）地形図（1/300）……146
Fig.127　瓦窯31SX001・002実測図（1/40・1/60）……147
Fig.128　粘土採掘坑SX205・206，竪穴状遺構SX207実測図（1/40・1/80）……149
Fig.129　水城築堤以前の遺構実測図（1/60）……151

Tab. 目　次（上巻掲載分のみ）

頁

Tab. 1　大宰府史跡調査研究指導委員一覧 …… 4
Tab. 2　水城跡発掘調査次数一覧 …… 8

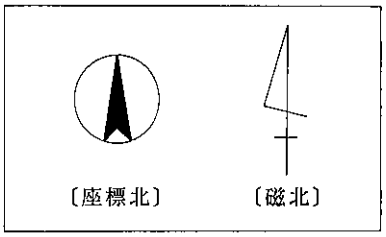
PL. 目　次（上巻掲載分のみ）

巻頭PL. 1　　水城跡全景航空写真
巻頭PL. 2　(1) 大宰府政庁跡と水城跡
　　(2) 筑前大宰府水城の一部切掘図
　　（久富寿年筆　東京大学日本史学研究室蔵）
巻頭PL. 3　(1) 西門全景（26次調査）　(2) 西門Ⅰ期遺構（26次調査）
巻頭PL. 4　(1) 木樋全景（5次調査）　(2) 木樋取水部全景（8次調査）
巻頭PL. 5　(1) 土塁全景（26次調査）　(2) 上成土塁積土（26次調査）
巻頭PL. 6　(1) 下成土塁積土（24次調査）　(2) 敷粗朶出土状況（35次調査）
巻頭PL. 7　(1) 瓦暗渠（5次調査）　(2) 外濠堆積状況（39次調査）
巻頭PL. 8　(1) 水城銘墨書土器　(2) 木樋鎹
　　(3) 経筒・副納品

※下巻に掲載のFig，Tab，PL目次は，下巻冒頭に記載。

凡　　例

1．本書に掲載の遺構実測図は，基本的には国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成しているが，第１～10次調査については，国土座標をもとにした基準点を設けずに実測を行っている。よって，真北も座標北ではなく，磁北により測量しているため，以下の記号により，真北の表示を区別している。



2．本書掲載の地形図の内，Fig.14・45・57・65・90・97は，調査区については，その調査時に測量したものであるが，調査区外の周辺地形図については県および太宰府市教育委員会が航空測量を行った測量図（太宰府市教育委員会2002『水城跡２』）を利用し，合成することにより作成した。また，Fig.14・45・90については，調査区の実測は国土座標によらないものであるため，航空測量図との合成については，任意に行っている。

3．本書掲載の図の内，Fig.62・63については，太宰府市教育委員会発行の報告書（太宰府市教育委員会1994『水城跡』）の掲載図から，Fig.126・127については同市教育委員会発行の報告書（太宰府市教育委員会2002『水城跡２』）の掲載図からそれぞれ転載使用した。掲載にあたっては，同市教育委員会の許可を得た。

4．遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。

ＳＡ：土塁，柵，石垣，ＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＩ：竪穴住居，ＳＫ：土坑，ＳＸ：その他の遺構

5．掲載図面中，土器の断面を黒塗りにしたものは，須恵器であることを示す。

6．土師器・陶磁器・瓦等の報告においては，以下の文献の型式分類・名称等に準じている。

・土師器：九州歴史資料館1981『大宰府史跡　昭和55年度発掘調査概報』

・黒色土器：田中　琢1967「古代・中世における手工業生産の発達（４）畿内」『日本の考古学』Ⅳ

・陶磁器：森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして―」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

・森田　勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2

・上田秀夫1982「14～16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

・古代瓦：九州歴史資料館2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』

高橋章2007「「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」の追加資料について」『観世音寺―遺物編２―』九州歴史資料館

・中・近世瓦：九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編１―』

・製塩土器：小田和利1996「製塩土器から見た律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21　九州歴史資料館

・鋳造・鍛冶関連遺物：九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編２―』

・滑石製石鍋：杉原敏之2007「観世音寺出土の滑石製石鍋」『観世音寺―考察編―』九州歴史資料館

第Ⅰ章　緒　言

（1）特別史跡水城跡

かつて筑紫と呼ばれた，現在の福岡平野周辺には，大海に面した地理的特質から対外交渉の要衝として律令制国家成立以前にも幾つかの重要な施設が置かれた。その一つである水城は，『日本書紀』によれば，天智天皇３年(664)に造られたことが知れる。それは，平野を遮断する大堤に水を貯えた，他に類を見ない城壁であった。

水城の築堤

水城の築堤は，天智天皇２年(663)に朝鮮半島の百済国再興のため，当時の日本が援軍を派遣した，白村江の戦いが大きな契機となっている。この役の敗戦によって，当時の外交・軍事の戦略的拠点であった北部九州地域には，水城をはじめ，大野城，基肄城等，大宰府を中心とする防衛施設が置かれた。その後，律令制国家が成立し，西海道諸国の内政統括，対外交渉の拠点として位置づけられた大宰府において，水城は大野城や基肄城と共に，歴史的に付与された軍事機能を物語る施設であった。また同時に，博多湾周辺に置かれた，外国饗宴施設の筑紫館から官道を通って大宰府郭内へ向かう際には，必ず通過しなければならない交通の要衝でもあった。大宰帥・大伴旅人は，この水城を大宰府の境界の地として，帰京の歌を詠んだ。

修理水城専知官

古代の水城に関する記録は，決して多くない。天平神護元年(765)に少弐従五位下采女朝臣浄庭を「修理水城専知官」に任命したという記事がある。同時に，大宰大弐佐伯今毛人を「築怡土城専知官」に任命した記事があり，これらの背景に，新羅との外交悪化による防衛施設の再整備を推察する意見もある。いずれにせよ，築堤から100年余り経過した奈良時代後半にも，この防衛施設が維持管理されていたことは確かである。ただし，大宰府が実態を失って以後は，「いわば横たわれる山の如し」と描写されたように，次第に田園に佇む小山の景観を呈していったのであろう。そのような姿は，近世の多くの地誌にも残されているが，元禄年間には貝原益軒よる，『筑前國続風土記』の中で抜き取られた木樋の状況が記録されている。

水城跡の研究

水城跡に関する実証的な研究が興ったのは，大正期に入ってからのことである。大正２年(1913)，現在のJR鹿児島本線拡幅の際，東京帝国大学の黒板勝美や九州帝国大学の中山平次郎の土塁観察によって，敷粗朶の確認や積土の状況が詳細に報告された（黒板1913，中山1914他)。そして，昭和５年には，九州帝国大学の長沼賢海・鏡山猛によって，水城跡木樋の調査が行われた（長沼1932)。この調査で，水城の導水施設である木樋の実態と構造が検討された点は特に重要である。また，この時期と前後する頃，水城跡は史蹟名勝天然記念物保存法によって，大正10年３月３日に全国でも早い時期に大宰府跡と共に国指定史蹟となっている。

特別史跡指定

水城跡は，戦後新たに制定された文化財保護法によって，昭和28(1953)年３月31日に，大宰府跡，大野城跡と共に特別史跡となった。その後，昭和50年の調査によって確認された幅約60ｍの外濠の存在から，土塁以外の箇所についても重要な施設が埋没していることが認識された。この成果によって，外濠の範囲については昭和53年より追加指定が開始されている。そして，水城跡は調査の中でより認識が深められ，幾度か追加指定されながら今日に至っている。そのような動きの中で，平成16年(2004)に大野城市教育委員会によって「特別史跡水城跡環境整備基本計画（案)」が，平成17年に太宰府市教育委員会によって「太宰府市文化財保存活用計画」

がそれぞれ策定された。さらに，この両市が中心となって，平成17年には「水城跡整備事業推進協議会」が発足した。地域との関りを大切にしながら，計画的な整備と活用を進めていくための組織である。築堤から1300年以上を経た今日，水城跡は新たな時代へ向けて大きく動き出している。

（2）調査の経過

昭和30年代後半に本格化した列島規模の開発の波は，水城跡の所在する太宰府周辺も例外ではなかった。特に昭和38年(1963)に四王寺山南麓に計画された大規模な宅地造成は，大宰府史跡の景観を一変してしまう危機的事態であった。昭和41年，福岡県教育委員会は，文化財保護委員会と協議の上，大宰府史跡を面的に保存するため，史跡指定拡張案を決定した。しかし，この案に対して，直ちに地元の理解を得ることは難しく，指定拡張が成ったのは，大宰府史跡の発掘調査開始から２年近くが経過した，昭和45年９月21日のことであった。この指定拡張と大宰府史跡の調査に至る経緯は，『大宰府政庁跡』でも詳しく触れている。

高速道の水城跡通過

大宰府史跡の保存問題が大きく取り挙げられた頃，昭和40年に九州縦貫自動車道建設の計画が決定し，特別史跡水城跡の通過が大きな問題となった。道路建設によって，水城跡の地下遺構が破壊されるだけでなく，土塁上を通過する道路の景観的問題も懸念された。さらに昭和43年には，新たに国道３号線バイパスの建設計画が起こり，高速道路と近接して通る路線案が決定した。高速道の路線の迂回やトンネルによる地下通過の可能性については，計画以後，幾度か協議が持たれたが，工法や予算上の問題から変更されることは無かった。そのため，特に高速道路では，路線の計画高を水城の天端より3.5m下ることや，景観に配慮した高架が採用された。この道路と水城跡の関係は，今日でも現地に立つことによって容易に理解できる。

調査の開始

こうした協議を経て，福岡県教育委員会は，昭和45年度に国道３号線南バイパス建設予定地から水城跡の第１次調査を開始した。結果として，欠堤部を中心に２～４次調査を実施したが，述べてきたように，水城跡の調査は開発を要因として始まったのである。１・２次調査では，河川の氾濫原で遺構は認められなかった。そして昭和47年の３次調査では，土塁基底部の断割によって，積土内に杭列やシガラミを確認し，土塁構造についての知見を得た。さらに昭和49年の４次調査では，御笠川の東側で石敷遺構を検出しており，欠堤部に洗堰が想定されるようになった。これら以前にも，昭和44年の東門地区における水道工事の立会調査では，礎石を確認している。

洗　堰

昭和48年からは，大宰府歴史公園整備事業の計画に基づき，水城跡の環境整備事業が開始された。そして昭和50年には，整備事業の一環として，外濠と木樋を中心に５次調査を行った。この調査では，土塁前面に幅約60mの外濠が存在することや，木樋が導水管の機能を持つことなどを明らかにした。そして昭和51年，東土塁西端付近の６次調査では，太宰府側で幅約10mの内濠が存在することを確認した。さらに昭和53年には，昭和５年の木樋取水部の再調査を８次調査として実施した。そして，その周辺部となる10次調査では，８世紀後半代の井戸より「水城」銘の墨書土器を検出している。このように１次調査開始から初期の段階では，開発対応や環境整備事業に関る調査を中心に行ってきた。

幅60mの外濠

水城銘墨書土器

昭和57年の大宰府歴史公園整備事業以後，水城跡の調査は，開発対応の調査が続いた。特に

個人住宅建設や下水道工事などによる緊急調査が中心であり，土塁後面の内濠を太宰府市教育委員会が，西土塁前面の外濠を大野城市教育委員会がそれぞれ調査を実施してきた。このうち，太宰府市教育委員会が実施した昭和61年の14次調査では西土塁において明確な内濠を確認し，平成２年の17次調査では木樋の抜き取りの痕跡を確認している。特に後者の調査では，木樋の埋設から設置状況と下部構造が明らかにされ，木樋取水部が復元されている。さらに，平成６年に大野城市が実施した外濠地区の大野城市25次調査では，砂層や粘土層の堆積が見られ，流水と滞水を繰り返した外濠の痕跡と理解された。

木樋の抜きとり

平成５年，九州歴史資料館は，第５次５ヵ年計画として水城跡の構造解明を目的とした調査計画を立案し，大宰府史跡調査研究指導委員会に諮問した。水城跡指定地の周辺に開発が増加しており，追加指定の必要性から，構造に関する基礎資料を得るための調査を行うこととしたのである。以後，平成20年(2008)の第８次５ヵ年計画まで，途中大宰府政庁跡や観世音寺の調査で中断することもあったが，継続的に水城跡の発掘調査を実施してきた。

平成５年に東門地区西側で実施した24次調査では，下成土塁上に土塁軸線に規定された８世紀代の掘立柱建物や，土塁の積土下位で敷粗朶を確認した。敷粗朶については，粘質土を互層に積んで３層に亘っており，軟弱な砂層の地山に対する地盤補強のためと理解された。さらに，平成７年から開始した西門地区の調査では，西門が３時期に亘って変遷することや土塁構造について多くの知見が得られた。門は，７世紀後半のⅠ期の掘立柱式から８世紀初め頃のⅡ期に大宰府政庁や大野城と同じく礎石式に変わることが分かった。また，Ⅲ期には門周辺を大きく改修したことや，門を通過する官道の東から本格的な外濠が始まることなども確認した。

敷粗朶の確認

西門の変遷

大宰府政庁跡の調査で一時中断した水城跡の調査は，平成12年に再開した。そして平成12～13年には，32・33次調査を実施した。木樋抜き取り跡地の32次調査では，枕木状木製品が出土したのみで，木樋の埋設状況は不明であった。一方，33次調査では，西門地区土塁切り通し東側の基底部が地山の削平によるものであることや，古代から中世の間にこの平坦地が利用されていたことが分った。さらに平成13年の35次調査では，積土下部に11層に亘って埋設された敷粗朶をはじめ，下成土塁面で大型掘立柱建物を確認したが，これはこの土塁下位で調査されたロストル式の瓦窯との関係が想定された。さらに西土塁丘陵付近では，平成15・16年に36・38次調査を実施した。36次調査では丘陵上で掘立柱建物を，38次調査では丘陵取り付き部の積土の状況をそれぞれ確認した。

平成18年，九州歴史資料館では，それまでの調査成果を再検討し，水城跡の構造を語る上で必要な調査を集中的に行うこととした。そして，平成20年の正式報告書刊行を年次計画に位置づけた。これは，水城跡が所在する太宰府市と大野城市の両市が中心となって，水城跡整備事業推進協議会を設立したことに起因している。この事業では，平成21年度以降，整備を具体的に進めることを計画しており，そのため当館が行ってきた水城跡の調査成果を基礎情報として早急に公表する必要があったのである。貯水施設を中心に39・40・44・45次調査を計画した。平成17・18年度に実施した39次調査と同補足調査では，外濠内に土塁軸に並行して，幅約60ｍの範囲に数条の溝状遺構が走ることを確認した。そして，外濠は９世紀代まで開溝し，その後急速に埋没していったことなどが明らかとなった。また平成19年に実施した40次調査でも，外濠部の土塁際に幅9.2ｍの溝状遺構があることを確認している。同調査地は，33次調査で認

外濠内に数条の溝

されていた木樋掘形の北側の延長部にあたる。そのため，木樋埋設と吐水部の状況を確認するため，40次補足調査を実施したが，掘形を確認したものの木樋の埋設は認められなかった。

内濠については，平成20年に44次･45次調査を実施した。39次調査地後背の44次調査では，河川の氾濫により，内濠の具体的な遺構等は確認できなかった。そして40次調査地と土塁を挟んで反対となる，木樋取水口推定地の45次調査地では，12世紀前半まで機能していた流路を確認したにだけに留まった。

以上，九州歴史資料館が中心となった，水城跡の調査について述べてきた。昭和45年の開始から，既に38年が経過している。先述したように，ここ数年の特別史跡水城跡をとりまく状況を鑑みるとき，調査成果の公表が最優先事項と考えられた。そのため，平成20年度に一端調査を終了し，これまでの調査成果を総括する正式報告書の作成作業に入ったのである。

（3）調査組織

水城跡をはじめとする，大宰府史跡の発掘調査は，昭和47年から年次ごとの調査計画を立案し，大宰府史跡調査研究指導委員会（当時は大宰府発掘調査指導委員会）に諮問しながら実施している。委員会は15名の学識経験者によって構成されている。現在は，歴史学５名，考古学

Tab. 1　大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧（在任年順，◎は委員長経験者を表す）

氏　名	分　野	職（就任時）	在任期間
◎竹内　理三	国　史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山　猛	考　古	九州大学教授	S43～S46
浅野　清	建　築	大阪市立大学教授	S43～S62
井上　辰雄	国　史	熊本大学教授	S43～S58
井上　光貞	国　史	東京大学教授	S43～S56
大田　静六	建　築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎　敬	考　古	九州大学助教授	S43～H2
岸　俊男	国　史	京都大学教授	S43～S61
坂本　太郎	国　史	國學院大学教授	S43～S55
坪井　清足	考　古	奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
小田　富士雄	考　古	九州大学助手	S43～
◎平野　邦雄	国　史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野　久	国　史	奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～
◎笹山　晴生	国　史	東京大学助教授	S59～
澤村　仁	建　築	九州芸術工科大学教授	S59～
杉本　正美	造　園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村　一	造　園	京都大学教授	S59～H19
◎横山　浩一	考　古	九州大学教授	S59～H11
渡辺　定男	都市工学	東京大学教授	S59～
八木　充	国　史	山口大学教授	S63～
川添　昭二	国　史	九州大学教授	S63～H17
鈴木　嘉吉	建　築	奈良国立文化財研究所長	S63～
西谷　正	考　古	九州大学教授	H4～H19
佐藤　信	国　史	東京大学教授	H6～
坂上　康俊	国　史	九州大学教授	H8～
田中　琢	考　古	奈良国立文化財研究所長	H8～H10
町田　章	考　古	奈良国立文化財研究所長	H11～H16
山中　章	考　古	三重大学教授	H12～
田辺　征夫	考　古	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	H17～
林　重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18～
石松　好雄	考　古	元九州歴史資料館副館長	H20～
尼崎　博正	造　園	京都造形芸術大学教授	H20～

４名，建築史学２名，造園学２名，都市工学１名，土木工学１名である（Tab. 1）。

水城跡の発掘調査は，先述したように，道路建設に対する緊急調査によって始まった経緯がある。そのため，調査開始から４次調査までは，福岡県教育委員会文化課が行っている。昭和47年に九州歴史資料館が設置されて以後は，大宰府史跡の調査機関として，水城跡についても主に当館が発掘調査を行ってきた。また，史跡地周辺の緊急調査や近年の災害復旧，保存修理による調査では，太宰府市教育委員会，大野城市教育委員会が調査を実施している。

本報告は，福岡県教育委員会，九州歴史資料館が実施した調査が中心であり，基本的には報告する調査に関った組織を中心に記述する。九州歴史資料館の調査担当組織は，昭和47年から平成19年度までは，調査課であったが，平成20年度に組織改変が行われ，学芸調査室調査班となっている。ただ，初代学芸調査室長児玉真一は，報告書作成作業途中，12月６日に病気のため急逝した。報告の鏃等の金属製品は，氏の実測である。その後の作業は氏の生前の遺志を継いで班員で進めた。

水城跡調査関係者一覧

福岡県教育委員会文化課（１～４次調査）

国道３号線福岡南バイパス関係

１次調査（昭和46年）　課長　杉原信彦　　調査担当　藤井　功　松浦宥一郎　森田　勉

２次調査（昭和46年）　課長　杉原信彦　　調査担当　濱田信也　森田　勉

九州縦貫自動車道関係

３次調査（昭和46年）　課長　杉原信彦　　調査担当　亀井明徳

４次調査（昭和47年）　課長　杉原信彦　　調査担当　亀井明徳

福岡市下水道工事関係

立会調査（昭和44年）　折尾　学（福岡市教育委員会）　石丸　洋　　山本輝雄

九州歴史資料館

館　長	鏡山　猛（昭和47～55年）	田村圓澄（昭和56～平成３年）	
	吉久勝美（平成４～７年）	高橋良平（平成８・９年）	
	光安常喜（兼）（平成９～13年）	森山良一（兼）（平成14～19年）	
	西谷　正（平成20年）		
副館長	野上　保（昭和50～52年）	久保園遂男（昭和53・54年）	藤井　功（昭和59・60年）
	前田栄一（兼）（平成元～３年）	石松好雄（平成４～８年）	松尾正俊（平成８～10年）
	宮小路賀宏（平成11・12年）	柳田康雄（平成13・14年）	橋口達也（平成15・16年）
	濱田信也（平成17年）	木下　修（平成18・19年）	平山浩一（平成20年）
参　事	栗原和彦（平成10～12年）	横田賢次郎（平成14・15年）	
学芸調査室長	児玉真一（平成20年）		
調査課長	石松好雄（昭和56～平成元年，心得：昭和51～55年）		栗原和彦（平成２～８年）
	横田賢次郎（平成９～13年）	高橋　章（平成14～16年）	児玉真一（平成17～19年）

調査担当

５次調査（昭和50年）　調査課　石松好雄　倉住靖彦　高倉洋彰　横田賢次郎　森田　勉　高橋　章

		学芸二課	渡辺正気	横田義章	亀井明徳			
6次調査	(昭和50年)	調査課	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
7次調査	(昭和51年)	調査課	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
8次調査	(昭和52年)	調査課	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
9次調査	(昭和53年)	調査課	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
10次調査	(昭和53年)	調査課	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
10-2次調査	(昭和54年)	調査課	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田　勉	高橋　章
20次調査	(平成3年)	調査課	栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	赤司善彦	◎吉村靖徳	
24次調査	(平成5年)	調査課	栗原和彦	◎横田賢次郎	小田和利	吉村靖徳	○小川泰樹	
26次調査	(平成6年)	調査課	栗原和彦	横田賢次郎	◎小田和利	○吉村靖徳	小川泰樹	
	(平成7年)	調査課	栗原和彦	横田賢次郎	◎小田和利	小川泰樹	○杉原敏之	
26次補足	(平成8年)	調査課	栗原和彦	横田賢次郎	◎小田和利	小川泰樹	○杉原敏之	
27次調査	(平成6年)	調査課	栗原和彦	◎横田賢次郎	小田和利	吉村靖徳	小川泰樹	
29次調査	(平成10年)	調査課	横田賢次郎	赤司善彦	◎齋部麻矢	杉原敏之		
32次調査	(平成12年)	調査課	横田賢次郎	○中間研志	◎齋部麻矢	杉原敏之		
33次調査	(平成12年)	調査課	横田賢次郎	○中間研志	齋部麻矢	◎杉原敏之		
	(平成13年)	調査課	横田賢次郎	◎中間研志	小田和利	○岡寺　良		
35次調査	(平成13年)	調査課	横田賢次郎	中間研志	◎小田和利	○岡寺　良		
36次調査	(平成15年)	調査課	高橋　章	◎小田和利	吉村靖徳			
37次調査	(平成15年)	調査課	高橋　章	◎小田和利	吉村靖徳			
38次調査	(平成16年)	調査課	高橋　章	小田和利	◎吉村靖徳			
39次調査	(平成17年)	調査課	児玉真一	小田和利	◎杉原敏之	○岡寺　良		
39次補足	(平成18年)	調査課	児玉真一	◎杉原敏之	岡寺　良	○坂本真一		
40次調査	(平成19年)	調査課	児玉真一	◎杉原敏之	岡寺　良	○坂本真一		
44次調査	(平成19年)	調査課	児玉真一	杉原敏之	◎岡寺　良	○坂本真一		
40次補足	(平成20年)	調査班	◎杉原敏之	岡寺　良	○一瀬　智			
45次調査	(平成20年)	調査班	杉原敏之	岡寺　良	◎一瀬　智			

◎，○は調査主任・担当者である。10次調査までは，特に専従を置いていない。調査関係職員として，文献（古代史）については，倉住靖彦・酒井芳司が，保存処理については，横田義章・加藤和歳が，写真撮影については石丸洋・北岡伸一が担当した。また，調査に関係した調査補助員は，澤田康夫，山本輝雄，山本信夫，今井涼子，比嘉えりかである。

水城跡本報告書作成に関る組織は以下の通りである。九州歴史資料館学芸調査室調査班を中心として，作成業務を行った。また，第Ⅶ・Ⅷ章を中心とした，考古学をはじめ，自然科学，土木工学等の検討については，外部の先生方にも執筆の依頼をお願いした。現地で検討会を行いながら執筆作業を進めていただいた。

九州歴史資料館

総　括　　館　　長　　西谷　正

副 館 長　　平山浩一

	参　事	児玉真一	馬田弘稔
庶　務	総務室長	岡本京士	
	企画主査	梅野研次	主任主事　志水良行
報　告	学芸調査室長（兼）	児玉真一	
	調査班	杉原敏之（班長）	岡寺　良　一瀬　智
	学芸班	釜瀬進一郎（班長）	井形　進　加藤和歳　酒井芳司　大庭孝夫
	整理補助員	高田いく子	
	整理作業員	大田千賀子　市川千香枝　中田千枝子	

福岡県教育委員会文化財保護課

報　告	参事補佐兼調査第一係長	小田和利
寄　稿	小田富士雄（福岡大学名誉教授）	
	林　重徳（佐賀大学低平地研究センター）	
	下山　正一（九州大学大学院理学研究院）	
	磯　望（西南学院大学人間科学部）	
	杉山　真二（株式会社　古環境研究所）	
	井上　晋（九州大学大学院農学研究院）　※再録	
	牛島　恵輔（九州大学大学院資源システム）※再録	
	下高　大輔（太宰府市教育委員会）	

なお，本報告書作成にあたり，國學院大学，東京大学，福岡市埋蔵文化財センター，写測エンジニアリング㈱，パリノ・サーヴェイ㈱，西日本新聞社，森弘子，太宰府市市史資料室，太宰府市教育委員会文化財課，大野城市教育委員会ふるさと文化財課諸氏には，有益な御教示を得るとともに，写真提供，分析等の協力を得た。末筆ながら記して感謝したい。

【調査報告掲載文献】

1　福岡県教育委員会1970『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第１集
2　福岡県教育委員会1975『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第２集
3　福岡県教育委員会1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＶＩ
4　福岡県教育委員会1978『水城　昭和50年度発掘調査報告』
5　福岡県教育委員会1979『水城　昭和51・52・53年度の発掘調査と史跡環境整備事業実施概要』
6　太宰府市教育委員会1994『水城跡』太宰府市の文化財第24集
7　九州歴史資料館1994『大宰府史跡　平成５年度発掘調査概報』
8　九州歴史資料館1996『大宰府史跡　平成７年度発掘調査概報』
9　九州歴史資料館1997『大宰府史跡　平成８年度発掘調査概報』
10　九州歴史資料館1998『大宰府史跡　平成９年度発掘調査概報』
11　九州歴史資料館1999『大宰府史跡　平成10年度発掘調査概報』
12　九州歴史資料館2001『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅰ』平成12年度
13　九州歴史資料館2003『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ』平成13・14年度
14　太宰府市教育委員会2003『水城跡２』太宰府市の文化財第67集
15　九州歴史資料館2004『大宰府史跡発掘調査報告書』平成15年度
16　福岡県教育委員会2007『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報』平成17年度

【参考文献】

大野城市教育委員会1996『水城跡』Ⅰ　大野城市文化財調査報告書第43集
黒板勝美1913「福岡県学術研究旅行報告書」『史学雑誌』25-3
長沼賢海1932「水城の大樋の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』７
中山平次郎1914「水城の研究」『筑前史談会講演集』第一集

Tab. 2　水城跡発掘調査次数一覧

本調査

次数	地区名	地区略号	調査面積	調査期間	地　番	文献	調査機関	本書対象
1	御笠川欠堤部	6AMK-H	1,600	710213～710315	太宰府市水城字古門畑122-4，123-6	文献1	県	○
2	御笠川欠堤部	6AMK-H	1,000	7107	太宰府市水城字古門畑123-6	文献2	県	○
3	東下成土塁前面部・東外濠部	6AMK-G	1,000	720602～720815	太宰府市水城字八反田121・122	文献3	県	○
4	御笠川欠堤部	6AMK-H	70	7306	太宰府市国分字川原261-1	文献3	九歴	○
5	東外濠部・東門木樋部	6AMK-F・G	350	750424～750615	太宰府市水城字八反田66，国分字衣掛224-1	文献4	九歴	○
6	東内濠部	6AMK-C	440	760119～760402	太宰府市国分字衣掛256	文献5	九歴	○
7	西内濠部	6AMK-O	36	7606	太宰府市吉松字松本193-5	文献5	九歴	○
8	東丘陵部・東門木樋部	6AMK-A・C	140	770708～770723	太宰府市国分字衣掛191-1	文献5	九歴	○
9	西下成土塁後面部	6AMK-U	25	780417～780422	太宰府市吉松字星ヶ丘475-4	文献5	九歴	○
10	東下成土塁後面部	6AMK-C	250	781201～790131	太宰府市国分字衣掛221-1	文献5	九歴	○
10-2	東門南側	6AMK-A	15	791001～791005	太宰府市国分203	未報告	九歴	○
11	東下成土塁後面部	6AMK-D		860324	太宰府市国分235	文献6	太宰府市	
12	西内濠部	6AMK-J	180	831102～831122	太宰府市吉松118	文献6	太宰府市	
13	東内濠部	6AMK-C	113	860401～860411	太宰府市国分字衣掛240-3・4	文献6	太宰府市	
14	西内濠部	6AMK-J	110	861028～861105	太宰府市吉松字原ノ下123-1	文献6	太宰府市	
15	西内濠部	6AMK-O	40	861027～861110,930722	太宰府市吉松字梨184-2	文献6	太宰府市	
16	東門南側	6AMK-A	12	880316～880323	太宰府市国分字衣掛185	文献6	太宰府市	
17	西内濠部・木樋部	6AMK-J・K	795	900806～910109	太宰府市吉松字松本197	文献6	太宰府市	
18	東門南側	6AMK-A	84	900917～901005	太宰府市国分字衣掛185	文献6	太宰府市	
19	西内濠部	6AMK-O	14	911113	太宰府市国分字衣掛193-4	文献6	太宰府市	
20	東門南側	6AMK-A	22	920109～920124	太宰府市国分字衣掛195	文献7	九歴	○
21	西下成土塁後面部	6AMK-T・U	9	920528	太宰府市吉松字星ヶ丘470	文献6	太宰府市	
22	東内濠部	6AMK-C	110	920821～920908	太宰府市国分1丁目220-3	文献6	太宰府市	
23	東内濠部	6AMK-O	14	921111	太宰府市吉松604	文献6	太宰府市	
24	東下成土塁後面部	6AMK-D	660	930311～931225	太宰府市国分字衣掛226	文献7	九歴	○
25	西下成土塁後面部	6AMK-V	95	930423～930601	太宰府市吉松611・610-3	文献6	太宰府市	
26	西門	6AMK-Q・V・W	770	940418～951228	太宰府市吉松字星ヶ丘447-1，大野城市下大利2丁目	文献8	九歴	○
26補	西門・水城経塚	6AMK-Q・V・W		960410～970306		文献9	九歴	○
26補2	西上成土塁前面部	6AMK-V	50	001017～001124	太宰府市吉松字星ヶ丘447-1	文献12	九歴	○
27	東内濠部	6AMK-C	36	940602～940604	太宰府市国分1丁目240-8	文献8	九歴	○
28	西内濠部	6AMK-O	28	980918	太宰府市吉松190-4	文献14	太宰府市	
29	御笠川欠堤部	6AMK-H	10	981208～981221	太宰府市水城1丁目8	文献11	九歴	○
29-2	御笠川欠堤部	6AMK		060227～060313	太宰府市水城1丁目1151	未報告	九歴	○
30	東内濠部	6AMK-C	113	990506～990522,991122	太宰府市国分1丁目244-1	文献14	太宰府市	
31	東下成土塁後面部・瓦窯	6AMK-C	250	991227～00328	太宰府市国分1丁目219	文献14	太宰府市	
32	西外濠部・木樋部	6AMK-R	110	000221～000825	太宰府市大野城市下大利4丁目691-1	文献12	九歴	○
33	西下成土塁後面部	6AMK-P・Q	775	001128～010625	太宰府市吉松175，176，178	文献13	九歴	○
34	ＪＲ欠堤部	6AMK	19	010206～010228	太宰府市吉松91-6	文献14	太宰府市	
35	東下成土塁後面部	6AMK-D	320	010719～020205	太宰府市国分1丁目247-1	文献13	九歴	○
36	西丘陵部	6AMK-X	120	030908～040113	大野城市下大利4丁目757-1	文献15	九歴	○
37	西上成土塁後面部	6AMK-V・X	30	031205～031219	太宰府市吉松475-13	文献15	九歴	○
38	西外濠西端部・西上成土塁前面部	6AMK-Y・W	690	040607～050120	大野城市下大利4丁目714	未報告	九歴	○
39	西下成土塁部・西外濠部	6AMK-M・N	184	050817～060331	大野城市下大利3丁目11外	未報告	九歴	○
39補	西外濠部	6AMK-M・N	700	06518～070330		未報告	九歴	○
40	西下成土塁部・西外濠部	6AMK-R・S	400	070601～080331	大野城市下大利4丁目2-2・3,702-3・4,695-1	未報告	九歴	○
40補	西下成土塁部・木樋推定部	6AMK-R		080903～090224		未報告	九歴	○
41	東門	6AMK-A	72	060215～060317	太宰府市国分2丁目195番地外	文献16	太宰府市	
42	東上成土塁部	6AMK	25	070823～070827	太宰府市大字国分	未報告	太宰府市	
43	西上成土塁前面部	6AMK-L	60	07	大野城市下大利3丁目5-1・5-8,687，4丁目1-1,715	未報告	大野城市	
44	西内濠部	6AMK-I	300	080220～080331	太宰府市大字吉松110-1・112-1	未報告	九歴	○
45	西内濠部	6AMK-O	310	080527～080725	太宰府市大字吉松184-1・2外	未報告	九歴	○
46	西上成土塁前面部	6AMK-V・W	40	0810～	大野城市下大利4丁目	未報告	大野城市	

立会調査（県・九歴のみ）

No.	地区名	地区略号	調査面積	調査期間	地　番	文献	調査機関	本書報告対象
1	東門	6AMK-A		691127～691128	太宰府市大字国分	文献3	県	○
2	水城瓦窯	6AMK-C		91年度	太宰府市大字国分	未報告	九歴	○
3	水城瓦窯	6AMK-C		930403	太宰府市大字国分	文献9	九歴	○
4	西土塁太宰府側テラス	6AMK-O		980202～980203	太宰府市大字吉松	文献10	九歴	○
5	東土塁博多側外濠部	6AMK-G		001220～010131	太宰府市大字水城	文献12	九歴	○
6	ＪＲ欠堤部土塁	6AMK-L		年次不明	太宰府市大字吉松・大野城市下大利	未報告	九歴	○

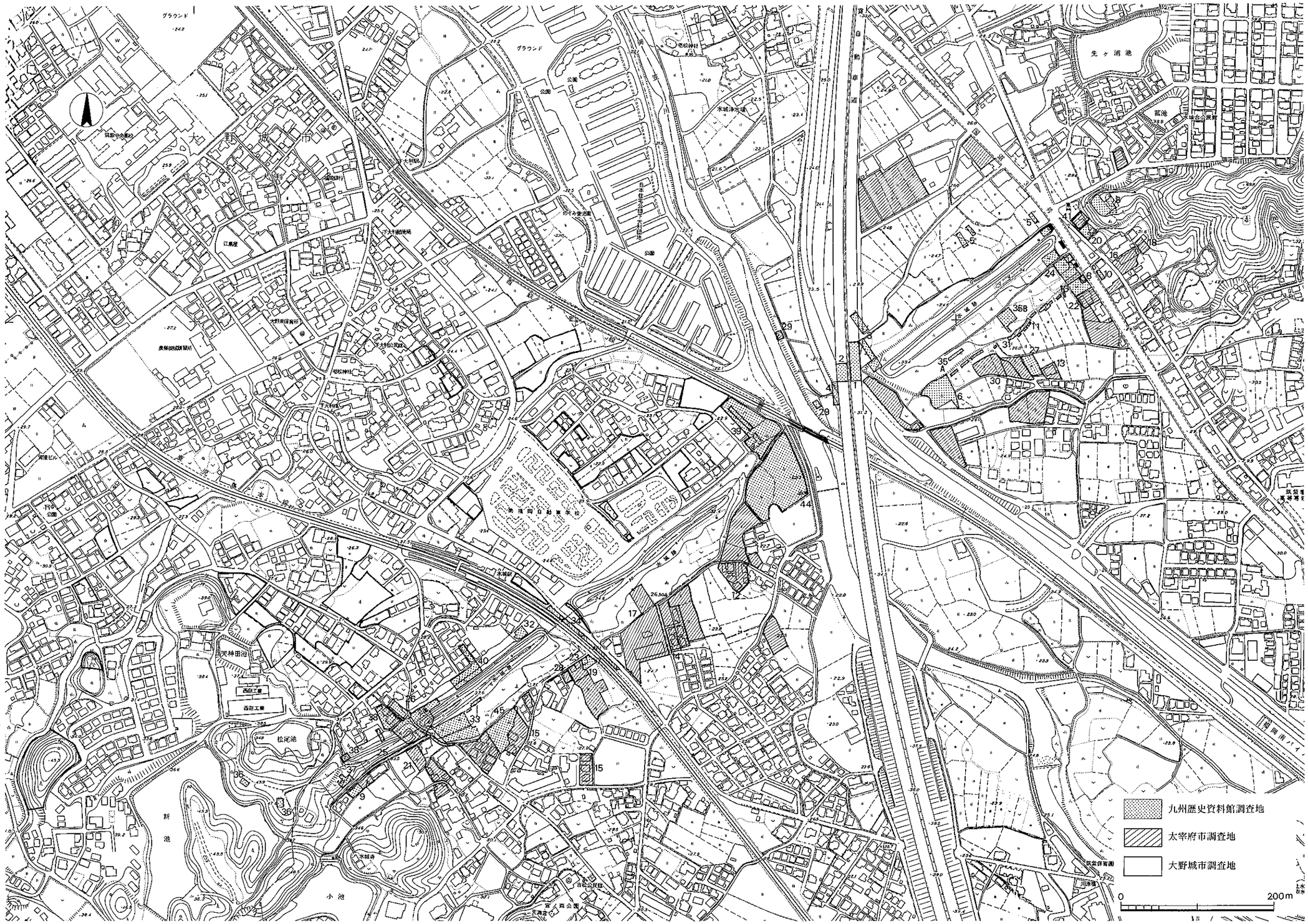


Fig. 1　水城跡調査地域図（1/5,000）

第II章　位置と歴史的環境

遺跡の位置

水城跡は，九州北西部の北緯33° 31′，東経130° 29′付近に位置する。福岡市の博多湾から南東約12kmの内陸部にあり，行政区は福岡県太宰府市国分・水城・吉松，大野城市下大利にまたがって所在する。水城跡の北東に接する四王寺山とその南麓一帯には，大宰府政庁跡を始めとする大宰府関連の遺跡が広がっており，現在までに約900haの広大な面積が国の史跡指定を受け，周辺景観に配慮した整備や日常的な管理が行われている。このうち水城跡は大野城市や春日市に分布する通称「小水城」と共に「特別史跡水城跡」として約30haが保存され，市街地の中に残された貴重な歴史遺産，また緑地として多くの市民・来訪者に親しまれている。

地理的環境

水城が所在した「大宰府」は，具体的には古代日本律令制下の地方行政機構である。地理的な概念としては，その管轄した西海道諸国島，つまり九州一円を指す場合，また大宰府政庁を中核にして水城・大野城・基肄城などの周辺施設を含む大宰府都城の範囲を指す場合，あるいは条坊制が敷設された大宰府郭の範囲を指す場合など様々である。水城は後述のように大宰府政庁とそれを取り巻く諸施設との関連のなかで成立・機能したものであり，ここでは大宰府郭を中心としつつ周辺施設を視野に入れた地域について述べる。現在の行政区分では大野城市・太宰府市・筑紫野市と宇美町の一部を含む範囲となる。

この地域の地形を概観すると，福岡平野と筑紫平野を結んで北西ー南東に延びる狭い平地が，北～東は三郡山地，南～西は脊振山地に囲まれて盆地状を呈する地形的な特徴をもつ。この狭い平地部は二日市低地帯と称され，太宰府市域を貫流して博多湾に向かう御笠川水系と，筑紫野市域から南下して筑後川に注ぐ宝満川水系によって形成された沖積低地や段丘から構成されるもので，現在，この低地帯を中心に太宰府市や筑紫野市の市街地が広がっている。また古来より，大陸に通じる那津（なのつ）と朝倉・豊後，あるいは筑後・有明海を結ぶ南北交通の要衝として重要視され，今日でも幅1.2 ～ 1.5kmの狭長な低地に，福岡平野から筑紫平野を通過して九州各地を結ぶ鉄道・道路幹線網が集中している。

二日市低地帯

低地帯の北～東側に連なる三郡山地は，南端に標高830mの宝満山が位置し，その西には大城山（標高410m）を最高峰とする四王寺山が控える。四王寺山は古くは大野山と称され，朝鮮式山城である大野城が築かれた山で，南西麓に水城跡が接続する位置にある。三郡山地とは小低地によって一旦離されているため，独立した山塊をなす。山の南側（太宰府側）は急峻な斜面が形成される一方，北側は四王寺川によって開析された谷が大きく開き，その周囲が馬蹄形の峰として残されている。この峰々には大野城跡の城壁が巡り，内部の谷に向かって伸びる小尾根には，建物群が分散して配置されている。また南側の山麓へは，尾根から続く多数の丘陵が放射状に派生し，一部では小規模な扇状地を発達させている。

三郡山地

四王寺山

一方，低地帯の南～西側には，標高1,055mの脊振山を主峰とする脊振山地が聳えている。この山地の北東部には牛頸山・黒金山・天拝山等の低山地が連なり，東には山口川を挟んで脊振山地の主稜線が，九千部山から権現山，そして基肄城が所在する基山へと連なっている。基

脊振山地

山から東には三国丘陵が広がり，東端は筑紫平野に接している。これらの山麓には小さな谷が入り組んだ丘陵が形成されるが，宅地化が進んだ地域も多く，丘陵の面影が残る場所は少ない。

牛頸窯跡群

なお，北側の牛頸山から樹枝状に伸びた支脈一帯には，牛頸窯跡群として知られる須恵器の一大生産地が営まれ，さらに支脈東端部の吉松丘陵に接続して，水城跡の土塁が築造されている。

低地帯を構成する狭い平地部は，北西側は宝満山を源流とする御笠川が博多湾に向けて貫流し，南東側も同じく宝満山を発する宝満川が筑後川に向けて南下することで，双方に開く地形となる。

御笠川

宝満川

御笠川は宝満山と四王寺山の間を南流し，四王寺山麓に沿うように西そして北西に流れを変えて那珂川・大佐野川と合流しながら博多湾へと向かう。宝満川は山口川を合流しながら筑後川に向けて南下する。低地帯一帯には，両水系の開析・堆積作用で形成された沖積地，

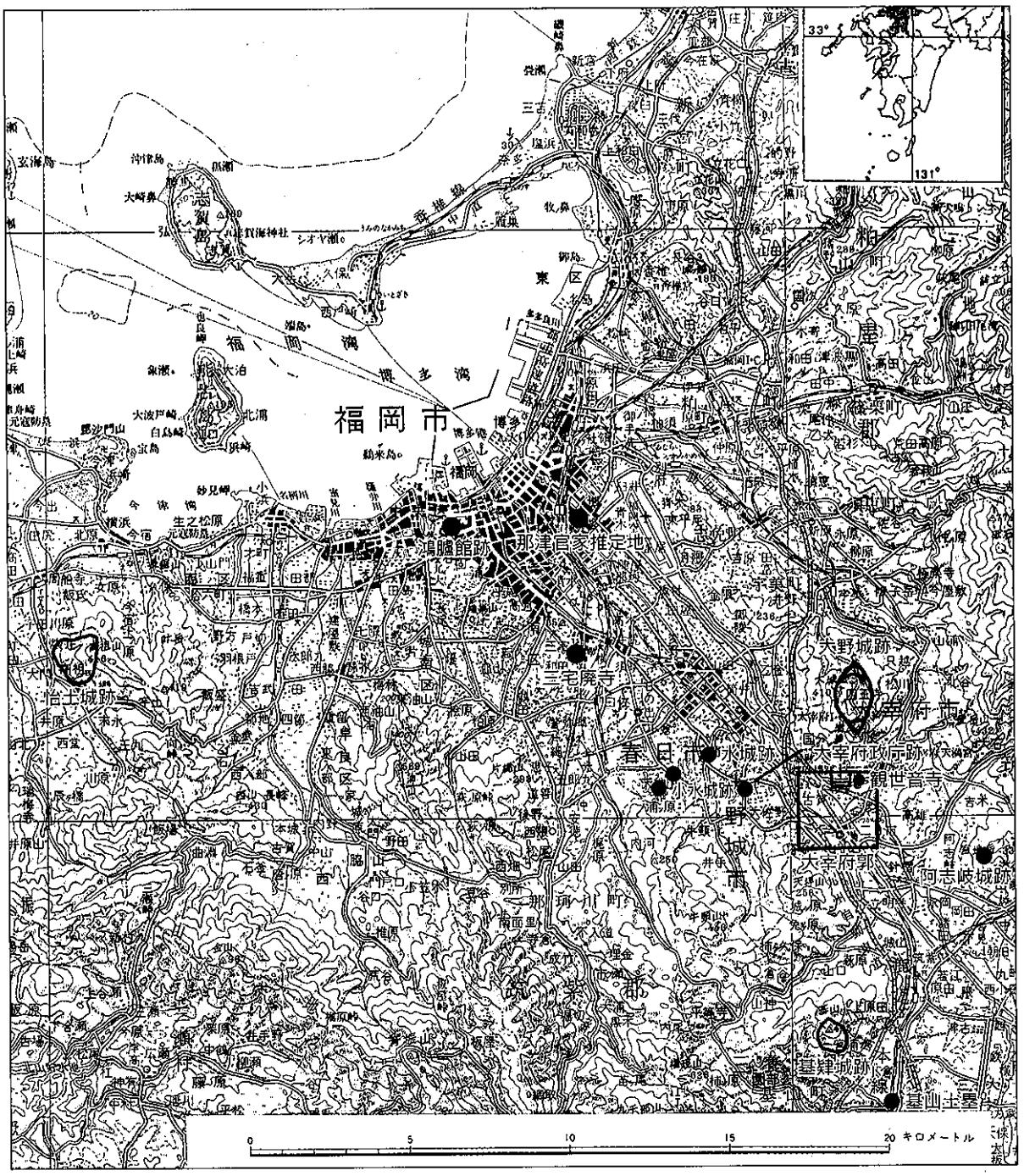


Fig. 2　大宰府関連遺跡分布図（1/200,000）

及び南北の山地から延びる丘陵の安定地盤が広がっており，大宰府関連の遺跡がその上に営まれている。このうち水城跡は，低地帯が東の四王寺山と西の吉松丘陵に挟まれて，幅が1.2km ともっとも狭まる部分に，平地部を塞ぐように横たわっている。大宰府政庁跡からは東門地区で北西に約1.8km，西門地区で西に約2.4kmの位置にあたる。土塁の東西端はそれぞれの丘陵部を取り込んで接続するが，遺構の大部分は沖積低地上に築かれている。

水城跡の立地

歴史的環境

水城跡をはじめとする大宰府史跡の歴史的背景を考えるときに，６世紀後半以降の東アジア地域の国際情勢を抜きに語ることはできない。６世紀末～７世紀前半の中国における統一王朝隋･唐の成立は，東アジア世界，特に朝鮮半島の諸国に緊張をもたらした。４世紀以降，高句麗･新羅・百済の三国が鼎立していた朝鮮半島では，南部の加耶地域や半島への影響力保持を図る倭も加わって抗争を繰り返していたことは『日本書紀』（以下『書紀』）や『三国史記』あるいは高句麗好太王碑文などで知ることができる。中国では五胡十六国・南北朝の争乱期後，589年に隋が中国を統一するが，高句麗侵攻の失敗等により再び国内情勢が不安定になり，618年に唐が成立する。やがて642年に高句麗が百済と結んで新羅に対する軍事行動を起こすと，唐は新羅の要請に応じて半島への介入を始め，高句麗に出兵する。そして660年に唐・新羅連合軍が百済を攻撃したことで百済は滅亡，高句麗も668年に滅ぼされ，その後新羅による半島統一が達成される。このような国際情勢は，日本列島の支配体制にも大きな影響を与え，律令国家への歩みが始まるが，海峡を隔てて半島と向き合っていた北部九州地域は，列島の中で最も国際情勢に影響されやすい位置にあった。

東アジアの国際情勢

北部九州では527年の筑紫君磐井の乱が平定されたことで，ヤマト政権による外交権の一元化や地域支配が進展する。その象徴的な出来事が『書紀』継体天皇22年(535)の筑紫君葛子による糟屋屯倉献上と安閑天皇２年(535)の「鎌」・「穂波」をはじめとする北部九州から瀬戸内海そして畿内に至るルート沿いの諸国における屯倉の設置である。そして宣化天皇元年(538)五月庚丑朔日条では「那津之口」の「官家」つまり那津官家の「修造」を伝えている。那津官家は当時，朝鮮半島南部で繰り返されていた紛争にヤマト政権が積極的に関わるため，半島への「去来之所関門」である筑紫の那津に兵站基地を設置したものである。一方でその役割に対外的機能の端緒がみられることや，「筑紫肥豊」３国の管内支配について触れることから，那津官家を大宰府の歴史的前提として位置づける説は根強い。ただし那津官家の存在は史実としても，大宰府の前身とするにはその官司としての役割・実態の解明が不可欠である。

磐井の乱

那津官家

この那津官家の所在地については，現在の福岡市南区三宅をはじめ，博多湾沿岸の数ヶ所が候補に挙げられてきた。近年，福岡市博多区博多駅南から那珂にかけての一帯にあたる，那珂川と御笠川に挟まれた南北に長い台地上に，弥生時代～古墳時代の大規模な集落跡が確認され，比恵・那珂遺跡群として同市教育委員会による発掘調査が実施された。そのうち比恵遺跡では南北約55m，東西50m以上の区画を伴った６世紀後半～７世紀後半の倉庫とみられる建物跡が10棟検出された。その他にも倉庫跡が確認され，台地全体にこのような倉庫群が広がっている可能性があるという。その規模や構造は後の官衙正倉に類似するもので，当時の入り江近くに立地することからも，那津官家に関連した施設と考えられる。

比恵遺跡

1. 水城跡　2. 大宰府政庁跡　3. 筑前国分寺跡　4. 筑前国分尼寺跡　5. 観世音寺　6. 大野城跡・四王院跡
7. 春日水城跡　8. 上大利水城跡　9. 神ノ前窯跡　10. 前田遺跡　11. 御笠団印出土地　12. 遠賀団印出土地　13. 市ノ上遺跡
14. 杉塚廃寺　15. 塔原廃寺　16. 武蔵寺　17. 般若寺跡　18. 岩屋城跡　19. 推定金光寺跡　20. 崇福寺跡
21. 原山無量寺跡　22. 安楽寺跡　23. 有智山寺(大山寺)　24. 阿志岐城跡　25. 基肄城跡

Fig. 3　水城跡周辺主要遺跡分布図（1/62,500）

660年に百済が滅亡すると，国の再興を図る遺臣は倭に援軍を要請する。それを受けて，斉明天皇・中大兄皇子率いる政権は百済救援を決定し，翌年天皇以下政権の中枢は飛鳥岡本宮より筑紫に下向，「娜大津」に到着し，磐瀬宮に入った。この時，娜大津を長津と改称している。続いて朝倉橘広庭宮に遷るが，天皇はここで突然亡くなっている。この朝倉宮は現在の朝倉市朝倉町付近に比定するのが通説になっている。なぜ前線基地の博多湾沿岸から遠く離れた内陸部に宮が遷ったのかは定かでない。九州横断自動車道の建設に伴う発掘調査では，現朝倉市杷木町志波地区の遺跡群で７世紀後半代の掘立柱建物跡群が発見され，朝倉宮関係の施設の可能性も考えられている。斉明の死後，称制した皇太子中大兄皇子は長津宮に遷り，弟の大海人皇子が軍政の指揮を執ったとされる。そして大軍を百済復興の援軍として半島に送り込んだ。なお磐瀬宮の所在地は不明である。

朝倉橘広庭宮

663年，倭・百済連合軍と唐・新羅連合軍は忠清南道の錦江河口付近に比定される白村江において会戦に及ぶが，倭・百済軍は大敗し，倭軍は百済の亡命貴族と共に撤退，百済は完全に滅亡する。その敗戦後，倭は唐・新羅連合軍の侵攻を想定し，ただちに辺境防備の施設と伝達システムの整備を開始する。『書紀』によると天智天皇３年(664)には防人や烽を対馬・壱岐・筑紫に置くとともに，筑紫に水城を築き，翌年には長門国に城を，筑紫国には大野・椽（基肄）城を築いたと記している。その後も天智天皇６年(667)には対馬嶋金田城，讃岐屋嶋城，大和高安城の築城，さらに文武天皇２年(698)には鞠智城の修理などを伝えており，対馬を含む北部九州から瀬戸内海沿岸を経て畿内に至る地域に，防衛施設の配備が急ピッチで進められていった。特に最前線となる北部九州にはその多くが集中し，中でも水城・大野城・基肄城はその位置関係から，大宰府との密接な関わりを想像させる。

白村江の敗戦

「大宰府」の成立は大宝元年(701)の大宝律令の制定・施行によるものだが，大宰府に繋がる一定の機能を果たした機構自体は，先述のように那津官家，あるいは「筑紫大宰」・「筑紫総領」の段階にも存在したとされる。筑紫大宰の史料初見は推古天皇17年(607)まで遡る。その属性や機能は時代による変化があり課題も多いが，概ね筑紫における内政・外交を司ったとされる。一方総領は「＝大宰」と考えられてきたが，近年では両者を別のものとし，総領を主に内政面での役割を果たしたものとする説がある。いずれにせよ白村江の敗戦という当時の国家的な危機をきっかけとして，それまでの那津官家や筑紫大宰，筑紫総領の役割が集約・整理・再編される形で，現在の大宰府政庁跡の地において，後の「大宰府」へと繋がる拠点的施設が成立する。その遺構が大宰府政庁跡で確認されたⅠ期古段階に位置づけられる遺構群である。

大宰府の成立

大宰府政庁跡の発掘調査成果では，政庁跡の遺構が大きくⅠ～Ⅲ期の３時期に区分されること，さらにⅠ期の遺構が古段階・新段階・Ⅱ期造営時の３時期に細分されることが明らかにされた。Ⅰ期古段階とはその創設時期にあたり，後の中門や北門周辺の地下で検出した方位が不揃いの柵遺構や，正殿周辺で検出した掘立柱建物跡・柵列跡がその時期に属する。現在地における筑紫大宰の成立が白村江の敗戦をきっかけとするもので，水城や大野城・基肄城の築造との関係を考えると，Ⅰ期古段階の遺構も664年頃の天智期まで遡る可能性がある。

政庁跡の発掘調査

このように水城は当時の緊迫した情勢のもと，現在の政庁跡の地に成立した機構・施設を防御する目的で築造された。それは単独でその目的を達するものではなく，続いて築城された大野城・基肄城など周辺の防御施設と連動することで威力を発揮するものだった。

大野城　大野城は『書紀』によると百済の亡命貴族である憶礼福留・四比福夫の指導のもと，白村江敗戦後の天智天皇４年(665)に築かれた朝鮮式山城である。大宰府政庁のすぐ北側背後にある四王寺山に所在し，水城とともに玄界灘からの敵の侵入に備えた。朝鮮式山城の特徴的な構造は，土塁や石塁による城壁が山をぐるりと取り囲む点にある。大野城では，四王寺山の円形に巡る峰々の上を１周約6.5km，南北に二重になる部分があるため，全長で約８kmの城壁が走る。城壁の大部分は版築で築かれた土塁で，谷の部分には石塁を築き，石塁の下に排水施設を設けるなどの工夫がされている。城門は城壁を断ち割るように造られており，現在までに７ヶ所確認されている。中には門礎や唐居敷が残るものもある。城壁で囲まれた城内には，数ヶ所の小尾根に造成した平坦地に，掘立柱・礎石建物跡が分散して70棟以上確認されている。ほとんどが規格を同じくする総柱建物で，穀物庫や武器庫といった倉庫跡と推定されている。

基肄城　基肄城は大宰府政庁跡のほぼ真南およそ７km離れた位置にある。筑紫野市と佐賀県基山町の境にあたる脊振山地の基山を中心とした２つの峰に城壁を巡らせた朝鮮式山城で，有明海側からの敵に備えた。『書紀』によると，天智天皇４年に大野城とともに憶礼福留・四比福夫の指導のもとで築城されている。城壁は南に開く筒川の谷を取り込んで峰々を巡り，全長は3.8km，谷部は石塁で塞ぐ。石塁には排水のための水門が設けられている。城門は南門を主門として４ヶ所で，城内では40棟前後の建物跡が確認されているが，本格的な調査は実施されておらず詳細は不明である。

水城跡の西側に接続する吉松丘陵から，さらに西方の大野城市から春日市にかけては，脊振山地の牛頸山から樹枝状に派生する丘陵地帯が，多数の小谷を伴いながら複雑に広がっている。

「小水城」　そのうちいくつかの谷部に，水城跡よりも小規模な土塁を見ることができる。これらは通称「小水城」と呼ばれる。比較的残りが良いものに，水城跡の西約800ｍに位置する大野城市の上大利水城跡，同じく西3.4kmに春日市の大土居水城跡，さらに500ｍ西に同市の天神山水城跡があり，水城跡と合わせて「特別史跡水城跡」に指定されている。土塁の規模は水城跡の半分程度で，このうち春日市の大土居水城跡では近年の調査で木樋が発見された。このほかにも類似する遺構が数ヶ所で指摘されている。春日市内では小倉地区・春日地区で小水城が推定されているが，いずれも現状では住宅地内に埋没して遺構の残存状況は悪い。一方，基肄城を南東に約３km下った基山町小倉・宮浦にも関屋土塁・とうれぎ土塁，久留米市上津には上津土塁と呼ばれる同様の小水城が所在する。だがこれらも宅地化や道路のために，わずかが残るのみである。

阿志岐城　大宰府の東側にあたる筑紫野市阿志岐の宮地岳山腹で，平成11年(1999)に古代山城跡が発見された。同市教育委員会の調査では，基部に切石の列石を伴う版築土塁と，谷部を塞ぐ３ヶ所の石塁による城壁が全長1.3km確認されている。いわゆる神籠石系山城にみられる特徴を持ち，切石の角に「L」字形の切り欠きを施した箇所も見られた。列石の下には更に扁平方形の切石の基底石を置くが，日本の古代山城では他に例が無いものという。また城壁が山を全周しないことや，その正面が筑紫平野あるいは二日市低地帯ではなく，宝満山の麓を通過する峠道を意識して選地されていることなども特徴的である。ただし築城年代等も含めて不明な点は多い。

以上のような水城をはじめとする諸施設の位置関係は偶然の結果ではなく，入念に計画された大宰府防衛ラインの設定によるものである。このほかにも明確な遺構は確認されていない周

「羅城」　囲の険しい山地を防衛ラインに組み込み，自然地形を巧みに取り入れた一種の羅城とみる考え

方もある。政庁北西部の水城からさらに西には小水城によって間道を塞ぎ，脊振山地の自然地形を利用して基肄城へと至り，東は大野城から宝満山，そして阿志岐城を結ぶことで北方から東西にかけて通路を遮断したことになる。南の筑紫平野への開口部にはこれまでのところ基山町の土塁を除いて防衛施設の形跡は明らかではない。しかし基肄城の位置，あるいは筑後国府前身官衙や上津土塁の存在を考慮すると，有明海側からの侵攻にも意を配したことは想定される。これらの具体像は今後の課題となる。いずれにせよ大宰府政庁を中心にこれらの防衛施設を配置し，全体として倭国防衛の中核拠点と位置づけたと見ることができよう。

水城はその完成後，日常的にメンテナンスが施されながら維持されたと考えられるが，記録には残されていない。築造記事の後に国史に現れるのは，『続日本紀』天平神護元年(765)三月辛丑条で「大宰大弐従四位下佐伯宿祢今毛人為築怡土城専知官，少弐従五位下采女朝臣浄庭為修理水城専知官」というものである。８世紀に入ると朝鮮半島を既に統一していた新羅との間で，互いの遣使を追い返すなどのトラブルが続き，国交関係が悪化していた。このため，新羅との決定的な対立に備え福岡市西区と前原市が境界を接する高祖山の西側山麓一帯に怡土城を新たに築き，わざわざ専知官を置いて水城の大規模な修理を行ったと考えられる。

修理水城専知官

怡土城

防衛施設である水城は，一方で大宰府の内外を隔てる関門の役割を果たした。早くは『万葉集』に天平２年(730)大宰帥大伴旅人が大納言を兼任したために上京することとなり，和歌とともに「府吏」をはじめ縁の人々が水城の上で見送りする様子が記されている。帥や大弐クラスの大宰府高官の送迎は，水城で行われるのが恒例だったようで，それは平安時代になっても続いている。藤原実資の日記『小右記』寛弘２年(1005) ７月23日条には，大宰大弐の藤原高遠が大宰府に赴任した際，水城で「印鎰」を受け取った後，「府庁宿所」に入ったことが，高遠の手紙から見て取れる。また『大弐高遠集』には高遠がこの時に詠んだ一首があり，「府にいるひ，みつきのせきに，少弐・府官なとむかへにあつまりきたり」という一文が添えられている。「水城の関」という表現は，その実態を表したものであろう。彼ら帥・大弐は，水城東門を通過して府庁に至ったが，反対に外（博多）側には「大宰府道」と呼ばれる都へと続く官道が延び，玄界灘から響灘の沿岸部，そして到津駅（小倉北区到津）・杜崎駅（門司区田野浦）を通って山陽道に接続していた。その陸路もしくは途中で海路を利用して，大宰府と都を往来したと考えられる。この大宰府道には他に，大宰府から東に向かって宝満山と阿志岐城の間の峠を抜け，田河郡（田川市・郡）を通って豊前国府（みやこ町国作）に至る「田河道」がある。

関門としての水城

古代官道

一方，水城西門を通過する官道は，内側では大宰府郭の条坊街区に接続し，外側では鴻臚館に向かって延び，さらに怡土郡（前原市・二丈町・福岡市西区）あるいは肥前松浦方面へと続いたと考えられる。鴻臚館とは平安時代の呼称で，外国からの来客を滞在させ，接待するために平安京，難波，筑紫の３ヶ所に設けられた施設である。筑紫の鴻臚館は，それ以前では「筑紫館（つくしのむろつみ）」と呼ばれた施設にあたると考えられ，福岡市中央区の福岡城跡の中にその跡が確認されている。昭和62年(1987)より継続して実施されてきた福岡市教育委員会による発掘調査では，７世紀後半に位置づけられるⅠ期から，８世紀前半～中頃のⅡ期，８世紀後半～９世紀前半のⅢ期と，３時期にわたる大規模建物の変遷を確認し，瓦や輸入陶磁器など多量の遺物が出土している。また西門ルート上にあたる太宰府市～福岡市にかけて，断片的ではあるが西門跡を通過してほぼ直線状に伸びる官道の跡が発掘調査で確認されている。

鴻臚館

第Ⅲ章　水城跡研究史

（1）近世までの水城研究

飯尾宗祇『筑紫道記』

水城が廃絶して以来，その姿を実見した最も古い記録として，連歌師の飯尾宗祇による『筑紫道記』がある。宗祇は当時大内義弘に招かれ山口にあり，文明12年(1480)９月から10月にかけて太宰府・博多を旅している。太宰府天満宮を参詣して連歌を興行し，翌日観世音寺・戒壇院から大宰府政庁跡を訪ね，関守に「あやしけ」に睨まれながら刈萱関を通過している。そして水城跡を訪れた宗祇は，次のような記録を残している。

越え過ぐるまゝに大成堤有，いはゝよこたはれる山のことし，尋れは是も天智天皇のつかせ給ひけるとなん，民の愁いかはかりにかと思ふも悲し，

天智天皇の命によって築造されたものという伝承を伝えるが，宗祇はその堤の名称や何たるかについては記していない。その約１世紀後の慶長３年(1598)豊臣秀吉の治世下で直轄地となった筑前に，代官として石田三成が着任する。三成に従った是斎重鑑の『九州下向記』によると，６月に博多から太宰府を訪れ，その「道すから又みる所ともおほし」として政庁跡や観世音寺，刈萱関などについて記すが，水城については触れられていない。

徳川幕府の治世となり18世紀に入る頃になると，中世からの記憶が人々の中で次第に薄れ，記録として残そうという気運が各地で生じてくる。さらに領内の把握を志向する領主権力の要請も相まって，地誌編纂のブームが起こる。福岡藩では儒学者であり，且つ博物学者でもあった貝原益軒の手により『筑前国続風土記』（以下『続風土記』）の編纂が行われた。『続風土記』は元禄元年(1688)に編纂の許可がおり，完成は宝永６年(1706)である。内容は徹底的な実地調査に基づく実証的なもので，元禄年間における筑前国の状況がよく伺える有用の書である。また水城跡についても当時の様子を詳述した初めてのものである。

貝原益軒『続風土記』

日本紀を考ふるに，天智天皇三年筑紫におゐて，大堤を築て水を貯ふ。名付て水城というよししるせり。是太宰府の要害のために築せられたるなるへし。称徳天皇天平神護元年，太宰小弐采女朝臣浄庭を，水城を修理する専知官とせられし由，続日本紀に見えたり。今其堤を見るに，高さ五間，根盤二十七間，東西に長き事八町許にして，其間たえて堤なき所一町許あり。堤の内は田と成て水をたくはへす。元禄十二年此堤の辺の田をほりしに，大なる木二有て掘出しけり。長さ三間許，小口二尺余あり。一本は杉，一本は朽て見分す。此土堤を築し時の台木なるへし。東西の間堤なき所より，水は北の方に流る。誠に世にたくひすくなき大堤なるへし。其東の大路のすちに，門の址にや，大なる礎猶残れり。水城の関といへるは此所なるへし。

この後に大伴旅人や藤原高遠らの古歌を紹介している。益軒は大宰府防衛のためという水城の築造目的を理解しながらも，『書紀』の記述から「堤の内」に水を貯えたとする貯水説を採っている。さらに注目すべきは元禄12年(1699)に「大なる木」２本を掘り出したという記述である。その大きさは長さ約5.5m，小口は約60cmほどで，恐らく木樋を掘り出したものと考え

「大なる木」出土

られるが，益軒は土塁の「台木」と認識している。また東門跡に現存する礎石を門礎と理解していることも触れておきたい。

また後述する伊藤常足『太宰管内志』に引用された，宝永２年(1705)付の益軒の序がある安見有定編『筑陽記』は水城跡について「堤ノ土手并関所ノ礎今猶有之，其土手連東西，中間一町許崩云云，東方所残長百六十間余，西方長二百四十間余，根張十五間，高四間也，堤内埋為田地」と伝える。概ね『続風土記』の内容と一致するが，土塁の法量に若干違いがある。これらに続く近世筑前の地誌に『筑前国続風土記附録』（以下『附録』）がある。加藤一純・鷹取周成の手により寛政10年(1798)に成ったもので，『続風土記』を本編とし，天明～寛政期の筑前領内について実地調査に基づいて報告する。その大きな特徴として着色挿絵が付されている。しかし水城跡については「水城大堤　本編（「続風土記」）に詳也。」として詳述しない。

青柳種信『拾遺』

『続風土記』・『附録』を踏まえ，文化11年(1814)に青柳種信『筑前国続風土記拾遺』（以下『拾遺』）の編纂が開始される。種信は本居宣長に学んだ国学者で，考古学や地誌にも深い関心を持った。『拾遺』編纂では，まず古文書や戦記・系図等を研究し，さらには領内各村・浦・寺社より提出された「書上」をもとに，文政３年(1820)より実地調査に取りかかっている。このように基礎研究と調査に大きな労力を費やしており，その記述も神社や考古遺跡を中心に厚みを増すものとなっている。水城跡についても長文であるため，一部を紹介する。まず古代の遺跡としての水城跡の概要を述べる。

往昔は堤の内に川水を堰入て水を湛(タヽヘ)たり。故に水城といふ。…即太宰府の外堺也。堤の中，東西に両門を開けり。東は席田の久尓(クニ)，糟屋の宍守(ヒナモリ)等の駅を経て京に上る官路也。西門は博多また肥前松浦等に至る。府ノ大道といひたりしも是なるへし。堤の北面には大石を畳て石壁を築たれハ水城関とも磐垣(イハカキノ)関ともいへり。

西門の存在

益軒同様，土塁内側の貯水説を採り，さらに水城が大宰府の外郭線にあたることや土塁東西の門，それぞれの門から延びる官道について所見を述べている。西門の存在を指摘した初めてのものでもある。事前の基礎研究と実地調査による情報の正確さが伺われる。また土塁前面には石垣があったとする。これに続いて文政期当時の状況を記述する。

今此堤の長を計るに…通計長六百弐拾間，高五間有。…近世に至りて土を引，淳水を埋て田畑を開けり。今より二十年前まてハ田中に大石多く連りて有。西門の址にハ礎石も厳然として有。其辺に古瓦も多く散在せしか，近年土民等川溝等の修補に其石を取用ひしかハ，今は此所にも夫とおぼしき石一ツも見へす。変迁の速なる事かくの如し。…今より後にはいよ〳〵其跡とも見へぬ如くに消亡ぬへきか，あたらしさにかくハ記し侍りぬ。元禄年中此辺の土中より大材を掘出せしよし本編に見へたり。近年も松杉樫等の大材を此川の辺より穿出せり。少も朽損なし。色黒くして，相州箕根山の神代杉などの如し。

「大材」の出土

「近世」までは「淳水」があったこと，西門跡の礎石や，周辺の様子についての言は重要である。また開発により急激にその痕跡が無くなることへの危機感を表している。さらに川（御笠川か）付近での「大材」の出土を伝えるが，用途には触れていない。西門の存在や官道ルート，石垣の存在について論点を提示したことは大きな成果であろう。

奥村玉蘭『名所図会』

『拾遺』は文政12年(1829)に草稿が完成するが，その間文政４年(1821)には博多の商家の出である奥村玉蘭によって『筑前名所図会』が作成された。玉蘭は「太宰府碑」を撰した亀井南冥に学び，天満宮の絵馬堂を寄進，学校院跡に住するなど大宰府に特別の思いを持った人物である。『筑前名所図会』の最大の特徴は挿絵で，寺社中心で着色がある『附録』のものと趣を異にして，伝説・風俗などを中心に軽妙・精細に描かれている（Fig. 4・5）。作成にあたっては実地を訪ね，広く書籍の調査も行っており，本文にも見るべきものがある。

今其堤を見るに，東西の山際より築上(つきあげ)たる所半里余あり，中に崩て川の流たる所一丁あり，此所より往々(まいへ)大木の板のたくひ掘出したる事あり，是ハ樋に用ひたる物なるへし，凡其内を見渡せは，一里四方もある堤なり，東の方大路の傍に，門の礎一ツ残れり，是を俗に鬼の硯石といふ，水城の関といへるは此所なるへし

概ね『続風土記』の内容に沿うが，以前御笠川近くで出土した「大木の板」（『拾遺』の「大材」か）を「樋」と認識している点は注目される。

このほか種信の門人で鞍手郡古門村古物神社の神官伊藤常足による『太宰管内志』がある。文化元年(1804)から38年もの歳月をかけて天保12年(1841)に完成する大著だが，水城跡については「平家物語」・「八幡愚童訓」・「筑陽記」・「続風土記」の記述と古歌を引用するもので，所見についても概ね『続風土記』に倣ったものである。

水城跡は，近世における学問の興隆とともに地誌に取り上げられたことで，古代の遺跡として再発見された。特に筑前では『続風土記』や『拾遺』など国史に拠りながらも実証的な研究が行われたことで，宗祇の時代のおぼろげな伝承から，次第に厚みを増す内容となっている。またその中で古歌も多く取り上げられたことも，併せて水城に対する認識を広め，西都太宰府を構成する名所としての位置づけに大きく寄与した。

（2）近代的研究へ

古代の遺跡としての水城跡の認識は，明治維新後も引き継がれる。ただそこには天智天皇の「聖蹟」あるいは「元寇遺蹟」という意義が前代よりも強く反映されていた。明治22年(1899)

「憂国の士は…」

福岡元寇記念会建碑事務所の手により「憂国の士は少時車を駐むべし」と記した木柱が，水城

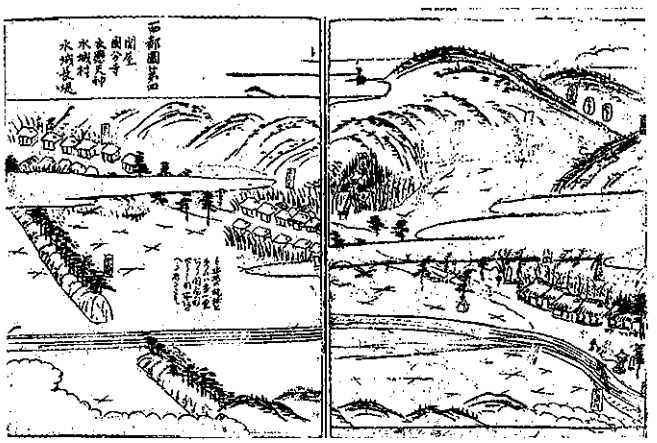


Fig. 4　『筑前名所図会』（西都図第四）（福岡市博物館蔵）

Fig. 5　『筑前名所図会』（鬼の硯石）（福岡市博物館蔵）

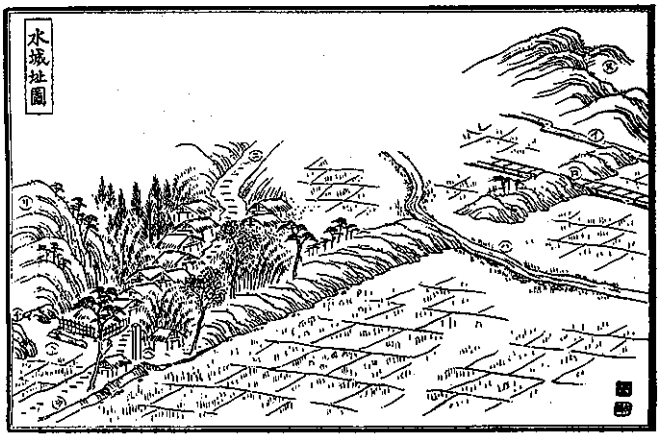


Fig. 6 『靖方遡源』（水城址図①）

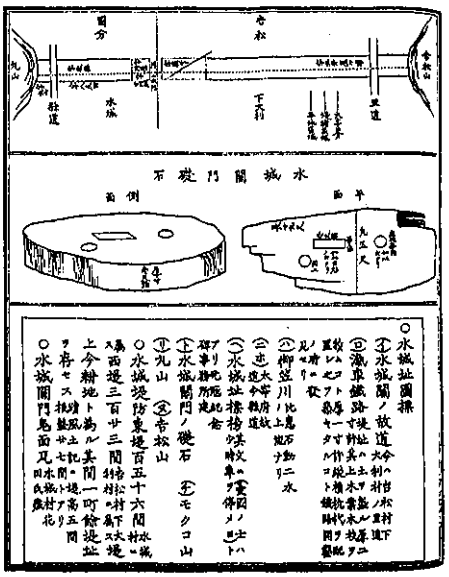


Fig. 7 『靖方遡源』（水城址図②）

東門跡近くの土塁際に建てられている。その場所は東門門礎から旧街道を挟んだ位置である。

また明治24年(1891)には蒙古襲来史料集である『伏敵編』が山田安栄の編纂で刊行された。同書一冊のほかに「靖方溯源」と「竹崎季長蒙古襲来絵詞」とを合わせた一冊を附録とする。これらも蒙古襲来遺蹟の顕彰と国民の敵愾心の発揚を目的に推進された元寇記念碑建設運動との関係で編纂された。このうち「靖方溯源」は元寇以前の外交防衛関係史料を編年体で集成したもので，水城については特にFig. 6・7のような図と「水城址考」を載せる。注目すべきは図の解説「水城址図標」の「(ロ)瀛車鉄路」である。明治22年(1899)に現在のJR鹿児島本線の九州鉄道博多－千歳川仮駅間が開業しているが，その開削工事の際に観察された土塁断面の状況が記される。Fig. 7を載せるため本文の掲載は避けるが，土塁の築造に「木葉木枝」や杭が使用されていることを指摘する。なお「水城址考」では，筥崎宮宮司芦津磯夫の説として水城内側の貯水説を紹介している。

「靖方溯源」

これ以降，明治期を通じて水城跡の研究成果は見あたらない。「靖方溯源」も当時の状況や線路開削に伴った土塁の構造に関する指摘はあるが，その他の点では基本的に近世の地誌で提示されたものを超える成果ではない。この水城跡の研究を近代的な考古学研究という点で飛躍させたのは，皮肉にも大正２年(1913)の水城駅開業のための鹿児島線拡張に伴う大規模な土塁開削であった。この時，東京帝国大学黒板勝美と九州医科大学中山平次郎が現地を訪れて調査を行い，それぞれ詳細且つ貴重な記録を残している。なお巻頭PL. ２は，黒板に同行した美術学校卒業生久富寿年の筆によるスケッチである。

大正２年土塁開削

黒板は大正２年(1913)「福岡県学術研究旅行報告書」（『史学雑誌』25-3）と大正３(1914)「福岡地方旅行談」（『考古学雑誌』4-6）でその報告を行っているが，前者では特に土塁の構造について報告し，後者ではそれを含めて水城跡の全体についての考えを述べている。まず土塁の構造については『続風土記』なども触れず，「靖方溯源」に僅かな記述があるのみとして，今回の調査の重要性を強調する。そして土塁積土の状況について

黒板勝美

上部の方は砂で固めてありますが，上から一丈位の下は，粘土の層が色々の色をしております。その一つの

層の厚さが凡五寸位で，その層には，柴や木葉が層をなして置かれてあります。殊に其木の枝や木葉が上から充分圧迫されている上に，水分がジクジクあるので，殆ど初期の状態，木葉の如きは青々として重なっている…今日では上部の方は砂と変じておりまして不明でありますが，その砂層の間に，其形迹が存しておりますから，或は上迄同一の構造であったのかと思はれます。

版築土層と敷粗朶

と記している。版築土層といわゆる敷粗朶を確認しており，特に採取した植物からその樹種を同定し，若葉が多いことから築造が春から秋に及ぶ点まで報告する。また土塁の傾斜が外面は３段で30°～40°，内面はやや緩く４段であることや，御笠川による欠堤部には「水門」があり，明治44年(1911)の水路整理の際大石が掘り出されたことなど，他にも多岐にわたる指摘をしている。なお貯水については，灌漑用水を今日ほど要しない古代では御笠川の水量は多く「防禦のために水を貯ふるにも余り時日を要せなかった」，大宰府はやや台地の上にあり水没の恐れはないとして，土塁内側の貯水説を採っている。

中山平次郎

一方，中山の報告は大正３年(1914)「水城の研究」(『筑前史談会講演集』１)に載る。中山も「靖方溯源」の記載を土塁の断面について述べた恐らく唯一のものとしつつも疑問を呈し，再調査の重要性を説いた上で，開削によって露出した土塁断面の調査報告に止まらず，水城全体の構造に関する私見を述べている。土塁断面の観察結果については，断面の土質を「表層部」と「基底部」の２部に大別し，

基底部は…粘土又は細砂を混ぜる粘土質の土よりなり，最も多く帯青色の砂土が用いられてあるが，他に種々なる色沢の土質も混用せられている。これら種々なる土質は，概して二三寸乃至五六寸の厚さを保ち，(最厚処九寸至) 交互に積み重ねられ，為に断面に層畳性の斑紋を表示している。層畳の方向は鉄道切断部の東側面においては概して水平であるが，西側面においては心もち前下りになって居る。…基底部粘土層は水城盤根の全部を為しているものでは無くして，大隆起の前縁の少しく前の辺より，後面の中段にわたり水城の軸となっている。幅約廿二三間の根部に表はれ，その前後は表層部におけると類似の土質よりなっている。…この粘土質と他の土質との移行部は，前側においては，下方に向て彎曲し，略蒲鉾状を呈している。…

表層部は…概して細砂を混ぜる赤土よりなっているが，質均等ではなく，その断面に基底部の粘土層におけると類似の盛り上げのときに生じた，土質の相違に因する層畳性斑紋を見ることができる。層畳の方向は，粘土層に近き深層においては，概して水平であるが，大隆起の処では，頂部に近ずくに従て盤根部に向った弱き弓状の彎曲を呈して居る。

とする。上成土塁（「表層部」）と下成土塁（「基底部」）に土質の相違を認め，まず「根堅め」として粘質土で「蒲鉾形の低く平き長堤」を築き，次に砂質土でこれを覆って「隆起段階等表面より見るを得べき各部を造った」という。さらに「深部の粘土質盛土」より発見の樹葉樹枝，つまり敷粗朶について，「水城根堅工事の築造法を識知するに有力」であり，土層に乱れがないことから築堤当時のものと位置づける。それは「しばしば畳性斑紋の界線のところから」出土し，上層のものは状態が悪いが，深層出土のものは概ね緑色で原型を保ち，樹種の判別が可能であるという。そして黒板同様に植物の観察から晩春より秋の間に築造されたとする。さらに土塁については，傾斜が前面は急で後面は緩やかであることに加え，調査地付近の積土の粘

質土が吉松丘陵の粘土層と同質で，そこからの採土が考えられること，西門跡西側の土塁が，吉松丘陵から延びる自然丘陵の削り出しで成形された可能性を指摘している。

門については，まず残存する門礎から東門の存在は確実としながら，門礎が原位置を保つものか疑問を呈している。一方西門については土塁下部や切通しの土塁断面に列石が確認できること，切通し付近に採取できる瓦片が，少し東西に離れると見あたらないことから「切通となっている辺に，西門と称すべき一の関門が存在していたは」疑いないとする。また『拾遺』の土塁前面に石垣があったとする説に対して，東西の門付近には石垣があったが，今回の開削に伴う調査からも大部分は土塁と否定している。そして土塁断面に埋没する古瓦の存在から，積土の「後世何等歟の理由に」よる積み直しを想定していることも注目される。貯水については，やはり内側への貯水説を採るが，「水城の前面には，泥沼地若くは湟池等の放瀉した水を受け湛える設備が施されていたのであらぬ歟」と，併せて外濠の可能性にも言及している。中山の報告は，黒板の成果を用いた部分もあるだろうが，水城跡周辺の入念な踏査を踏まえて，より全体的で詳しい著述となっている。

外濠の可能性

また『続風土記』以来の数書が水城跡の法量を記すが，いずれも差があることを問題とし，大正４年(1915)に水城村出身で筑紫郡技手の竹森善太郎によって水城跡の実測が行われた。これは大正天皇の大典を記念した水城青年会による建碑に伴って実施されたもので，現在も東門跡近くに立つ「水城大堤之碑」（Fig. 8）に，その数値が築造・修理の記録と共に碑文に刻まれている（Fig. 9）。

「水城大堤之碑」

このころになると民間でも郷土史の研究が盛んになり，水城跡ついての著作も現れる。

福岡県出身で陸軍少将の竹内栄喜による昭和４年(1929)「太宰府を中心とする国防築城」（『筑紫史談』46）はその一つである。竹内は「戦術及築城原理の見地から」水城の性質や大宰府防衛について考察し，「其築城形式の範となった朝鮮の築城」との比較研究を行った。そこでは，水城の土塁内側貯水説を，水城跡を単独で観察することで「恰も平地に築かれた貯水池の大堤防」に見えるもので，書記の記述にも合うことから通説となってしまっていると批判する。そ

竹内栄喜

「朝鮮の築城」との比較

Fig. 8　水城大堤之碑

Fig. 9　水城大堤之碑（碑文）

して水城を「博多方面に対し太宰府の正面を防禦すべき重要の築城施設」，大野城を「博多平地を制すべき防禦の核心」として，「太宰府は此要害（大野城）の掩護下に置くのを基礎條件として博多附近の旧位置から南方に移された」ものと推論する。そして「平地及び山地に亘りて主要なる防禦正面に一連の防禦線を設定するの築城思想は百済末期の泗沘防禦に於て明かに認められる所」（Fig.10）として，水城と大野城両者を大宰府防衛施設として一体に考えるべきと説く。また大宰府の都市計画（条坊）について触れながら，そこに都市が広がるならば「少くも太宰府防禦に意を注ぐ限り，之を尋常の大堤と書き流すことは出来ぬ」，前面に深田があるとする「八幡愚童記」の記事には「後世の潤飾多く信用を措き難き点もあるが…（土塁）構築の結果自然深き塹壕を前面に生じ，之に水が溜まりて水湟の如きものとなつた」として外濠説を主張する。そして「高句麗及び百済王都の築城は天然の大江を利用せる為め，人工の障碍を設定するの必要がないけれども，太宰府の正面防禦の為めに大江に代はるべき人為の水湟を設けた」という。さらに驚くことに，大土居・天神山・「大土居と水城の中間平地稲田中」で水城と同一構造の土塁発見を伝えている。中山平次郎と共に調査した「天神山東側」の土塁積土の状態が，大正２年調査の水城土塁と酷似することから同類の施設として捉え，大野城から水城，さらに西に延びるこれらの「築城施設」，那珂川町安徳の岩門城を糸島・早良方面に対する大宰府西の防衛拠点に想定する（Fig.11）。

外濠説の主張

武谷水城

昭和５年，６年には武谷水城が「水城史観」（『筑紫史談』49～52・54）を著した。武谷は嘉永５年(1852)に御笠郡水城村に誕生し，名は「豊」だが明治23年に出身地にちなんで「水城」と改めた。軍医として各地に赴任し，明治43年(1910)に帰福後は郷土史研究に尽力し，「水城大堤之碑」の撰書も務めた。「水城史観」では史資料に基づく考察を経ながらも，独自の観

Fig.10　百済国都泗沘（扶余）附近築城要図

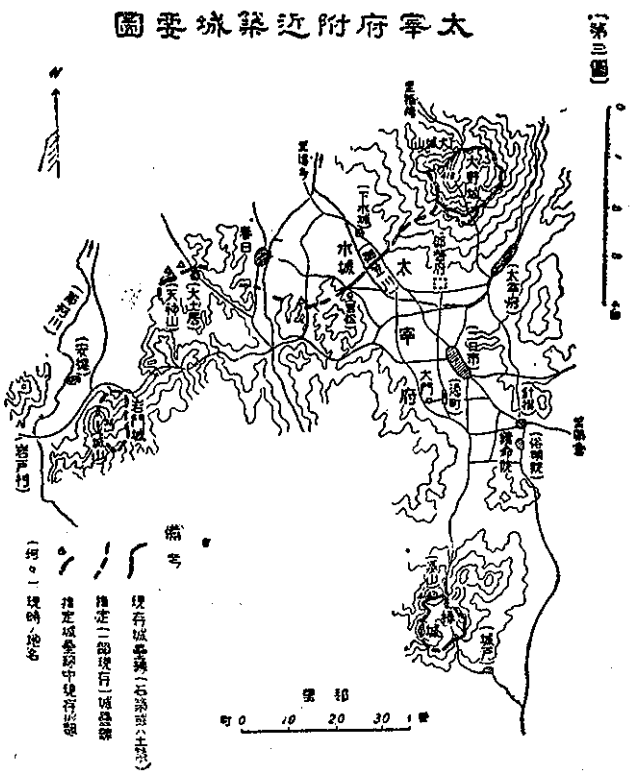


Fig.11　太宰府附近築城要図

点から多岐にわたる指摘をする。特に武谷自身の記憶に基づいた幕末～昭和初期に至る水城跡の変容や，東門跡の他に残存する３つの門礎についての記述は貴重である。そのほか，水城は「石土交築」で，明治44年(1911)御笠川改修工事の際，畳石発見の欠堤部と東西門付近のみが石垣であること，元寇と水城との関係を諸書における水城と元寇防塁の混同によるもので，水城の使用はなかったことなどを指摘する。また周辺の地形・地名より「堤と積水との関係は，内外の異あるも後世の城廓と城濠の関係と，略ぼ同一の目的」として「氾濫悩敵説」を否定しながら土塁内側の貯水説を主張する。その上で次に述べる昭和５年(1930)の出土木樋について湿抜き用ではなく「堤の内部に湛へたる積水用の物にして，又た時に臨んで其の一部の排泄溝なるべき」排水溝としている。ただし外濠の存在については「研究の余地」ありと否定していない。

木樋の発見

昭和５年(1930)，新国道（現県道112号）開設に伴って移転家屋の井戸を掘削したところ，９月26日に地表下３m程の深さで偶然木樋が発見され，九州帝国大学の長沼賢海と鏡山猛により調査が行われた。それが「水城の大樋の調査」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査書』７）として昭和７年(1932)に報告されている。そこには実測図や出土状況写真が載せられ，本格的な発掘調査であったことが分かる。木樋に関する多くの貴重な情報を載せながら，その上で木樋や土塁の構造，土塁と周辺の標高差から水城内側の貯水説を否定し，さらに木樋の性格について構造，樋内外の埋土堆積状況，地下水の出水状況から，木樋を通水のための暗渠ではなく，地下水を抜き出す湿抜きの設備とした。

長沼賢海と鏡山猛

近世の地誌以来，昭和戦前期まで積み重ねられてきたこれら水城の諸研究の成果を，新たな知見を加えながらまとめたのが昭和43年(1968)の鏡山猛『大宰府都城の研究』である。鏡山は大宰府政庁を始め，周辺諸施設を「大宰府都城」の構成要素として位置づけ，論じる中で，水城については主に残存する４つの門礎や，自らが関わった昭和５年発見の木樋について考察する。特に木樋については土塁の内側から「外に排水する施設」であり，さらに当時観世音寺で保管されていた木樋（現在九州国立博物館に展示）は「大形の丸太杉のくりぬき」で出土木樋と構造を異にすることや，『続風土記』や『拾遺』の記事から他にも木樋の存在を想定し，「水城築堤は水を貯える堰堤のようなものか疑問」とする。そして土塁の形状が外側が急勾配で内側は緩傾斜だが，内側に貯水するならばこの傾斜は逆になること，土塁の全長約１kmは水平ではなく中央部が両端に比して低いため，一様に貯水するのは不可能であること，大正３年開削の積土中，あるいは昭和５年に木樋周囲の土中で確認された樹枝樹葉が，湿気抜きのための人為的なものとの解釈から，土塁内側の貯水説を否定し，水城の主たる目的が貯水堤防ではなく防塁にあるとした。さらに天神山・大土居・上大利の小水城，さらには基山町の関屋土塁の存在に言及し，大宰府の大野城－水城－小水城－基肄城－関屋土塁を結ぶ線は百済泗沘の羅城と類似するもので，大宰府防衛の羅城を形成するものと位置づけた。

『大宰府都城の研究』

昭和45年(1970)には福岡県教育委員会・九州歴史資料館による水城跡の継続的な発掘調査が開始されるため，鏡山の成果はそれまでの水城研究の到達点であり，且つ以後の調査研究の基礎となった。なお昭和50年の福岡県教育委員会による水城跡第５次調査で，木樋は導水施設であることと土塁の前面に外濠が確認され，木樋の性格と水城の貯水法についての問題は一定の解決を得た。詳しくは第Ⅶ章を参照されたい。

第Ⅳ章　調査の記録方法と概要

（1）調査の記録方法

大宰府史跡は，大宰府政庁跡を中心に，政庁域周辺官衙跡・観世音寺・同子院跡・学校院跡・国分寺・大野城跡，そしてこの水城跡など広範な面積に及んでいる。これらの遺跡の実態を解明すると共に，史跡を保存・整備・活用していくためのデータを得るため，当館では５ヶ年計画で目標を設定し，各年次計画に従って調査を行い，その成果を積み上げる方法で調査に当たっている。また，遺跡が広大であるため，長期間にわたる調査を円滑に，しかも一貫して高精度に遂行するためには，遺構・遺物の調査及び記録化に際して以下の方法を採っている。

遺跡の表示方法

大宰府史跡の発掘調査及び記録類の整理に当たっては，奈良国立文化財研究所（現・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。以下，「奈文研」という。）が作成した遺跡の分類記号（奈文研1962）を準用し，それぞれの遺跡ごとに略号を付して対処している。遺跡を示す略号は，算用数字とアルファベットの大文字とを組み合わせた４文字からなり，先頭の算用数字が時代を示し，２文字目のアルファベットが遺跡の種別を示し，最後の２文字には遺跡の略号を付す表記法である。

遺跡略号

よって，これに従って，水城跡を示す略号は６ＡＭＫとなる。先頭の「6」は奈良時代，２文字目の「Ａ」は遺跡の種別が官衙であることを示し，最後の２文字「ＭＫ」は水城（ＭＩＺＵＫＩ）を示している。

また調査次数については，第Ⅰ章に掲げる調査次数一覧表のとおりであるが，ここには大野城市教育委員会調査分のうち外濠地区の調査については，調査主体が異なることや水城本体の調査ではないことから，別個に調査次数が付されている。また，一覧表の調査次数についても昭和51年度(1976)の第６次調査の時点において初めて付されたものであり，それ以前の県の調査については，第６次調査の時点で，第１～５次調査として次数番号が付与されたものである。

地区割

先の４文字の略号は，「水城跡」という大宰府史跡中の大きな地区割を示しているが，さらにこの地区を細分するために，以下の方法で小地区設定を行っている（Fig.12）。小地区設定は，上成土塁・下成土塁・土塁の南北両側を基本にして区分し，さらに川や鉄道，門跡などの土塁が途切れている欠堤部などを境界にしてＡ～Ｙに細分している。

また，調査にあたっては，面的に調査区を設定した場合，３ｍグリッドを設定してグリッド番号を付して調査を行っているが，水城跡の場合，主軸となるべき土塁直交軸が，大宰府政庁周辺とは異なり，真北（座標北）から西へ約36°（N36° W）傾いている。よって，グリッドの設定に当たっては，10次調査ではN38° 30′ W，24次調査ではN36° W，26次調査ではN37° W，39次ではN40° W，40次ではN35° Wの方向を主軸として調査を行った。なお，32次・33次・35次は土塁軸線に関係なく，座標北を主軸として調査を行った。

遺構の表示方法

発掘調査において検出された遺構は，検出時点では性格が不明なものが大半を占める。そのため，すぐさま性格に応じた遺構の名称を付すことは困難である。しかし，遺構番号を付けなければ遺物の取り上げに支障を来すこととなる。そのため，発掘調査段階ではS-1,S-2,S-3というように単純化した番号（S番号）を遺構の検出順に付し，遺物を取り上げている。また，1/100の遺構配置図を作成し，遺構番号を記入すると共に，遺構の状況や出土遺物に関しての情報も併せて記録している。

S番号

整理段階では，遺構の性格及び出土遺物の時期など大方が判明しているので，主要な遺構に関しては，各調査次数を通した遺構番号台帳を登録することとしている。その際，奈良国立文化財研究所作成の遺構分類記号（奈文研1962）に準じて，番号の前に遺構であることを示す「S」と，遺構の種別を示すアルファベットを付して，遺構の理解の便とラベリングの簡便さを測っている。ちなみに水城土塁本体はＳＡ001，水城東門はＳＢ010と表記される。また，水城跡については他の大宰府史跡とは別個の遺構番号（001～）を付している。

なお，この方式を水城跡の調査で採用しているのは，６次調査以降の九歴の調査のみであったため，県調査の１～５次調査の報告遺構についても，今回と同様の方式で遺構番号を付した。また，太宰府市教育委員会・大野城市教育委員会による調査については，今回の報告対象からは外れるために，本書では各自治体が付している番号をそのまま採用している。

遺物の表示記録

出土遺物に関しては，洗浄後に遺物の取捨選択を行い，選別された遺物を中心に遺跡略号・調査次数・小地区・層位・S番号・出土年月日を記載し，実測が終了すると地区ごとに実測順からR001・R002といった遺物番号（R番号）を追記している。また，遺物台帳に遺物番号を登録し，併せて実測した遺物の内容を記載し，遺物の照合や番号の重複を避けるために用いている。

R番号

なお，九歴では平成12年度(2000)以降，R番号による整理を取らずに，整理・報告作業時には仮番号を付して整理番号とし，報告書刊行後は，報告遺物ごとに報告書掲載番号を記載したカードを付して整理している。また，正式報告書刊行後は，概報報告資料との重複関係が分かるようなデータ整理を行って，カード化すると共に，将来的なデータベース整備の基礎データ作成に努めている。

【参考文献】
奈良国立文化財研究所1962『平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査』奈良国立文化財研究所学報第15冊

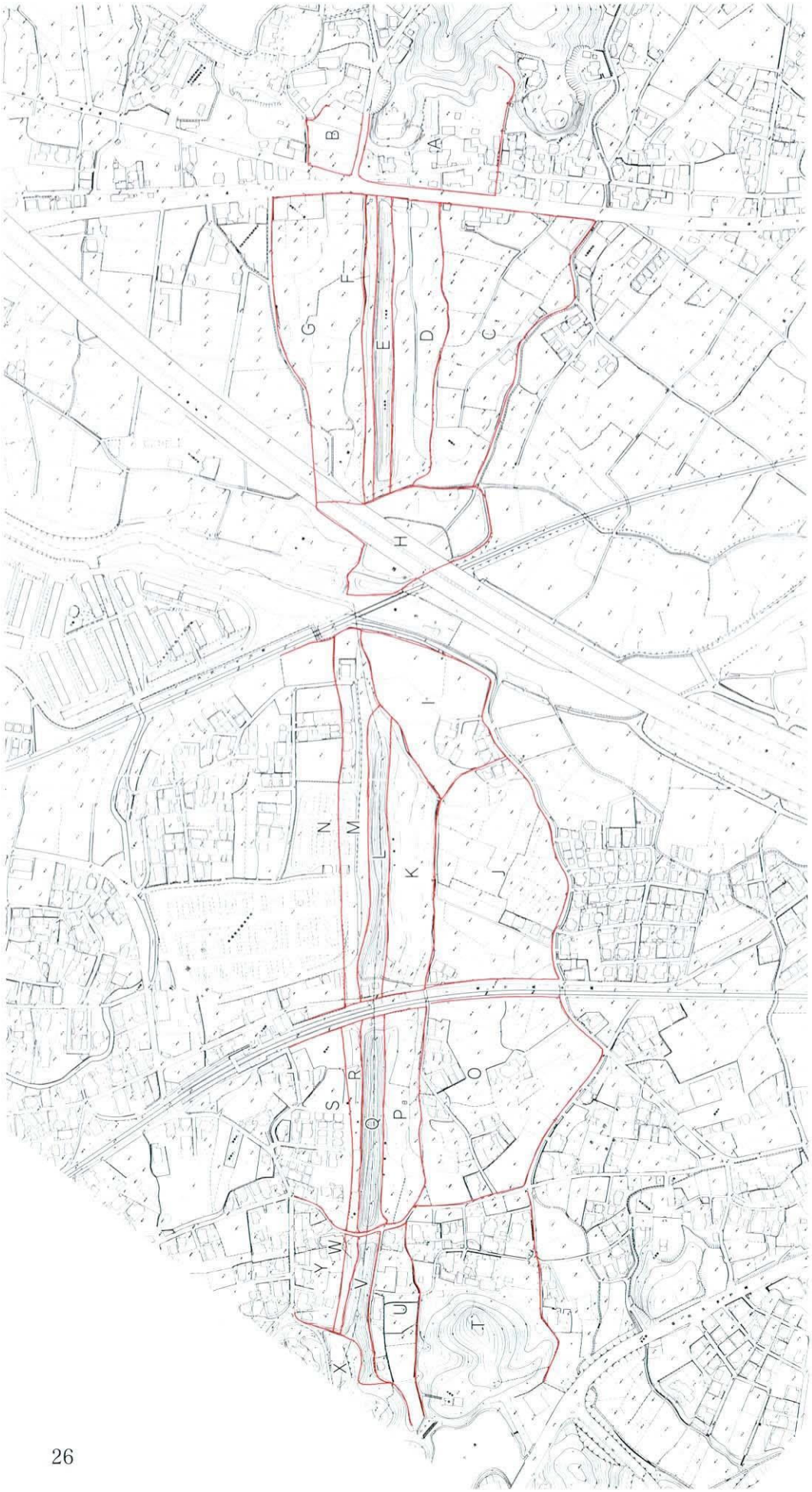


Fig.12　水城跡地区割図（1/6,000）

（2）調査の概要

調査の経過については，福岡県教育委員会が調査を初めて行った昭和45年度以前については，第Ⅲ章で詳述しているため，ここでは県・九歴が行ってきた調査の概要について記述する。

1）昭和44年度立会調査

調査箇所：東門跡　　**調査期間**：1969年11月27～28日　　**調査面積**：55㎡

概　要　昭和44年度の福岡市水道工事で，水城東門跡推定地へ至る旧道上を工事掘削している際に，東門礎石のある箇所から南へ約22.87mの地点で，円座のある礎石が発見され調査が行われた。調査の結果，礎石はある時点で埋設されたものであるが，建物に伴うようなものではないことが判明した。また，礎石の下からは「大国」銘文字瓦（907型式）が出土した。　**礎石の出土**

2）第１次調査

調査箇所：御笠川欠堤部　　**調査期間**：1971年２月13日～３月15日　　**調査面積**：1,600㎡

概　要　国道３号線バイパス建設に先立っての調査で，３本のトレンチを設定して調査が行われ，各トレンチで多量の川砂の堆積が見られ，遺構はなかったが，地下約３m地点で青磁碗が検出され，川は中世には現在の水城堤防の切断面の真下を流れていたことが判明した。

3）第２次調査

調査箇所：御笠川欠堤部　　**調査期間**：1971年７月　　**調査面積**：1,000㎡

概　要　第１次調査と同じく，国道３号線を建設するに先立って行われた調査で，第１次調査の西側の調査である。調査の結果は１次同様，河川堆積と古代～中世の遺物を確認した。

4）第３次調査

調査箇所：東土塁西端部・東外濠部　　**調査期間**：1972年６月２日～８月15日

調査面積：1,000㎡

概　要　九州縦貫自動車道を建設するに先立って行われた調査で，東土塁西端部及びその北側の外濠推定部分の調査である。土塁上からは掘立柱建物２棟，溝２条が検出され，下成土塁からは積土と杭列が確認された。また外濠部分からは，外濠と目される砂層堆積を確認した。

5）第４次調査

調査箇所：御笠川欠堤部　　**調査期間**：1973年６月　　**調査面積**：70㎡

概　要　九州自動車道の橋脚建設中に，石敷遺構が発見されたために急遽行われた調査である。旧御笠川の河床にあたる部分に人頭大の石敷遺構が見られ，奈良時代を中心とした中世まで含む遺物が見つかった。この石敷遺構は，洗堰等の古代水城に関連するものと考えられる。　**石敷遺構**

6）第５次調査

調査箇所：東外濠部・東門木樋部　　**調査期間**：1975年４月24日～６月15日

調査面積：350㎡

概　要　水城跡環境整備事業に伴い，整備の基礎資料を得るために行われた。この整備事業に伴う調査は，78年度の第10次調査まで続くこととなる。外濠部では，トレンチが設定され，下成土塁上では木樋吐水部のすぐ西側で瓦敷排水施設が見つかったほか，下成土塁直下から約60m地点の間に外濠と考えられる窪みと水成堆積が確認された。木樋の縦樋部分も調査され，木樋構造の一端を解明することとなった。また，中世における土塁の修復についても確認した。　**外濠の発見**

7）第６次調査

調査箇所：東内濠推定部　　**調査期間**：1976年１月19日～４月２日　　**調査面積**：440㎡

概　　要　東土塁西側の下成土塁の南側の調査で，下成土塁積土層を検出したほか，土塁の南側において，幅10ｍの溝状の砂層堆積を確認した。この溝状遺構は古代～近世までの遺物を含んでいるが，木樋取水部との関連が想定された。また，シガラミ遺構や杭列なども検出された。

8）第７次調査

調査箇所：西内濠推定部　　**調査期間**：1976年６月　　**調査面積**：36㎡

概　　要　住宅建設に伴い行われた事前調査で，西土塁南側の国鉄（現・JR）鹿児島本線の線路西側にあたる。調査の結果，下成土塁の南側で，東西方向の溝状遺構が確認された。遺構内の遺物は８～９世紀のもので占められており，内濠との関係が想定された。

9）第８次調査

調査箇所：東丘陵部・東門木樋取水部　　**調査期間**：1977年７月８日～23日

調査面積：140㎡

概　　要　東丘陵部の調査区では，表土直下で地山を確認し，水城の版築土塁が及んでいないことが判明した。また，木樋取水部では，昭和７年に長沼賢海により行われた調査の再調査が行われ，取水部の横樋と縦樋，横樋を固定する木柱が確認された。

木樋取水部の調査

10）第９次調査

調査箇所：西土塁西端部　　**調査期間**：1978年４月17日～22日　　**調査面積**：25㎡

概　　要　住宅建設に伴う事前調査で，調査の結果，土塁中心部より約20ｍ南側で南方へ50°傾斜する地山の落ちを確認した。版築積土等は確認されなかった。

11）第10次調査

調査箇所：東門木樋取水部南側　　**調査期間**：1978年12月１日～1979年１月31日

調査面積：250㎡

概　　要　木樋取水部へとつながる貯水もしくは導水施設を確認するために行われたが，関連する遺構は検出されなかった。しかし，木枠の井戸を確認し，そこから８世紀後半頃の「水城」銘の墨書土師器蓋が出土した。

「水城」銘墨書土器の出土

12）第10-2次調査

調査箇所：東門南側　　**調査期間**：1979年10月１日～５日　　**調査面積**：15㎡

概　　要　住宅建設に伴う事前調査で，東西方向にトレンチを設定し調査を行った結果，近世遺構の包含層の下から地山層を確認し，この地点において土塁が元来存在しなかったことを確認した。

13）第20次調査

調査箇所：東門南側　　**調査期間**：1992年１月９日～24日　　**調査面積**：20㎡

概　　要　史跡地内の現状変更に先立つ確認調査で，２本のトレンチを設定し調査を行った。その結果，近世～近代の土坑が４つ確認され，その内の一つが切り込む形で，版築積土層を確認した。これは土塁，東門基壇もしくは官道の版築積土層と想定された。

14）第24次調査

調査箇所：東土塁南側東門周辺　　**調査期間**：1993年３月11日～12月25日

調査面積：660㎡

概　　要　大宰府史跡発掘調査５ヶ年計画において立案された水城跡の計画調査における最初の調査である。調査の結果，下成土塁上で奈良時代の掘立柱建物２棟等が確認されたほか，版築土層下層に植物の枝や葉を敷き詰める敷粗朶工法により，下成土塁が築造されていたことが判明した。

敷粗朶の出土

15）第26次調査・補足調査

調査箇所：西門

調査期間　(26次調査)：1994年４月18日～ 1995年12月28日

(補足調査)：1996年４月10日～ 1997年３月６日，2000年10月７日～ 11月24日

調査面積：770㎡

概　　要　西門および周辺の構造解明のために行われた調査で，94年度の調査において土塁基底部から石列，石組暗渠，官道側溝等を検出した。さらに95年度の調査では，門建物ＳＢ110の柱掘形が検出され，さらに土塁頂部から経塚遺構も検出された。さらに96年度に行われた補足調査では，ＳＢ110をさらに遡る門遺構ＳＢ120が検出され，掘立柱から礎石へ変遷する状況が判明し，Ⅰ～Ⅲ期にわたる門の変遷が解明された。さらに上成土塁中段において，土塁構築時における支柱穴を４個確認した。また，この支柱穴が確認された中段テラス（Ｋ区）については，長らく埋め戻されない状態が続いたが，2000年10 ～ 11月に埋め戻しが行われるに際して，補足調査が行われた。土層の観察により土塁の３回の追加施工や，版築時の土突棒痕跡と考えられるタマネギ状下方湾曲が観察された。

水城経塚

西門のⅢ期変遷

16）第27次調査

調査箇所：東内濠推定部　　**調査期間**：1994年６月２日～４日　　**調査面積**：36㎡

概　　要　住宅建設に伴う事前調査で，南北のトレンチを設定し調査したところ，東西方向と考えられる溝１条が検出された。９世紀代の須恵器・土師器・瓦片や弥生土器が出土した。

17）第29次調査・第29-2次調査

調査箇所：御笠川欠堤部　　**調査期間**（29次調査）：1998年12月８日～ 12月21日

(29-2次調査)：2006年２月27日～ ３月13日

調査面積：10㎡

概　　要　御笠川河川改修事業に伴い，御笠川東岸の擁壁工事中に石敷遺構が発見されたために急遽調査を行った（概報報告時は第28次調査として報告したが，今回は第29次調査として報告する）。石敷遺構の中からは古代の軒瓦・土器が大量に出土し，水城に関連する遺構の可能性が考えられた。また2006年３月には，第29次調査が行われた北側で，擁壁工事が行われたため立会調査を行ったが（29-2次），瓦を数点採集したのみで，石敷等の遺構は確認されなかった。

石敷遺構

18）第32次調査

調査箇所：西土塁木樋吐水部　　**調査期間**：2000年２月21日～８月25日

調査面積：110㎡

概　　要　ＪＲ鹿児島本線の線路の西側の木樋吐水部の調査を行った。木樋は既に抜き取られており，抜き取り痕跡を確認すると共に，下層からは当初からの遺構として溝状遺構等を確認

した。また，抜き取り穴の最下層から木樋本体の枕木と思われる角材も出土した。

19）第33次調査

調査箇所：西土塁西門東側下成土塁　　**調査期間**：2000年11月28日～2001年６月25日

調査面積：775㎡

概　　要　西門の南東側にあたる下成土塁上について，構築物等の有無を確認するために調査を行った。その結果，８世紀代の掘立柱建物，土坑，溝等のほか，中世の掘立柱建物，木棺墓，道路遺構等を検出した。また東側のトレンチ調査では，木樋の掘形と思われる掘り込み状遺構が確認され，この箇所に木樋が埋設されている可能性が指摘された。上成土塁の背面についても調査が行われ，前面側に比べて粗い積土層を呈しているなどの所見を得ることができた。

木樋掘形

20）第35次調査

調査箇所：東土塁南側下成土塁　　**調査期間**：2001年７月19日～2002年２月５日

調査面積：320㎡

概　　要　1994年に九州大学牛島恵輔教授によって行われた地中電気探査により，東土塁において２箇所の反応があり，木樋の埋設によるものと瓦窯によるものと想定された。その２箇所について調査を行ったところ，木樋が想定された箇所では木樋は無く，下成土塁の積土層とその下層から11層にも及ぶ敷粗朶層を確認することができた。また，瓦窯が想定された箇所でも，瓦窯は検出されなかったが，瓦製作に関わると考えられる掘立柱建物１棟が検出された。

瓦窯関連の掘立柱建物

21）第36次調査

調査箇所：西丘陵部　　**調査期間**：2003年９月８日～2004年１月13日　　**調査面積**：120㎡

概　　要　土塁の西側の丘陵部は非常に見晴らしの良いところで，なおかつ「矢倉」という小字名称が残っているため，古代水城に関わる施設の存在が想定されたために調査が行われた。２箇所調査区を設定し調査が行われた。Ｂ区については，地山面に弥生時代の円形住居１棟を確認したにとどまったが，Ａ区では，弥生時代の貯蔵穴の他，時期については未確定なものの，古代と想定されうる掘立柱建物１棟を確認し，「望楼」の可能性が想定された。

22）第37次調査

調査箇所：西土塁西端南側　　**調査期間**：2003年12月５日～19日　　**調査面積**：30㎡

概　　要　2003年７月19日未明に起こった豪雨災害により，土塁西端の一部が崩落したため，災害復旧に伴う調査として行われた。その結果，崩落した土砂は昭和初期頃に形成された二次堆積であり，崩落した部位も水城跡本体へ接続する自然丘陵部分であることが判明した。

23）第38次調査

調査箇所：西門北西平坦面・西土塁丘陵取付部

調査期間：2004年６月７日～2005年１月20日　　**調査面積**：690㎡

概　　要　西門を通る官道の土塁前面についての状況を解明するため，土塁前面の平坦部分の調査を行った。その結果，幅60ｍの外濠は確認できなかったものの，土塁裾部に幅約２ｍの溝状遺構を検出し，土塁下の状況を知ることができた。また，西土塁の丘陵の取付部では，土塁が取り付く斜面は，自然丘陵と思われていたが，版築状に積土がなされていることが判明した。また，この積土層の下層には１条の杭列が確認され，土塁の土留めのためと考えられた。

24）第39次調査・補足調査

調査箇所：西土塁東端部・外濠部　　**調査期間**：2005年８月17日～2007年３月30日

調査面積：700㎡

概　　要　御笠川欠堤部の西側の西土塁東端部の状況と，外濠の状況を確認するために調査である。土塁東端部では，現状平坦面である箇所から，土塁基底部の積土と見られる土層を確認した。さらにその下層では古墳時代前期の完形の壺を伴う遺構も確認し，この場所が後世の攪乱を受けていないことが判明した。その結果，現在の御笠川の直近まで土塁が残存する状況が確認された。外濠部の調査では，基底部から約36m北側箇所で幅14m，深さ2.5mの溝状遺構が検出され，外濠の一部と推測された。

外濠の出土

25）第40次調査・補足調査

調査箇所：西門木樋吐水部・外濠部　　**調査期間**：2007年６月１日～2009年２月24日

調査面積：400㎡

概　　要　西門東側の木樋吐水部と推定される箇所と外濠部の調査を行った。土塁基底部で検出した木樋掘形は丁寧に版築積土で埋められ，積土の最下部から敷粗朶層も検出された。掘形から木樋は検出されず，後世の抜き取り痕跡も見られなかったため，木樋は当初から埋設されなかった可能性が考えられた。また，掘形上部は８世紀頃に修復を受けており，その上層に12世紀以降に属する土が堆積し，現状の土塁基底部が形成されていることが判明した。外濠の調査では，土塁に併行する溝状遺構を確認し，下層で８世紀の遺物を確認した。

木樋掘形に敷粗朶

木樋は埋設されなかった

26）第44次調査

調査箇所：西内濠推定部東端　　**調査期間**：2008年２月20日～３月31日　　**調査面積**：300㎡

概　　要　御笠川欠堤部の西側の太宰府側について，内濠等の状況を確認するために調査を行った。土塁に直交する３本のトレンチを設定し，調査を行ったところ，全てのトレンチで地表下約１～２mで洪水堆積による灰色砂礫層が確認され，その砂礫層から14世紀を下限とする遺物が検出された。そのため，14世紀以降の洪水堆積によって，それ以前の地形は流されており，古代の水城に関わる遺構は見られなかった。

27）第45次調査

調査箇所：西門推定木樋取水部・推定内濠部　　**調査期間**：2008年５月27日～７月25日

調査面積：310㎡

概　　要　西門南東側の推定木樋取水部及び内濠部分の確認のため，対象地内に３箇所調査区を設定して調査を行った。木樋取水部が想定されるＡ区では近世以降の包含層の直下に地山層を確認し，そこから土坑３基，溝状遺構２条，ピット等を検出したが，想定された木樋取水部よりも既に低い標高となっており，木樋取水部本体は検出されなかった。また，内濠の状況確認のために設定したＢ・Ｃ区では，溝状遺構等の流滞水を示す層位が確認された。

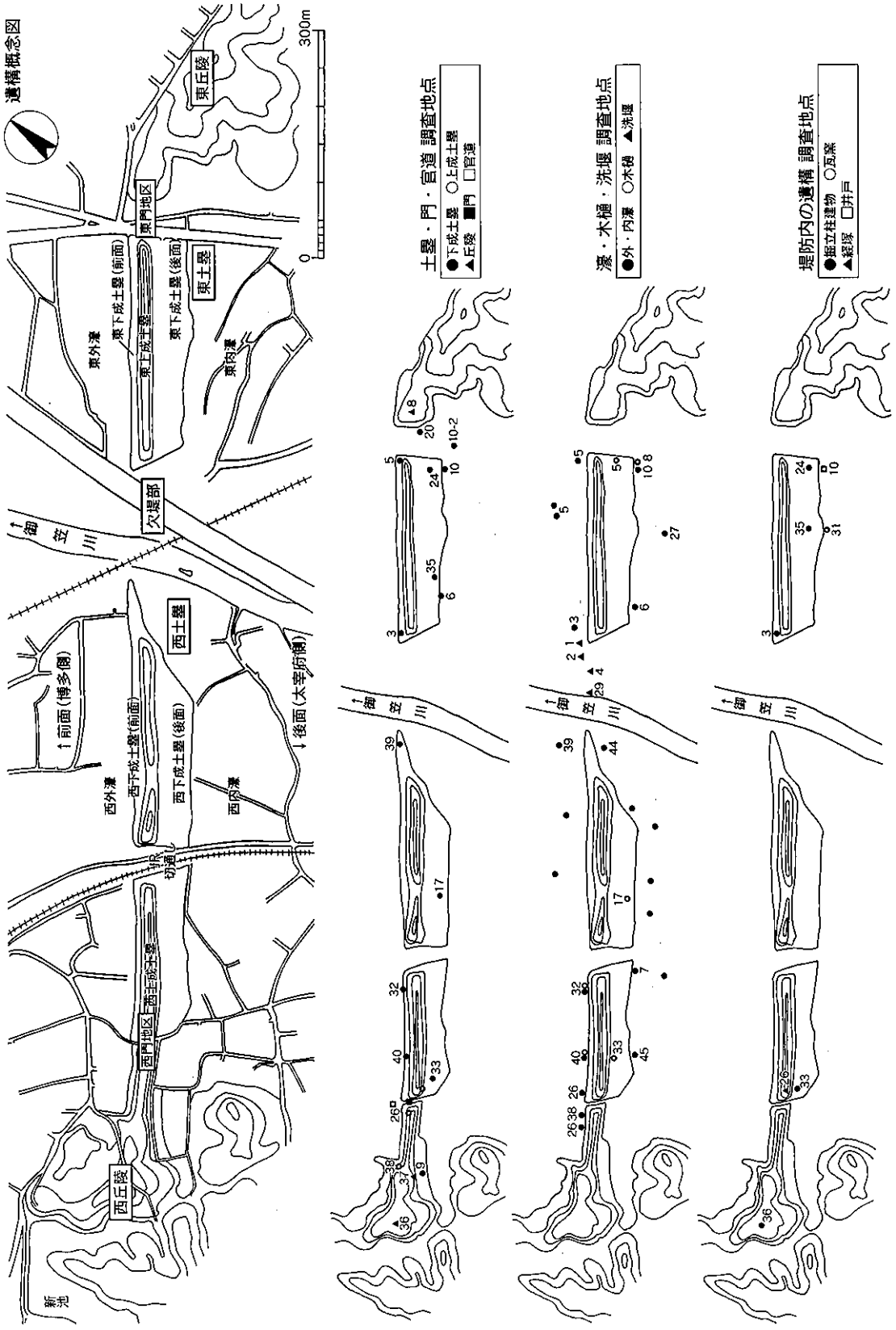


Fig.13　水城跡遺構概念図（1/8,000）・遺構分布略図

第Ⅴ章　調査遺構

（1）遺構の概要

水城は，二日市低地帯と呼ばれる地点に築かれた長さ約1.2kmの土塁である。記録による限り，築堤の時期は７世紀後半に求められる。また西門地区では，３期の門変遷があることが分っており，Ⅱ期の８世紀初め頃には，掘立柱式から礎石式の建物に変わる。他に土塁には，幾度かの修復の痕跡などが認められるが，出土資料が限られており，時期的細分は難しい。

水城の施設には，土塁，外濠，内濠，木樋等がある。また土塁の東西には，門が付設され，鴻臚館から大宰府へ通じる官道が通過している。さらに土塁が途切れる中央部には御笠川が北流し，東は大野城から西側へ延びる丘陵と繋がっている。

本報告では，土塁ＳＡ001を基準にして，大きく地区別けを行っている（Fig13）。御笠川を挟んだ東側を東土塁，西側を西土塁と呼び，土塁の博多側を前面，太宰府側を後面とする。さらに，東西２箇所に付設された門については，それぞれ東門地区，西門地区と呼び，中央の土塁が途切れる箇所を欠堤部とする。このうち，土塁本体については，大きく下成土塁と上成土塁とに分かれる。下成土塁は土塁の基底部となる部分で幅約80m，上成土塁はその上に幅25m，高さ７～10mに積んでいる。濠については，土塁前面には幅約60mの外濠があり，御笠川を挟んで東を東外濠，西を西外濠とし，後面の内濠については，東内濠，西内濠とする。木樋については，土塁を挟んで，内濠より水を導水する取水部と流しだす吐水部とに分かれる。

地区分け

遺構の報告では，検出状況と規模，関連資料や時期について記述している。遺構配置図については，遺構説明の際，該当調査次数遺構の初出や重要な遺構に関る箇所に付している。

（2）土塁

水城の土塁積土に関する調査は，大正期に始まる。現在のJR鹿児島本線拡幅の際，黒板勝美や中山平次郎によって土塁の観察が行われ，積土の状況や敷粗朶の埋設など，土塁構造に関する多くの知見が得られている。1971年以降の調査では，第３・５・６・10・24・26・33・35・38・39・40次調査で土塁の構造に関する調査を行っている。特に第24・35次調査では，土塁基底部に埋設された敷粗朶の状況を明らかにした。さらに，第26次調査では，門の変遷と土塁の関係を，33次調査では，旧地形と土塁との関係を調査で確認している。ここでは，築堤の順番に従って，下成土塁，上成土塁の状況についてそれぞれ報告する。また下成土塁では，東土塁，西土塁と博多側の前面，太宰府側の後面に分ける。特に，上下土塁の調査を行った第26次調査については，両項に亘って報告する。

1）下成土塁

東土塁前面

５次調査１トレンチ（Fig.15，PL.20）

東門地区西側の外濠際に設定した。調査の結果，積土が大きく２時期に亘ることが明らかとなった。築堤時の積土は，暗青灰色粘質土の濠底から南の土塁側へ次第に高く上がりながら，

２時期の積土

粗砂や細砂，灰色粘土や赤褐色粘質土を積んでいる。そして，その前面に外濠堆積層と考えられる，茶灰色粗砂層がある。外濠際の標高は26.2m，積土の最下面は26.6mである。一方，

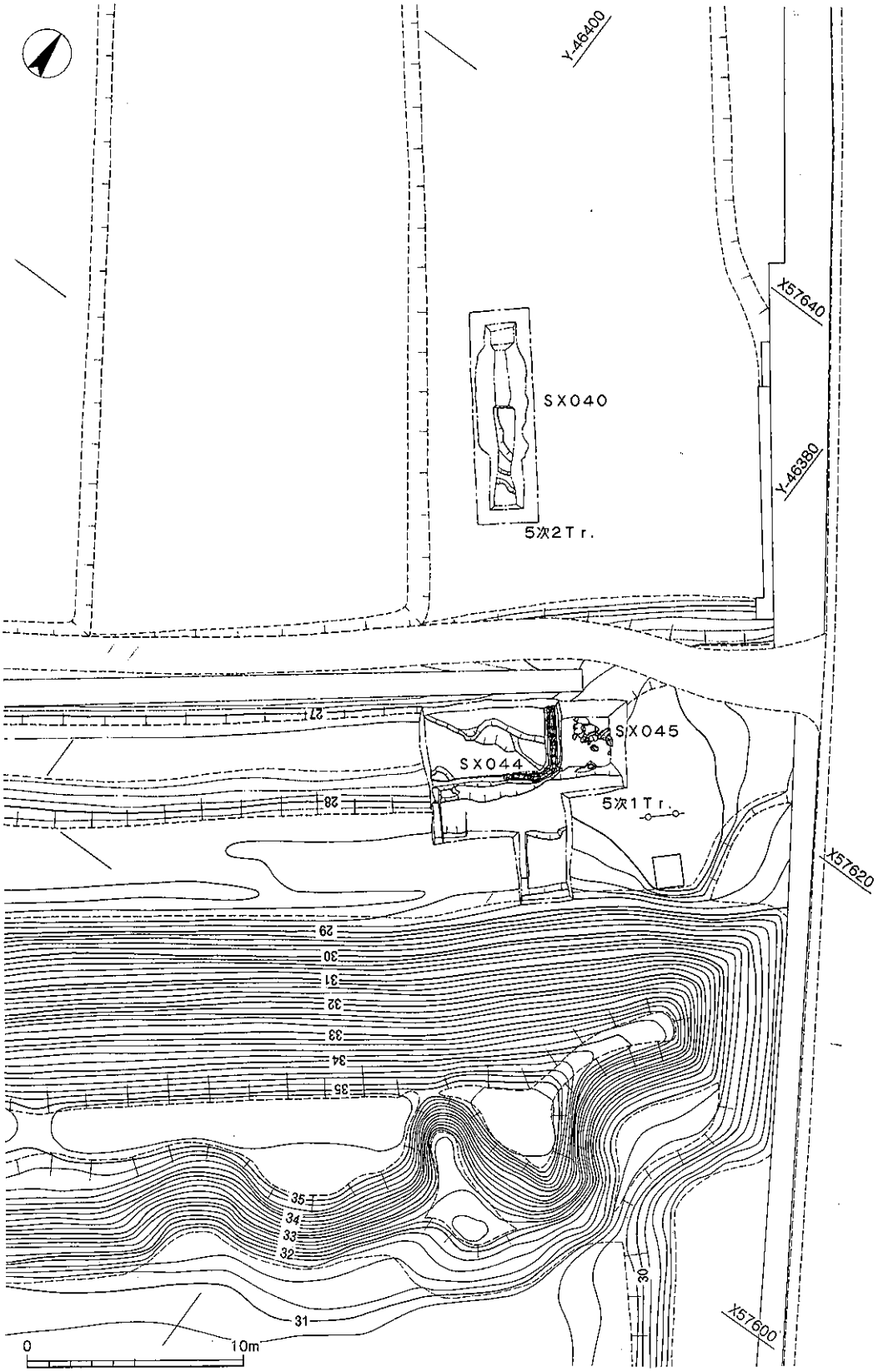


Fig.14　東門地区北西側地形図（1/300）

Fig.15　東下成土塁東門地区西側前面積土・暗渠SX044実測図（1/30・1/60）

新期の土塁は，状態の良いところで積土を60cm程度嵩上げしている。黄褐色土や灰褐色土，茶灰色粘質土を積んでおり，厚さ10cm程度と細かい。また，濠際では地山に溝を掘り込み，丸瓦や平瓦を使用した暗渠ＳＸ044を埋設している。その使用瓦から，この新期の積土の時期は，

嘉定通宝の出土

８世紀代に求められる。また，外濠際で，宋銭「嘉定通宝」（1208年初鋳）が出土しており，新期の土塁に伴う外濠は13世紀頃までは維持されたと考えられている。

暗渠

ＳＸ044（５次）（Fig.15，PL.20）

５次調査１トレンチで検出した瓦使用の暗渠である。ちょうど土塁際裾部に設置されている。トレンチ西壁から約３ｍは素掘りの状態で，幅0.55m，深さ0.30m程度の規模で東へ続いているが，そこから東へは，瓦を使用した暗渠を埋設している。瓦は２ｍほど土塁に並行した後，緩やかに曲がって北へ延びる。トレンチ内では，約５ｍの長さとなる。この瓦暗渠は，平瓦を約５cm程度重ねながら繋げ，その上に丸瓦を置いている。丸瓦の連結は屋根に瓦を葺く方法と同じで玉縁をはめ込み，平・丸瓦の組み合わせた上には破砕した平瓦で蓋をする。玉縁の接合が上手くできないコーナー部分では，破砕瓦で蓋をしている。約５ｍ分暗渠に使用された平瓦は，暗渠の底面となる平瓦上面の南北では25.3cmの比高差があり，西から北へ排水するようになっていたと考えられる。この瓦の暗渠内は，中空となってヘドロが堆積していた。外濠がある程度堆積した段階で埋設されており，瓦の時期は８世紀代である。

３次調査断割トレンチ（Fig.17）

３次調査東土塁西端で設定した，長さ13ｍのトレンチで積土を観察した。下成土塁北側では，現地表下1.4ｍ付近に黒茶色土があり，その下位には淡灰色粘質土や淡黄色土を厚く積んでいる。この黒茶色土は，土塁南側の積土を削平して北側に整地したと考えられる。積土本体は，粘質土と花崗岩バイラン土を互層に積んでいるが，南側の中心に近い部分では，灰色土や赤褐色粘質土と灰色砂層を比較的厚い単位で積み，積土の傾斜が始まる肩際では，より単位が細かくなる。この肩際の積土とその上層の黒茶色土は不整合であり，修復などの時期差が想定される。

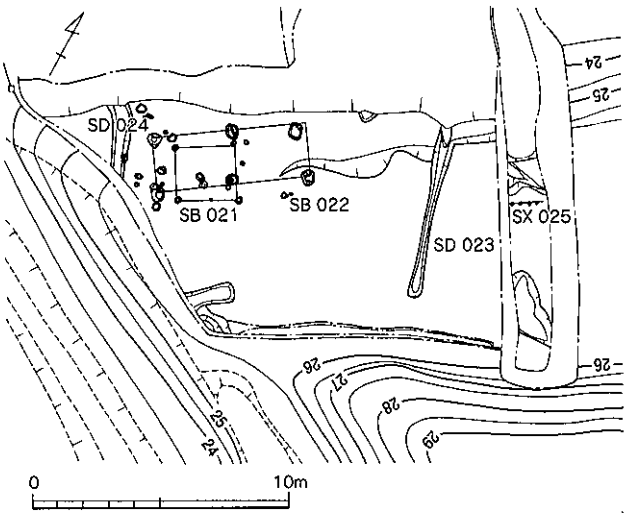


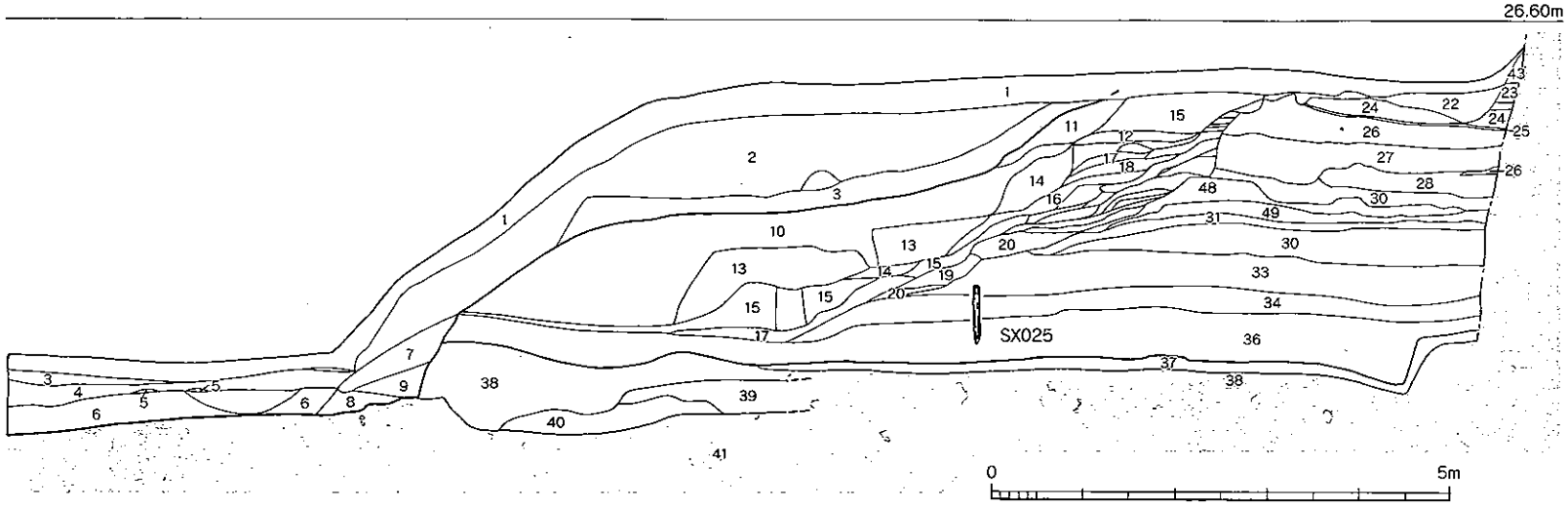
Fig.16　東土塁西端（３次C区）地形図（1/300）

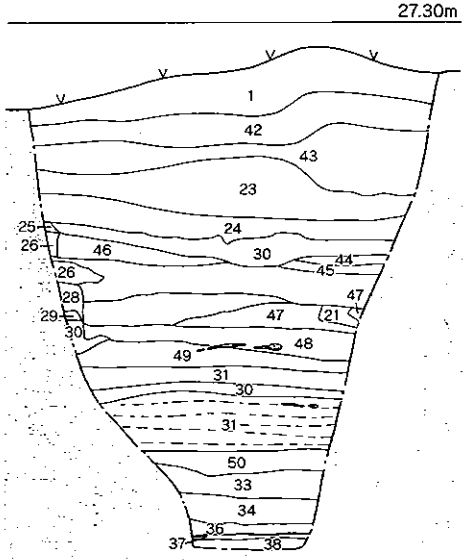
敷粗朶の埋設

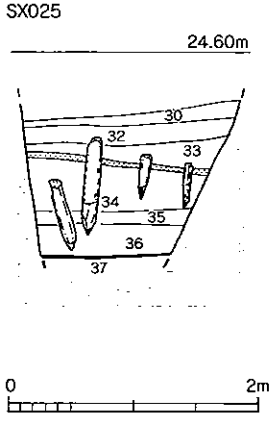
また，積土の中位では，黒灰色粘質土下位の淡青灰色粗砂に枝葉が見られ，敷粗朶と考えられる。この積土された赤褐色砂層の地山面はほぼ水平に成形されており，標高は22.7ｍである。そして，その上に黒灰色や青灰色粘質土や粘砂土等を20～40cmの単位で積みながら，間に木杭列ＳＸ025やシガラミを埋設している。

杭列

ＳＸ025（３次）（Fig.17）







1. 表土、茶色土(現代の耕作土)
2. 暗黄色土(ブロック状に粘土を混入する近代陶器含)
3. 白黄色粘土
(ブロック状と考えられる2.の土層中にこの種のものが混入している)
4. 黄白色微砂層
5. 灰色粘土質微砂層(酸化鉄沈殿)
6. 黄褐色砂質土(流土)
7. 灰色砂質土(細砂)
8. 淡褐色微砂層
9. 白黄色微砂層
10. 黒茶色土(盛土表土1.で上下端を切断されている)
11. 暗黄褐土
12. 14.に類似するがやや黄色気味で粒子が荒い
13. 淡灰色粘土(微砂を少し含む酸化鉄少し)
14. 黄色土(混入物のほとんどない単純層)
15. 淡黄色土(17.と類似しているが花崗岩の粒子を含む)
16. 茶色土(17.と同じように単純層)
17. 赤褐色土(酸化鉄を多量に含むが土質は19.に類似)
18. 灰色砂質粘土
19. 21.に類似するが粘質土を含む
20. 黒色砂質粘土
(粒子の大きな砂粒を含むがやや紫色を帯びる)
21. 23と同じであるがやや黒色を帯びる、63と質的に同じ
22. 暗灰色砂質土(畑耕作のための溝掘乱土)
23. 灰色微砂質土
24. 灰色砂質粘土層(51の粘土化した質)
25. 白黄色砂層(細砂)
26. 灰色粘土層(比較的かたい55のごとき間層を)
27. 49に類似
28. 赤褐色粘土(酸化鉄が多量に沈着し、かたい)
29. 暗茶色砂質土(小部分の間層か?)
30. 黒灰色粘土
31. 淡青色荒砂層(葉・枝を少量に混入する)
32. 59と同じ(葉・枝を混入する)
33. よう黒色砂質粘土
(64に比較して、やや砂粒を含む葉・小枝混入)須恵器片
34. よう黒色粘土(粘土の単純層、葉、小枝を含む)
35. 暗灰色粘土
(64と同質の粘土であるが、37の影響で鉄分を含み、黒色でない)
36. 暗青灰色粘土(単純層で葉、小枝は含まない)
37. 赤褐色砂層(68の表層で酸化鉄が多量に沈着し、錆化し、固い)
38. 褐色微砂層(酸化鉄斑点状にあり)
39. 淡褐色微砂層(単純層)
40. 赤褐色荒砂層(酸化鉄多量に沈殿する)
41. 淡褐色荒砂層(70と同質の砂層で鉄分がない)
42. 黄色土(やや軟質)
43. 淡黄色土(やや撹乱を受けているか?)
44. 55と同じ
45. 46と同じ
46. 暗黄灰色荒砂層(55と同質でやや汚れた感じ)
47. 暗灰色粘土(斑鉄あり)
48. 55と同じ
49. 暗青色荒砂層 ― 色調は異なるが、木材圧積状態からみて同質
50. 黒青灰色粘土(青灰粘土と黒色粘土が混入、やや砂粒)

Fig.17　東下成土墨西端前面（3次）積土土層図・杭列SX025実測図（1/60・1/80）

木杭とシガラミの埋設

東土塁西端の下成土塁積土内で検出した。積土中位には，黒灰色粘質土下位で淡青灰色粗砂に包含される敷粗朶があり，さらにその下位の積土内で木杭列とシガラミを確認した。ちょうど砂層の地山面上に積んだ，黒灰色や青灰色粘質土，粘砂土の間に木杭とシガラミを埋設している。木杭の大きさは27～63cm程度で，30cm間隔に４本打っている。また，それに絡むシガラミは土塁軸線に並行している。杭先は最下層の暗青灰色粘質土で止まり，上層も粘質土に覆われていることから，積土中の土砂の流出を防ぐためと考えられる。

東土塁後面

20次調査トレンチ（Fig.18・45，PL.35）

20次調査では東門推定地に土塁と並行して２箇所のトレンチを設定した。東側のＡトレンチでは，標高30.10m前後で花崗岩風化土の地山を検出した。一方，西側のＢトレンチでは花

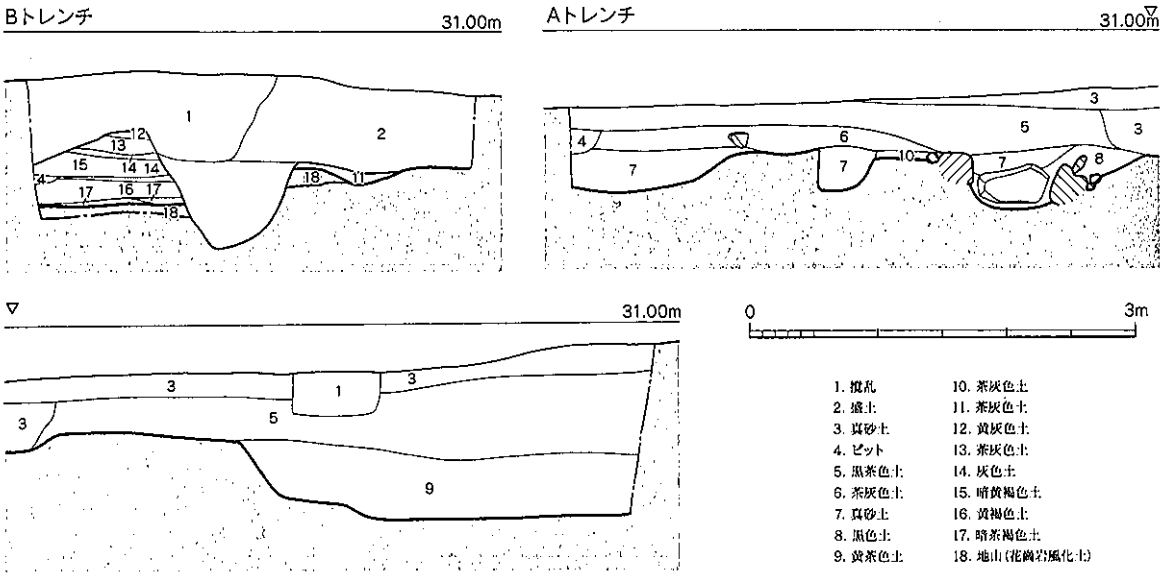


Fig.18　東下成土塁後面東側（20次）積土土層図（1/60）

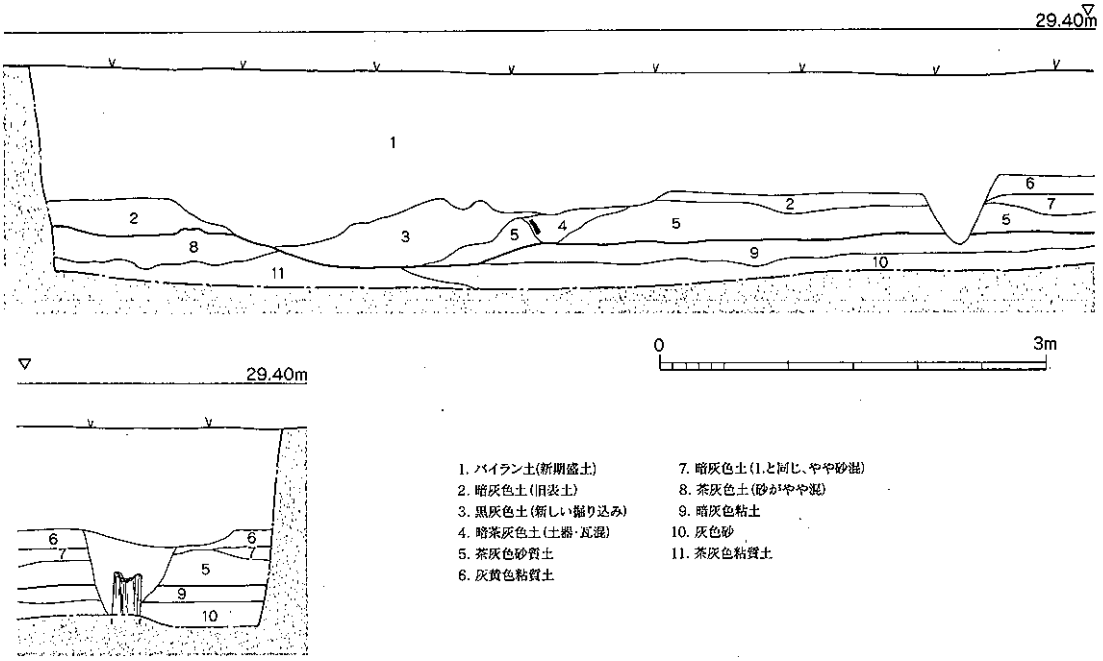
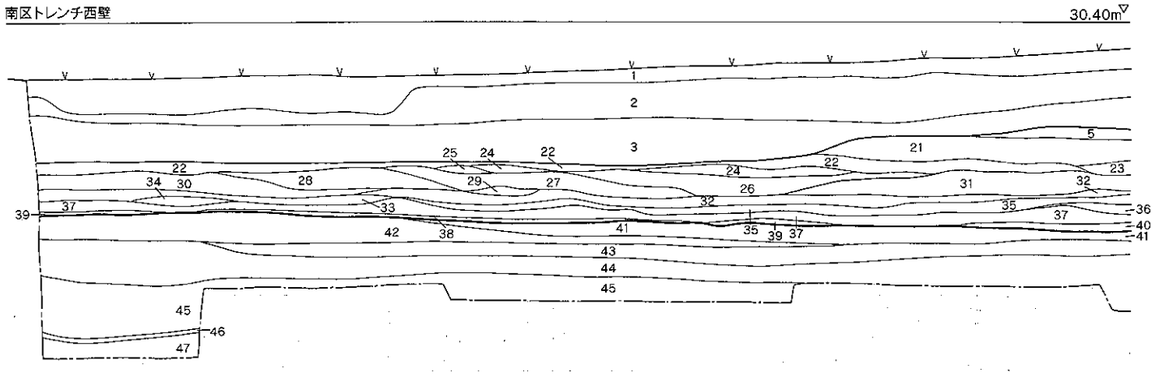


Fig.19　東下成土塁後面南側（10-2次）土層図（1/60）

北区トレンチ西壁

1.真砂土
2.黒褐色土
3.暗褐色土(茶色粘質土ブロック)
4.黄色粘質土(灰褐色砂質土の混土、茶色粘質ブロック若干含む)
5.黄色粘質土と灰褐色砂質土の混合(茶色粘土ブロックを若干含む)
6.灰色砂質土 黄色粘質土ブロックを若干含む
7.灰褐色砂質土 黄色粘質土ブロックを若干含む
8.黒色土 灰色粘質土ブロックを多く含む
(黄色粘質土ブロックを若干含む)
9.灰褐色砂質土と灰色粘質土の混合
10.灰褐色砂質土
11.白褐色砂質土 茶色粘土ブロックを含む
12.黒色粘土と灰色砂質土の混合
13.灰色砂質土と灰色粘質土の混合
14.黒色粘土
15.黄橙色粘土と褐色砂質土の混合
16.灰色砂質土 黒褐色粘土ブロックを含む
17.黒褐色粘土
18.灰褐色砂質土
19.灰白色砂質土
20.暗灰褐色粘土
21.灰色砂質土
22.橙色土
23.褐色砂質土
24.褐色砂質土
25.灰褐色砂質土
26.黒色粘質土
27.暗褐色砂質土
28.灰色砂質土
29.白色砂質土 橙色土を含む
30.白色砂質土
31.暗褐色砂質土
32.白色砂質土
33.淡褐色砂質土
34.暗灰色砂質土と灰色粘質土ブロックの混合
35.茶褐色砂質土
36.黄色砂質土と灰色粘質土の混合
37.灰色砂質土
38.白色砂質土
39.白色砂質土
40.白色砂質土と黄色砂質土の混合
41.暗褐色砂
42.白色砂質土
43.白色砂質土と灰色粘質土の混合
44.白色砂質土
45.黒褐色粘質土
46.暗灰色粘質土
47.茶色粘質土
48.黒色粘質土と灰色粘土の混合
49.白色砂質土
50.黒色土と灰色砂質土の混合
51.黒灰色砂質土
52.黄灰色砂質土
53.白色砂質土
54.灰色砂質土
55.茶色砂質土
56.白色砂質土
57.白色砂質土
58.橙色砂質土(鉄分)
59.暗灰色粘質土
60.灰色粘土
61.黒色粘質土(腐植土)
62.白色砂質土(黄色砂質土混)
63.青灰色土
64.青灰色砂質土
65.黒灰色砂質土(枝葉混)
66.灰黄色粘質土
67.黒色粘質土
68.青灰色砂質土
69.黒灰色砂質土
70.灰黄色砂質土
71.黒色砂質土(腐植土)

南区トレンチ西壁



1.客土
2.黒褐色土
3.暗褐色土
4.黒褐色砂質土
5.暗黄褐色質土
6.暗灰褐色砂質土
(黄灰色土をブロック状に多く含む)
7.灰色砂質土
8.黄灰色砂質土
9.灰白色粘質土
10.暗茶色砂質土と灰色土の混合土
11.灰色土
12.灰白色粘質土
13.黒色粘質土(腐植土)
14.茶褐色砂質土
15.灰褐色砂質土と33ブロックの混合
16.灰色砂質土
17.暗茶灰色砂質土
18.灰褐色砂質土
19.灰白色砂質土(茶橙色土混)
20.黒色粘質土(青灰色粘質土混)
21.暗灰色砂質土
22.黄色砂質土
23.暗灰褐色砂質土
24.暗褐色砂質土
(灰色ブロックを含む)
25.黄褐色砂質土
26.暗褐土と灰色粘質土の混合
(橙茶色砂質土を多く含む)
27.褐色土と暗灰色土の混合
(灰色粘質土をブロック状に含む)
28.灰褐色土と暗灰色土の混合
(灰色粘質土をブロック状に含む)
29.白色砂質土
(29層との間に黄橙色砂質土を2cm程の厚さにはさむ)
30.褐色～暗褐色砂質土
(灰色粘質土をブロック状に多く含む)
31.暗灰色砂質土
(黒灰色土ブロック 灰色粘質土ブロックの混合)
32.灰色粘質土
(橙茶色土を多く含む)
33.白色砂質土
34.淡茶色粘土
35.白色砂質土と黄茶色土の混合土
36.黄褐色粘質土
37.灰褐色砂質土
38.淡茶色粘土
39.橙茶色砂質土(上)と
淡茶色粘土(下)の互層
40.橙茶色粘土
41.灰色粘土(鉄分を多く含む)
42.暗灰色粘質土
43.淡灰褐色砂質土
44.淡灰褐色粘質土
45.淡灰色粘土
46.橙茶色粘土
47.青灰色粘土

Fig.20　東下成土塁後面（24次）積土土層図・敷粗朶SX088実測図（1/60）

岡岩風化土の地山上に黄褐色土や茶灰色土を積んでいることを確認した。地山面の標高は29.6～29.8mである。両者のトレンチから，東側へ向かって地形が上がっていることが分る。ちょうどこの20次調査付近が丘陵から積土が取り付く箇所となる可能性が高い。また，この南側で実施した10-2次調査地は，内濠推定範囲に入っているが，暗灰色粘質土の遺構面とその下位に暗灰色砂の地山を検出した(Fig.19･57)。そのため，官道の東に内濠は存在しないことがわかった。

24次調査断割トレンチ（Fig.20，PL.21，巻頭PL.6）

東門地区西側の24次調査では，下成土塁の断割りを行った。調査区の南北にわたるトレンチを併せて約37m分を調査した。表土除去後に確認した。北・南区両端の基底部積土の比高差は約1.4mあり，南へ緩やかに傾斜して低くなっているが，これが本来的なものかは不明である。これに対して，積土構築以前の旧表土面は，北端の標高が28.1m，南側中央付近が28.3mで約0.2m程度の高低差しかなく，ほぼ水平である。積土は，砂質土と粘質土を互層に積み重ねているが，水平に積まれていないところもある。全体的に見ると，黄色粘質土と花崗岩バイラン土の混土層があり，南区では約30cm程度の間隔を持つ単位を３層，北区では４層みることができる。北区では，この層を挟む形で黒褐色粘質土がある。この付近の地盤は，灰黄色や灰色粘質土下位に黒褐色粘質土や腐植層があり，極めて軟弱で，下位では砂層になる。この軟弱な基盤土の積土最下層から，厚さ約0.4mの間に樹木枝葉を敷いた，敷粗朶ＳＸ088を確認した。

積土の単位

敷粗朶

ＳＸ088（24次）（Fig.20，PL.21）

24次調査北区トレンチにおいて検出した。トレンチ中央付近では，土塁に並行する幅約１m，高さ0.2m程度の高まりがある。その高まりの粘質土層から厚さ約40cmに亘って樹木枝葉を敷いた，敷粗朶を確認した。背灰色砂質土や黒灰色砂質土を挟んで少なくとも３層が互層になっている。出土した敷粗朶は，細い枝や木屑が多く，土塁に対して並行するものや斜位となるものが多く，直交するものは少ない。この下位には，黒褐色粘質土や腐植層があり，その下位に砂層の地山がある。

敷粗朶の状況

10次調査断割トレンチ（Fig.21，PL.22）

東門地区西側の10次調査で，下成土塁際の断割りを行った。ちょうど24次調査の南側にあたる。表土下約0.6mのところで，積土層を確認した。積土は大きく上部と下部に分れる。上部は，暗灰色，赤褐色，黄色褐色の互層であり，厚さ５～10cm程度に積んでいる。下部は，黒味の強い暗灰色土や砂質土で，その下位には40cm程の厚さで背灰色粘質土を積んでいる。さらに，その下位は砂層の地山で，標高26.4mである。この地点では，敷粗朶などの埋設については認識できていない。

６次調査断割トレンチ（Fig.21，PL.22）

東土塁後面西端の６次調査では，土塁主軸に直交させて土塁際を約３m断割った。その結果，表土下約0.8mのところで，積土層を確認できた。褐色や黄褐色土，淡黄灰色や淡茶褐色のバイラン土を厚さ10cm程度に積んでいる。これらの積土には，厚さ約15cm程度の暗紫色土，淡黒灰色土の層が50cm間隔で３層認められる。また，最下部付近では，バイラン土層を30cm程度の単位で厚く積んでいる。標高24.4m付近では，地山層である茶褐色砂質土を確認でき，こ

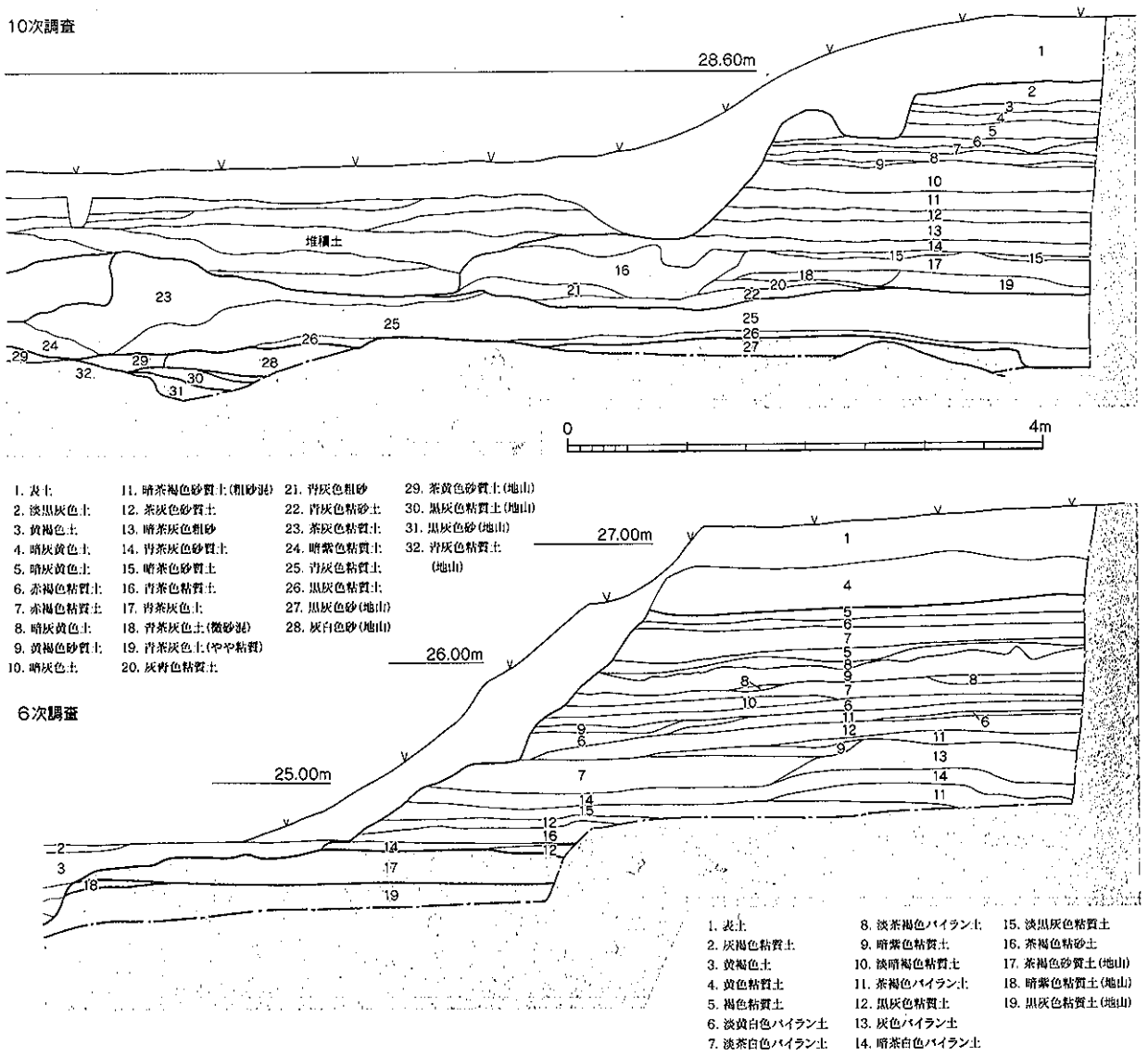


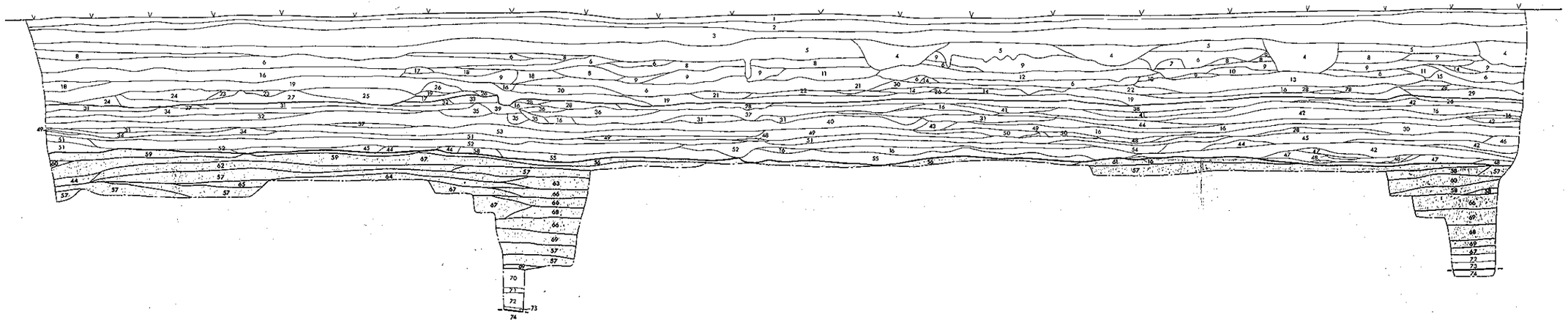
Fig.21　東下成土塁後面（6・10次）積土土層図（1/60）

の上面から積土を開始している。この地山の基底面は水平に削平されている。基底面が粘質土である点は，東門地区10次調査と同じである。

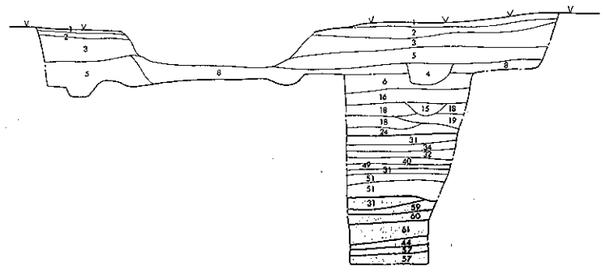
35次調査断割トレンチ（Fig.22，PL.23，巻頭PL. 6）

35次調査では，東土塁中位付近で下成土塁の断割りを行った。東門切り通し際から西に約80mの距離にあたる。木樋埋設を確認するため，A区では土塁に並行する形でトレンチを設定したが，木樋そのものは確認できなかった。この地点では，現表土の50cm下位で基底部の積土を確認できたが，上面の標高は27.8mである。積土は大きく，上層と下層に分かれる。上層は黄灰色土と暗灰色砂を主体とし，下層については，褐色砂と黒褐色砂を交互に積んでいる。さらに現地表から２mの地点で敷粗朶ＳＸ172に達する。厚さ1.5mの間に敷粗朶層は，粘質土や砂質土に枝葉を敷き並べながら11面確認した。その下位には溜まり状の黒褐色土が厚さ30cm，さらに下位には灰色砂が15cm程度堆積しており，地山層の暗灰色粘質土に至る。この地山面は地表から約４m，標高は24.3mである。

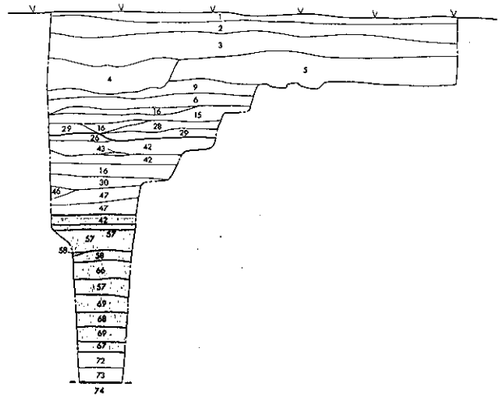
35次　A区 北壁　　28.30m



35次　A区 西壁　　28.30m

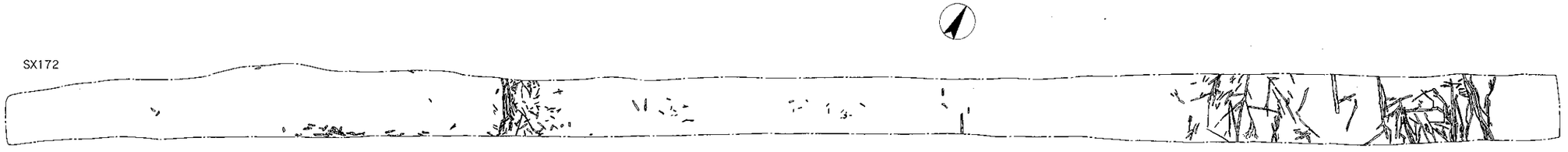


35次　A区 東壁　　28.30m



1. 表土(暗灰色砂)—整備の盛土
2. 真砂土(黄褐色砂)—整備の盛土
3. 真砂土(明黄褐色砂)—整備の盛土
4. 5に黄褐色土塊混(植木穴)
5. 暗褐色土—旧表土
6. 暗灰色砂(締りあり)
7. 白色砂
8. 黄灰色土
9. 黄褐色土(よく締り粘性あり)
10. 9+灰褐色砂
11. 9+暗灰色土
12. 黒褐色粘土
13. 黄灰色砂に褐色粘土塊混
14. 明褐色粘土
15. 暗灰色土+暗褐色砂
16. 暗褐色砂
17. 暗灰色粘土
18. 9+17
19. 8+暗灰色粘土塊
20. 黒灰色粘土
21. 暗黄灰色土
22. 暗灰褐色砂
23. 褐色砂+17
24. 16+17
25. 褐色砂+17
26. 暗黄灰色砂
27. 褐色粘土+17
28. 暗褐色土
29. 明褐色砂+28
30. 明褐色砂
31. 黄褐色砂
32. 黒褐色砂
33. 暗赤褐色土
34. 暗黄褐色砂
35. 黄褐色土
36. 黄灰褐色土
37. 明黄褐色砂
38. 暗灰砂
39. 明黄褐色土
40. 黒褐色土
41. 黄褐灰色砂
42. 明褐灰色砂
43. 黄灰色砂
44. 褐色砂
45. 16+褐色粘土
46. 灰色砂+褐色粘土
47. 明赤褐色砂
48. 黒灰色砂
49. 暗褐色土(粗砂多し)
50. 白色砂(鉄分沈着)
51. 明黄灰色砂
52. 黒褐色土(粗砂多し)
53. 灰白色砂
54. 灰褐色砂
55. 52+17
56. 黄褐色粘土
57. 青灰色砂
58. 暗褐色粘土
59. 明褐色粘土(締り強い)
60. 暗灰色粘土(締り強い)
61. 黒灰色粘土(締り強い)
62. 57+44
63. 57+灰色粘土
64. 明青灰砂
65. 青灰色土
66. 暗灰色細砂
67. 57に灰白色砂礫多し
黒灰色細砂
68. 67に炭化物混
69. 暗青灰色砂
70. 黒色細砂(澄り埋土)
71. 暗褐色砂(澄り埋土)
72. 黒褐色土(粗砂多し)(澄り埋土)
73. 灰色砂(澄り埋土)
74. 暗灰色粘土(地山)

SX172　敷粗朶11層範囲



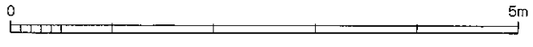
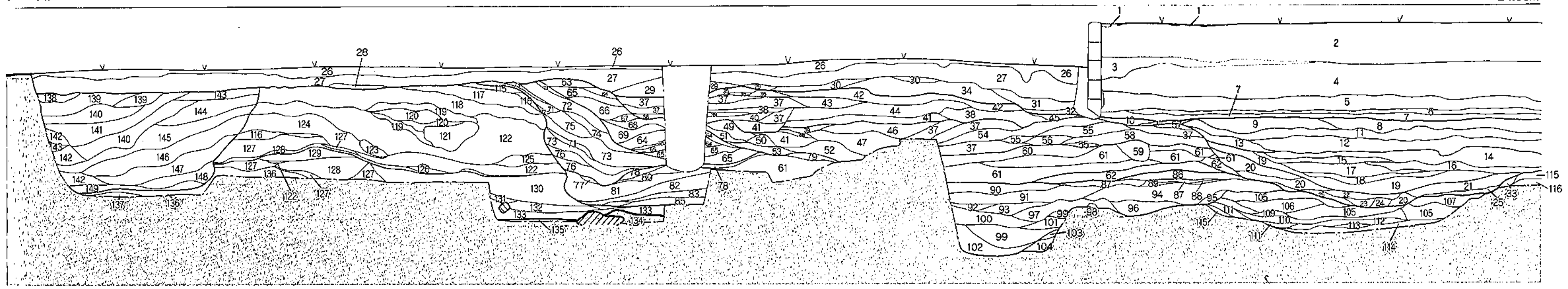
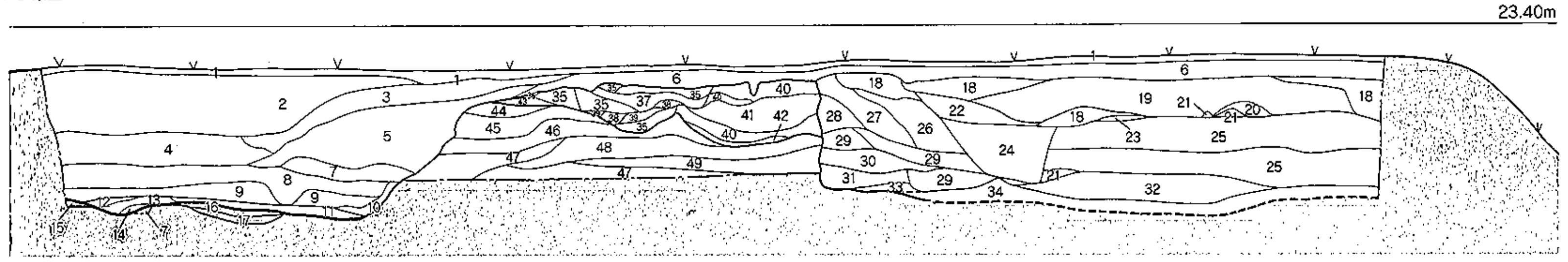


Fig.22　東下成土塁後面（35次A区）積土土層・敷粗朶SX172実測図（1/60）

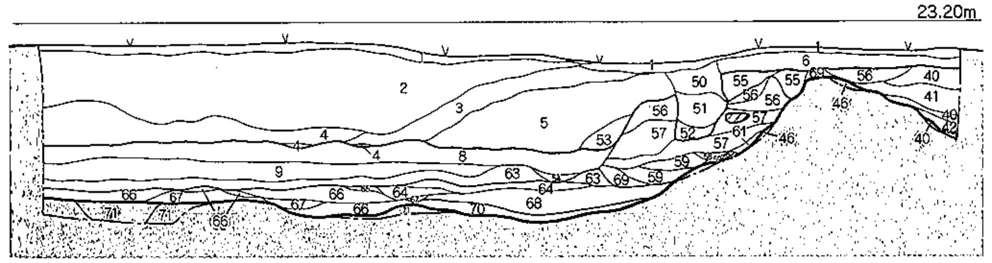
Tr.10-11 西壁



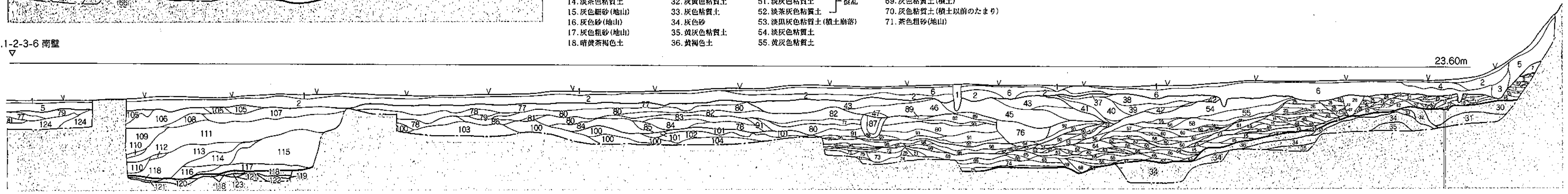
Tr.4-5 東壁



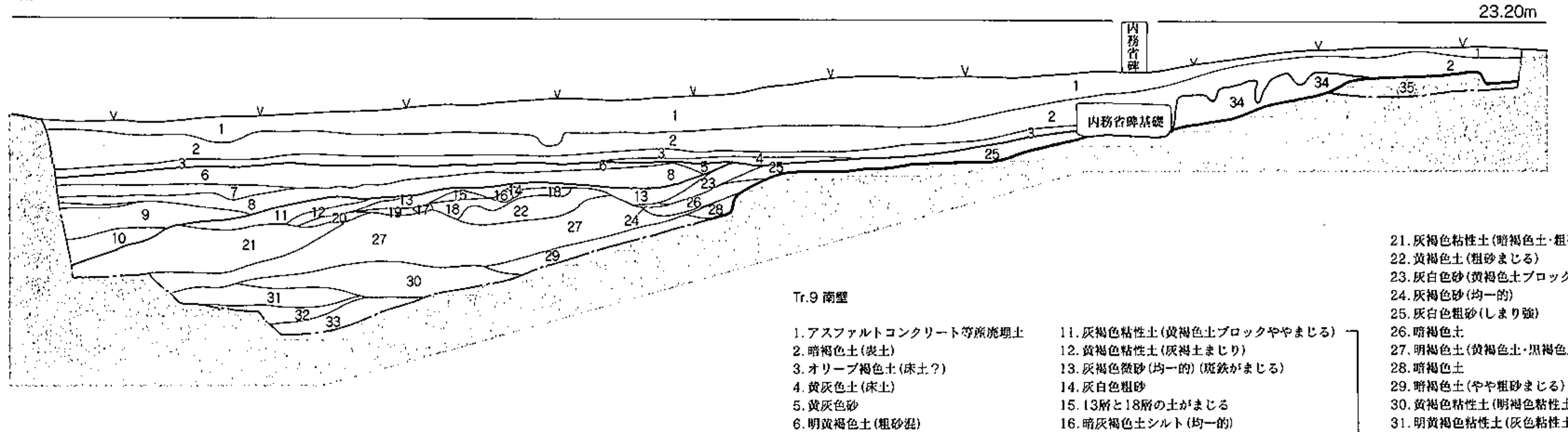
Tr.3-7 東壁

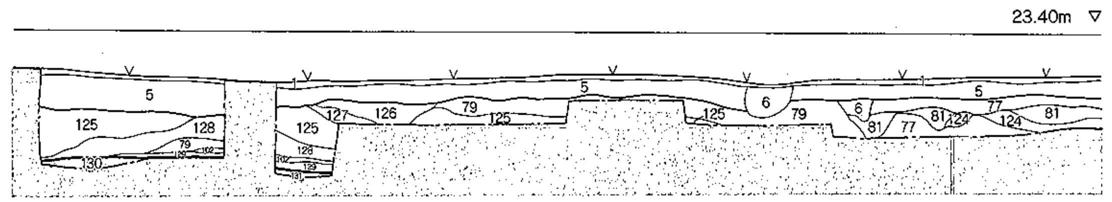


Tr.1-2-3-6 南壁



Tr.9 南壁





0　5m

Tr.4-5,3-7 東壁

1.黒灰色土(表土)
2.灰色土(産廃盛土)
3.黒色土(客土)
4.橙灰色土(客土)
5.暗黄灰色土
6.黒灰色土
7.暗茶灰色土
8.淡黒灰色土(旧耕作土)
9.淡橙灰色(旧床土)
10.淡橙茶色土
11.淡橙灰色土
12.淡茶灰色土
13.淡灰色土(砂粒含)
14.淡茶色粘質土
15.灰色細砂(地山)
16.灰色砂(地山)
17.灰色粗砂(地山)
18.暗黄茶褐色土
19.黒色粘質土
20.黒灰色粘質土
21.灰白色粘質土
22.灰色砂
23.黄灰色砂
24.暗黄褐色砂質土
25.暗黄褐色砂質土(灰色砂混)
26.暗黄茶褐色土
27.暗黄褐色土
28.暗黒灰色土
29.暗黄色土
30.暗茶黄色土
31.黒灰色土
32.灰黄色粘質土
33.灰色粘質土
34.灰色砂
35.黄灰色粘質土
36.黄褐色土
37.淡灰色粘質土
38.暗黄灰色粘質土
39.暗茶灰色土
40.明黄灰褐色粘質土
41.暗灰色砂
42.淡灰黄色粘砂
43.黄橙褐色土
44.淡茶灰色砂
45.淡灰色砂
46.茶灰色粗砂
47.暗茶灰色粗砂
48.黄灰色粗砂
49.暗灰色粗砂
50.暗黒灰色土 ┐
51.淡灰色粘質土 ├ 撹乱
52.淡茶灰色粘質土 ┘
53.淡黒灰色粘質土(積土崩落)
54.淡灰色粘質土
55.黄灰色粘質土
56.黄灰褐色粘質土
57.暗黄灰褐色粘質土 ┐
58.淡茶灰色粘砂土 │
59.灰色粘質土 ├ 「修復土」
60.淡灰色粘質土 │
61.黄灰褐色粘質土 │
62.明黄灰色砂 ┘
63.黄褐色粘質土(床土で汚染された整地層)
64.暗灰色粘質土 ┐
65.灰色粘質土 │
66.暗灰茶色粘質土 ├ 整地層
67.淡黄灰色粘質土 │
68.灰茶色粘質土 ┘
69.灰色粘質土(積土)
70.灰色粘質土(積土以前のたまり)
71.茶色粗砂(地山)

Tr.9 南壁

1.アスファルトコンクリート等産廃埋土
2.暗褐色土(表土)
3.オリーブ褐色土(床土?)
4.黄灰色土(床土)
5.黄灰色砂
6.明黄褐色土(粗砂混)
7.6層に黒褐色粘性土ブロックが混じる
8.灰白色粗砂
9.10層に黄褐色土ブロックが混じる
10.灰褐色粘性土
11.灰褐色粘性土(黄褐色土ブロックややまじる)
12.黄褐色粘性土(灰褐土まじり)
13.灰褐色微砂(均一的)(斑鉄がまじる)
14.灰白色粗砂
15.13層と18層の土がまじる
16.暗灰褐色土シルト(均一的)
17.灰褐色微砂(均一的)
18.14層に同じ
19.14層に同じ
20.13層に黄褐色粘性土ブロックがまじる
21.灰褐色粘性土(暗褐色土・粗砂まじる) ┐
22.黄褐色土(粗砂まじる) │
23.灰白色砂(黄褐色土ブロックまじる) │
24.灰褐色砂(均一的) │
25.灰白色粗砂(しまり強) │
26.暗褐色土 ├ SX231埋土
27.明褐色土(黄褐色土・黒褐色土粘性ブロックまじる) │
28.暗褐色土 │
29.暗褐色土(やや粗砂まじる) │
30.黄褐色粘性土(明褐色粘性土ブロック・微砂混) │
31.明黄褐色粘性土(灰色粘性土ブロックまじる) │
32.灰褐色シルト(微砂混) ┘
33.褐色砂(粗砂混)
34.明褐色土(灰褐色土ブロックまじる,「修復」積土(整地)層か?)
35.褐色砂(地山)

Fig.23　西下成土塁東端（39次）積土土層図（1/60）

Tr.10-11 西壁

1.黒灰色土(表土)
2.橙灰色土(真砂土)
3.黒灰色土(旧表土)
4.橙灰色粘質土
5.灰色土(耕作土)
6.淡灰色土(耕作土)
7.黄褐色土(床土)
8.暗茶色土(粘性有)
9.暗茶色土(黄褐色ブロック含)
10.暗茶灰色土
11.暗茶灰色土
12.暗茶灰色土(11より明)
13.暗茶色土
14.灰色粘質土 ┐
15.明灰色粘質土 │
16.暗灰色粘質土 ├ 溝上層
17.灰黄色粘質土 │
18.灰色粘質土 │
19.灰色粘質土(粘性強い、一時期の堆積) ┘
20.灰色粘質土
21.灰色細砂(流水痕跡) ┐
22.淡灰色細砂(21と一連) │
23.暗灰色細砂 ├ 溝下層
24.暗灰色粘砂 │
25.灰色粘質土 ┘
26.黒灰色土(表土)
27.黄灰色砂質土
28.明黄灰色粘砂土
29.黄灰色土
30.暗黄灰色土
31.灰色土
32.暗茶褐色土
33.黄灰褐色粘質土
34.黒灰色土
35.暗黄灰色土
36.暗黄灰色粘質土
37.淡黄灰色粘質土
38.黄灰色粘質土
39.白黄灰色土
40.暗黄灰色粘質土
41.淡茶灰色土
42.黄灰褐色粘質土
43.淡黄灰褐色土
44.淡黄茶灰色土
45.淡黄灰色土
46.暗淡茶灰色土
47.黄茶灰褐色粘質土
48.暗灰色砂
49.明黄灰色土
50.暗灰黄色土
51.淡黄灰色土
52.淡茶黄灰色土
53.淡暗灰色土
54.淡黄茶灰色粘質土
55.茶褐色土
56.暗灰色粘質土
57.淡灰色粘砂土
58.暗灰色粘砂土
59.黒灰色土(撹乱)
60.淡灰茶色砂
61.淡灰色細砂
62.淡灰色細砂(鉄分多い)
63.暗灰色粘質土
64.淡暗灰色粘質土
65.暗灰色粘砂土
66.淡暗灰色粘砂土
67.淡灰色土
68.暗灰色土
69.淡暗黄灰色土
70.淡灰色砂
71.白灰色粘質土
72.灰色粘質土
73.暗灰色粘質土
74.淡灰色粘質土
75.白灰色粘砂土
76.淡暗灰色粘質土
77.黒灰色粗砂
78.茶褐色土(鉄分沈着)
79.淡灰茶色砂
80.淡白色細砂
81.白色粘質土
82.白灰色細砂
83.灰色細砂
84.淡灰色粘砂
85.淡灰色砂
86.淡橙灰色細砂
87.淡灰色細砂
88.橙褐色粘砂
89.淡橙赤灰色砂
90.黄橙灰色砂
91.淡茶灰色土
92.淡灰色砂
93.茶灰色砂
94.橙褐色粘質土(暗灰色粘質土混)
95.黒褐色土
96.茶灰色粘質土
97.茶色砂
98.灰色粘質土
99.淡黄灰色粘質土
100.淡灰色粘砂土
101.黄橙灰色粘砂土
102.橙灰色粗砂
103.黒灰色土
104.淡灰色土
105.灰色粗砂
106.黄灰褐色粘質土
107.黄灰褐色土(粗砂混)
108.橙褐色粘質土
109.灰色粘質土
110.黒褐色粘質土
111.淡灰色粘質土
112.灰白色粘質土
113.灰白色粗砂
114.灰色粗砂(バイラン土二次堆積)
115.黄褐色土
116.淡灰色砂質土
117.灰色粗砂(灰色粘土ブロック混)
118.灰色粘質土
119.茶灰色粘質土
120.茶黄灰色粘質土
121.灰色細砂
122.灰色粘砂土
123.茶褐色土
124.明灰色粘質土
125.茶灰色粘砂土
126.灰色砂質土
127.暗灰色粘質土
128.暗灰色砂質土
129.明茶灰色粗砂
130.橙茶灰色粗砂
131.黒灰色粗砂
132.茶灰色粗砂
133.灰色粗砂(礫混)
134.淡茶灰色粗砂
135.灰色粘砂土
136.黄灰色砂
137.茶色砂
138.黄灰色粘質土
139.橙灰色粘質土
140.暗灰色粘質土
141.灰色粘質土
142.橙色粘質土
143.黄灰色粘質土
144.茶灰色砂(黄褐色砂質土ブロック混)
145.茶色砂(暗灰色砂質ブロック混)
146.黄褐色砂質土
147.灰褐色砂質土
148.黄褐色砂質土
149.灰黄白色粘質土

Tr.1-2-3-6 南壁

1.黒灰色土(現表土)
2.黒色土
3.暗黄灰色土
4.暗黄灰色土
5.淡黒灰色土
6.黒灰色土
7.黄灰褐色土(灰色粘質土)土塁崩落土
8.灰黄色土(黄褐色ブロック)
9.灰黄色土 ┐
10.灰色粘質土 ├ 粘質土系積土②
11.淡灰色細砂 │
12.黒褐色土(あずき土) ┘
13.淡灰色粘砂 ┐
14.橙褐色土 │
15.灰色粘質土(灰色ブロック混) ├ バイラン土系赤積土①
16.淡橙灰色粘砂 │
17.暗灰色粘質土(15に近い) │
18.淡灰色粘質土 ┘
19.淡灰色細砂(11に近い) ┐
20.淡灰色+黒褐色土 ├ 粘質土系積土②(黒褐色系)
21.黒褐色土+淡灰色土 │
22.淡灰色土+黒褐色土 ┘
23.淡黄灰色粘質土 ┐
24.淡黄褐色粘質土 │
25.淡茶灰色粘細土 ├ 粘質土系積土③(淡黄灰色系)
26.　〃　(25よりやや暗) │
27.灰色粘質土 ┘
28.淡茶灰色土(細粒)
29.灰色粘質土
30.暗灰色粘砂(水田耕作的堆積層)
31.灰色細砂
32.淡橙褐色土 ┐
33.淡黄灰色シルト ├ 自然堆積
34.暗灰色粗砂 │
35.淡灰色砂(地山) ┘
36.黄灰色砂(地山)
37.暗灰色土
38.橙灰褐色土
39.暗淡灰色砂質土
40.灰色砂質土
41.暗黄灰色粘質土(黄色、黒色ブロック混)
42.灰色粘砂
43.淡黄灰色土
44.淡灰色砂質土
45.暗黄灰色粘砂土
46.淡灰色粘砂土
47.暗黄灰色土
48.淡茶色砂質土
49.暗灰色粘質土
50.暗灰色土
51.暗灰色土(粘質土ブロック混)
52.淡灰色粘砂土
53.明橙褐色土
54.淡暗灰色粘質土
55.黒褐色土
56.暗灰色粘砂土
57.淡茶灰色土(土器出土)
58.黒褐色粘砂土
59.淡黄灰色粘砂土
60.黒褐色粘質土
61.淡黄灰色土
62.暗灰色粘質土
63.淡灰色砂質土
64.暗灰色粘砂土(茶色ブロック)
65.暗灰色粘砂土
66.淡暗灰色土
67.淡灰色粘質土
68.暗灰色粘砂土
69.灰色粘質土
70.暗灰色粘砂土
71.淡黄灰色土
72.淡灰色土
73.淡橙灰色土
74.淡灰色粘砂
75.暗灰色粘質土
76.淡黄茶灰色土(やや砂質・淡黄灰褐色ブロック混)
77.暗黄灰褐色土
78.淡茶灰色粘質土
79.黄灰褐色粘質土
80.暗黄灰色土(灰色粘質ブロック)
81.暗黄灰色砂質土
82.灰色砂質土
83.淡黄灰色粘砂土
84.淡灰色砂質土(黄色ブロック混)
85.淡灰色砂質土
86.暗淡茶灰色土
87.黒灰色土
88.暗黄灰色土
89.黄灰褐色土
90.淡灰色粘砂
91.暗茶色砂
92.暗黄灰褐色粘質土
93.淡黄灰色砂
94.暗黄橙褐色粘質土
95.淡黄橙褐色土
96.橙褐色土
97.淡灰黄色土
98.灰色粘質土
99.暗灰色粘質土
100.黄褐色粘質土
101.黄茶褐色粘質土
102.灰色粘砂土
103.灰色粘質土(黄褐色ブロック混)
104.淡灰色粘砂
105.暗黄茶褐色土
106.暗灰色粘質土
107.暗黄茶褐色土
108.暗灰色土
109.暗黄茶褐色土
110.暗黄色土
111.暗茶黄色土
112.淡茶灰色粘質土
113.暗茶灰色土
114.暗黄褐色土
115.暗茶黄色土
116.暗黄褐色土
117.淡茶灰色土
118.灰色粘質土
119.黒褐色土
120.黄灰褐色土
121.茶褐色砂
122.淡灰色粘質土
123.淡橙灰色砂
124.淡黄灰褐色粘質土
125.暗黄茶褐色粘質土
126.暗黄灰色粘質土
127.淡黄灰色粘質土
128.暗黒褐色粘質土
129.淡茶灰色粘砂土
130.淡灰色細砂(地山)
131.茶色粗砂(地山)

敷粗朶

ＳＸ172（35次）（Fig.22，PL.23，巻頭PL. 6）

35次調査Ａ区断割トレンチ内で検出した。現地表面から約2.0～3.4m下位の積土中より検出した。検出面の標高は26.1mである。粘質土や砂質土に枝葉を敷き並べながら積土している。結果として約1.5mの厚さの積土の中に11面の敷粗朶層がある。この敷粗朶自体は，トレンチ内を見る限り，土塁に直交する形で敷かれている。この敷粗朶の下位から地山の暗灰色粘質土までは，上層に腐植土となる厚さ30cmの黒褐色土，さらにその下層に灰色砂が堆積している。そのため，築堤以前にこの範囲に自然流路が存在した可能性がある。

11層の敷粗朶層

西土塁前面

39次調査断割トレンチ（Fig.23・24，PL.23・24）

欠堤部西側の39次調査では，土塁の残存状態を確認するために土塁軸に並行するトレンチを，外濠との関係を確認するために土塁に直交するトレンチをそれぞれ設定した。

軸線に並行するトレンチでは，西側で現地表下20cmで積土層に達する。特に下成土塁が途切れる付近では，花崗岩バイラン土系の淡黄灰色土や黄褐色粘質土を積んでおり，層全体の厚さは60cm程度になる。その下位では，暗灰色や灰色の粘砂土や淡茶灰色土や黄色灰色土を積んでおり，全体の厚さは90cm程度になる。ただし積土は，西側へ向かうに連れて立ち上がっており，層としては薄くなる。この積土下位は砂層の地山で，平坦面の標高は22.2mである。この地山も積土と同じように，西側へ向かうに連れて高くなっている。その上には灰色や灰黄色粘質土，橙褐色土，灰色砂による，下成土塁の積土がみられる。

土塁の残存状況

一方，トレンチの東側は，途切れながらも積土が続いている。現状で確認できる下成土塁の「段落ち」際から東側19m付近では，暗灰色土や暗茶灰色土のほか，明黄褐色粘質土，淡茶色粘砂を暗灰色粗砂層の地山に積んでいる。地山面の標高は22.4mである。結果的には「段落ち」から東へ約35m付近までは，僅かな積土が粗砂層の上に続いている。この積土内では柱痕跡ＳＸ220を１個確認したが，広がりは不明である。

土塁に直交するトレンチでも，花崗岩バイラン土系の淡黄灰色土や黄褐色粘質土を上層に，暗灰色や灰色を中心とする粘砂土を下層に積む単位は共通する。ただし南側では，下層の暗灰色粘砂土等を砂層の自然堆積層に塗りつけるように積んでいる。この土塁南半に見られる自然堆積層の断面は土饅頭状であり，下位から木材や完形の古式土師器を置いていたＳＸ234を検出している。また，この自然堆積層の南端の抉れた部分には後世の積土がある。この橙色や灰色粘土による新しい積土は，基本的に土塁線に沿って盛られており，東側へ続いている。

土塁前面部については，本来であれば外濠が始まるはずであるが，この地区では，基底部から北側へは，平坦地が35m付近まで続いている。土塁際に溝ＳＤ225が掘削され，その北の立ち上がりが土手状となるほかは，淡灰色土や暗黄褐色土の整地層が続いて緩やかに外濠へ至る。このような整地層の状況は少なくとも，土塁軸線に沿って東側へも20m程度は広がっており，その先で粗砂層の地山となる。

以上のような調査状況から，御笠川へ向かって築堤時の土塁が延びていたことは確かである。特に積土修復が，土塁軸線に対して行われていることもそれを追認するものと考えられる。ただし，他と同じように下成・上成土塁を築いていたのかは現状では不明である。

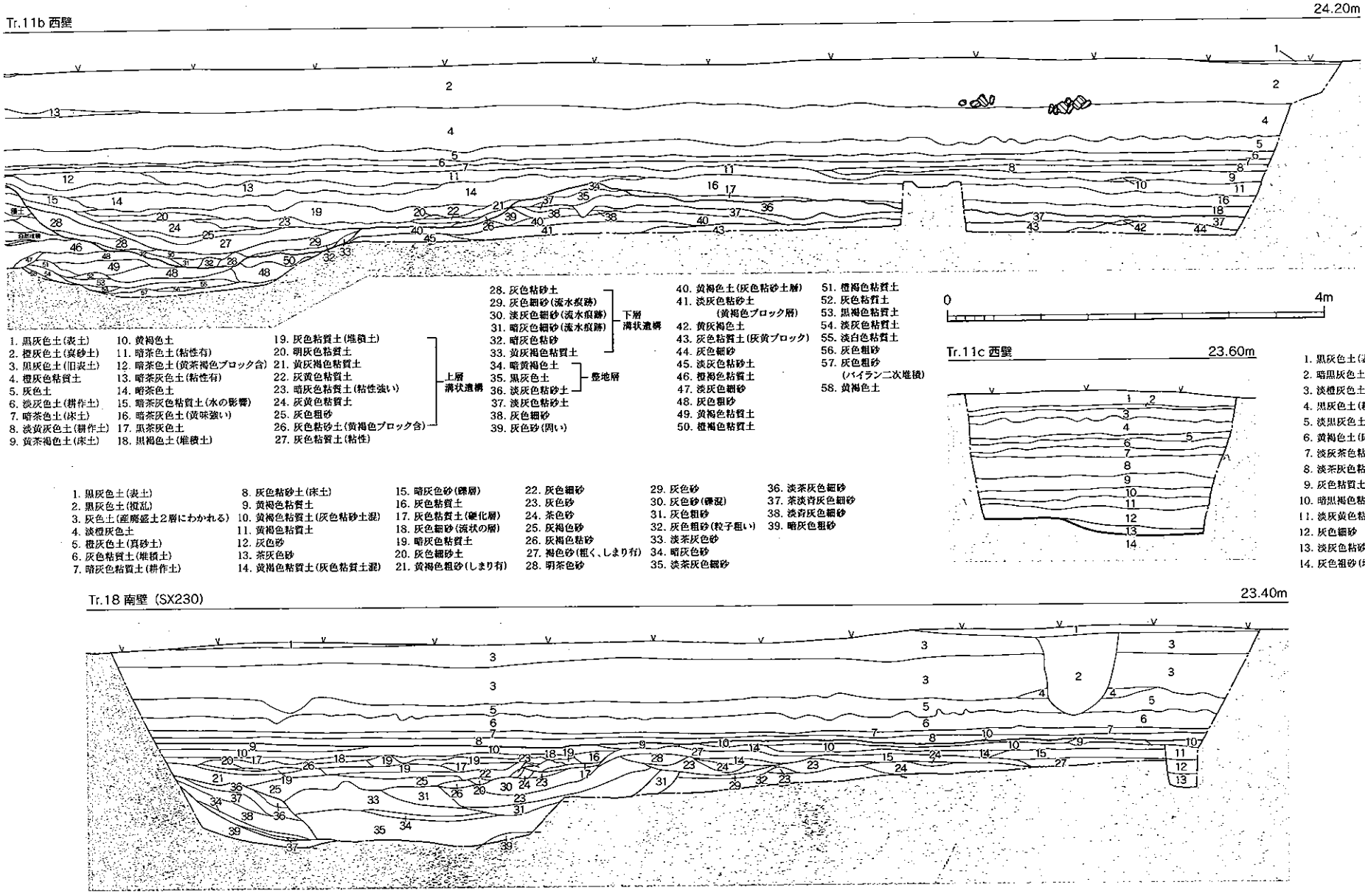


Fig.24　西下成土塁東端（39次）基底部周辺土層図（1/60）

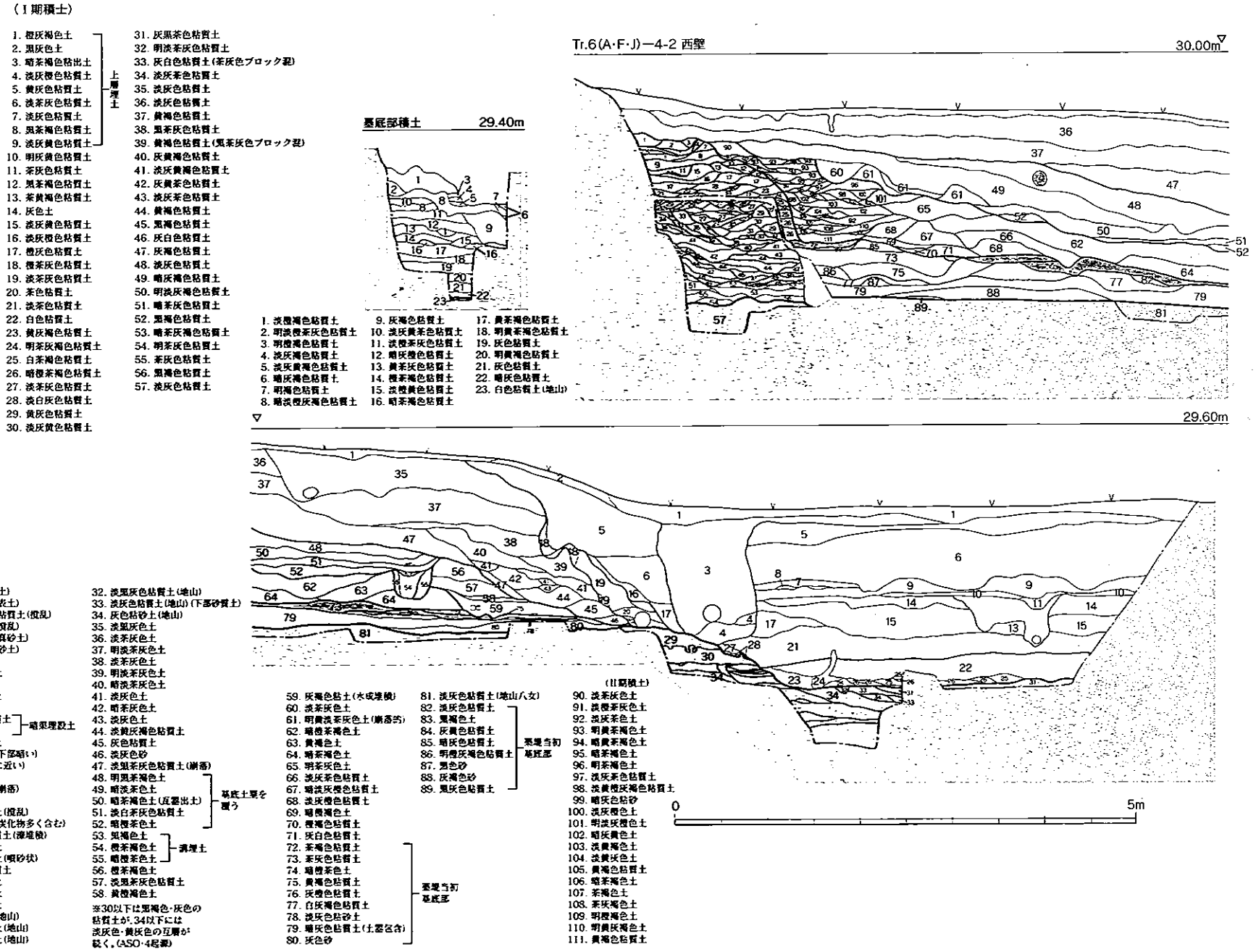


Fig.25 西下成土塁前面（40次）積土土層図（1）（1/60）

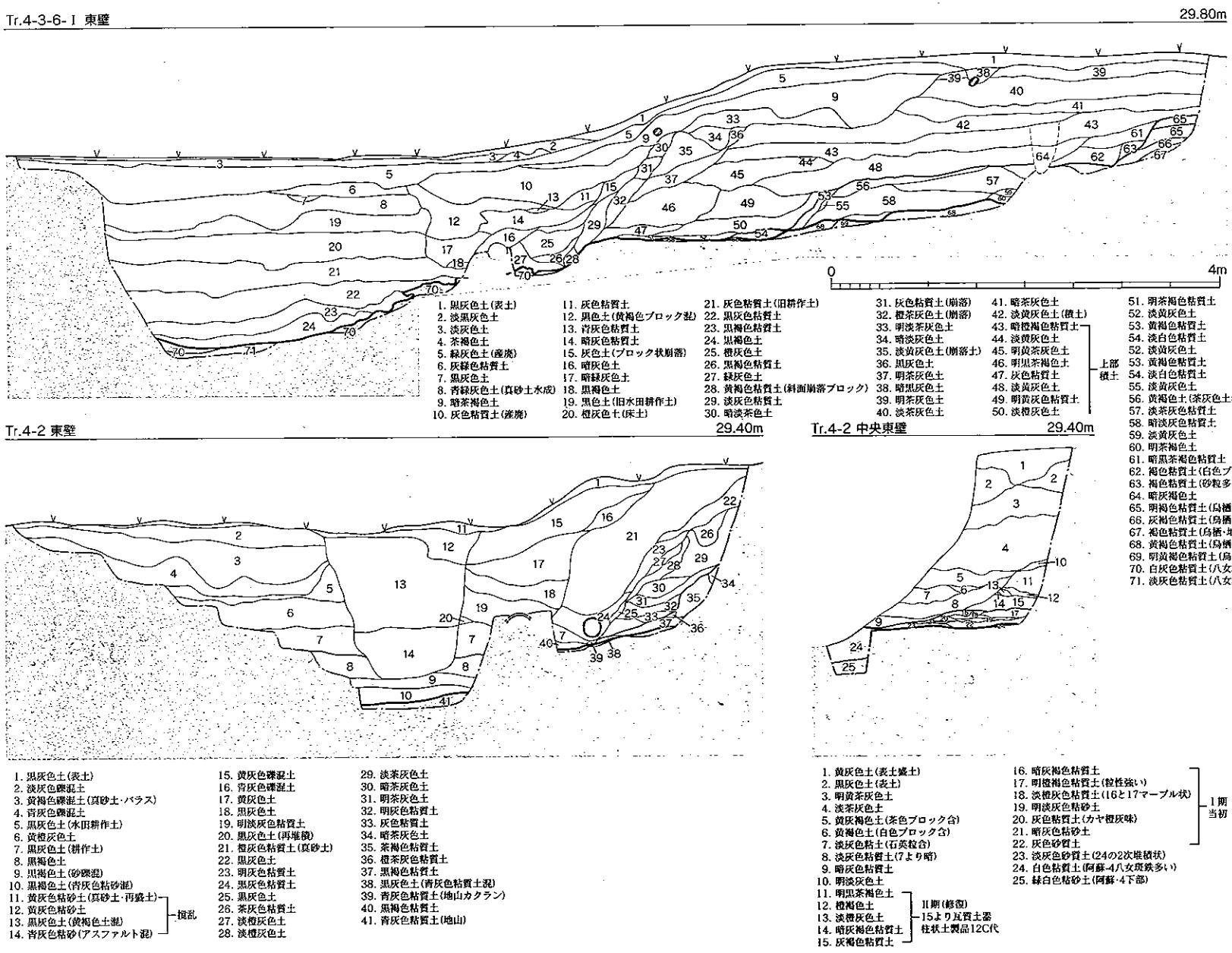


Fig.26　西下成土塁前面（40次）積土土層図（2）（1/60）

西門地区土塁前面

40次断割トレンチ（Fig.25～27，PL.25～27）

西門地区東側の40次調査地は，木樋埋設推定地である。下成土塁積土と木樋掘形や外濠との関係を確認するため，平坦地にトレンチを設定した。このうち，土塁に直交する西側のトレンチ（Fig.25）では，外濠と基底部積土，さらに上成土塁との関係を確認することができた。

積土は，土塁裾では現地表より0.6m程度，平坦部落ち際では1.2m程度の深さで確認することができる。上部には斜面堆積層の淡茶灰色土があり，その下位に積土が崩落したと考えられるブロック混じりの淡灰黄茶色土が堆積している。そして，この崩落土下位に暗茶褐色土系の包含層が積土を覆っている。この暗茶褐色土から13世紀前後の瓦器が出土しており，下成土塁の廃絶期を示している。そして，その下位には暗橙茶灰色土や暗茶灰色土の積土がある。この積土面先端の標高は28.0mである。これらは南側で，そのまま上成土塁の修復積土に続いており，基底部積土の上部も積み直されたことが分かる。その時期は，上成土塁の修復積土中から８世紀代の土器が出土しており，かつ下成土塁積土先端部の外濠際の堆積層を12世紀前半の廃棄土坑ＳＫ245が切ることから，８世紀以降，12世紀前半の中で考えることができる。

13世紀に下成土塁の廃絶

そして，この基底部積土の下層には築堤当初の積土が見られる。暗橙茶色土で上面は鉄分の沈着が強い。下部には，暗灰色粘質土や灰白色粘質土，灰色砂があるが，粗く整地されたような状況である。さらに下位には，阿蘇４火砕流起源の淡灰色粘質土の地山がある。この地山面は土塁本体へ向かうにつれて高くなっている。この築堤当初の基底部積土も南側の土塁本体へと続いている。そして，その上位に明橙褐色粘質土や淡灰黄褐色粘質土などを10cm程度の厚さで積んでいる。これらは，一見鳥栖ロームの地山と間違えるほど粘性が強く緻密である。このような積土の状況から，付近では地山の成形によって生じた土を，そのまま他の土と混ぜることなく，再度積んだことが分かる。木樋の掘形はこの積土層を切っており，本来は下成土塁基底部築造後に木樋が埋設されると考えられる。

東側のトレンチは，西側とはやや状況が異なる（Fig.26）。土塁裾際には，地山が残っており，その上に積土を確認できる。大きく２時期に分かれるが，上層の積土は厚く明黄灰色粘質土，淡黄灰色粘質土等で，厚さは20cm程度である。基本的には粗い。その下位に黄褐色土を薄く積んでおり，この面を上面として下層の積土がある。黄褐色粘質土の地山に淡茶灰色粘質土や暗茶灰色粘質土を積んでいる。この下層の積土の先端部は標高28.2mで，西側のトレンチで確認した先端部と高低差はあるが，上成土塁際からの距離はほぼ並行する位置にある。

この下成土塁平坦地の東側では，大きな高低差のある段がつく。ただし，トレンチの状況から，大きく削平，撹乱を受けていることが分かり，当初の積土がどの程度の高さであったのかは不明である。ただし，東端に土塁と並行する形で設定したトレンチでは，28.2m付近まで地山を削り出し，そこから１m程度の積土を行っていることを確認している（Fig.27,Tr.６）。さらに東の基底部が落ちる箇所では，27.3mで地山を確認できる，その上に僅かに積土と捉えてよい層がある。このような状況から，現状で見える下成土塁の段の違いが，当初から同じ比高差で存在していたかは，検討を要する。

下成土塁の段の違い

26次調査東断割トレンチ（Fig.28，PL.53）

26次調査西門地区東側では基底部と外濠との関係を確認するため，土塁に直交するトレンチ

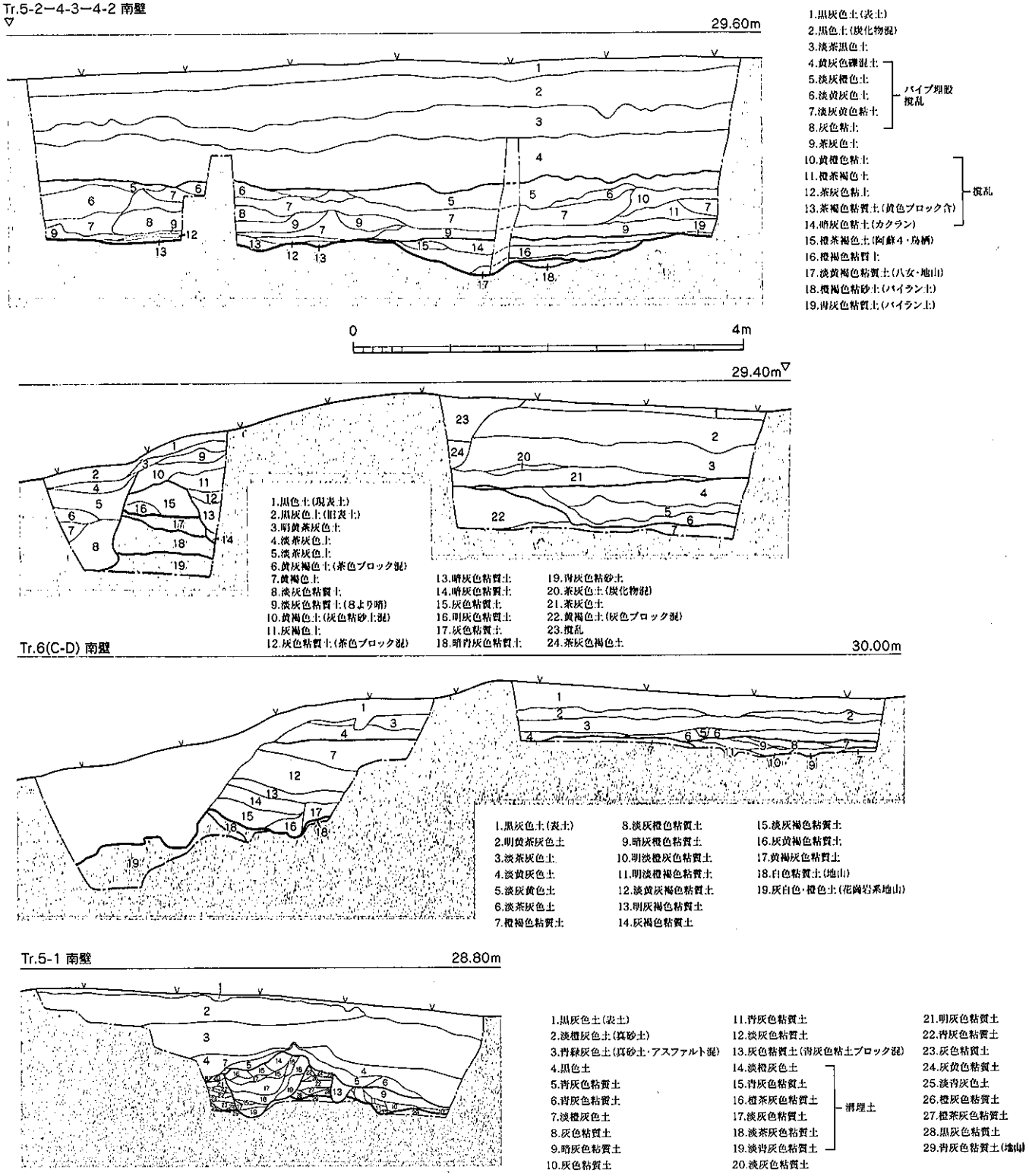


Fig.27　西下成土墨前面（40次）積土土層図（3）（1/60）

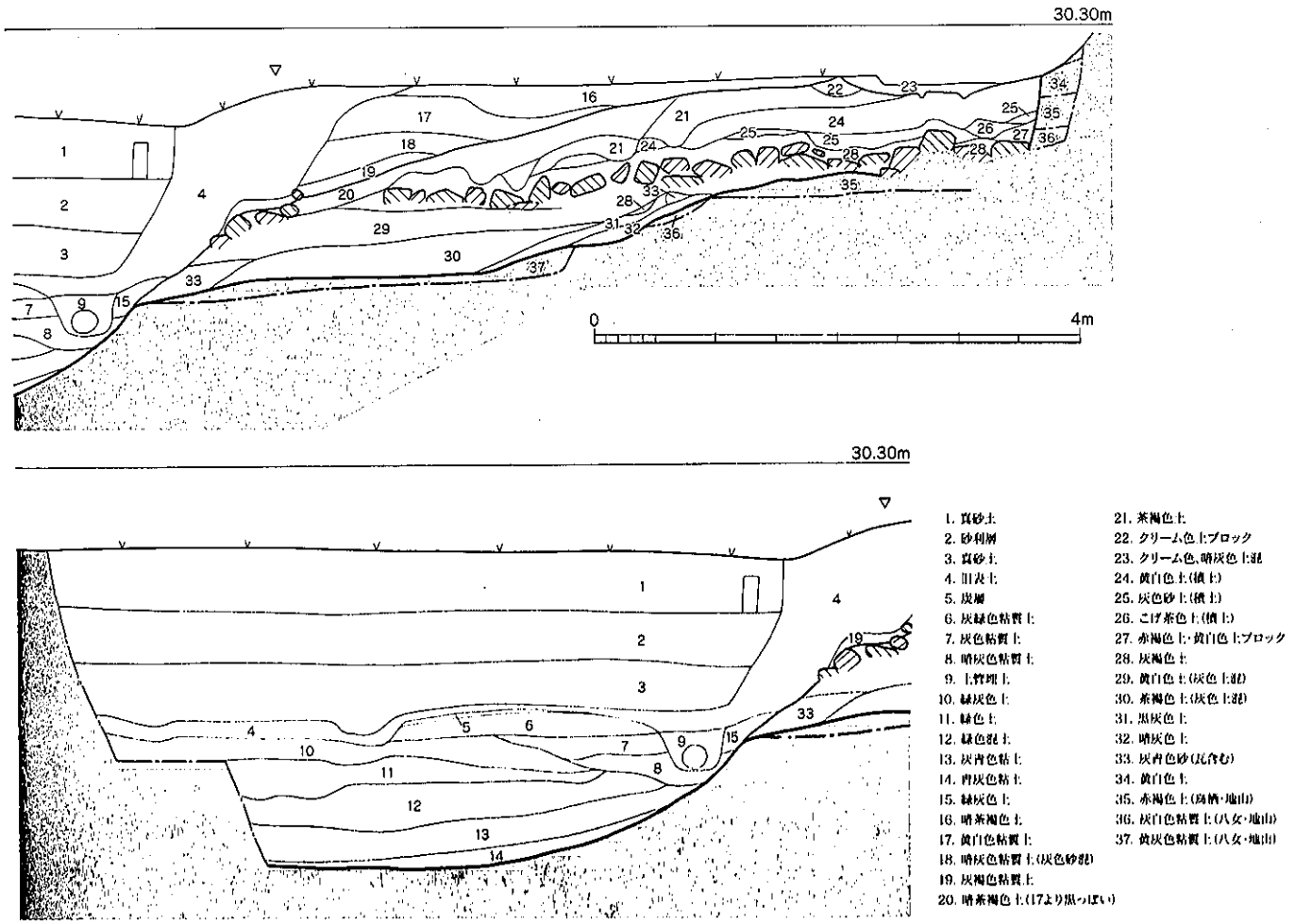


Fig.28　西下成土塁西門地区東側前面（26次）積土土層図（1/60）

を設定した。上成土塁の北際では，土塁に並行する石列ＳＡ104を設置しており，それに直交する形で暗渠ＳＸ106が外濠へ続いている。その下位には，基底部が抉れたような落ち込みＳＸ275が見られる。付近の基底部は，基本的に阿蘇４起源の火砕流堆積層による台地を成形しており，その上に黒灰色土や暗灰色土を10cm程度に積んでいる。そして，ＳＸ275の落ちを修正するように，赤褐色と灰色土の混土や黄灰色土を30cm程度，厚く積んでＳＸ106を埋設する。そして，その上に砂質土を挟んで黄灰色土と茶褐色土や暗茶褐色土を積んでいる。これらの積土は，ＳＸ106に対応して外濠へ傾斜しているが，さらにＳＸ106の吐水口直上には，基底部を平坦に張り出すように，黄灰色粘質土や灰褐色粘質土を積んでいる。この西門東側の基底部の幅は，継ぎ足した積土上端で約6.0m，傾斜していくＳＸ106吐水口で測ると7.0mである。

積土内に暗渠施設

26次調査Ｄ区土塁断割トレンチ（Fig.33，PL.29）

西門西側土塁前面で上成土塁から下成土塁までを断ち割った。このうち，上成土塁については，後で詳しく述べる。土塁中位のテラス下位には，Ⅰ期上成土塁があり，積土は上・下層に分かれる。特に下層には，地山に見られる灰白色粘質土と茶褐色土，明赤灰色土を積んでいる。そして，この下位に，地山成形を行って積んだ下成土塁が約1.1mの厚さである。褐色砂を中心として，黒灰色砂や灰色砂，明赤灰色土等を積んでいる。上層の積土と比べて傾斜はなく，

厚さは10～15cm程度になる。また，この下成土塁の積土前面には上層の積土が滑り落ちたような状態で堆積している。そして，その前面を成形して，赤色土や黒灰色砂，灰色粘土などを厚さ20cm程度に積んでいる。こうした前面部の継ぎ足しは40次調査の基底部土塁等と似ている。確認した地山面は褐色砂であり，標高30.8mである。

西門地区土塁後面

33次調査西門地区東側後面（Fig.29，PL.14）

33次調査では，西門地区土塁東側の後面で基底部の面的調査を行った。基底部は，阿蘇４火砕流によって形成された台地を成形している。調査地では，花崗岩風化土の上に灰白色粘質土を中心とする八女ローム，赤褐色土の鳥栖ロームの層位を順番に確認でき，その上層に茶褐色土のレス層が僅かに堆積している。門切り通しの土層観察では，上成土塁中央付近の標高35mまで地山の赤褐色土を確認でき，旧地形を取り込みながら築堤されたことが分かる。調査地では，地山を成形した下成土塁に積土の痕跡は確認できていない。黄色土系の整地層が僅かに見られるだけである。なお，この下成土塁の南側が上下２段に分れる点については，南側の下段に古期の遺構や包含層が存在しないことから，後世に削平されて段が造られたと考えられる。そのため段落ちＳＸ164も後世の造作による可能性が高い。

地山成形の下成土塁

柱痕跡

ＳＸ228（39次）（Fig.30，PL.24）

土塁基底部下位で検出した柱穴である。狭いトレンチ内であり，１個しか検出できなかった。ちょうど基底部の積土，淡黄灰色や黄灰色粘質土層の上面で確認した。径40cm程度の灰色の埋土の痕跡であったが，上層ではっきり確認できないため，作業穴等の可能性が高い。

平坦地・落ち・整地層

ＳＸ230（39次）（Fig.23・77，PL.27）

欠堤部西側の土塁前面東側で検出した平坦地である。この39次調査では，土塁前面約35m付近で外濠が始まることが明らかとなったが，土塁に並行する外濠は東端で大きく南に向きを変えている。それに併せて平坦地も東へ広がっている。ちょうど台形状に張り出した状態とな

平坦地と整地層

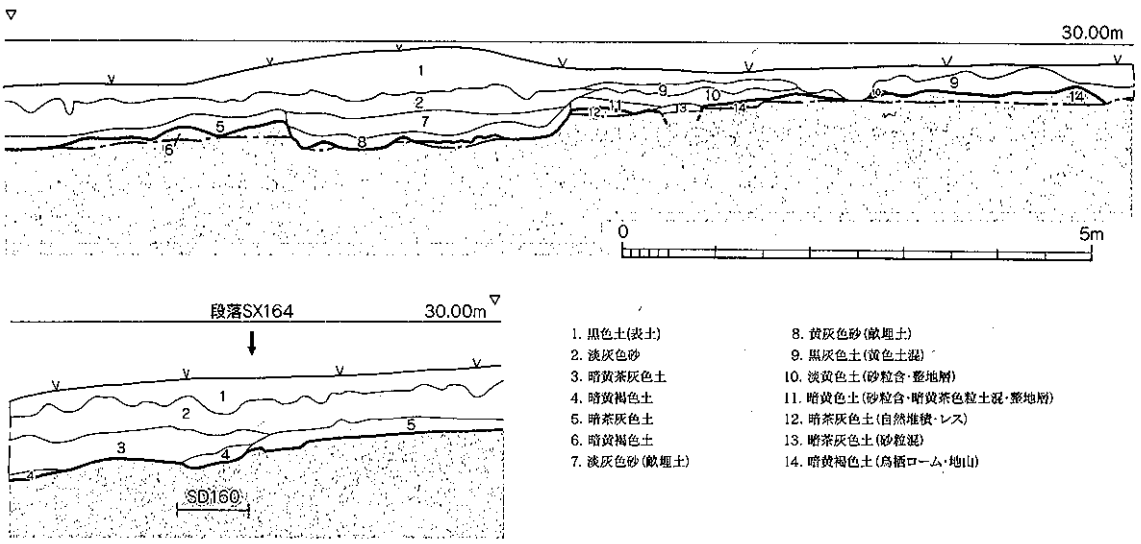


Fig.29　西下成土塁西門地区東側後面（33次）土層図（1/80）

る。面的に調査を行ったが，外濠の痕跡は認められない。この平坦地は基本的に粗砂層を地山としており，それが御笠川へ向かって次第に落ちていくが，その落ち際には黄褐色粘質土や灰色粘質土の整地層が認められる。この点からもこの付近は，外濠ではなく，平坦地として存在していたと考えられる。

ＳＸ231（39次）（Fig.23・77）

欠堤部西側の土塁が途切れる付近で検出した「落ち」である。下成土塁の残存状況を確認するために設定した土塁に並行するトレンチの東端で確認した。灰褐色粘質土や灰色砂，暗褐色土を20～40cm程度の厚さで積んで埋めている。人為的に埋められた溝，あるいは落ちが考えられるが，他の44次調査のトレンチの状況とは異なり，直接水の影響を直接受けた状況ではない。出土土器は７世紀代が中心である。埋土を見ると，上層の近世以降の耕作土とは明らかに異なる。土塁が欠堤部付近のどこまで残っていたか，現在の調査成果では不明だが，この落ちは下成土塁の基底に埋められた可能性があり，ＳＸ230東側の整地層に関係すると考えられる。

ＳＸ282（26次）（Fig.55）

西門地区東側の石組暗渠ＳＸ105の下位で確認した整地層である。西門地区基底部は阿蘇４火砕流堆積物による台地を利用している。築堤当初の状況を示しているかは不明だが，灰白色粘質土の地山を２ｍほど平坦に削りだした面にＳＸ105を埋設している。この平坦部の削出しは土塁軸線に並行しており，60cmの比高差で北側へ落ちる。暗渠を埋設するため，その下位に灰褐色土や茶褐色土による整地を行っている。

ＳＸ278（26次）（Fig.28）

西門地区東側の基底部北側にみられる落ち込みである。ＳＸ106の土層観察と併せてみる限り，基底部の崩壊の痕跡とみることができる。その落ちをＳＸ106埋設の際に再度積み直しを行っている。ＳＫ273・274は積み直した土塁が再度崩壊したものであり，この落ちに直接関係するものではなく時期的には新しい。

旧地形・その他

ＳＸ063（９次）（Fig.31・42）

ＳＡ001西土塁西門地区西側内郭で確認した地山の落ちである。土盛りされた現地表から1.9m下位で暗茶黒色土を確認した。埋没した自然木など，有機質を含む層である。人為的な痕跡は確認できず，自然地形の落ちと考えられる。

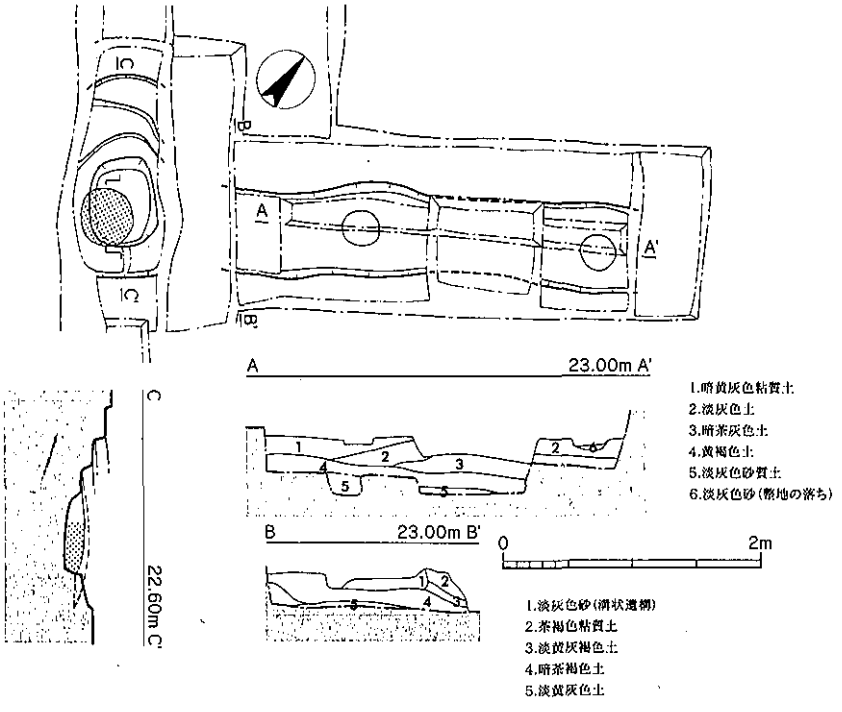


Fig.30　不明遺構SX228実測図（1/60）

ＳＸ129（26次）（Fig.48）

ＳＡ115Bのすぐ北側で検出した落ち込みで，北半部は未掘。南辺は２mほどになるか。埋土は黒紫色土と黄褐色土との混合土であり，新しい印象を受けた。

ＳＸ234（39次）（Fig.32，PL.27）

古式土師器の出土

下成土塁の積土下位の自然堆積層下で確認した。茶灰色砂層に埋没した状態で木材と古式土師器が出土した。木材の長さは不明だが幅60cm程度で，裏面は丸みを持っており，自然木が割かれたのかもしれない。古式土師器は甕片の上に完形の壺が置かれた状態であった。破片の割口を見る限り鋭い。面的に出土しており，意図的に置かれたことは確かである。その後，流水などによって埋没したのであろう。

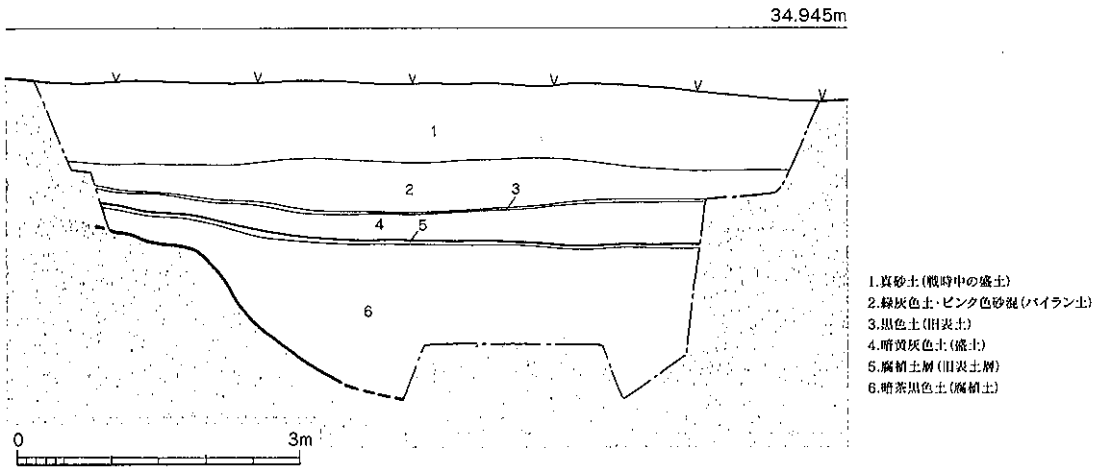


Fig.31　落ちSX063土層図（1/80）

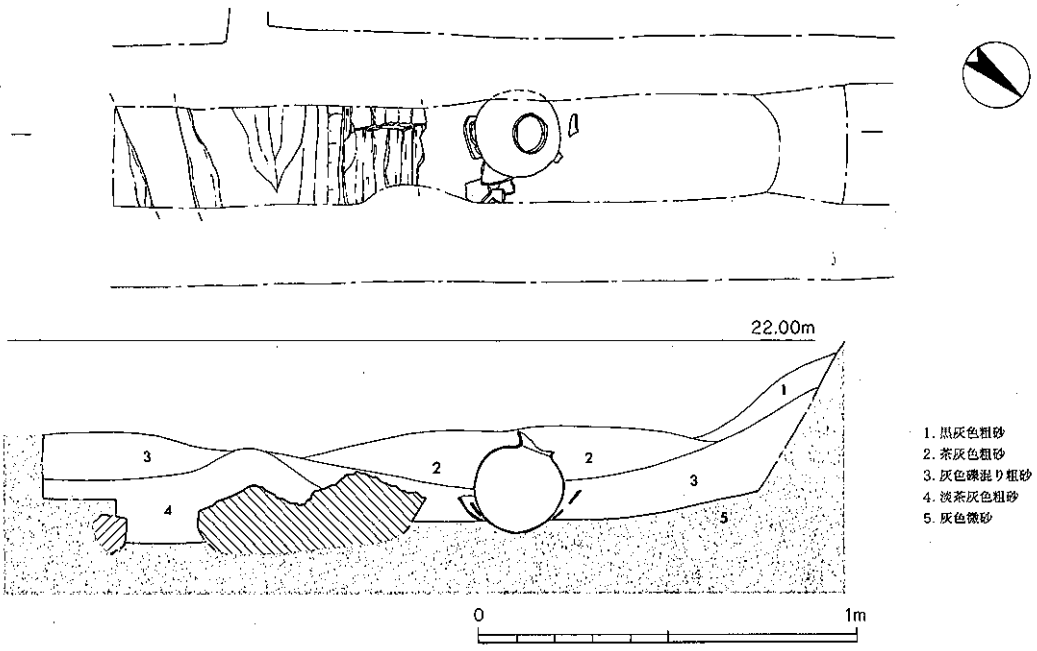


Fig.32　不明遺構SX234実測図（1/20）

2）上成土塁

水城土塁に関しては，詳細な地形測量図がなかったので，西門跡の発掘調査と並行して西門地区周辺の測量調査を実施した。それによると，これまで２段築成とみられていた土塁の博多側中段に平坦面が存在し，土塁北面は３段築成であること，中段の平坦面は切通しの左右で途切れていること。それに対応して土塁頂部幅が切通し側に向かって大きく広がっていることから，切通し箇所の上成土塁は，太宰府側にコ字形の張出し部を有していることなどが測量調査の結果明らかとなった。発掘調査の成果では，土塁頂部の拡幅はⅢ期門建物の改築に伴うものと考えられた。この測量調査の結果を踏まえ，①上成土塁の構築方法，②中段平坦面の状況，③土塁頂部の拡幅状況，④コ字形の張出し部は当初のものかを確認するため①についてはＤ調査区，②についてはＫ調査区，③についてはＤ・Ｋ調査区を設定し，確認調査を行った。

土塁は３段築成

Ｄ区土塁断割トレンチ（26次）

ＳＸ281（Fig.33・34・52，PL.29，巻頭PL.５）

当初の土塁頂部ラインとⅢ期門建物の修築土層及び中段平坦面との関係を把握するため切通し西側土塁の頂部平坦面に調査区を設定し，北・東・南の３方向に土層確認のトレンチを設け掘り下げた。また，北トレンチは土塁を半裁する格好で，基底部まで延長した。その結果，調査区北縁及び東・南トレンチで逆Ｌ字に走る築堤当初の土塁上場ラインを確認した。しかし，南トレンチでは，上場ラインの折れ曲がりを検出していないことから中段平坦面から切通し部にかけて逆Ｌ字形に埋めていることが判明した。なお，土塁上場のラインは，経塚を検出したＡトレンチでも確認している。

北トレンチでの修築積土の状況は，上位１/３ほどが赤褐色土と黄褐色砂質土の互層で，中位は赤褐色土とマサ土の互層で非常に細かい。下位は赤褐色土を主体に黄褐色砂質土・マサ土の互層を積んでいた。これらは，まさに版築土と呼べるくらい緻密で，唐鍬で掘っていても火花が出るほど硬く締まっていた。興味深いのは，壁にもたせかけた積み土の端部が上方に跳ね上がり，土層もやや厚めである。これは，壁と接する部分は突き固めがやり難いため厚さに違いが生じたものと考えられる。なお，壁面の傾斜角は下位が70°で，上位は60°を測り，上場から3.5m下（標高35.4m）で中段テラスに達する。Ｋ区中段テラスの標高は35.6mで，両者間は13mほどの距離を有するが，その間はほぼフラットと言うことになる。

修築積土

切通し部東土塁の西端部では軟質の茶褐色土（地山）が標高33.3m付近の高い位置にあり，路面との比高差が２mを有することから，土塁部分の築堤に際しては旧地形を最大限利用し，地山に積土を被覆し上成土塁を構築する。門が開削される部分は土質の硬い層まで掘り下げて地盤強化を図る工夫がなされていると言える。

また，壁面石垣ＳＡ115A西端の背面にトレンチを入れたところ，石垣の掘形を検出した。その部分の土層を観察すると，Fig.52右端部分に山形の土盛りが見られる。この部分は茶褐色土・灰色砂・灰黄色土を割合雑に盛っており，石垣と落ち込みとの間は黄灰色粘土と灰色粘土及び灰白色砂を互層に積んでいた。これを復原すると，旧地形を整形した後，土塁の核ともなる山形の土盛りを築き，石垣を並べる範囲の裾廻りをカットし石を据える。次に，石を堰板代わりに利用し，石と山形の土盛りとの間に土を水平に入れ，突き固める。石積みと土の突き固めとを交互に繰り返し，法面部を築いたものと推察される。

山形盛土

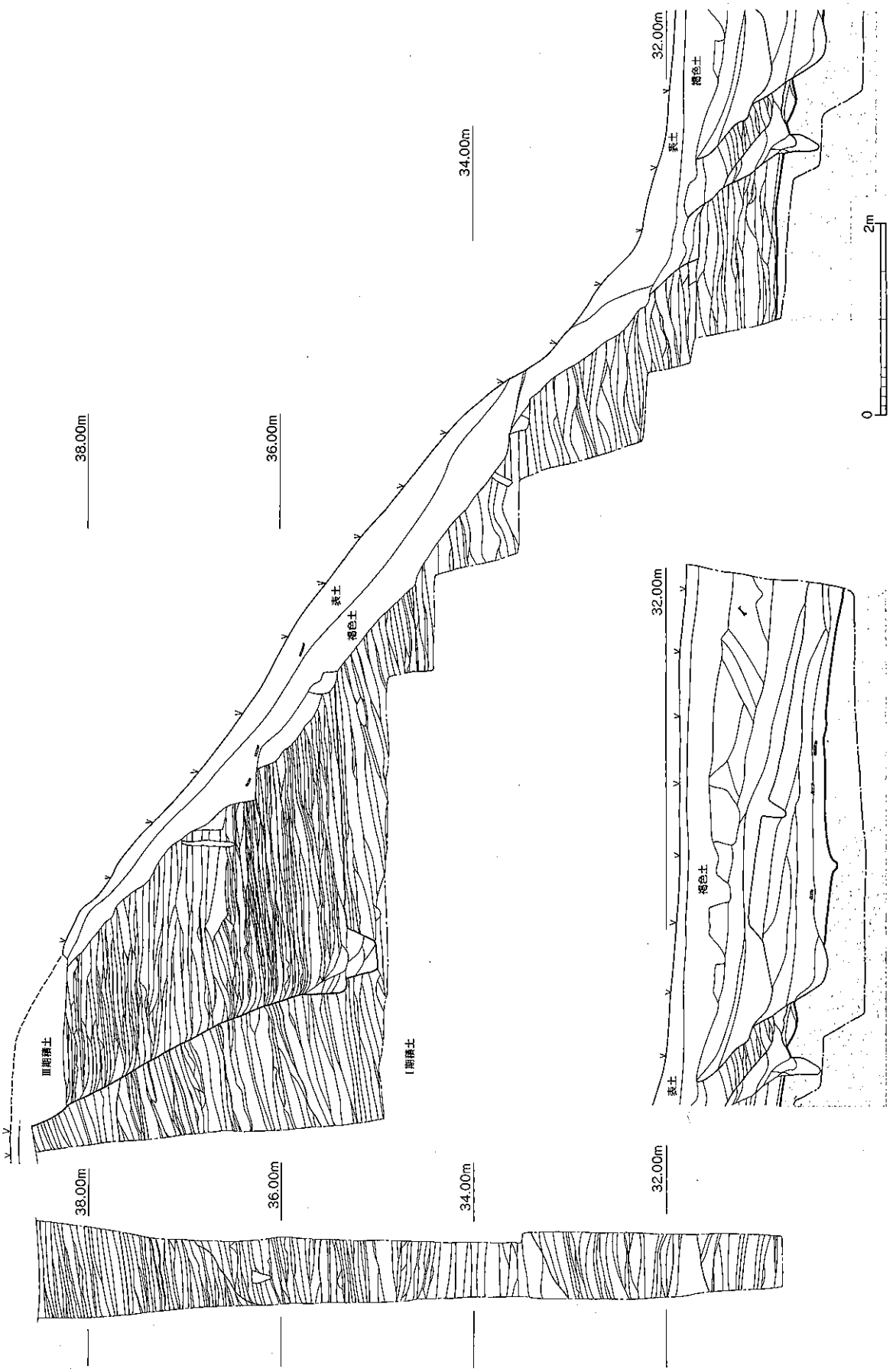


Fig.33　西土成土塁西門地区（26次D区）積土土層図（1/60）

西門切り通し西側積土（26次）（Fig.49，PL.38）

西門切り通し西側では，赤褐色土で構成されるⅢ期積土の下部にＳＢ110に関る柱穴が確認できる積土がある。標高32.4ｍに上面があり，大きく３つの単位に分れている。上部の厚さは50～60㎝で灰褐色砂，黄色砂からなり，単位は５～10㎝程度と細かい。所々拳大の礫を含んでいる。中部には，２層程度に分かれる灰色砂の厚い積土が40㎝程度あり，下部には灰色粘

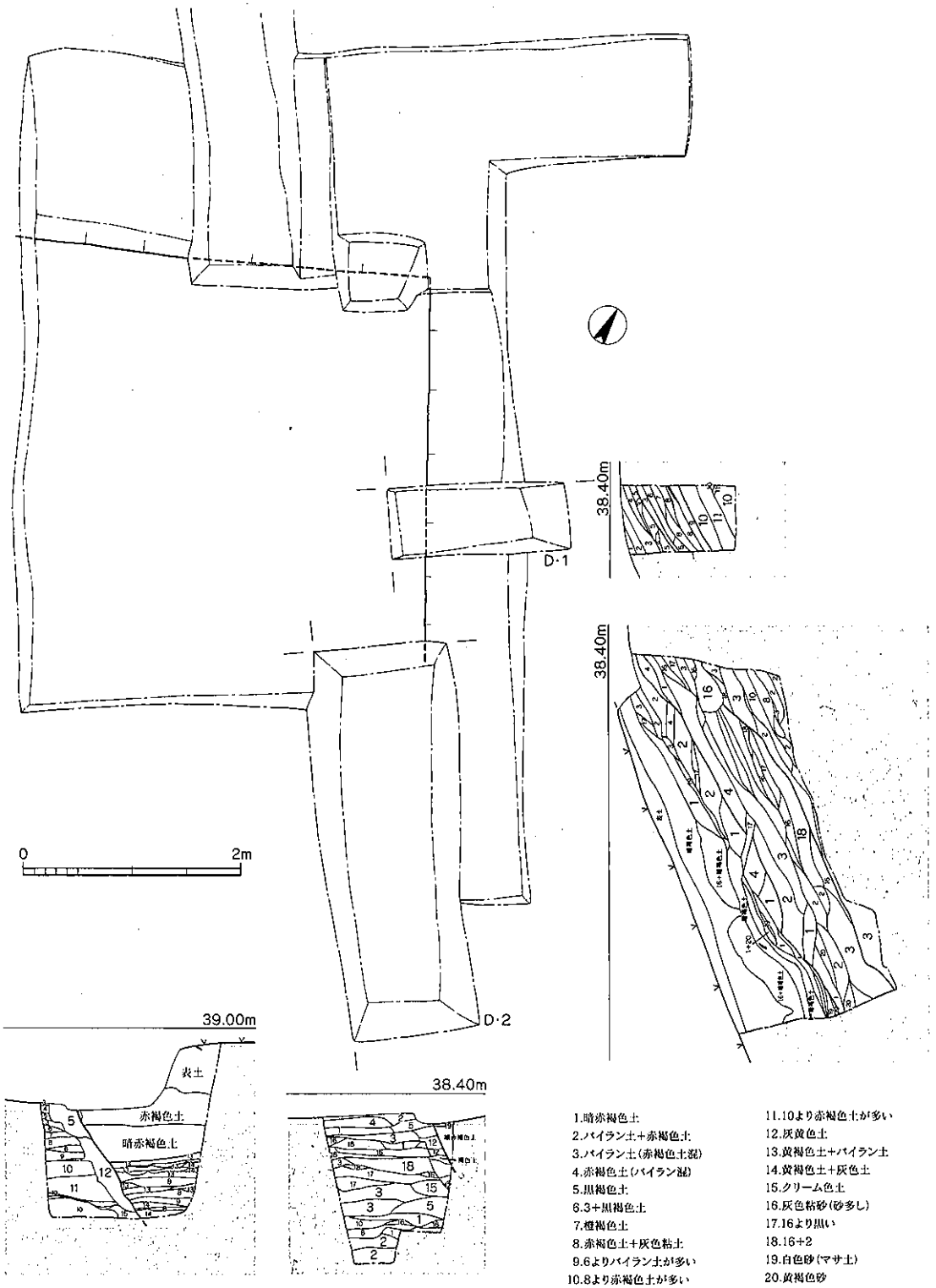


Fig.34　西上成土墨西門地区西側頂部（26次）トレンチ実測図（1/60）

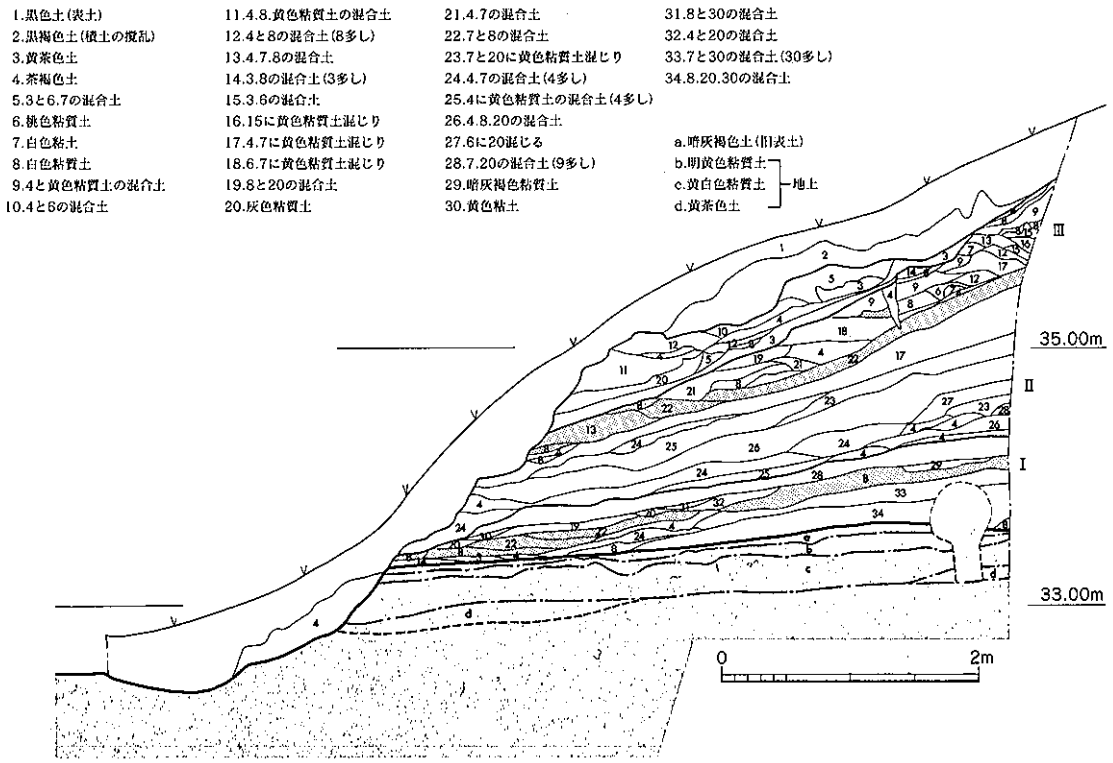


Fig.35　西上成土墓西門地区東側（33次）土墓積土土層図（1/60）

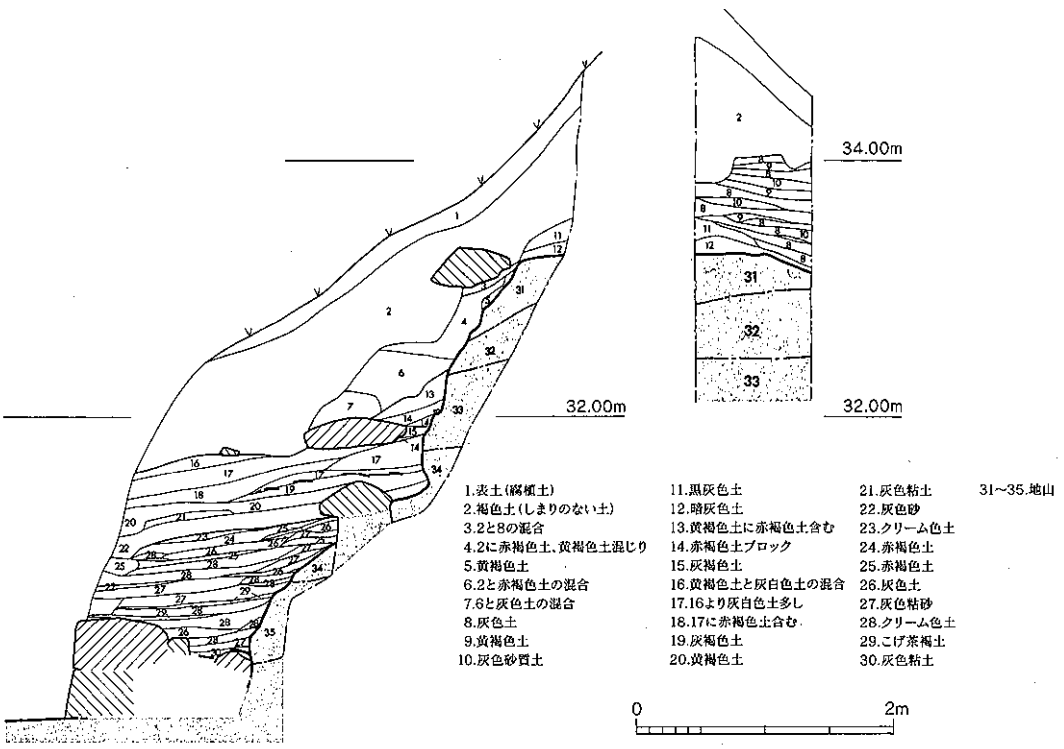


Fig.36　西上成土墓西門地区東側西端部（26次）土層図（1/60）

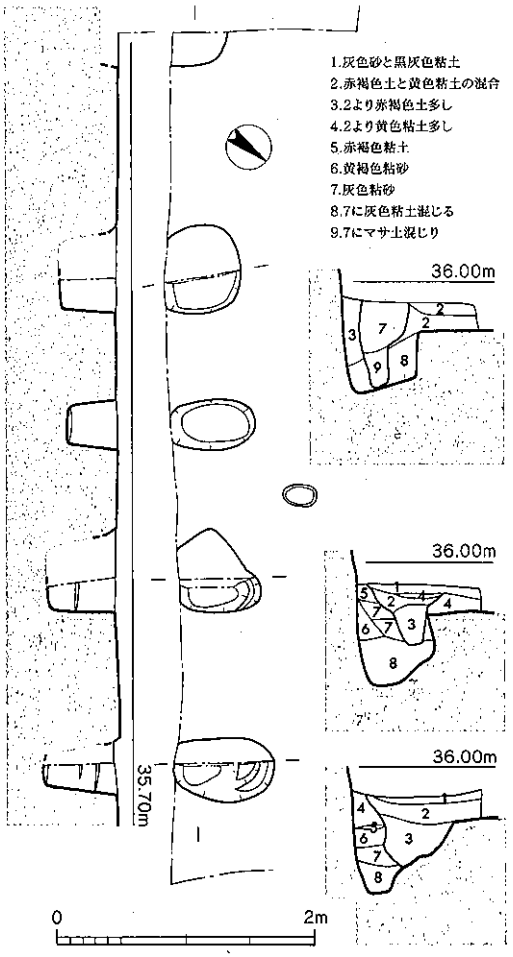


Fig.37　柱穴列SA128実測図（1/60）

質土の互層がみられ，８世紀代の土器が出土する通路の硬面がある。標高31.5mである。その下位は，暗灰色と黄色の混土があり，地山の赤褐色土となる。地山の標高は31.3～31.4mである。

なお，上部積土の灰褐色砂の下位では，黄褐色粘質土が大きく波打っている状況が断面観察から確認できた。平面的に検出したところ径10cm程度のクレータ状の窪みとなっており，突棒の痕跡と考えられる（PL.33）。

突棒痕跡

西門東側断割土層（26・33次）（Fig.35・36, PL.32）

西門跡切通し部後面東は，コ字形に張出しており，この張出し部が築堤当初のものかを確認するため屈曲部にトレンチを設定し，土層確認を行った（Fig.35）。土層は大きく３層に大別でき，Ⅰ層は白色粘土・黄色粘土・灰色粘質土を主体に積んでいる。Ⅱ層は茶色土を主体に積むが，Ⅰ層と比較して粗い積みであった。Ⅲ層は茶褐色土・白色粘土をブロック状に積んでおり，Ⅱ層との間には白色粘土を帯状に入れており，土塁への浸透水を背面に流す仕組みではないかとの佐賀大学林重徳教授の指摘を得ている。土層断面には修築積土はなく，築堤当初の積土であることが確認され，コ字形の張出も当初からのものと判明した。また，この切り通し東

白色粘土帯

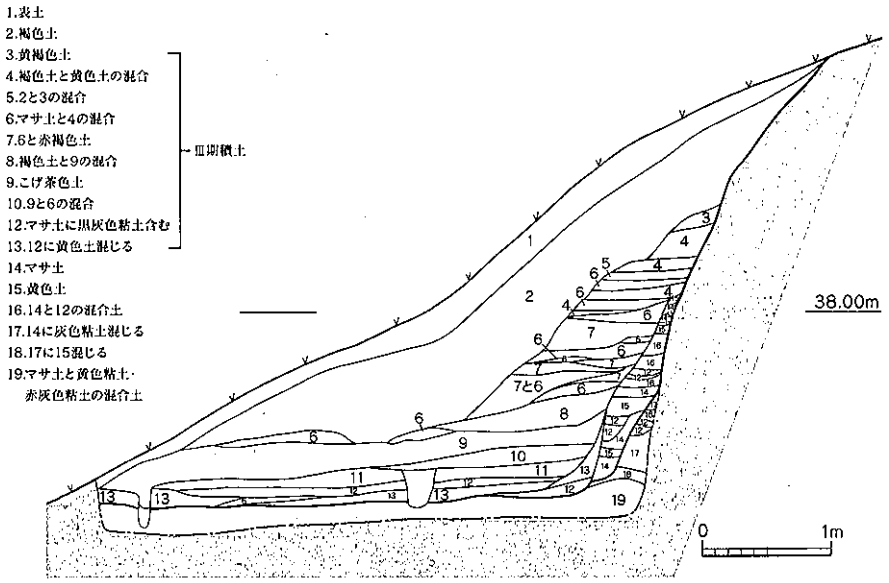


Fig.38　西上成土塁西門地区西側中段テラス（26次）東壁土層図（1/60）

側の前面では，旧地形を取り込んで土塁が構築されている（Fig.36）。阿蘇４火砕流堆積による台地の前面を成形して積土を行っている。

柱穴列

ＳＡ128（26次）（Fig.37・38，PL.33）

Ｋ区中段テラス土塁裾部で５個検出したが，西端の柱穴は埋土が他の柱穴に比して硬く締まっていたことから除外した。柱穴は長径0.6～0.8m，短径0.4～0.7mほどの長円形を呈し，平坦面からの深さは0.5m前後を測る。また，柱穴の間隔は1.2～1.4mとややばらつきが見られるが，土塁際で検出しており，堰板支柱の柱穴と考えられる。東側の柱穴２個は北側にテラスを有し，埋土も乱れていることから柱自体は抜かれているものと判断した。柱穴からの出土遺物はなかった。なお，柵はＡ・Ｄ・Ｋ区頂部及び中段テラスにおいても検出されていないが，存在したものと仮定すると中段テラスの縁辺に付設していたか。

堰板支柱の柱穴

西側丘陵取付部（Fig.42，PL.16）

土塁西端部の土塁本体が自然丘陵と接続する箇所は，現状で逆Ｌ字形に屈曲しており，取り付き状況を確認するために，38次Ｂ区として屈曲部にＡトレンチ，そのやや北側にＢトレンチを設定し，土層の堆積状況を観察した。

ＳＸ180（38次）（Fig.40，PL.31）

土層確認はＡ調査区断割りトレンチ１・２及びＢ調査区断割りトレンチで行ったが，断割りトレンチ２の壁面が崩壊したため断割りトレンチ１，Ｂ調査区断割りトレンチの堆積状況を図示する。Ａ区断割りトレンチ１の１～16及びＢ区断割りトレンチの１～23層は斜面堆積をなし，上方からの流入土で，それ以下が取付部本来の積土である。積土は黄褐色砂質土・茶褐色土・灰色粘土を主体とし，粗く積んでいた。▼印部分には積土の不整合が確認され，地滑りを起こしたことが窺われた。土塁本体寄りでは地山のマサ土を確認しており，地山を逆Ｌ字形に整形した後，上成土塁基部の積土を施したものと考えられる。Ｂ区断割りトレンチ上層から糸切り皿，トレンチ東端下層から丸底坏が出土している。

地滑り

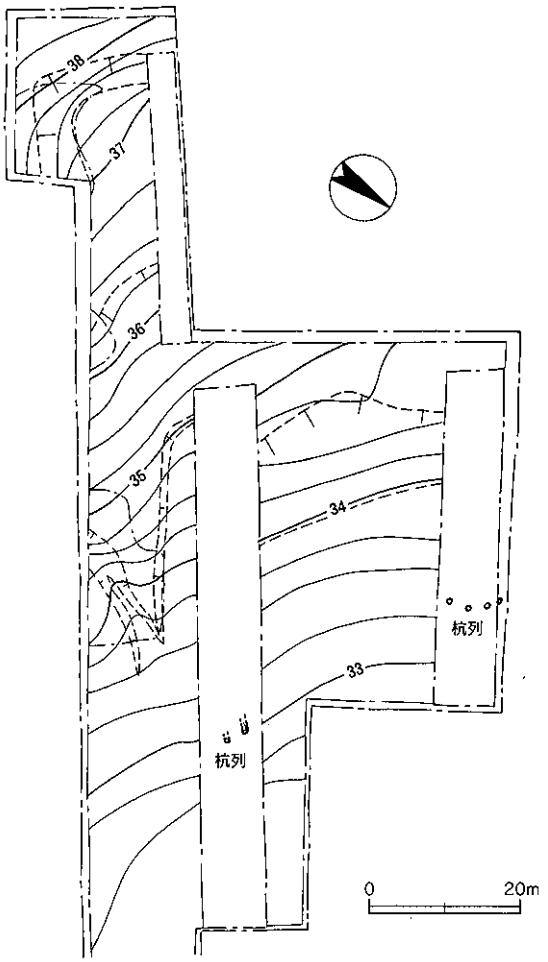


Fig.39　杭列SX181出土状況実測図（1/100）

杭　列

ＳＸ181（38次）（Fig.39，PL.31）

Ａ調査区断割りトレンチ１・２の最下部で検出した。トレンチ１では２本，ト

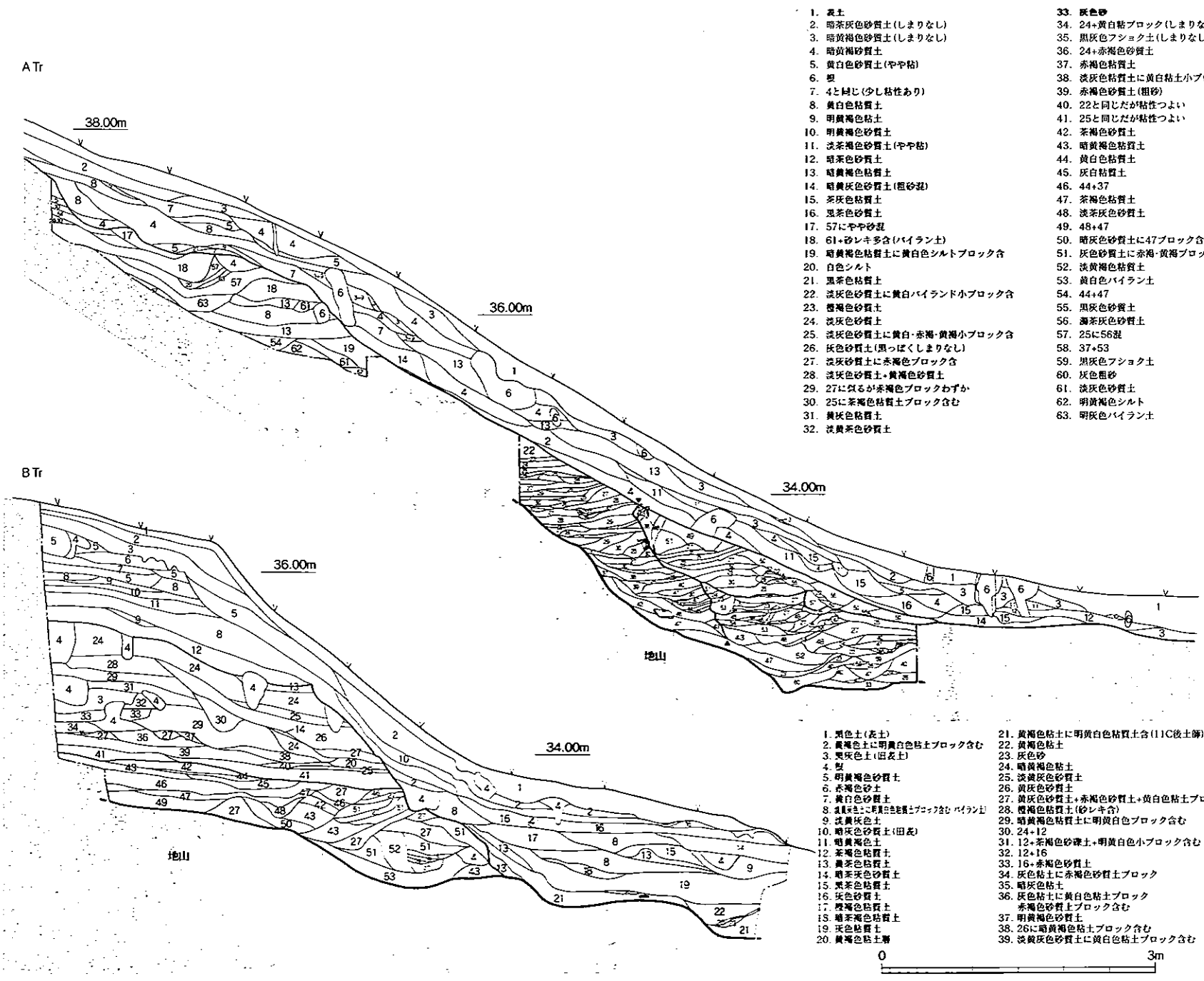


Fig.40 西土塁西端（38次B区）土塁土層図（1/60）

土留め用の杭　列

レンチ２では４本出土しており，接続部裾に約30cm間隔で弧状に打ち込んでいる。杭は平地側に倒れているが，本来，土留めとして土塁側に打ち込まれていたものが，土塁積土の滑りにより，平野側に傾いたものと思われる。

３）丘陵部

丘陵部の調査としては，水城に関連する施設－望楼・烽火等の存否を確認する目的で土塁東側（８次調査）と土塁西側（36次調査）及び災害復旧に伴い土塁西端部で行った37次調査がある。東側丘陵をＳＸ002，西側丘陵をＳＸ003とする。

東丘陵

ＳＸ002（Fig.41，PL.34）

８次調査は，環境整備事業に伴うもので，調査を行った第１地点は東門跡礎石から約40～60ｍ東側の丘陵突端部である。この箇所には上中下３段の平坦面があり，付近からは瓦が採集されており，この丘陵を上っていくと大野城跡水城口城門へと連続するため望楼等の施設が存在する可能性が高かった。上段と中段の平坦面にトレンチを設定して掘り下げたが，上段ではすぐさま地山が検出され，遺構・遺物の検出はなかった。中段においては，ピット群，土坑状の落込を検出したが，近世・近代の遺物が入っていた。調査の結果，この箇所においては，水城に関連する施設は何ら確認できなかった。

西丘陵

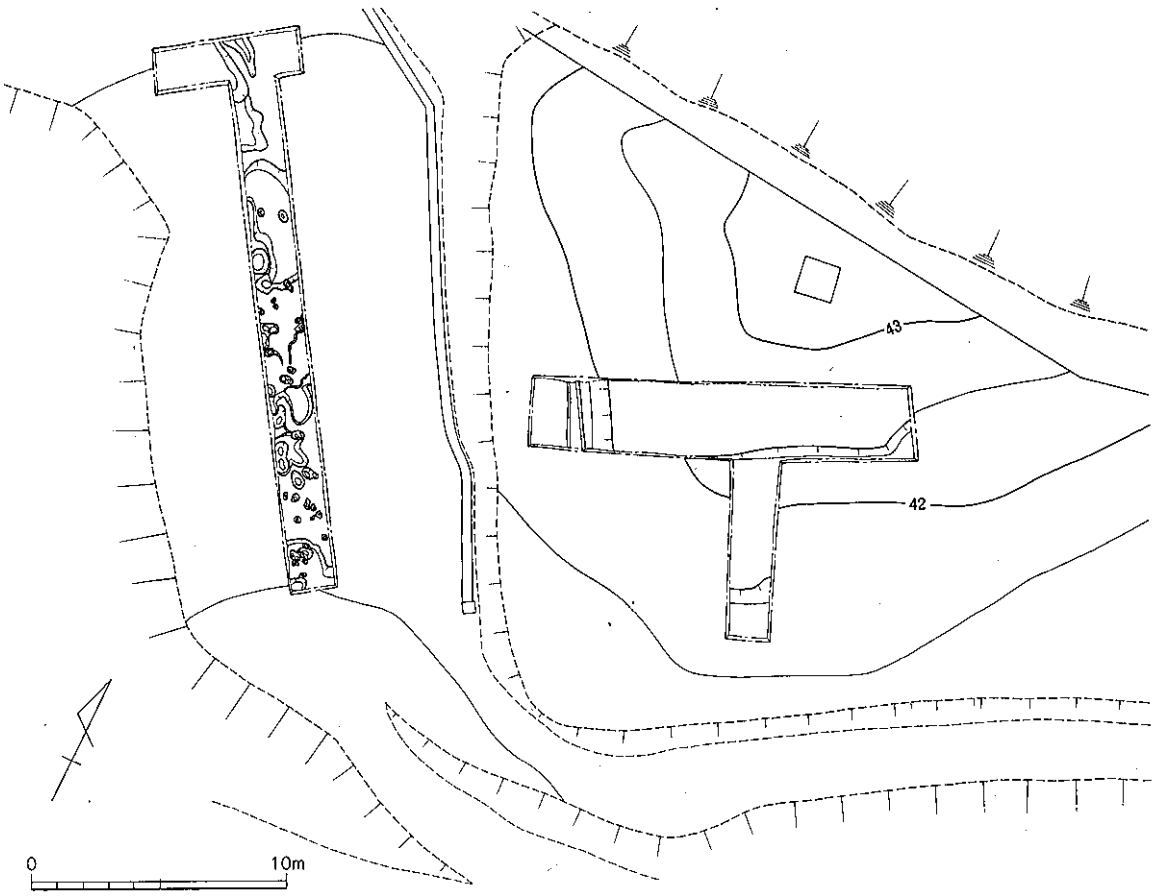


Fig.41　東丘陵部（８次１地点）地形図（1/300）

Fig.42　西上成土塁西端・西丘陵部地形図（1/600）

SX003 (Fig.42, PL.34)

36次調査は，計画調査に伴うもので，調査箇所は水城土塁が自然丘陵に接続する西端取付き部から100mほど西側の丘陵部にあたり，最高所で標高48.02mを測る。この箇所は，近辺で最も眺望のきく高台で，「矢倉」という小字が残っており，水城に関連する望楼施設の存在が予測されていた。丘陵東側の平坦面にA調査区，西側の丘陵鞍部にB調査区を設定し掘り下

「矢倉」の地名

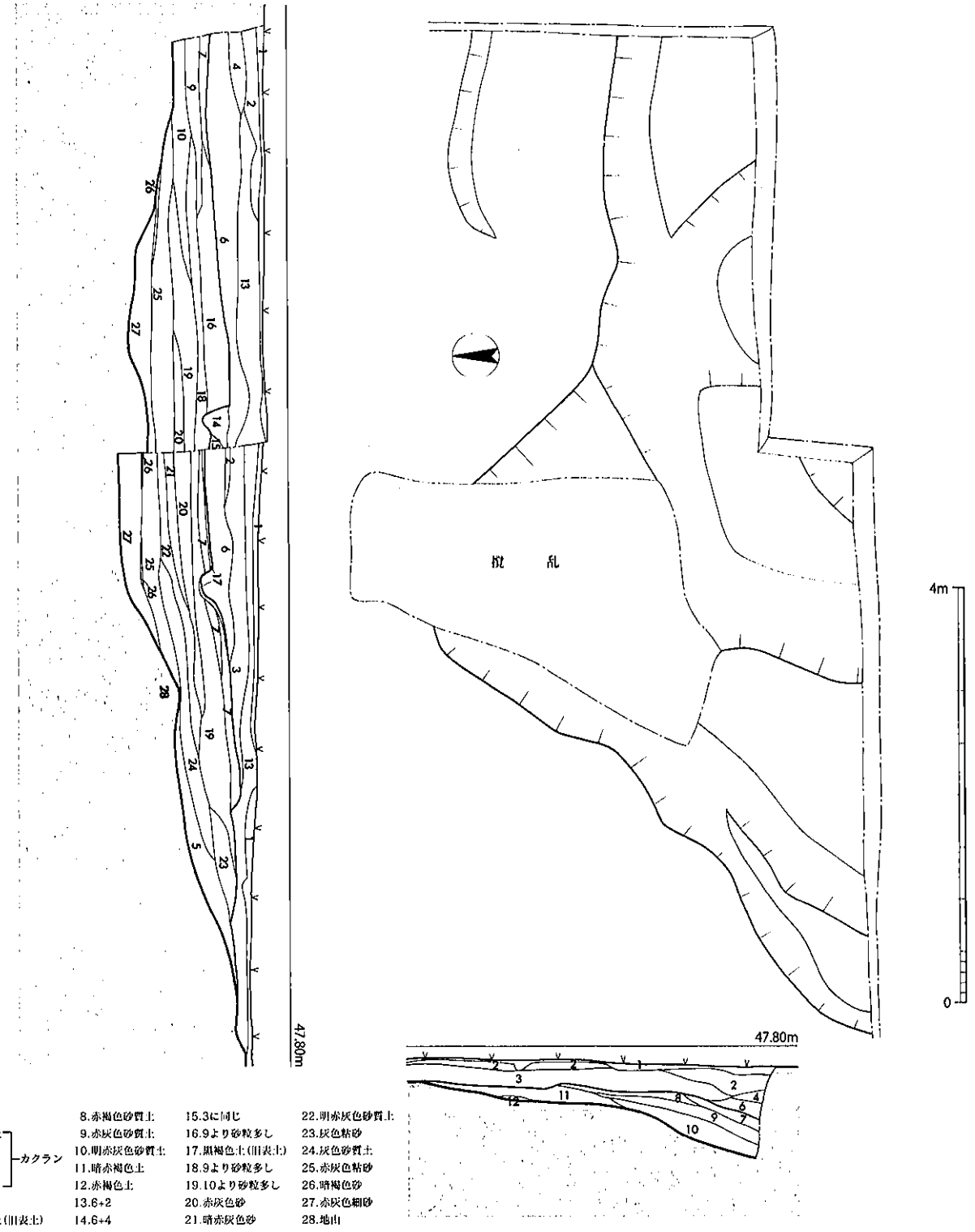


Fig.43　落ち込みSX176実測図（1/60）

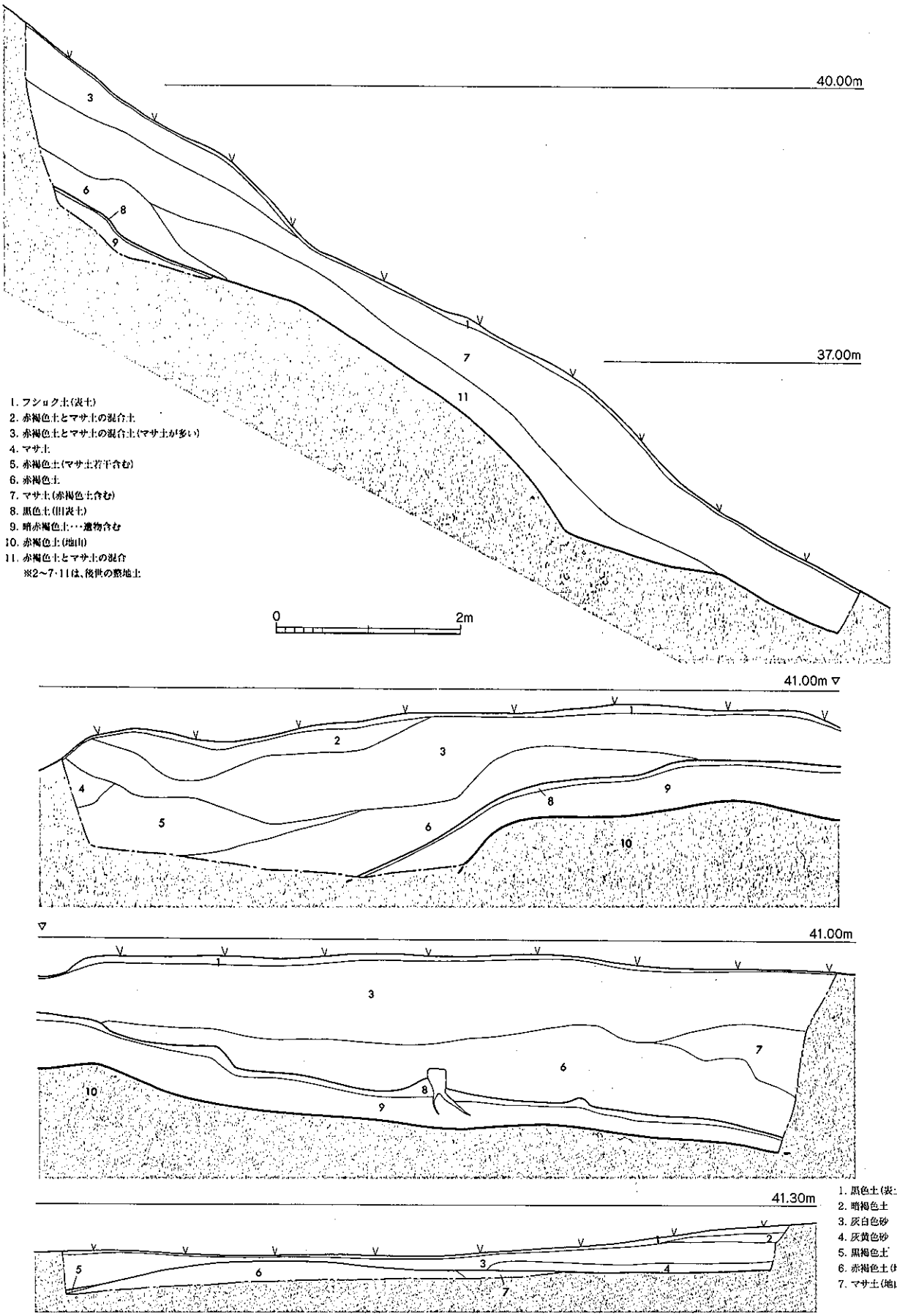


Fig.44　西上成土塁西端崩落箇所SX179土層図（1/60）

げを行った。調査の結果，A調査区では望楼とみられる掘立柱建物ＳＢ175と旧地形の落込ＳＸ176及び弥生時代の貯蔵穴ＳＫ174を検出した。B調査区では，弥生時代の円形住居跡ＳＩ177，土坑ＳＫ178を検出し，弥生時代においても集落として利用されていることが明らかとなった。

また，2003年７月19日未明に，太宰府市域を襲った集中豪雨は，河川の氾濫，大規模な土石流を引き起こし，大宰府史跡が被った被害も未曾有のものであったが，この時に水城跡土塁西端部（長さ15m，斜面幅15m）が崩壊した。37次調査は，土塁修復事業に伴うもので，水城土塁本体が自然丘陵にどの様に取付くかを確認した。

落　込

ＳＸ176（36次）（Fig.43，PL.15）

Aトレンチの西側で検出した旧地形の落込で，南西側に深くなっている。埋土は地山（赤褐色粘質土）が流失し，堆積したもので，北東側からの流入による斜面堆積をなしている。深さは調査区南西隅部で0.87m，西壁中央部で1.38mを測る。埋土下位から７世紀後半～８世紀前半の須恵器坏蓋が出土しており，掘立柱建物ＳＢ175の築造年代を考える上で重要なものと言えよう。

土塁取付き部

ＳＸ179（37次）（Fig.44，PL.15）

土塁西端部の崩壊箇所は，長さ52m×幅10mほどの平坦面となっているが，かつてこの平坦面には小屋が建てられており，この平坦面は小屋の造成によるものとみられていた。水城土塁の復旧工事に先立ち，どこまでが版築積土で，どこから自然丘陵が始まるかを確認するため，平坦面に長さ８m，幅２mのトレンチを設定した。また，崩壊部分については，法面の土層観察を主体とした。

土層の堆積状況は，上層から①表土，②赤褐色土とマサ土の混合土，③褐色土，④黒色土（旧表土），⑤暗赤褐色土（包含層），⑥赤褐色土（地山）で，旧表土上には薄い所で50cm，厚い所で180cm程の土砂が堆積していた。この，②～③層は全く締まりが無く，層の単位も厚く，水平堆積をなしていないことから水城築堤時の積土ではなく，後世（戦後頃か），小屋を建てるため丘陵斜面をカットし，その排出土砂を旧地形上に客土したものと考えられる。また，旧表土の④層下位にも版築土は認められず，崩壊した箇所は水城土塁本体に連続する自然丘陵であることが明らかとなった。

なお，今回調査した平坦面の上段にも畑として耕作されている長さ42m，幅20mほどの平坦地がある。この箇所は，住宅を建設するために削平したとのことであり，崩壊部分の調査結果から旧地形を復原すると畑部分は３mほど削平されたものと推測される（Fig.42）。

（3）門

水城には，土塁の東端側（東門）と西端側（西門）との二箇所に門建物が存在したことが門礎石，軒先瓦類の発見により，従来から知られていた。

1）門

a.東　門

水城土塁と旧国道３号線東側の旧道とが交差する地点に門礎石（Fig.45）が存在しており，この場所に東門が存在したと考えられている。しかしながら，東門側は旧国道によって大きく開削されているため，門遺構が良好な状態で遺存している可能性は低いものと思われる。

礎石（Fig.46，PL.39）　1は太宰府市大字国分字衣掛に存在する門礎石で，土塁の長軸と平行して位置する。石材は花崗岩で，長方形を呈し，長さ225cm，幅90cmを測る。柱座側が僅

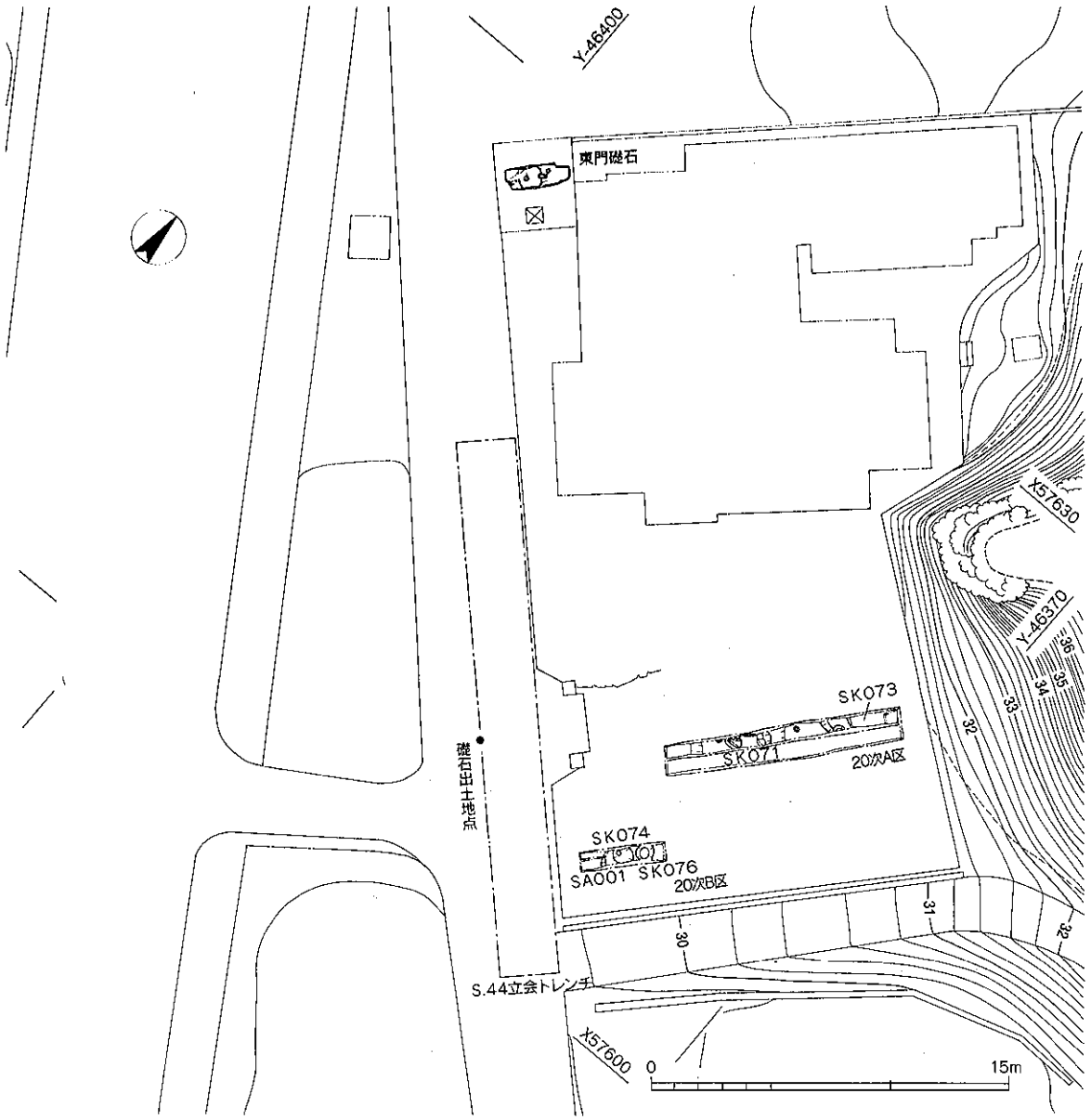


Fig.45　東門地区周辺（20次）地形図（1/300）

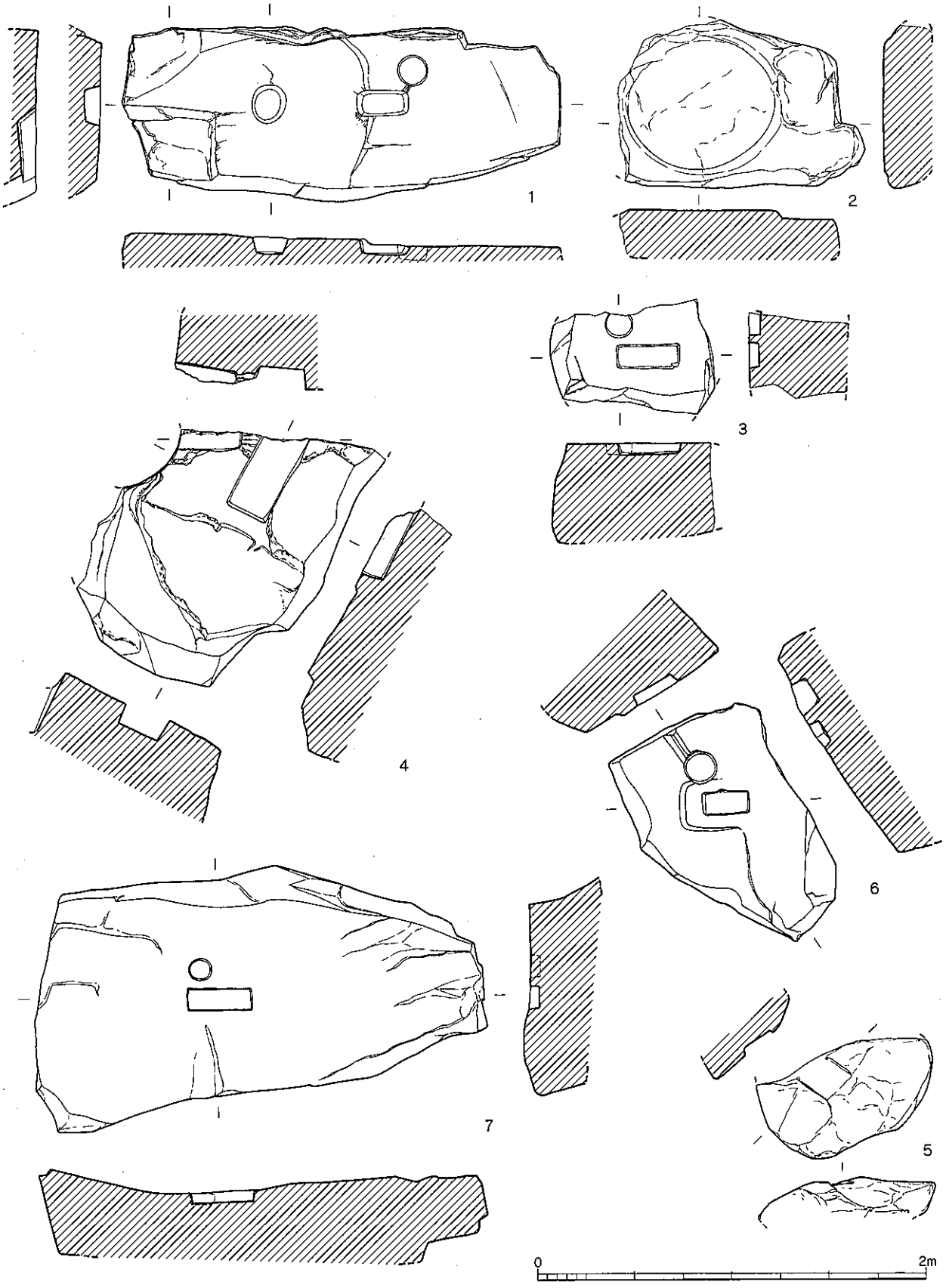


Fig.46　門礎石実測図（1/30）

かに高くなっており，その中央に径18cm，深さ９cmの枘穴を穿っている。枘穴から37cmの間隔を置いて，長さ26cm，幅13cm，深さ８cmの隅丸長方形の方立穴があり，その斜め上に径15cm，深さ８cmの門扉軸受穴が穿たれている。枘穴の中心から方立穴端まで46cmを測ることから直径90cmほどの柱が立つことになる。

また，土塁軸線との位置関係からみて，門扉軸受穴は枘穴と方立穴を結ぶ線より上側に位置していることから外濠側に開く外開きの門と言うことになるが，平成17年度に41次調査として太宰府市教育委員会が礎石の周辺を発掘した結果，礎石の下には攪乱土がみられ，原位置を保っていないことが明らかとなった。

３は東門から出土したとされる礎石であるが，大半が欠損し，方立穴と門扉軸受穴を残す程度である。方立穴は長方形を呈し，長さ32cm，幅12cm，深さ５cmで，軸受穴は径14cm，深さ６cmを測る。石材は花崗岩で，厚さは52cmと厚い。現在は西門側の民家の庭先に移動している。

建　物

ＳＢ010（Fig.45，PL. 5・35）

1969年11月27日，福岡市水道局による水道管埋設工事の際，円形柱座を有する礎石が発見された。東門礎石から南東に23mの位置で，これをＳＢ010とした。礎石はほぼ水平な状態で出土したが，土層図に見られる穴は掘形ではなく，礎石を落とし込ませるために掘った穴と判断された。この礎石に関わる建物については，調査範囲が狭小なこともあり，全く不明。礎石の下からは，「大国」銘文字瓦片が出土している。

礎石（Fig.46，PL.39）　２は重機による掘削時に発見されたため一部を欠損しているが，残存長134cm，幅92cm，厚さ25cmの扁平な花崗岩を用いている。当礎石は高さ２～４cm，上面径73cmの平滑な円形柱座を作り出すが，円形柱座を有する礎石は水城に関しては他に出土例がなく，この近辺に礎石建物が存在していたものであろう。精美な礎石の形状からすると８世紀前半以降の時期が考えられよう。

円形柱座を持つ礎石

b.西　門

水城土塁と太宰府市大字吉松の市道が交差する箇所は，土塁が途切れ，全体として幅７mほどの切通しとなっている。市道部分はさらに一段下がり，道路幅３mと車１台が通れる程度であり，東門側と比較して門遺構が遺存している可能性が高いとみられ，26次調査は西門遺構の検出を主眼として行った。

門建物

調査の結果，３時期の門遺構を検出した。水城築堤当初の掘立柱形式門建物をＳＢ120Ａ，Ⅱ期の瓦葺礎石門建物をＳＢ120Ｂ，Ⅲ期の楼門形式の礎石建物をＳＢ110として報告する。

３時期の門建物が存在

ＳＢ120Ａ（26次）（Fig.48・50，PL.37，巻頭PL. 3）

切通し部西側土塁壁面石垣ＳＡ115Ａの屈折部から4.5m南側の石垣際で径0.5mの空洞（柱痕跡）が現れ，これを手がかりに柱掘形を２個検出した。西側掘形は東辺長1.9m，石垣際で2.25m，深さ1.35mを測るが，掘形の西半部は石垣の下に隠れている。掘形の埋土は茶褐色土を10cmほどの厚さで版築状に突き固めており，埋土下位から柱根下部にかけては白色粘土（厚さ40cm）を入れていた。掘形を断ち割ったところ，最下部に径52cmの柱根（杉材）が高さ25

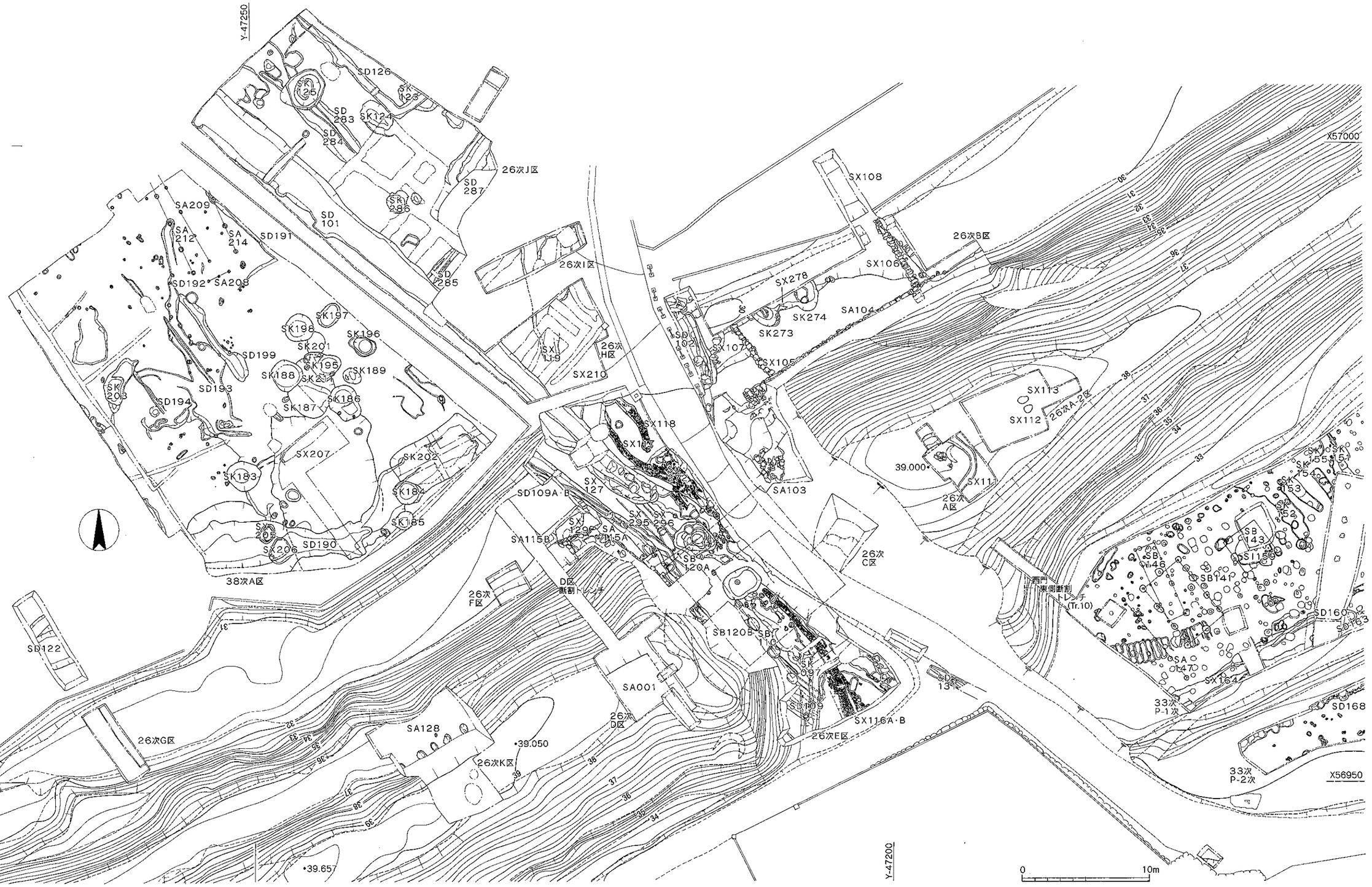


Fig.47　西門地区地形図（1/300）

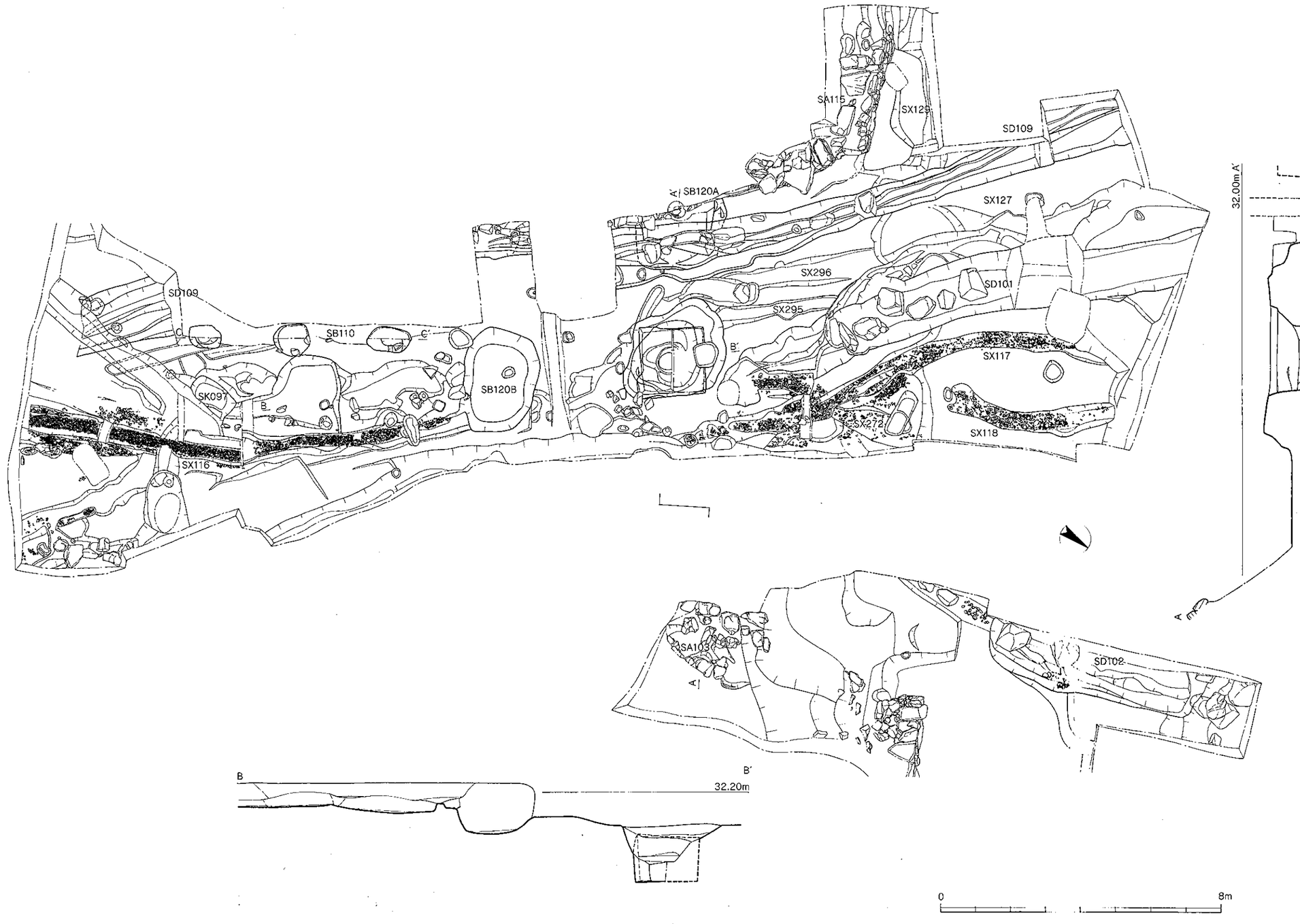


Fig.48　西門地区門建物SB110・120A・B実測図（1/120）

cmほど遺存していた。また，空洞部分上部にある２個の石は，ＳＡ115Ａの石が柱痕内に落ち込んだものである。なお，当掘形はＳＤ109Ａ・Ｂに切られている。

東側掘形は検出時点での上面形が3.4mほどの楕円形を呈し，中にはⅢ期積土が入っていたが，それを取り除くと北辺長1.88m，東辺長1.88mの正方形の掘形が現れた。検出面からの深さは1.3mを測る。掘形を断ち割ったところ，柱の抜取り穴が確認され，穴の下場が径48cmの円形を呈することから柱の圧痕を留めているものとみられる。柱根の心から抜取り穴の中心までの距離は4.32mを測る。

この門遺構が四脚門形式をなすとの仮定のもとに南半部及び切通し部東側土塁の壁面石垣ＳＡ103際で詳細に観察を行った。Ｅ３区においては硬化面を除去し，黄灰色の地山まで掘り下げたが，当建物に関連する柱掘形は検出できなかった。また，切通し部西側土塁の中央においてⅢ期建物整地層を断ち割って確認したが，掘形は存在しなかった。仮に，柱間が３間で，中央に門扉が付くとすると柱間全体の長さは12.96mとなり，壁面石垣ＳＡ103東端部に柱掘形が存在する必要がでてくる。実際，その箇所に掘形は存在するが，掘形下場のレベルが31.15m，ＳＢ120Ａ西掘形の上端レベルが30.98mで，この掘形はⅡ期建物に伴う掘形であることから間口３間は否定される。以上のことから，当門建物は間口１間と考えられ，構造的には門柱に横木を渡し，扉を付けただけの冠木門的な簡易な造りの門が考えられるが，間口２間である可能性は秘めているものの，柱掘形が存在する箇所は市道部分であるため確認できていない。門建物基壇自体は地山削り出しによるものであるが，地覆石・基壇積土等全く遺存しておらず，不明。なお，土塁における門建物の位置は，中段テラスの中央部付近にあたる。

冠木門的な簡易な造り

ＳＢ120Ｂ（26次）（Fig.48）

前述した如く，ＳＢ120Ａ東側掘形の上面には長径3.4m，短径2.8m，深さ0.3mの浅い楕円形土坑があり，Ⅰ期掘形と重複している。また，ＳＤ109ＢがＳＢ120Ａ西側掘形と切合う箇所の東壁は，丸く抉れ土坑状を呈し，その中には50cm大の扁平な石と30cm大の石が２個据えられ，締まりのある黄白色粘質土を入れていた。かつて，西門の切通し部から門礎石が発見されていること，切通し部の土塁北側斜面には鴻臚館式の軒瓦が散布していることを考えると，８世紀前半代において瓦葺の礎石建物が存在していたことは確実であり，先の土坑状の落込を礎石掘形とみなすことが可能である。

その様な視点で遺構図を再検討すると，切通し部中央に2.12×2.96mの東西に長い円形土坑が存在することに気づく。この土坑の埋土は汚れた黒色土であり，近現代の遺物が入っていたことから攪乱坑と考えていたが，規模・レベル的には北側の楕円形土坑と等しい。また，その3.4m南東側にも同じく攪乱坑とした隅丸長方形の土坑がある。これらを総合して考えると，中央の楕円形土坑が本柱を据えた礎石の抜取り穴で，南東側の隅丸長方形土坑が控柱を据えた礎石の抜取り穴とみられ，ＳＢ120Ｂは瓦葺の礎石建物となり，門の形式としては八脚門と推察される。なお，建物規模に関しては不確定要素が多いものの，南北は２間で10m，東西は石垣間に納まることから11mほどで，壁面石垣ＳＡ103の１m東側で当建物に伴うとみられる掘形状の落込を検出しており，三間一戸の八脚門が想定される。

Ⅱ期は瓦葺八脚門

当建物も地覆石・基壇積土は遺存しておらず，基壇に関しては全く不明。なお，土塁における門建物の位置は，築堤当初の土塁頂部北縁に大棟が位置する格好となる。

ＳＢ110（26次）（Fig.49，PL.38）

切通し部西側土塁の中央部裾で掘形を３個検出した。掘形１は長軸0.9m，短軸0.65m，深さ0.8m，掘形２は長軸1.03m，短軸0.92＋am，深さ0.56m，掘形３は長軸1.26m，短軸0.7＋αm，深さ0.68mで，掘形１－２間は2.5m，掘形２－３間は2.7mの間隔を有する。掘形１はやや小振りで，間隔も短いことから支柱とすると掘形２が控柱，掘形３が本柱とみられ

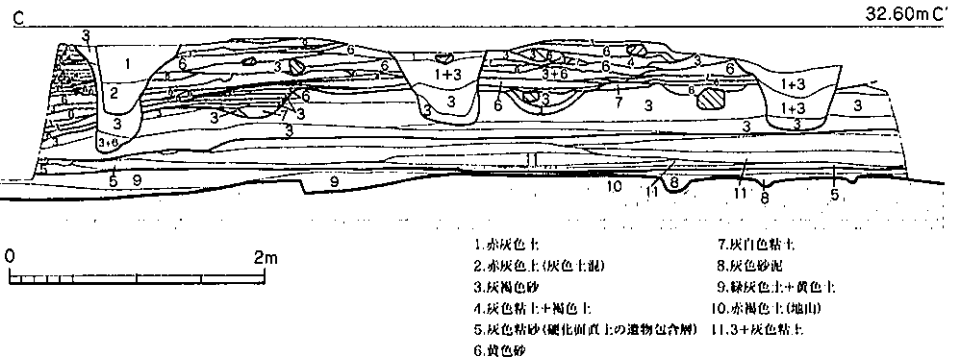


Fig.49　門建物SB110土層図（1/60）

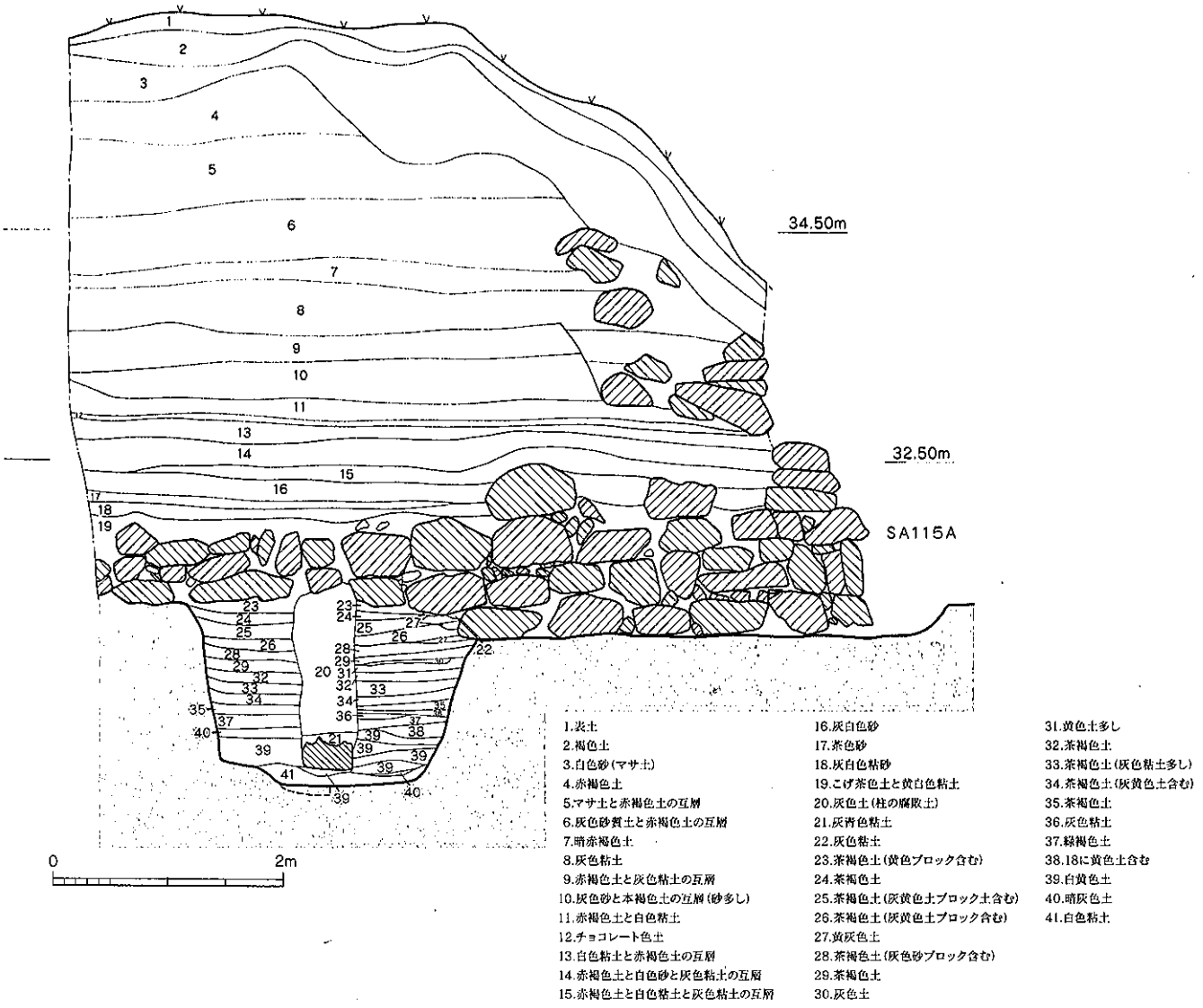


Fig.50　石垣SA115A・B，門建物SB120柱掘形土層図（1/60）

る。門建物の幅は壁面石垣ＳＡ103よりは広がらない（掘形列から石垣までの平行距離は約7.6m）ことから一間一戸とみられ，支柱までを含めた長さは10.4mで，幅は柱間２間分の5.4mに復原した。また，土塁頂部の表土中には平安期の軒先瓦，丸･平瓦が多量に存在することから，屋根は土塁よりも高い位置にあったと想定され，当建物は二階建ての門（楼門）と考えるに至った。 Ⅲ期は楼門

当建物の築造に際しては，（2）土塁　2)上成土塁の項目でもふれたが，切通し部の大規模な改修を行っている。土塁基部に石列ＳＡ104を埋設し，中段テラスから切通し部壁面にかけての長さ25m余りに渡り┐┌形に埋め，土塁頂部を拡幅している点である。これは，建物構造に関連し，楼門の回縁を介することによって切通し部東西の土塁を繋ぎ通路とし，兵士の往来を可能にするための措置とみられる。なお，Ⅰ期建物検出面からⅢ期掘形検出面までは約1.5mの比高差があり，Ⅲ期建物基壇は路面から２m近く上がることとなり，道路は楼門基壇によって完全に寸断される格好となる。

築造時期に関しては，切通し部西側土塁の修築土中から８世紀中頃の須恵器有高台の坏が出土しており，それ以降の築造と言えるが，土塁頂部に存在する平安期の瓦類が当建物に伴うとすれば９世紀代の築造と想定される。しかし，明確な築造及び終焉の時期に関しては明らかではなく，掘形の形態は掘立柱建物状であり，この点に関しても疑問を残す結果となった。

礎石（Fig.46，PL.39）　西門からは３種類の礎石が発見されている。４は円形柱刳込を有する礎石であるが，門扉軸受穴は欠損する。残存長146cm，幅113cmで，刳込から復原した柱径は58cmと推測される。方立穴は長方形を呈し，長さ31cm，残存幅10cm，深さ７cmを測る。また，礎石上面中央には残存長48cm，幅23cm，深さ10cmを測る長方形の穴を穿っており，これを方立穴とみるならば礎石形式の門礎に作り替えたことになる。５は切通し部南西側にある民家の石垣に転用されている礎石で，大半を欠損し，方立穴が見られる程度である。残存長57cm，幅79cm，厚さ17cmを測る。方立穴は長方形を呈し，残存長21cm，幅17cm，深さ3.5cmを測る。６も西門から発見されたと伝えられる礎石で，大半を欠損し，方立穴と門扉軸受穴を残す程度である。方立穴は長方形を呈し，長さ24cm，幅12cm，深さ６cmで，軸受穴は径16cm，深さ９cmを測る。また，方立穴の周囲は周りより３cm程高く，方立の座面と考えられ，20×40cmの方立が復原される。７も西門から掘り出されたとされる礎石であるが，現在は西門切通し部南東側の基底部に安置されている。完形品で，長さ235cm，先端幅44cm，基部幅122cm，基部の厚さ44cmを測る。柱座は造り出されていないが，方立穴の右側には径70cmの柱が乗っても十分なスペースがある。方立穴は長方形を呈し，長さ34cm，幅11cm，深さ６cmで，軸受穴は径11cm，深さ６cmを測る。石材は何れも花崗岩である。

これら礎石と門建物との関係であるが，Ⅰ期門建物ＳＢ120Ａは掘建柱形式であることから礎石４が伴うと考えられる。Ⅱ期門建物ＳＢ120Ｂは礎石形式と考えられるが，６・７何れの門礎石が伴うかは明らかではないが，仮に礎石７が攪乱坑とした掘形に収まっていたとしても十分な坑の大きさである。

2）石　垣・石　列

石　垣

ＳＡ103（26次）（Fig.51，PL.40）

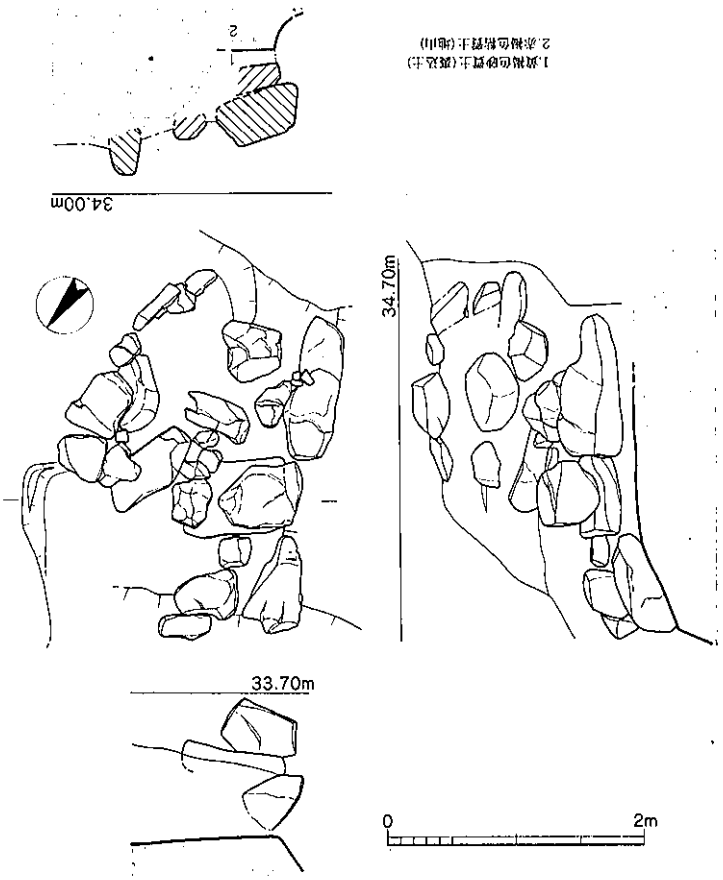


Fig.51　石垣SA103実測図（1/60）

Ｂトレンチ南端で検出した石垣で，標高33.0ｍの高さにあり，レベル的にＳＡ115Ｂと対をなし，Ⅲ期門建物に伴う壁面石垣と考えられる。長さ60～110㎝の割合大きめな花崗岩切石を積んでおり，長さ５ｍの３列，高さ1.3ｍの２段分が遺存する。

ＳＡ115Ａ（26次）
(Fig.50・53，PL.36)

Ⅲ期門建物ＳＢ110に伴う整地層の下部から検出した築堤当初の石垣である。切通し部西土塁壁面を覆う石垣で，Ⅰ期門建物ＳＢ120Ａ西側掘形の西半分に乗っかり，門柱の西側半分は石垣の中に隠れ，東側半分が露出する格好となる。石積みは堅い地山面を露出させ，大きいもので40×70㎝前後，小さいもので20×30㎝前後の花崗岩割石を水平を意識して積んではいるが，石と石との隙間を小石で充填しており，長方形切石を整然と積み上げた神籠石の水門に見られる石積みと比較すると極めて雑であり，水城の場合，裏込め石はみられないものの近世城郭の野面積み石垣に近い印象を受ける。石積みは北隅部で６段，その南側で３段，土塁中央部では石が抜かれ，掘形を確認したに留まる。石垣本来の高さがどこまであったかは，Ⅲ期門建物築造の際に壊され定かではないが，石垣の機能が切通し法面の崩壊防止にあったとするならば，切通し法面全体を覆っていたと考えたい。

ＳＡ115Ｂ（26次）(Fig.53，PL.36)

ＳＡ115Ａのやや上部には，Ⅲ期建物整地層中に積まれた石積があり，これを115Ｂとした。石積は現状で３段遺存するが，ＳＡ115Ａの基底部からは1.8ｍ上位にあり（標高32.8ｍ），レベル的にはⅢ期門建物ＳＢ110基壇と合う高さである。

ＳＡ115Ｃ（26次）(Fig.53，PL.36)

ＳＡ115Ａを埋めた後，その前面に築いている。40～60㎝程の比較的小振りの花崗岩割石を２～３段平積みしており，長さ3.4ｍ分遺存する。積石の表面が焼けているものがあり，ある時期まで露出していた可能性がある。何れの時期か不明であるが，土塁の修復に伴うものであろう。

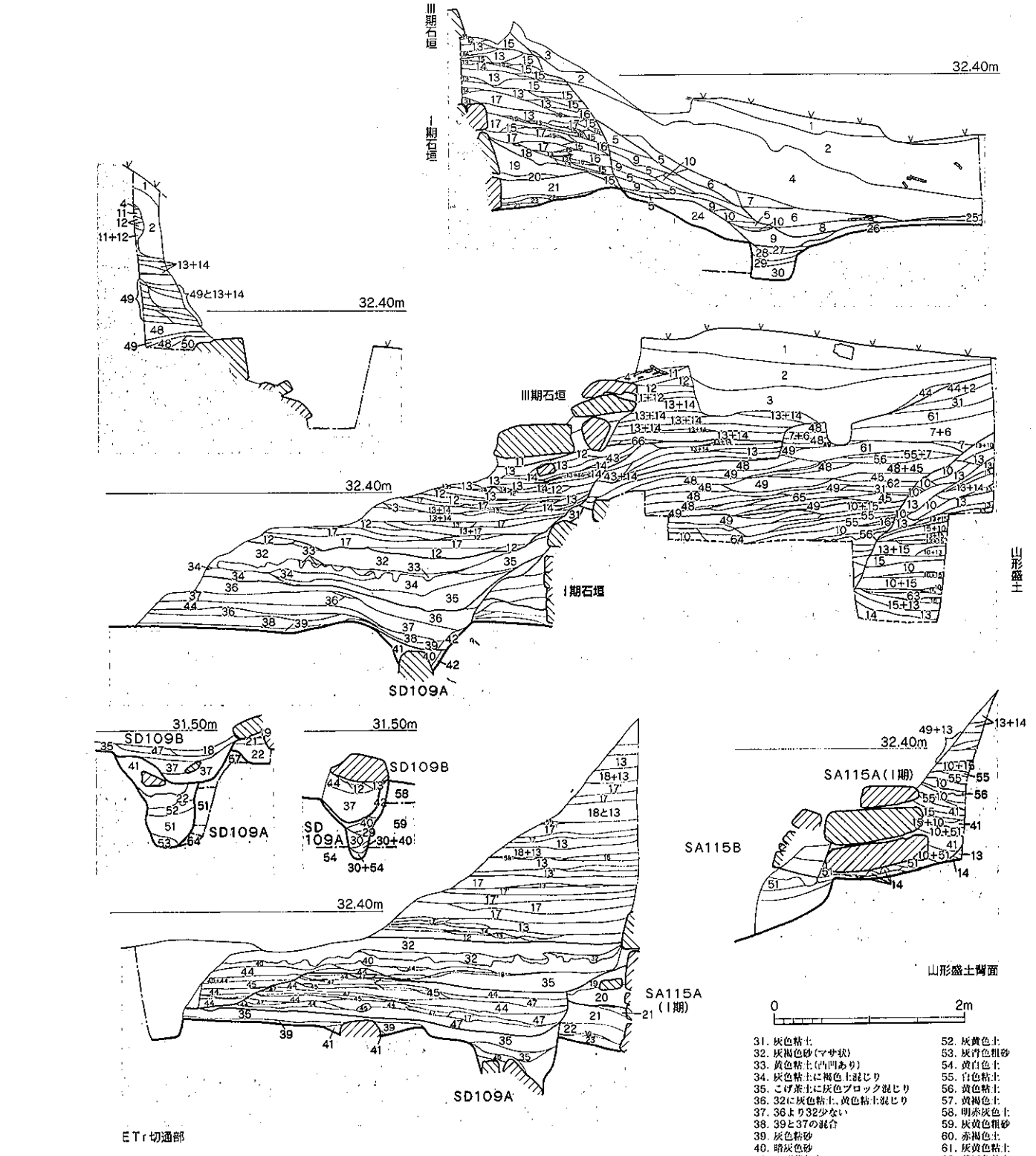


Fig.52　石垣SA115A・B，溝SD109土層図（1/60）

石　列

ＳＡ104（26次）（Fig.54，PL.40）

切通し部東側土塁の博多側基底部で検出した。東側土塁西隅部から土塁線と平行して土塁裾最下部に埋設される。当石列はⅢ期門建物ＳＢ110に伴う整地層で覆われており，整地層の基礎工事的なものと解釈される。石積みは40～100cm大の花崗岩割石を長さ17.4mに渡り平積

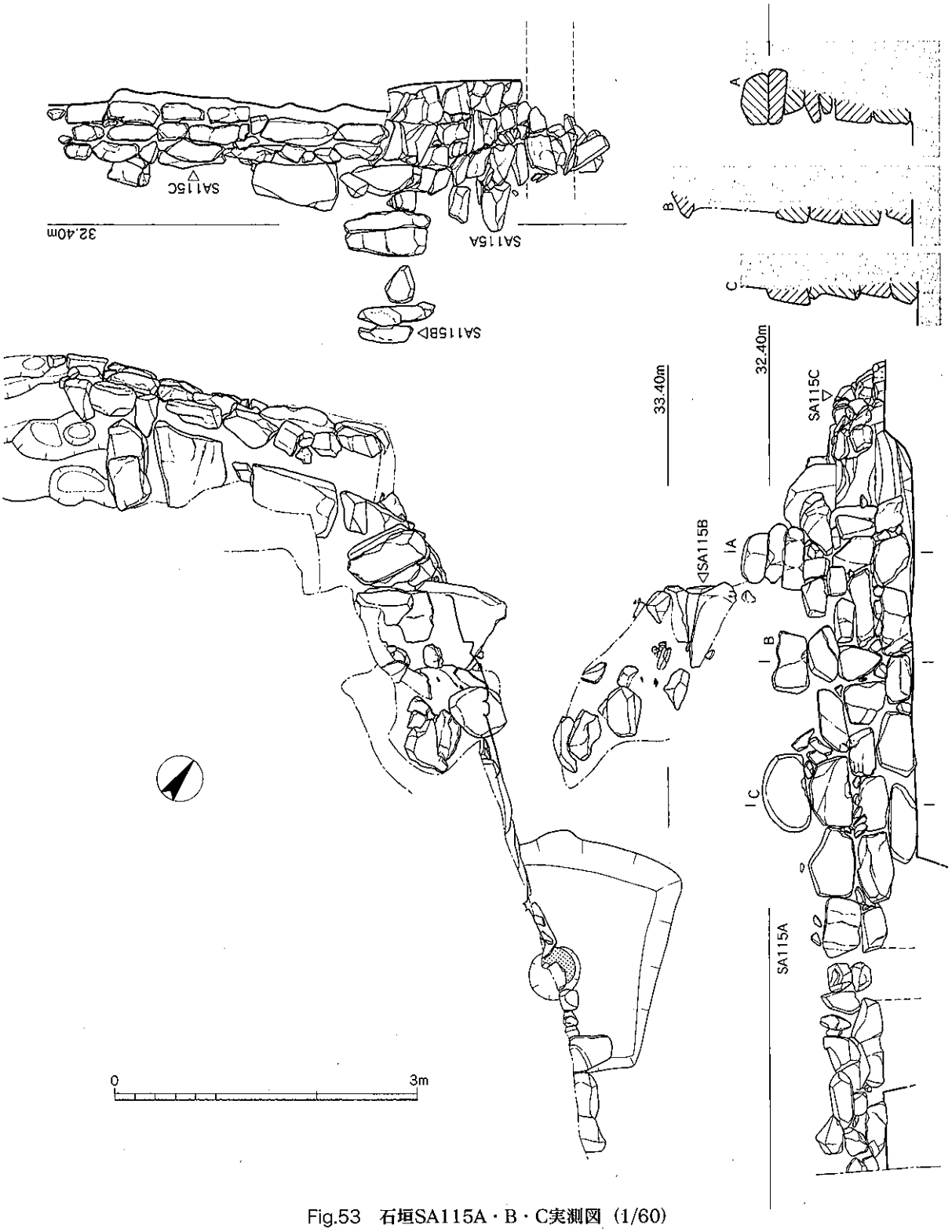


Fig.53　石垣SA115A・B・C実測図（1/60）

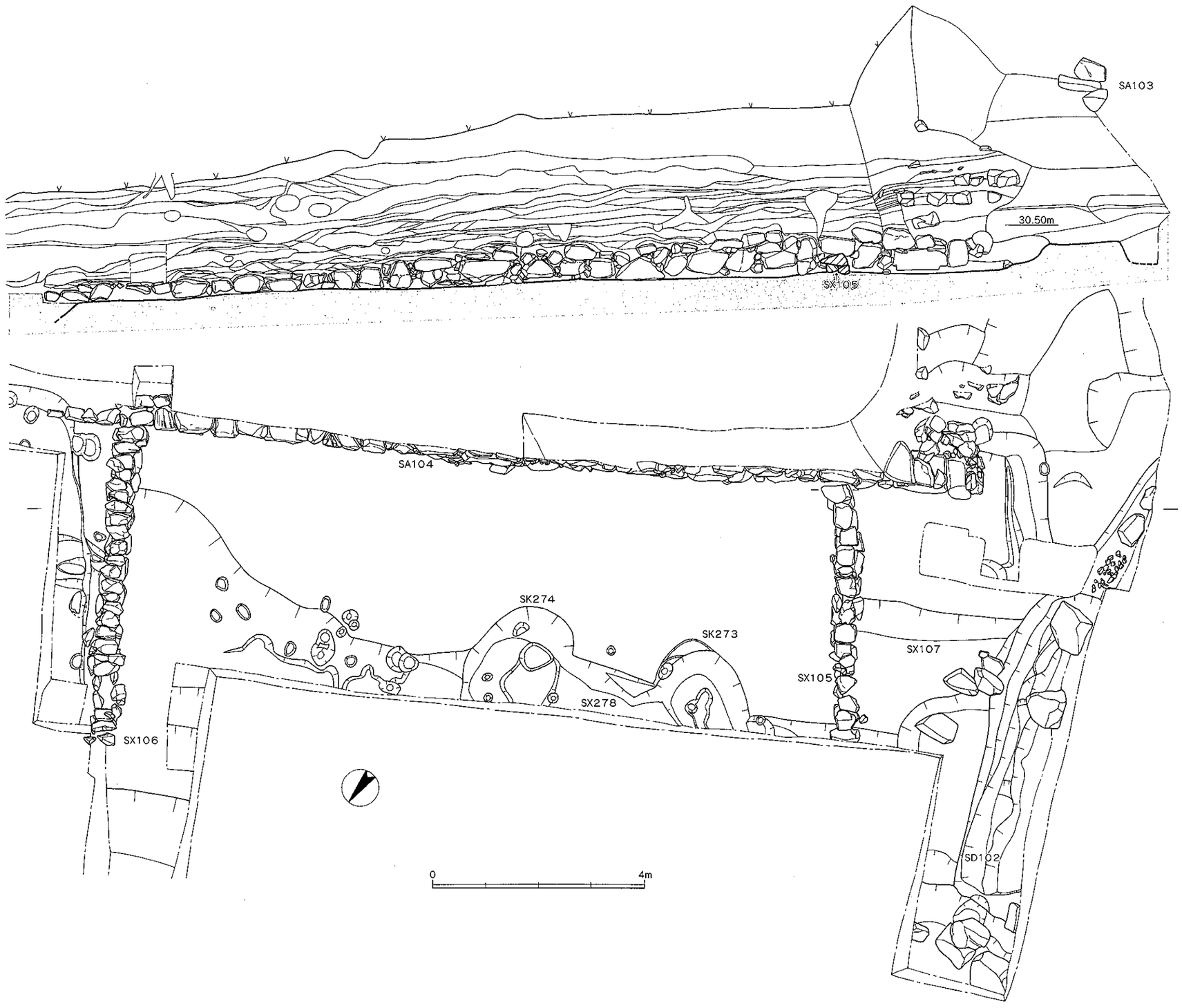


Fig.54　石列SA104実測図（1/80）

みしており，西端部で２～３段，東端部では１段を数える。石積みの状況は粗雑で，基部に大きめの石を据え，石の隙間を小石で充填している。石列のレベルは西端部が29.7m，東端部は29.0mで，両端部では70cmの比高差を有するが，地形の傾斜によるものとみられる。整地層中には縄目叩きを有する平瓦片が含まれており，Ⅲ期門建物築造に関連する施設である。また，石列と直交させて暗渠ＳＸ105・106を付設している。土塁正面の観察であり，上層は崩落土で積土の状況を見ることはできない。石列の上では，灰色砂質土や暗灰色土，茶褐色粘質土で厚さ５cm程度に積んでおり，上面は鉄分が沈着している。その上では灰色砂や黄灰色粘質土が中心となって厚さ20cm程度の積土となっている。

３）暗　渠

石組暗渠

ＳＸ105（26次）（Fig.55，PL.41）

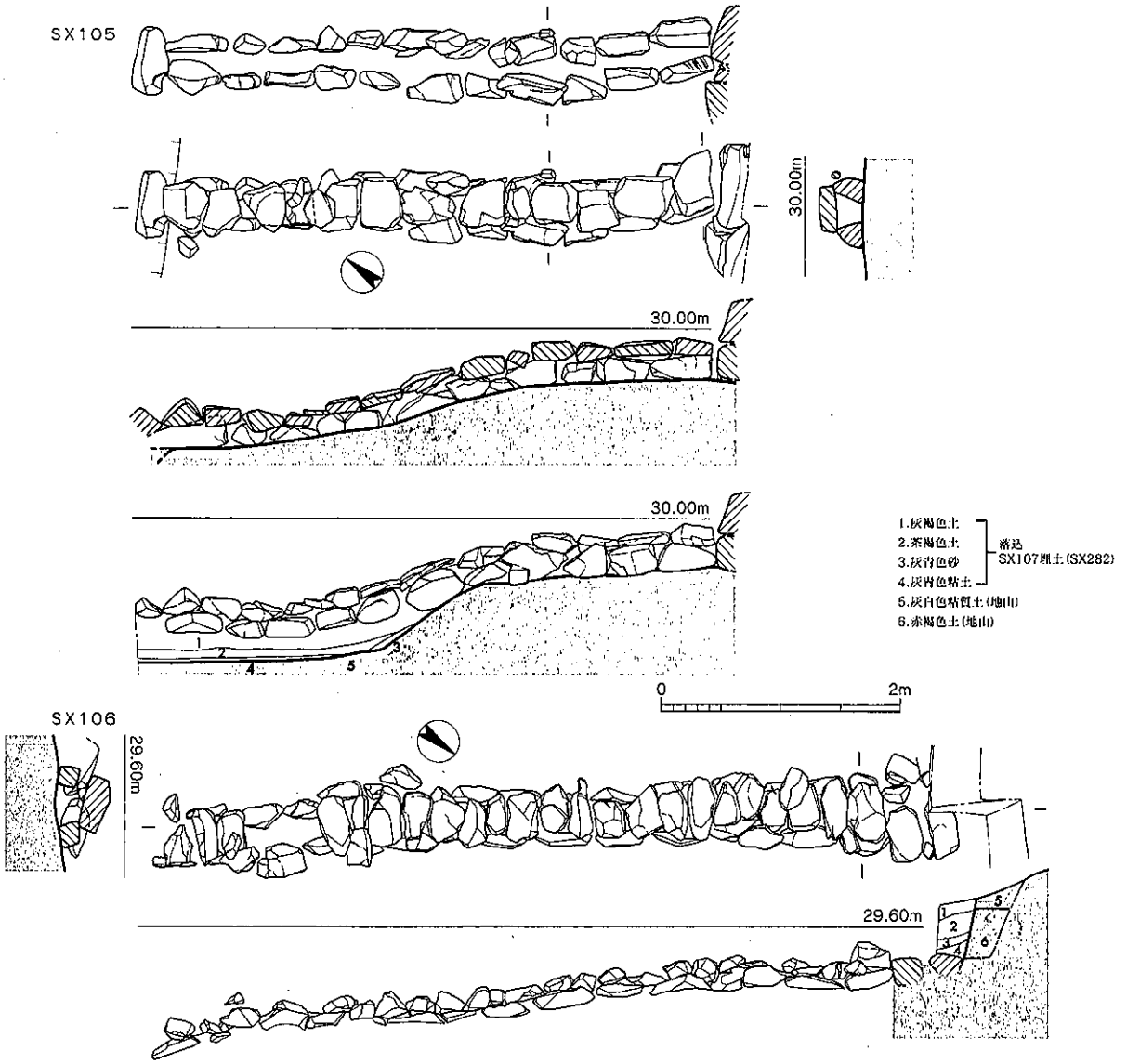


Fig.55　石組暗渠SX105・106実測図（1/60）

石列ＳＡ104に直交して石列西端から2.4ｍの位置に付設される。暗渠に伴う掘形はなく，Ⅲ期整地層で直接埋められている。形態的には花崗岩割石を石棺状に組み合わせたもので，長さ4.9ｍ分を検出した。蓋石は15個で，右側板は13個，左側板は11個数え，内法は20㎝を測る。暗渠内の埋土は締まりのない褐色土であり，弱いながらも流水痕跡が確認された。当暗渠は段落ＳＸ107上面に構築されているため，地形に沿って傾斜している。北端は確認できていないが，外濠に接続するものとみられる。

ＳＸ106（26次）（Fig.55，PL.41）

石列ＳＡ104の東端から1.3ｍ西側の位置で，石列と直交させて付設する。当暗渠は全体を確認したものの，蓋石は外さず図化及び写真撮影後に埋め戻している。長さ6.2ｍ，幅0.57ｍで，蓋石は22個数える。先端部は外濠ＳＸ108に接続しており，吐水部と外濠底面との比高差は1.5ｍであった。なお，石列との交点部に掘り込みは存在せず，ＳＸ105同様，石列背面から滲み出た水を外濠側に排水するための暗渠と考えられる。

石敷暗渠

ＳＸ116Ａ・Ｂ（26次）（Fig.48）

西門切通し部を南北に縦断するかたちで検出した石敷溝で，丁度ＳＢ110及びＳＢ120Ｂの中央下部に位置する格好となり，北端はＳＢ120Ｂ門礎掘形と重複する。上部をＳＸ116Ｂ，下部をＳＸ116Ａとした。ＳＸ116Ｂは切通し部南半で検出したもので，最大幅1.4ｍを測り，１～３㎝ほどの小石をやや粗く敷き詰め，中には格子目叩きを有する瓦片が含まれていた。ＳＸ116ＡはＳＸ116Ｂを掘り下げて検出したもので，検出長12.3ｍ，北端幅0.58ｍ，南端幅0.78ｍを測り，西側土塁に対して内湾する。掘形断面は明確な逆台形を呈し，地山に掘り込んでいる。内部には１～３㎝ほどの小石，７世紀後半代の須恵器片，縄目叩きを有する瓦片が含まれていた。ＳＸ116は形状から暗渠施設と考えられるが，ＳＢ120Ｂ掘形と重複していることからＳＢ110整地層に伴うものと考えている。

(4) 官　道

那津から水城西門を通過し，大宰府へ至る古代道路は，水城外濠により寸断され，その箇所には道路と西門とを繋ぐ木橋が架けられているものと推測されてきた。しかし，第26次調査の結果はそれを否定するものとなり，西門の前面以西には外濠は存在せず，木橋ではなく，道路がそのまま繋がっていることが明らかとなった。道路に関連する遺構としては，路面・側溝・轍があり，他に石敷溝も検出されている。

路　面

ＳＸ127（26次）(Fig.47，PL.36)

Ⅰ～Ⅱ期門建物に関連して使用された路面で，ＳＤ101-ＳＤ109間を路面ＳＸ127とした。西門切通し部分は，軟質の地山である茶褐色土を除去し，硬めの黄褐色土面まで露出させている。北端部での硬化面は厚さ１cm足らずであるが，土器細片・砂利を叩き込んでいた。Ｅ１・２区においては地山直上が路面となるが，Ｅ１区では瓦片は少ない。また，Ⅱ期門建物ＳＢ120Ｂが位置するＥ３区では，地山と硬化面との間に灰色粘土の間層がみられ，門建物基壇の痕跡かと思われるが，厚さ２～８cm程度であるためⅡ期基壇はそれほど高くなかったものと推測される。ＳＢ120Ｂ中央部掘形横の標高は31.43mで，ＳＤ109北端では標高30.55mと0.9mほどの比高差があり，土塁中央部が最も高く，路面の北・南側に向かって下がっている。

ＳＸ210（26次）(Fig.47，PL.36)

門建物との位置関係から考えて，Ⅲ期門建物ＳＢ110に関連する路面とみられ，西側溝がＳＤ101，東側溝がＳＤ102である。ＳＤ102が外濠と接続する箇所での路面幅は11mで，門建物前面での幅は５m余りと門に向かって幅が極端に狭くなっている。道路幅を確認するためにＪ区北端に長さ22mのトレンチを設定し，ＳＤ102延長部の検出を行ったが，側溝の存在は確認できなかった。Ｊ区南側においても小トレンチを設定し掘り下げたが，ここにおいても側溝の存在は確認できなかった。このことにより，東側溝は上成土塁基部から外濠間までの長さ９m余りが存在するのみで，それより北側は外濠が東側溝の役割を兼ねたと考えられる。硬化面等当時の路面は削平を受け遺存していないが，路面中央には土坑ＳＫ125（11～12世紀）が掘削され，道路の廃絶時期を示すものと考えられる。

外濠が東側溝を兼ねる

道路側溝

ＳＤ101（26次）(Fig.56，PL.36)

路面ＳＸ210の西側溝で，長さ47m分を確認した。北西方向に直線的に延びる溝で，南端は上成土塁基部で終わり，門建物ＳＢ120Ｂ復原線から北西4.4mの位置である。基部の幅2.2m，深さ1.1m，中央部の幅1.8m，深さ0.54m，北端の幅3.5m，深さ0.33mを測り，断面は逆台形を呈する。底面の標高は基部側が29.8mで，北端部側が28.75mと両者間には１mほどの比高差を有する。ＳＢ120Ｂ掘形検出面と北端部底面とでは3.6mの比高差となる。門建物ＳＢ120Ａに対しては，西側に６°振っている。

北端部の埋土は上層から緑灰色砂・黒色泥炭層・暗灰色細砂層で，埋土上～中位には青磁碗・土師器糸切り小皿などの遺物を包含する。また，南端側には50～80cm大の花崗岩が７個落ち込んでいるが，西側土塁の壁面石垣から崩落したものと考えられる。埋土上層には瓦類が多量

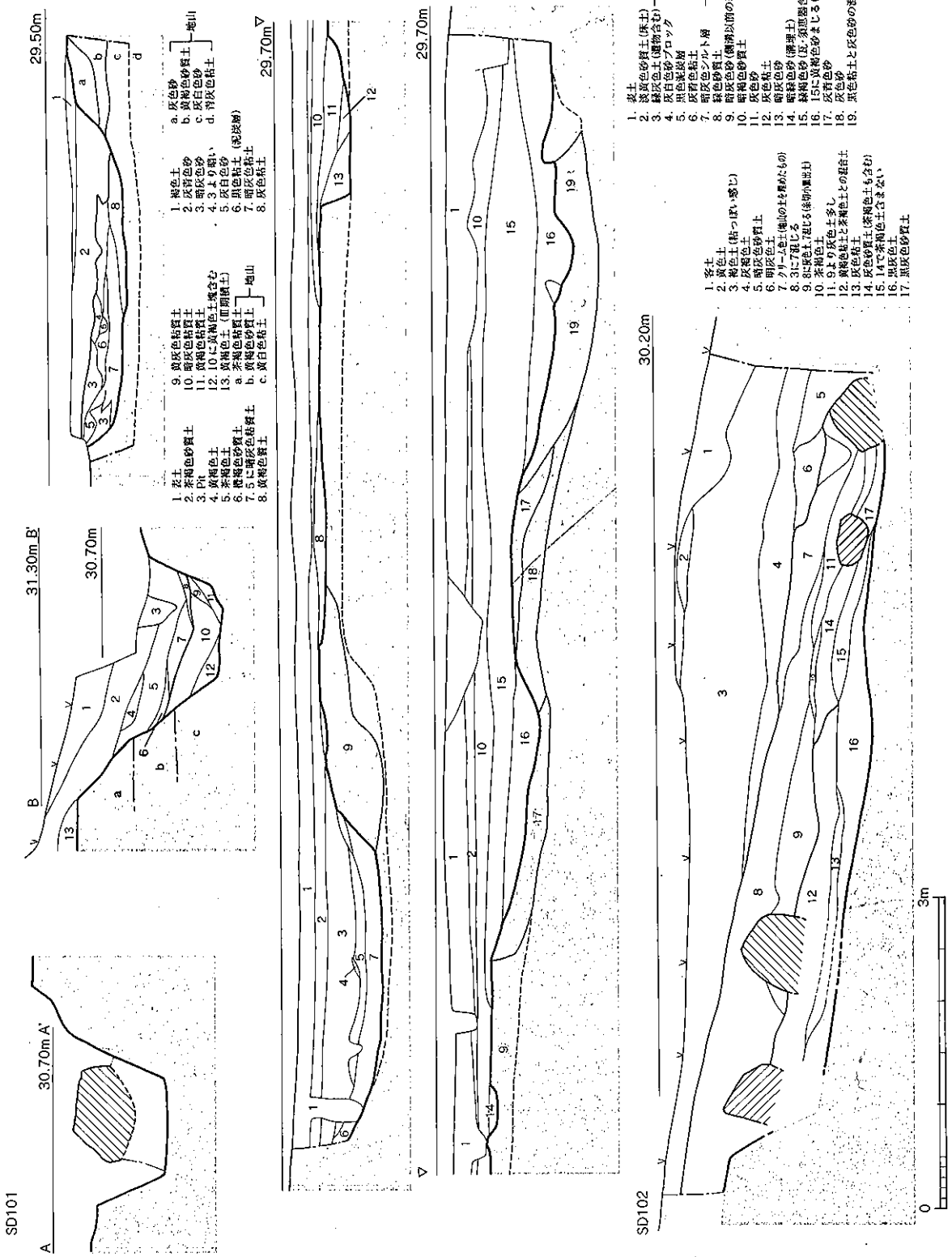


Fig.56　溝SD101・102土層図（1/60）

に包含されていた。

ＳＤ102（26次）（Fig.56）

ＳＤ101と対になる東側溝で，長さ9.2m分を確認した。溝の西半部には市道が存在するため完掘し得ていないが，検出基部幅0.78m，深さ0.56m，北端の検出幅1.4m，深さ1.0mを測る。ＳＤ102は，外濠との接続部以北においては存在せず，外濠が東側溝の役割を兼ねたと考えられるが，Ｊ区北端トレンチでは外濠の落込さえ確認していないことから，この部分での路面幅は19m以上を有することとなる。溝の北端は一段落ち込み外濠に接続するが，接続部分には花崗岩割石が４個置かれ，その部分は地山の灰白色土で埋められており，下層から糸切り小皿が出土している。溝内にはＳＤ101同様，花崗岩割石が４個落ち込んでおり，底面には瓦・小石が入っていた。

ＳＤ109Ａ（26次）（Fig.52，PL.36）

壁面石垣ＳＡ115Ａにほぼ沿って掘削された溝で，切通し部を南北に貫き，ＳＢ120Ａ西側掘形を切っている。上面幅0.3～0.5m，底面幅0.1～0.2mと細身の溝で，レベルは中央部が高く，南北両側に下がる。埋土下層からは須恵器有高台坏が２点出土している。当溝は築堤当初の門建物掘形を切っているが，８世紀前半代とみられるⅡ期の礎石門建物に切られることから，時期的には７世紀末～８世紀初頭に納まるが，その性格については判然としない。幅が細く，深いことから暗渠的な役割を有していたか。

ＳＤ109Ｂ（26次）（Fig.52，PL.36）

北西方向に直線的に伸びる溝で，ＳＤ109Ａにほぼ重複して乗っかるが，壁面石垣から北側６mの地点で分岐している。溝の規模は北端で幅0.9m，深さ0.3m，南端で幅1.6m，深さ0.6mであるが，ＳＤ109Ａ同様中央部が高く，南北両端に下がっている。また，溝の最下層には砂粒が薄く堆積しており，流水痕跡が認められた。ＳＢ120Ｂと重複関係にあるが，同建物に関連する道路西側溝の可能性も考えられる。

ＳＤ131（26次）（Fig.48）

下水道管埋設工事に伴う立会調査で確認した溝状の落ち込みで，調査面積が狭小であるため詳細は不明。上面観察程度の調査に留まるが，Ｅ４区南東隅部に花崗岩割石の集石が存在する点を考慮すると，ＳＢ110に関連する道路の東側溝になる可能性を有しよう。

轍

ＳＸ295（26次）（Fig.48）

ＳＢ120Ａ掘形の北西側にあり，掘形と重複し，北端はＳＤ101に切られる。残存長3.5m，幅0.37～0.58mで，深さ３～４cmの浅い溝状をなす。底面には硬化面があり，轍痕跡と考えられる。

ＳＸ296（26次）（Fig.47）

ＳＸ295の西側に併走し，北端はＳＤ101に切られる。残存長4.4m，幅0.54～0.76mで，深さ４cmとＳＸ295同様，浅い溝状をなす。底面には土器・小礫が叩き込まれており，轍痕跡と考えられる。

石敷溝

ＳＸ117（26次）（Fig.47）

E区北半部で検出した石敷溝で，ＳＤ101・102間に存在する。Ｓ字形に蛇行しているが，ＳＤ101とは重複していない。長さ12.5m遺存し，幅0.6mほどで，底面には小指大の石を敷いていた。

ＳＸ118（26次）（Fig.47）

ＳＸ117の東側1.7mで検出した石敷溝で，長さ4.9m分確認した。幅は0.5mで，南側に緩くカーブする。底面は北側に下がり，瓦・小石片を敷いていた。

ＳＸ119（26次）（Fig.47）

H区北端で検出した石敷溝で，前者に比して幅1.35mと大きめである。南北方向に走り，長さは4.2m分確認した。底面には瓦・花崗岩の小石がみられるが，敷くというよりはまばらに置いているという印象を受ける。

ＳＸ272（26次）（Fig.47）

ＳＸ117と交差する石敷溝で，それに切られる。検出長5.0m，幅0.5～0.9mで，当溝も瓦・小石片を敷いている。これらの溝は掘形底面が丸く，石の敷き方も石組暗渠ＳＸ116Ａと比較すると粗雑であり，通路遺構と考えられ，敷石は滑り止めのために通路底面に敷いたものと思われる。埋土下位からは龍泉窯系碗片が出土している。

落　込

ＳＸ107（26次）（Fig.47）

ＳＤ102と暗渠ＳＸ105の間の段落ちで，石列ＳＡ104の2.2m北側から石列と平行して一段（0.6m）下がる。ＳＤ102に切られる状態で須恵器甕が出土した。なお，暗渠ＳＸ105はこれを埋めた後に構築されている。

（5）木樋

1930年の東門地区における，長沼賢海，鏡山猛の調査によって，初めて木樋の構造が明らかにされた。この調査では，水城跡土塁基底部に直交する形で全長79.5mの木樋が埋設されたことをはじめ，取水口がT字に交差すること，中央部では緩傾斜の勾配が途中で急勾配となって吐水口へ至ること，吐水口の側板を斜めに切り落としていることなどが分かっている。この東門地区の木樋については，５・８次調査で再調査を行っている。特に５次調査では，木樋内に水流の痕跡を確認し，内濠から外濠へ水を伝える導水管の機能があったことを明らかにした。さらに1990年に太宰府市教育委員会が実施した取水部の17次調査では，既に本体が抜き取られた状態であったが，それでも，取水口が対称形であることや木樋下位に枕木を設置すること，土塁基底部築造後に木樋の掘形を掘削していることなどを確認している。同様に木樋の抜き取り跡の調査を実施した吐水部の32次調査では，枕木が出土している。そして33次，40次調査では，木樋埋設に関ると考えられる掘形を確認した。特に吐水部の40次調査では，当初から木樋が埋設されていない可能性が高いことを確認した。

１）取水部

木樋ＳＸ050（５・８次）（Fig.58，PL.42～44，巻頭PL. 4）

東門地区西側で５・８次調査を実施した。1930年調査の第２地点と第３地点の中間付近を５次調査として，第１地点を８次調査とした。

５次調査では，木樋を約11m分検出している。木樋は，土塁に直交する形で埋設されており，底板，側板，蓋から構成されている。樹種同定では，ヒノキ材とされる。底板は，掘形中央に２枚並べて設置しており，１枚の板は，幅70.0cm，厚さ26.0cmで，繋いだ板の両端には，側板を立てるために，深さ6.0cm，幅19.0cmの段状の掘り込みを有する。底板１枚分の長さは確認できていないが６m以上ある。２つ併せた樋の内法は116.0cmで，底板同士は，側面と小口にそれぞれ凹凸に掘り込んで繋ぎ合わせる，一枚枘つなぎである。また左右の底板は鉄製の大型鎹で留める。この調査では，鎹を４個確認したが，幅4.5cm～5.1cm，上面の長さ24.0～25.4cm，爪の長さは15.9m～16.6mの大きさである。木樋底板一つに対して３箇所は留めている。

底板は一枚枘つなぎ

側板は左右どちらも１枚である。既に上端部は腐蝕しており，性格な数値はでないが，厚さ20.0cm，高さ(幅)80.0cmで，底板に6.0cm食い込み，内法の幅74cmである。内法の高さについては，78cm前後はあったと考えられる。この側板１枚の長さは不明だが，調査区内では少なくとも8.35m以上はある。接合についても一枚枘つなぎである。側板の外面には，板目と直角方向に幅広の深い削り痕と幅狭く長平の刃痕が見られ，手斧とヤリガンナによる表面の調整が行われている。この調整に関る削り屑は，木樋掘形の最下層に僅かに包含されている。

蓋板の遺存は悪い。木樋の幅に合わせて，溝蓋のように木蓋を一枚一枚置いている。早い時期に腐蝕して木樋内に落下したと考えられるもので，現状幅45.0cm，長さ1.70m位である。また，蓋の継ぎ目に目張りしたと考えられる畝状の粘土が，幅70～80cm程度ある。1930年の調査では，蓋板の内側にL字状の切り込みを入れて側板が内傾しない方法をとっていたという。

Fig.57　東門地区西側木樋部地形図（1/300）

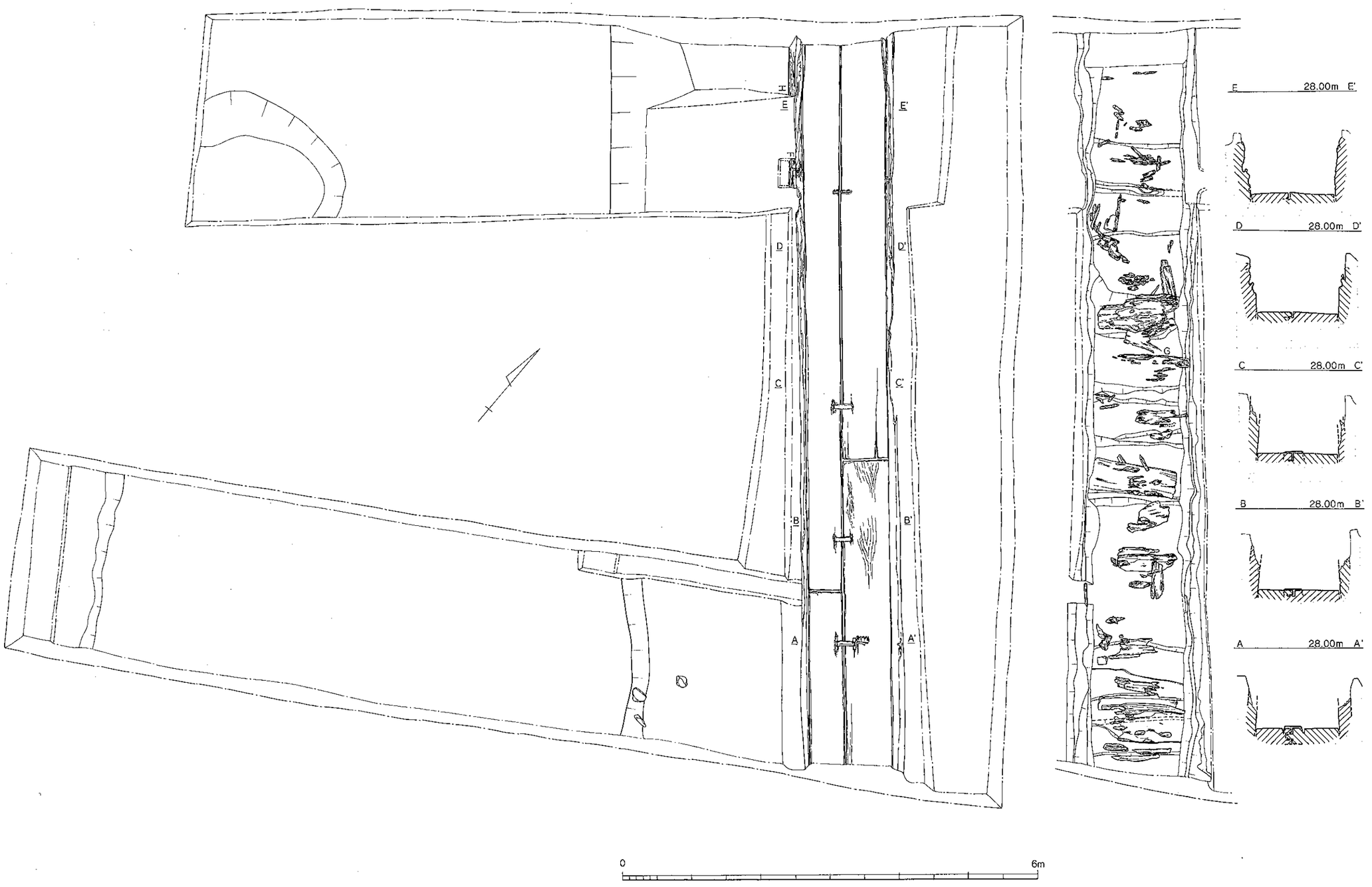


Fig.58　木樋SX050実測図（1/60）

木樋内には蓋上層より落ち込んだ崩落土が堆積しているが，その下位では灰色粗砂，暗灰色粗砂等，砂質系の土が互層に堆積していることから，水流による堆積と考えられる。

水流の痕跡

８次調査では，取水部を再調査した。既に上部は腐蝕しており，僅かに底板に接する部分が残っていた。側板の板幅は西側で17.8cm，東側で20.0cmである。底板は２枚で西側に凸部，東側に凹部がきて，枘つなぎとなっている。底板幅は西側80.0cm，厚さ26.0cm，東側80cm強で，両端には幅18.0cm，深さ6.0cmの段を有している。直交する横樋は縦樋底板を合い欠きにして組み合わせている。この底板は１枚で幅88cm，厚さ20cmで，両側に側板を立てるために幅12～13cm，深さ４cmの切り込みを入れている。また，小口部分には円形の刳り込みを入れて径47cm程度の面取りをした柱を建てる。この柱の掘形は円形で，検出面の径は160.0cmである。また柱の内側に幅20.0cm深さ4.0cmの段があり，この小口部分にも側板が立っていたと理解される。

横樋と縦樋の接合

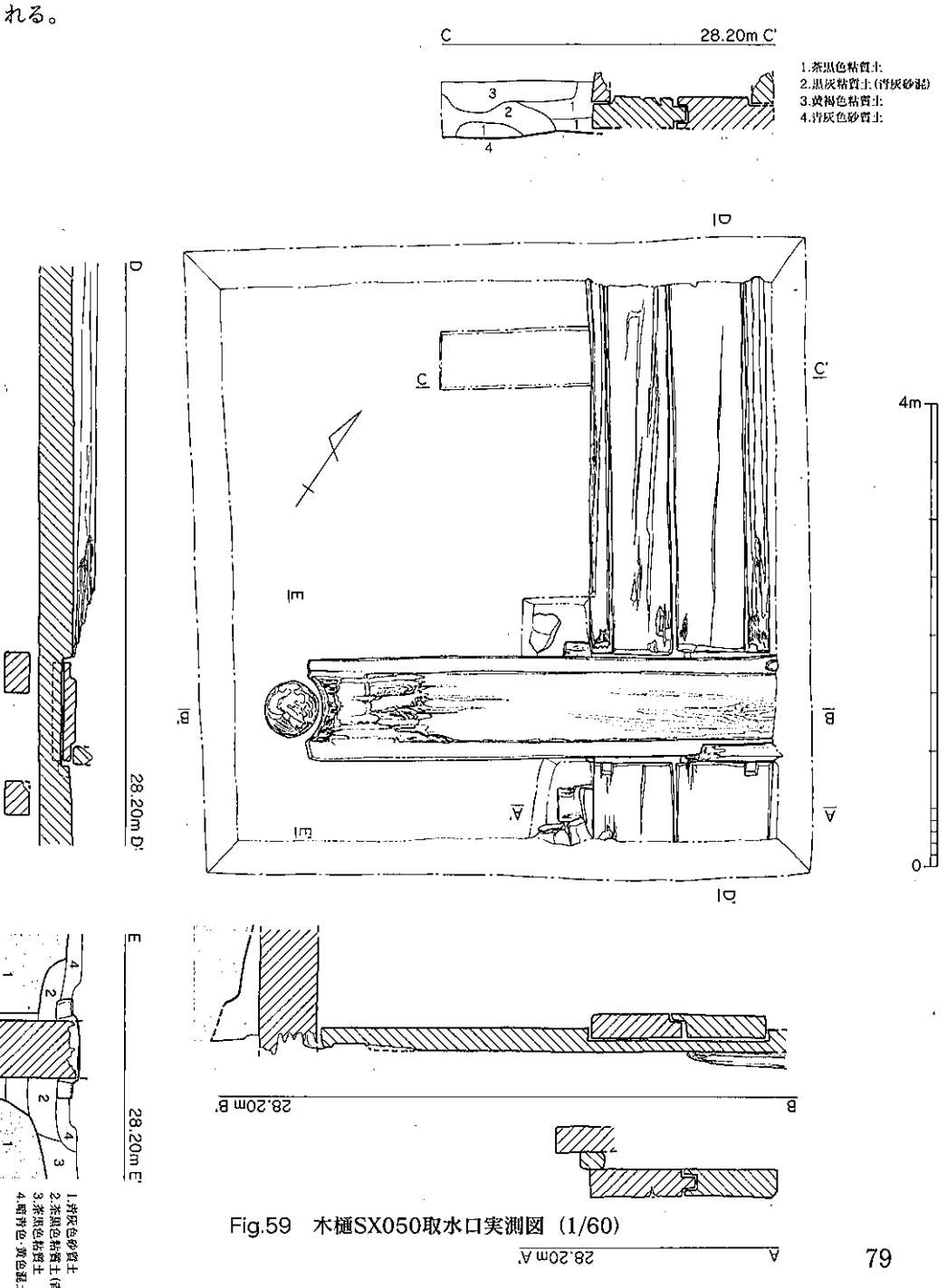


Fig.59　木樋SX050取水口実測図（1/60）

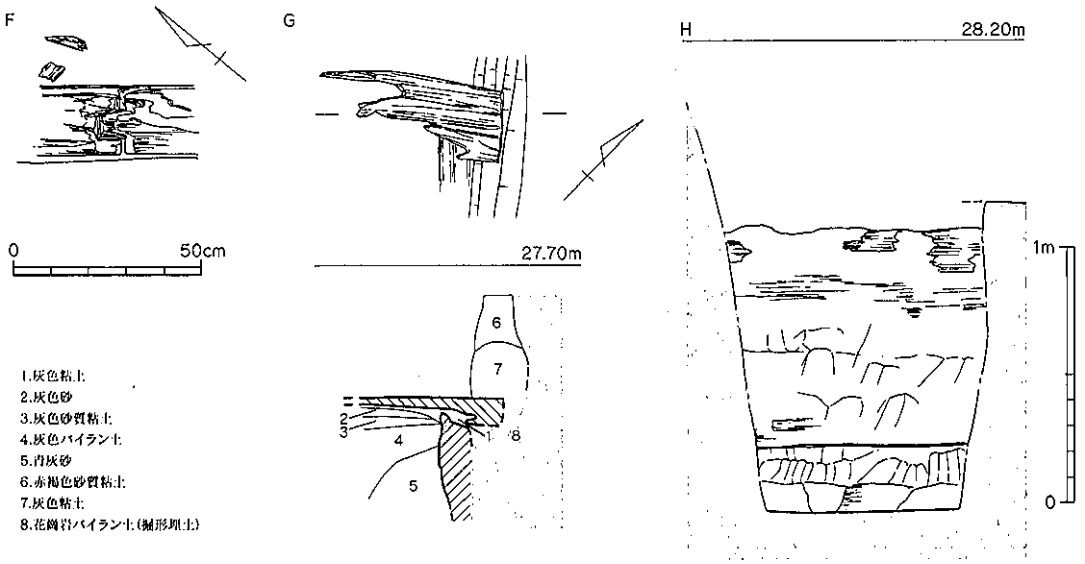


Fig.60　木蓋接合状況と側板の調整痕（1/20・1/30）

なお，５次調査北端における底板上面の標高は26.845m，８次調査における縦樋と南樋の交錯部分の標高は26.96mで，両者の高低差は12.2cmである。この間は，33.87mで，勾配は1/278になる。僅かに北側に傾いていることが分る。

木樋掘形

ＳＸ051（５次）(Fig.61)

５次調査第５トレンチでは，木樋の掘形を検出した。旧地表から約0.4mで掘形積土を確認でき，西側の肩部分と木樋本体部分を中心に検出したが，東側の肩については，県道112号線下に延びるため，確認することはできなかった。掘形は，木樋中軸線から西側肩を折り返した場合，上幅9.00m，下幅5.40m，深さ2.15mで端部は丸味を持った逆台形となる。

掘形は礫が混じる黒灰色土に掘り込まれている。最下層には花崗岩バイラン土を使用した背灰色土を30cm程度敷き，その上に側板を覆うように黒色や灰色，茶灰色で粘性の強い粘質土を積み，側板を安定させるためか，背後に山を造るような状態にする。そしてその積土の背後を赤褐色や茶褐色，暗灰色粘質土を10～20cm程度の厚さで水平に積み，さらに上層では，灰色や黄褐色のバイラン土系の粘砂土を５～10cm程度の厚さで締め固めている。木樋内には蓋上層より落ち込んだ積土が沈みこんだ状態である。また，この上層積土の茶灰色粘質土からは，須恵器が出土している。なお，掘形西肩の標高は28.35m，底面中央付近は26.20mである。

17ＳＸ001（17次）(Fig.62・63)

取水部から土塁基底部にかけての木樋の抜き取り跡が，太宰府市教育委員会によって調査されている。この調査では，木樋本体は既に抜き取られていたが，木樋取水口が左右対称形で，径が約0.5m，心々が7.15mとなることなどが確認されている。そして，横樋に直交する形で，縦樋を挟んで２箇所，中央に１本枕木が設置されていたことも明らかとなっている。枕木は長さ0.92～1.05m，幅0.30～0.32m，厚さ0.14～0.18mの大きさである。縦樋に並行する中央の細い枕木は，長さ6.60m以上で，幅は0.14～0.22m程度になる。

木樋の埋設方法

木樋の埋設については，基底部積土の後に掘形を掘削し木樋を埋設し，さらに上部の積土を

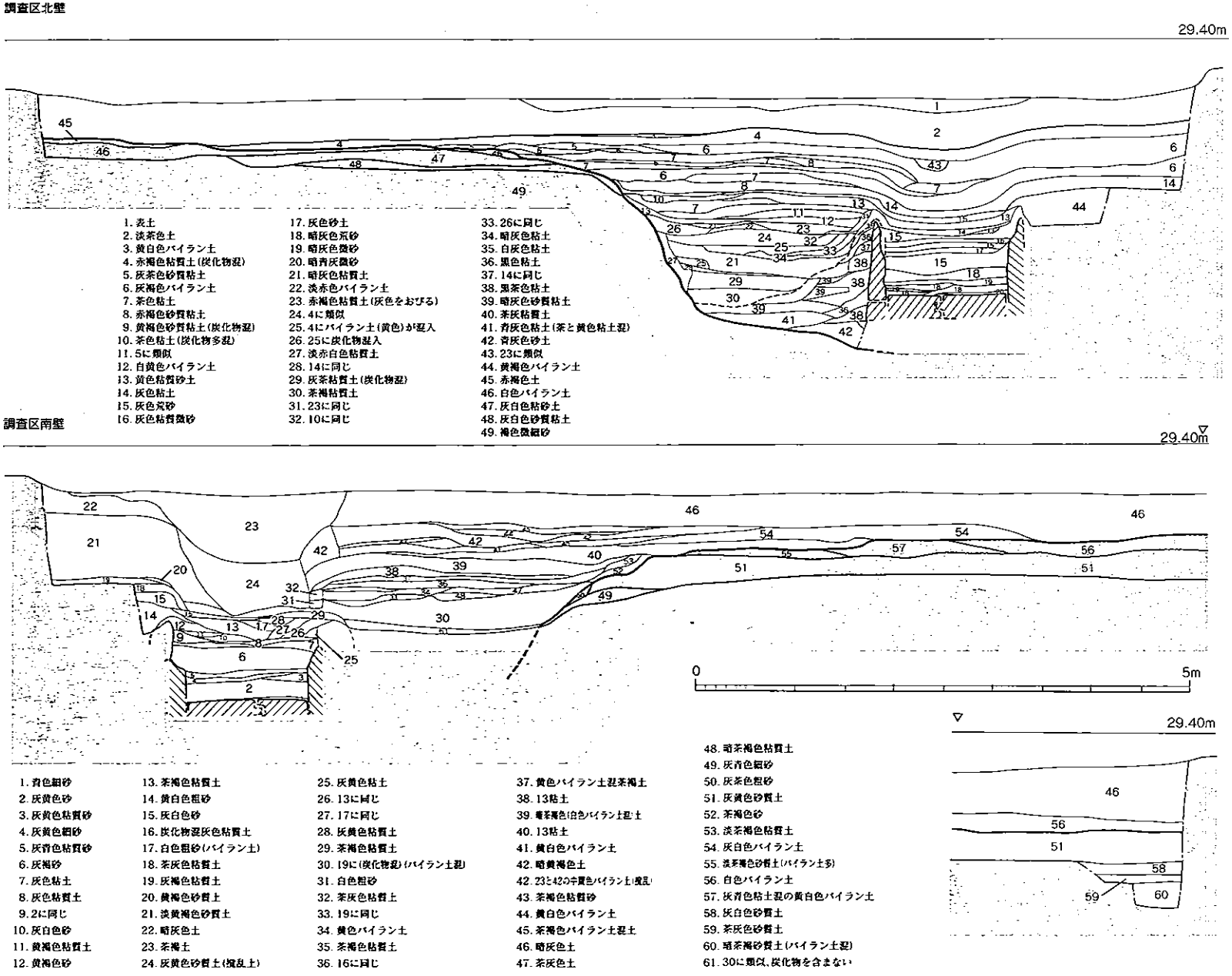
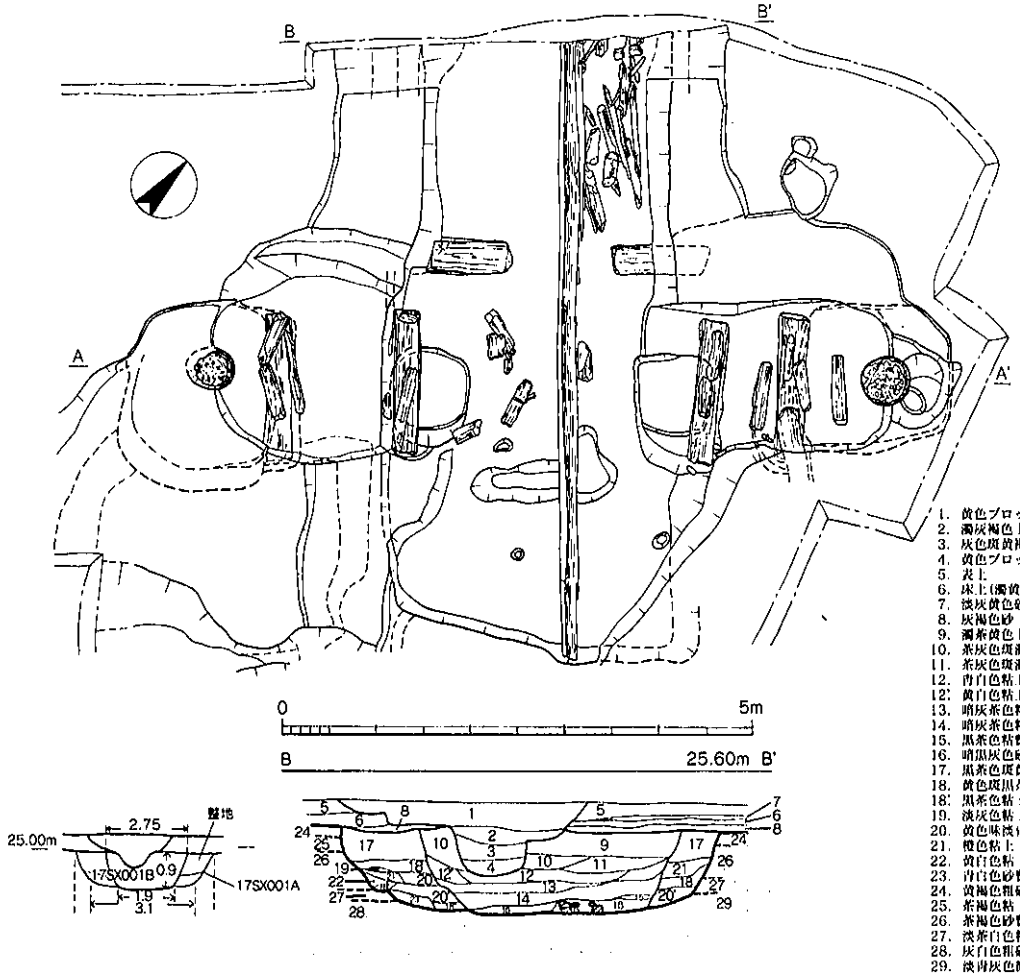


Fig.61　木樋埋設掘形SX051土層図（1/60）



1. 黄色ブロック入灰褐色土
2. 濁灰褐色土黄色ブロック入
3. 灰色斑黄褐色土
4. 黄色ブロック入灰色砂質土
5. 表土
6. 床土(濁黄褐)
7. 淡灰黄色砂質土
8. 灰褐色砂
9. 濁茶黄色土
10. 茶灰色斑濁黄色土
11. 茶灰色斑濁黄色土より黄色ブロック多い
12. 青白色粘土ブロック入暗青色砂質土
12'. 黄白色粘土ブロック入
13. 暗灰茶色粘質土木片多い灰青色ブロック
14. 暗灰茶色粘質土木片多い
15. 黒茶色粘質土
16. 暗黒灰色砂質土
17. 黒茶色斑黄色粘土
18. 黄色斑黒茶色粘土
18'. 黒茶色粘土　18"淡青色粘土ブロック入
19. 淡灰色粘土
20. 黄色味淡青灰色砂質土　20'粘質
21. 橙色粘土　21'濁橙色粘土
22. 黄白色粘土
23. 青白色砂質土
24. 黄褐色粗砂質粘土(地山)
25. 茶褐色粘土(地山)
26. 茶褐色砂質土(地山)
27. 淡茶白色粘土(地山)
28. 灰白色粗砂(地山)
29. 淡青灰色微砂質土(地山)

1. 黄色斑灰褐色土
2. 暗灰色砂
3. 暗灰色粘土
4. 淡黄色粘土(柱の腐植)
5. 茶色斑黄褐色粘土
6. 暗黄褐色粘土
7. 灰色斑淡茶色粘土
8. 植物(木の葉)の堆積
9. 茶色斑灰青色土
10. 茶黄色粘質土
11. 灰色砂
12. 黒灰色斑黄褐色土
12'. 黒灰色味
12". 黒色斑なし,灰色砂斑
13. 暗茶褐色土
14. 淡灰黄色粘土(柱の腐植)
15. 12"と同じ
16. 黄色砂質土
17. 黒褐色土
18. 茶褐色砂質土
19. 12と同じ
20. 黄色斑灰色土
21. 淡黄茶色粘土
22. 黄白色粘土ブロック入灰色砂質土
23. 黄白色粘土
24. 黒色斑灰黄色粘土
25. 淡黄茶色粘土
26. 灰色斑淡黄色粘土
27. 茶色斑灰褐色砂質土
28. 淡黄色粘土
29. 明黄色粘土
30. 灰黄色粗砂
31. 黄色味淡青灰色砂質土　31'粘質味
32. 青色粘土
33. 青灰色粘土
34. 淡灰黄色砂質土
35. 青灰色粘土ブロック入黒褐色土
36. 黒褐色粘質土
37. 青灰色砂質土
38. 淡青灰色砂質土
39. 暗青灰色砂
40. 黄色斑黒灰色砂質土
41. 暗黄灰色粘質土
42. 淡青色微砂質粘土
43. 黒色斑青灰色砂質土
44. 黒青色粘質土
45. 淡黄灰色ブロック入淡茶色砂質土
46. 青灰色斑灰色粗砂
47. 黒色斑青灰色砂質土
48. 暗灰色粘質土
49. 黒茶色斑灰青色砂質土
50. 黒茶色斑灰色粘質土
51. 茶黄色粗砂質土
52. 明黄褐色砂質土
53. 灰色砂
54. 淡青灰色微砂質土
55. 青灰色粘質土
56. 青色粘土

Fig.62　木樋17SX001取水口実測図（1/80）

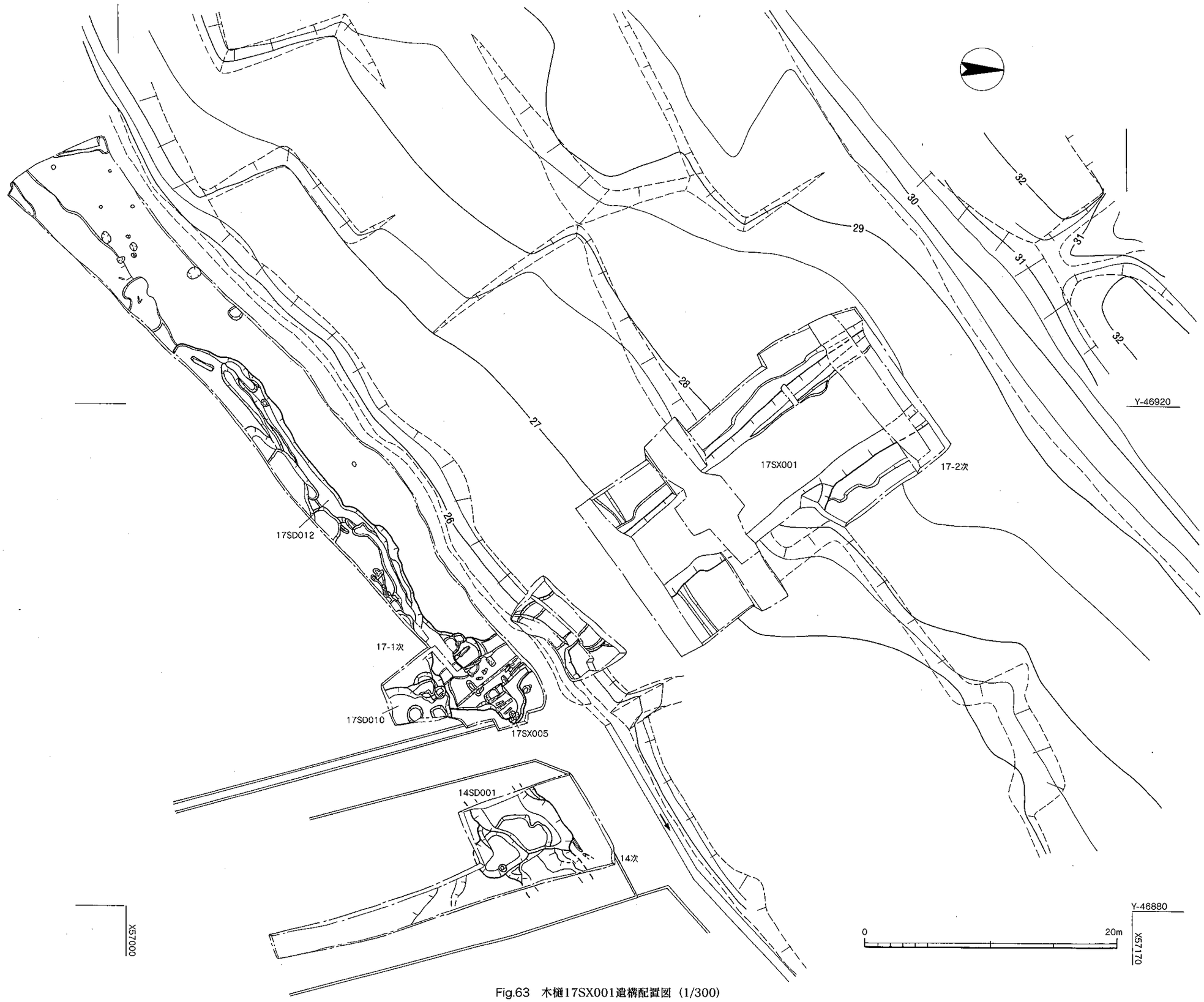


Fig.63　木樋17SX001遺構配置図（1/300）

行っている。この調査では，木樋への導水に関ると考えられる17ＳＤ012も検出しているが，溝は８世紀中頃に埋没すると考えられる。

ＳＸ150（33次）（Fig.64）

33次調査西門地区東側の土塁後背で検出した。西門地区は土塁の項でも報告したが，阿蘇４火砕流起源の丘陵を成形して基底部を造っている。33次調査では，この火砕流起源の地山に掘り込まれた，土塁に直交する溝状遺構を検出した。土塁に近いトレンチでは，上幅9.2m，南側の低い基底部で8.1mであり，現地表からの深さは3.2m以上ある。２箇所に設定したトレンチによって，土塁後背の下成土塁上に，少なくとも30m以上続くことが分った。土塁北側の40次調査でも同一のものと考えられる溝状遺構を検出したことから，土塁に直交する形で掘削された約70mの直線的な掘形と理解できる。現表土から0.8mで掘形の肩を検出でき，標高は30.9mである。積土は旧表土下位に見られるが白色粘土と花崗岩風化土を互層に積んでおり，中央部がやや沈んでいる。この点は，40次調査で確認した吐水部積土の状況と似ている。

２）吐水部

不明礫

ＳＸ045（５次）（Fig.15，PL.20）

５次調査吐水口東側で検出した花崗岩礫群である。1930年の調査では，木樋ＳＸ050の吐水口が残っており，周辺部は大きく撹乱を受けていない可能性が高い。このＳＸ044の東側で検出したこの礫群は，大きさ20cm～80cmで，出土状況を見る限り，自然の力によって運ばれた物ではなく，人為的に持ち込まれ，面的に置かれた可能性が高い。太宰府側における５次調査木樋床面の標高は26.8mである。これに対して吐水部の礫上面は，高いものでも26.2mである。木樋底板の厚さを考慮すれば，これらは吐水口に敷かれた礫の可能性が高い。このように吐水口に花崗岩礫を埋設した状況は，大土居水城にも類例が認められる。

吐水口に人為的に置かれたか

木樋抜き取り

ＳＸ135（32次）（Fig.66・67，PL.14・45）

32次調査西土塁西門東側の外濠地区で検出した。最大幅11.4mを測り，北側に半楕円形に拡がる落ち込みである。検出面の肩から深さ2.9m程度で，底面は平坦となり，標高は22.9mである。堆積土中には，厚さ60cmの湿地状と考えられる層が途中で認められるが，これは落ち込みが完全に埋まらずに，しばらく放置され，腐植土が形成された状態と考えられる。そして，この下位に粘質土等が人為的に投げ込まれた状況がある。そのため，木樋抜き取りに関る層はここから下位と考えられる。この最下層は，灰色粗砂と粘質土の互層であり，枕木状の木製品が出土した。また，この埋土下位の堆積層の下限は８世紀後半代で，この時期に木樋が抜き取られた可能性も指摘されている。

枕木状木製品の出土

木樋掘形

ＳＸ250（40次）（Fig.69～72，PL.45～47）

40次調査地は33次調査で確認した，木樋埋設推定地の北側延長部にあたる。木樋とその掘形，積土との関係を確認するため，土塁際に並行するトレンチを設定した。結果として上幅7.4m，下幅2.6m，深さ2.3mの断面逆台形の掘形を確認した。ただし，木樋の埋設は認められなかっ

木樋は埋設されていない

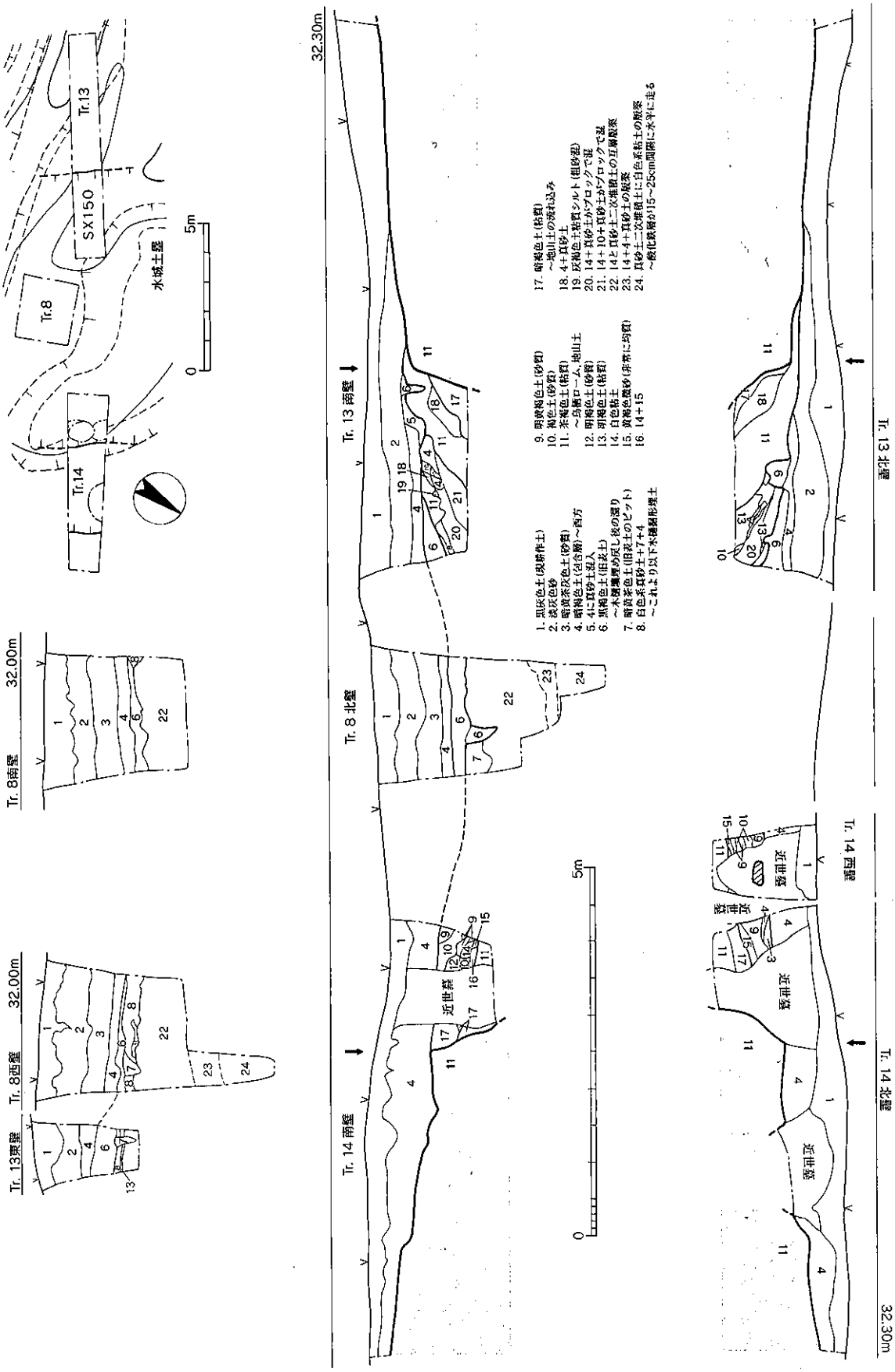


Fig.64　木樋掘形SX150土層図 (1/80)

Fig.65　32次調査区周辺地形図（1/300）

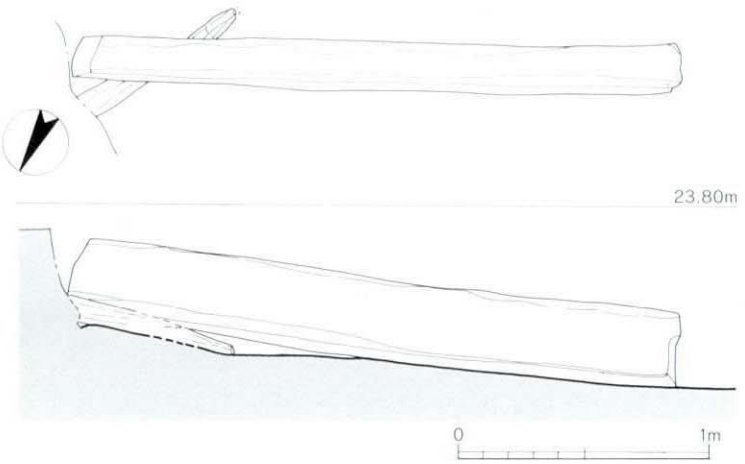
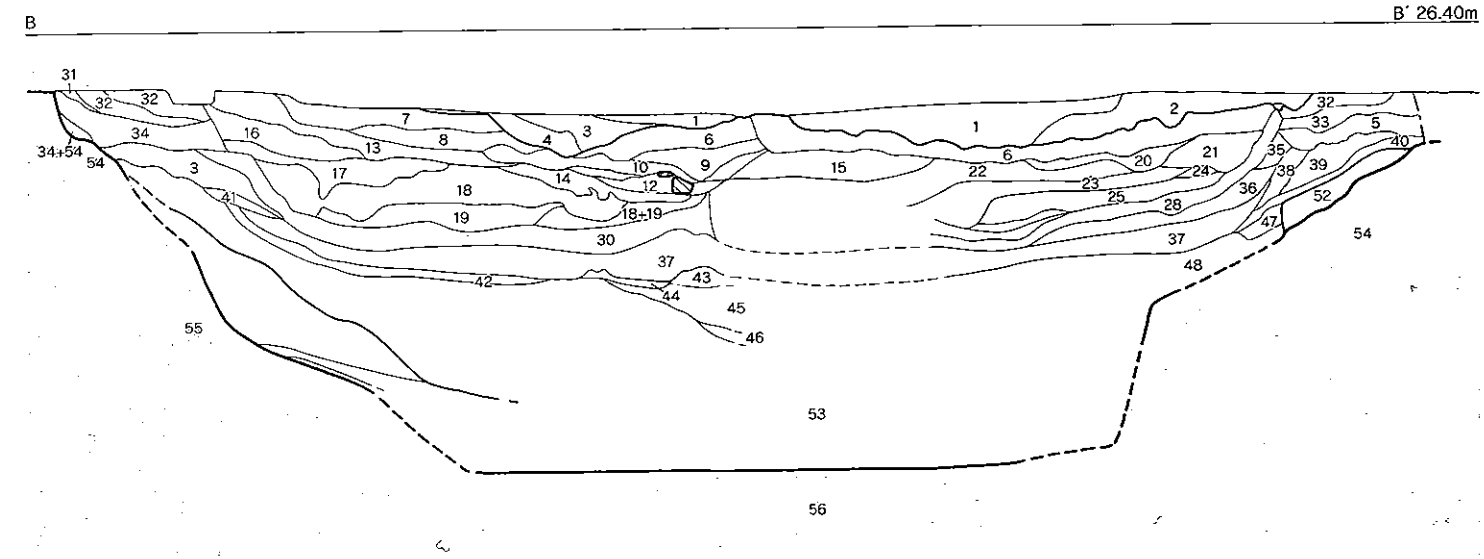
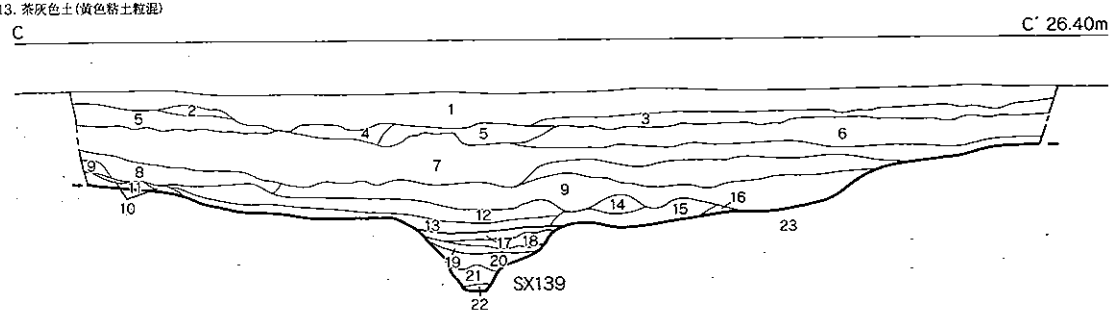


Fig.66　木樋抜き取りSX135枕木状木製品出土状況実測図（1/30）



1. 黄白粘土ブロック混灰色土
2. 明茶褐色土
3. 茶黄色土
4. 白黄色粘土ブロック混暗灰茶土
5. 暗灰色粘土若干混黒色土
6. 淡灰茶色土
7. 黄白色粘土ブロック混灰色土
8. 灰黄色土
9. 暗灰褐色粘土土
10. 暗灰黄色土
11. 黄灰色粘土ブロック混暗灰色土
12. 黒茶色粘質土(SX134埋土)
13. 茶灰色土(黄色粘土粒混)
14. 暗灰色土
15. 青灰粘土混黒色粘質土(ベトベト)
16. 青白粘土ブロック(大)混茶灰色土
17. 青白粘土ブロック(細)混黒灰色土
18. 青白粘土ブロック(大)多量混黒茶灰色土
19. 黄茶色粘土ブロック・粒混黒茶色粘質土
20. 暗茶色粘質土
21. 青灰色粘土ブロック(細)混暗暗茶灰色粘質土
22. 暗茶灰色粘質土(青灰粘土僅かに混)
23. 青灰粘土ブロック混黒色粘土
24. 33より粘土ブロック多い
25. 青灰粘土ブロック混黒茶色粘質土(茶色粘土混)
26. 28に同じ(やや黒色強い)
27. 26より色薄く茶色濃い
28. 暗黒色粘質土(青灰粘土・黄褐粘土若干混)
29. 暗茶色粘質土(青灰粘土僅かに混)
30. 黄茶色粘土粒・青灰色粘土粒混黒茶色粘質土(混ざり多し)
31. 黄褐色粗砂
32. 茶褐色土
33. 暗茶褐色土
34. 茶白色粘土ブロック(細)+暗灰色粘質土(斑)
35. 暗灰色粘質土
36. 青灰粘土ブロック混黒色粘質土(20と同か)
37. 黒色粘質土
38. 茶白色粘土+黒色粘土+青灰粘土
39. 青灰粘土ブロック・茶白色粘土ブロック(細)混黒色粘土
40. 黒茶色粘質土(軟)
41. 37+51
42. 黒灰色土(やや粘質・削り屑多量)
43. 黒茶色粘質土(腐植土・軟)
44. 淡青灰色粘土(軟)
45. 淡青灰色粘土(水分が多い)
46. 45+灰色粘土(軟)
47. 黒茶色粘土
48. 47よりやや砂質
49. 粘質土の互層
50. 青灰色粘土と粗砂の流転層
51. 灰色粗砂
52. 灰色粘土
53. 粗砂層
54. 青灰色粘土 ┐
55. 灰色粘土 ├ 地山
56. 黒茶色粘質土(腐植土) ┘



1. 暗灰色土
2. 淡灰褐色土
3. 灰褐色粘質土
4. 白灰色粗砂
5. 暗灰褐色土
6. 淡灰色粘質土
7. 暗灰色粘質土
8. 7よりやや淡色
9. 暗灰茶色土
10. 灰茶色粘質土
11. 白灰色粘土
12. 黒色粘質土
13. 黒灰色粘質土
14. 黄灰色粗砂
15. 灰青色粗砂
16. 暗灰色粗砂 ┐
17. 黄褐色粗砂 │
18. 灰色粗砂 │
19. 灰色細砂 ├ SX139埋土
20. 青灰色粘土混淡灰色粗砂 │
21. 暗灰色砂 │
22. 灰色粘土+21 ┘
23. 青灰色粘質土(地山)

0　3m

Fig.67　木樋抜き取りSX135土層図（1/60）

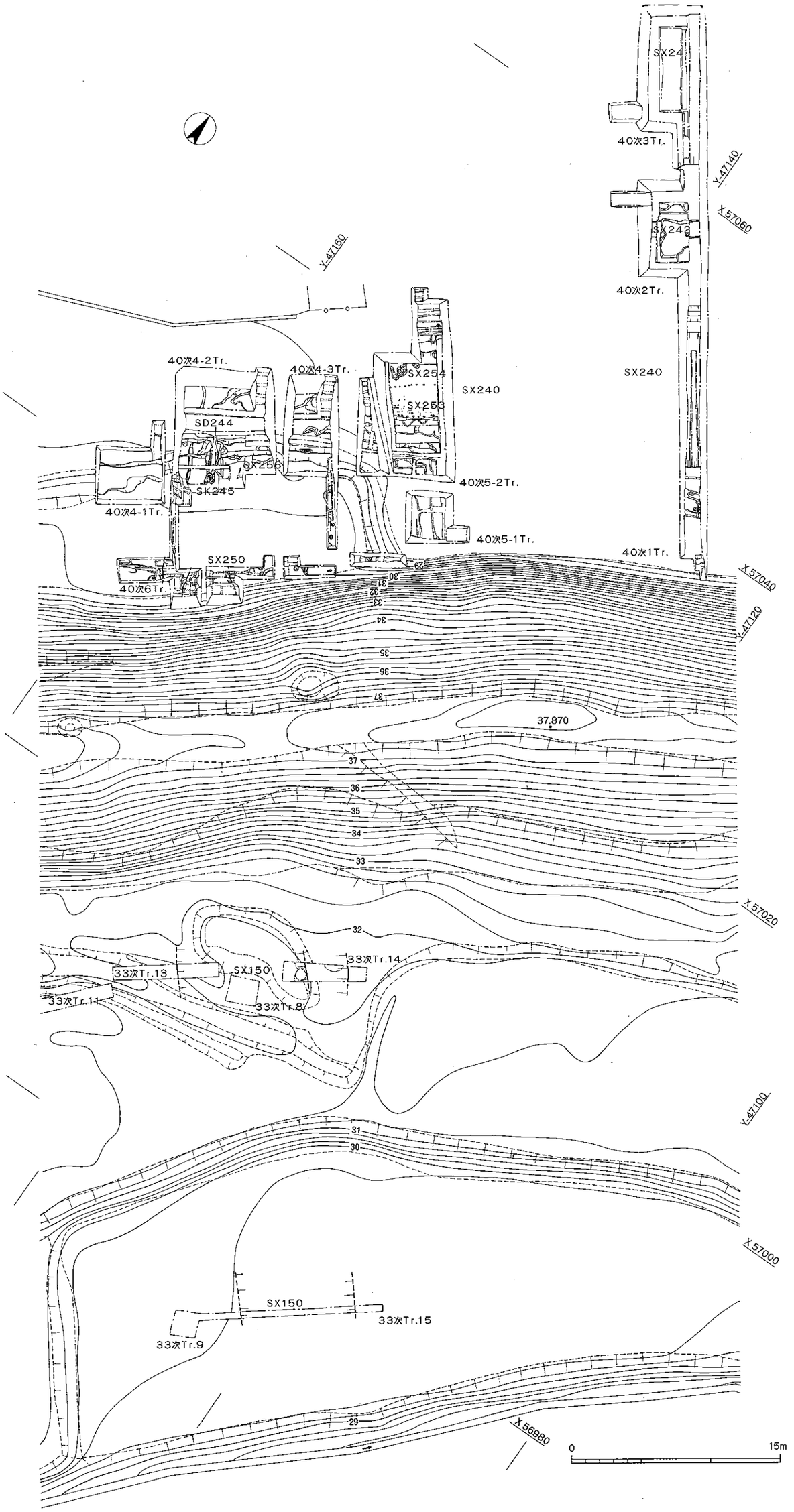


Fig.68　西門地区東側木樋部地形図（1/300）

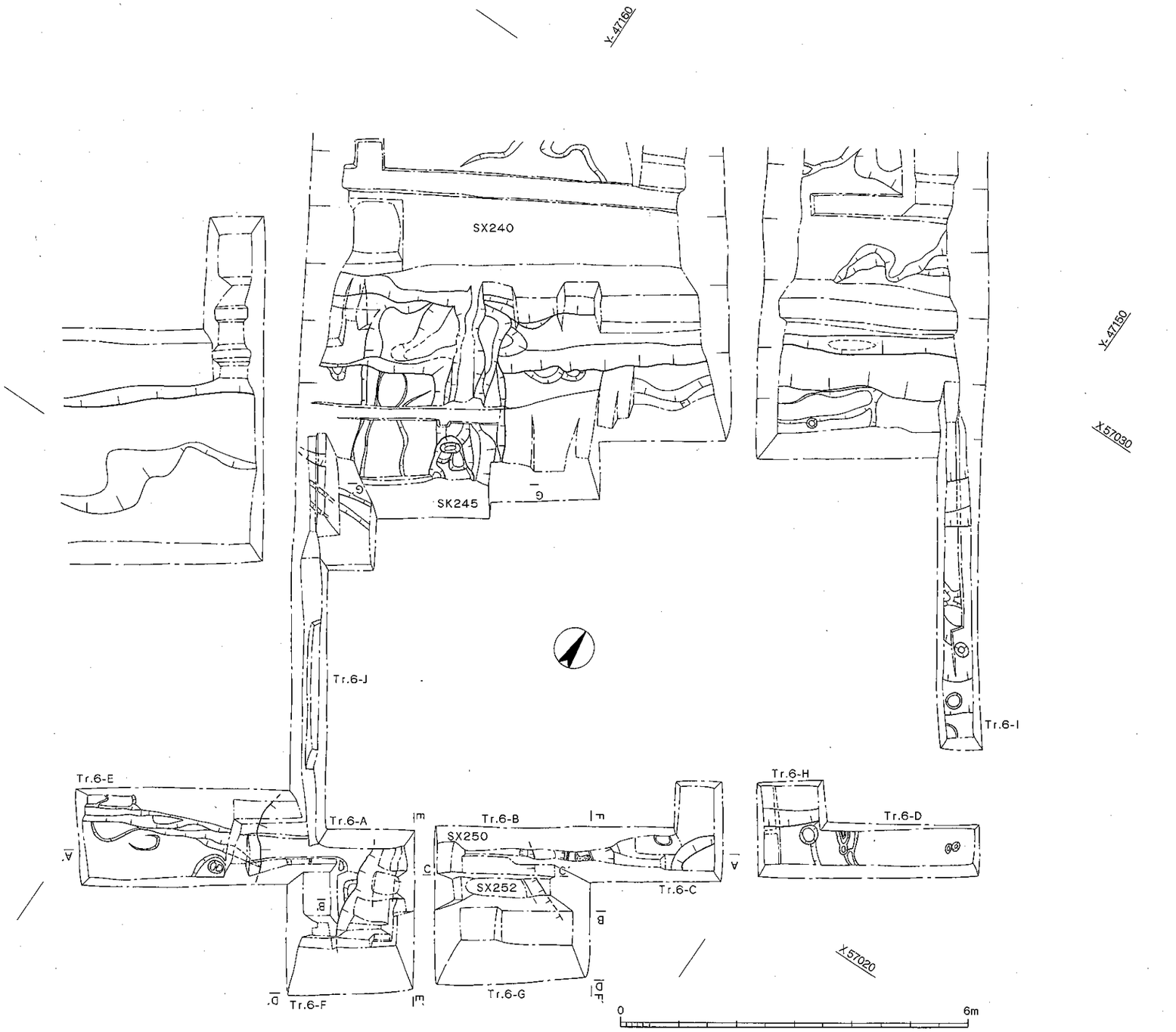


Fig.69　木樋掘形SX250周辺実測図（1/80）

た。この掘形は，築堤当初の基底部積土とその下位の地山を掘り込んでおり，下成土塁築成後に掘削されたことが分かる。掘り込み肩の標高は29.1m，掘形底の標高は26.8mである。また，この掘形は，外濠部付近でも痕跡を確認することができる。土塁裾で確認した溝状の掘形は約11m北へ延びており，上幅2.4m，下幅2.2m，深さ0.3m程度で，濠底の標高は27.2mである。

築堤当初の積土を切る

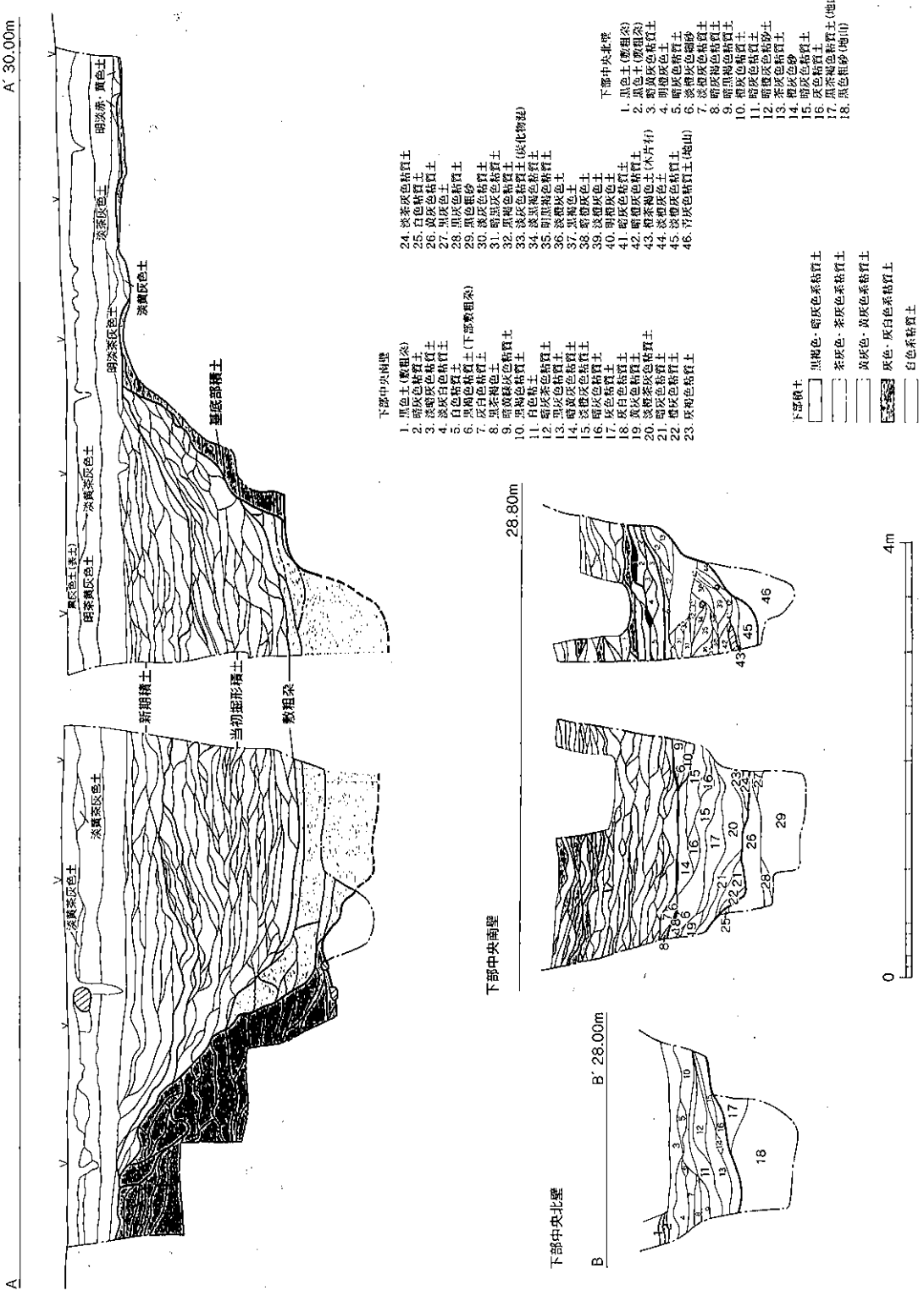
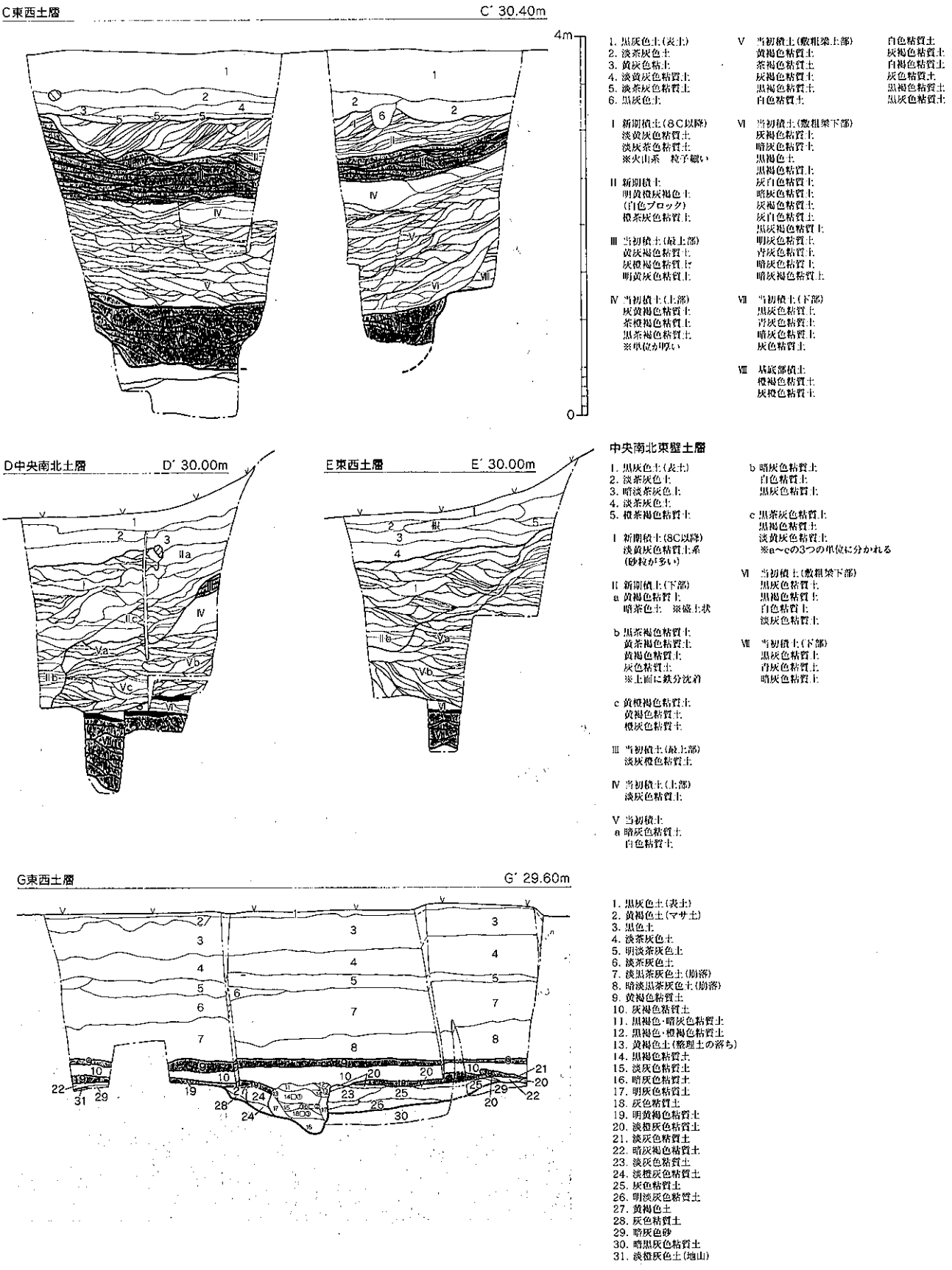


Fig.70　木樋掘形SX250土層図（1）（1/60）



1. 黒灰色土(表土)
2. 淡茶灰色土
3. 黄灰色粘土
4. 淡黄灰色粘質土
5. 淡茶灰色粘質土
6. 黒灰色土

Ⅰ 新期積土(8C以降)
淡黄灰色粘質土
淡灰茶色粘質土
※火山系　粒子細い

Ⅱ 新期積土
明黄橙灰褐色土
(白色ブロック)
橙茶灰色粘質土

Ⅲ 当初積土(最上部)
黄灰褐色粘質土
灰橙褐色粘質土
明黄灰色粘質土

Ⅳ 当初積土(上部)
灰黄褐色粘質土
茶橙褐色粘質土
黒茶褐色粘質土
※単位が厚い

Ⅴ 当初積土(敷粗築上部)
黄褐色粘質土
茶褐色粘質土
灰褐色粘質土
黒褐色粘質土
白色粘質土

白色粘質土
灰褐色粘質土
白褐色粘質土
灰色粘質土
黒褐色粘質土
黒灰色粘質土

Ⅵ 当初積土(敷粗築下部)
灰褐色粘質土
暗灰色粘質土
黒褐色土
黒褐色粘質土
灰白色粘質土
暗灰色粘質土
灰褐色粘質土
灰白色粘質土
黒灰褐色粘質土
明灰色粘質土
青灰色粘質土
暗灰色粘質土
暗灰褐色粘質土

Ⅶ 当初積土(下部)
黒灰色粘質土
青灰色粘質土
暗灰色粘質土
灰色粘質土

Ⅷ 基底部積土
橙褐色粘質土
灰橙色粘質土

中央南北東壁土層

1. 黒灰色土(表土)
2. 淡茶灰色土
3. 暗淡茶灰色土
4. 淡茶灰色土
5. 橙茶褐色粘質土

Ⅰ 新期積土(8C以降)
淡黄灰色粘質土系
(砂粒が多い)

Ⅱ 新期積土(下部)
a 黄褐色粘質土
暗茶色土　※盛土状

b 黒茶褐色粘質土
黄茶褐色粘質土
黄褐色粘質土
灰色粘質土
※上面に鉄分沈着

c 黄橙褐色粘質土
黄褐色粘質土
橙灰色粘質土

Ⅲ 当初積土(最上部)
淡灰橙色粘質土

Ⅳ 当初積土(上部)
淡灰色粘質土

Ⅴ 当初積土
a 暗灰色粘質土
白色粘質土

b 暗灰色粘質土
白色粘質土
黒灰色粘質土

c 黒茶灰色粘質土
黒褐色粘質土
淡黄灰色粘質土
※a～cの3つの単位に分かれる

Ⅵ 当初積土(敷粗築下部)
黒灰色粘質土
黒褐色粘質土
白色粘質土
淡灰色粘質土

Ⅶ 当初積土(下部)
黒灰色粘質土
青灰色粘質土
暗灰色粘質土

1. 黒灰色土(表土)
2. 黄褐色土(マサ土)
3. 黒色土
4. 淡茶灰色土
5. 明淡茶灰色土
6. 淡茶灰色土
7. 淡黒茶灰色土(崩落)
8. 暗淡黒茶灰色土(崩落)
9. 黄褐色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 黒褐色・暗灰色粘質土
12. 黒褐色・橙褐色粘質土
13. 黄褐色土(整理土の落ち)
14. 黒褐色粘質土
15. 淡灰色粘質土
16. 暗灰色粘質土
17. 明灰色粘質土
18. 灰色粘質土
19. 明黄褐色粘質土
20. 淡橙灰色粘質土
21. 淡灰色粘質土
22. 暗灰褐色粘質土
23. 淡灰色粘質土
24. 淡橙灰色粘質土
25. 灰色粘質土
26. 明淡灰色粘質土
27. 黄褐色土
28. 灰色粘質土
29. 暗灰色砂
30. 暗黒灰色粘質土
31. 淡橙灰色土(地山)

Fig.71　木樋掘形SX250土層図（2）(1/60)

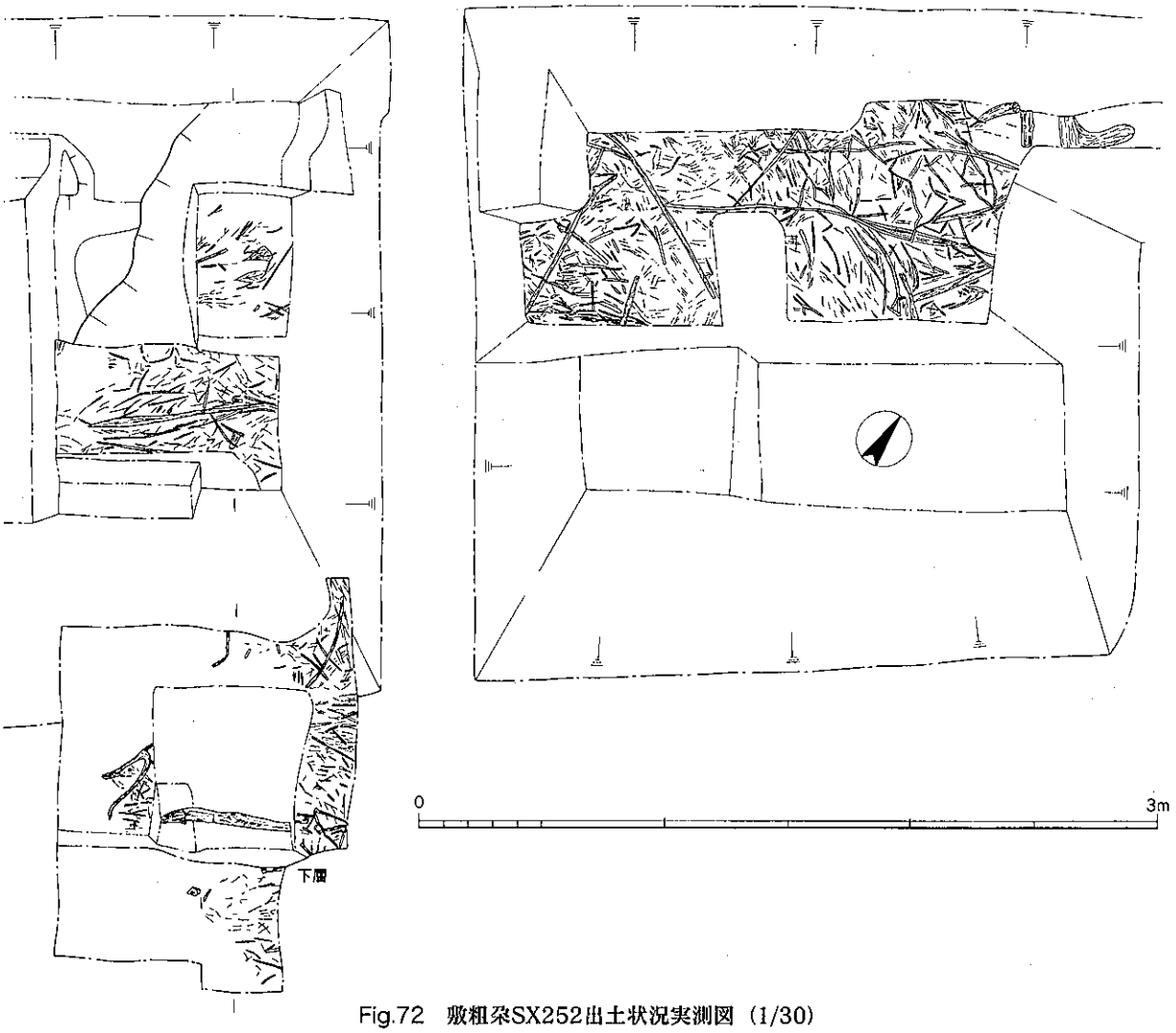
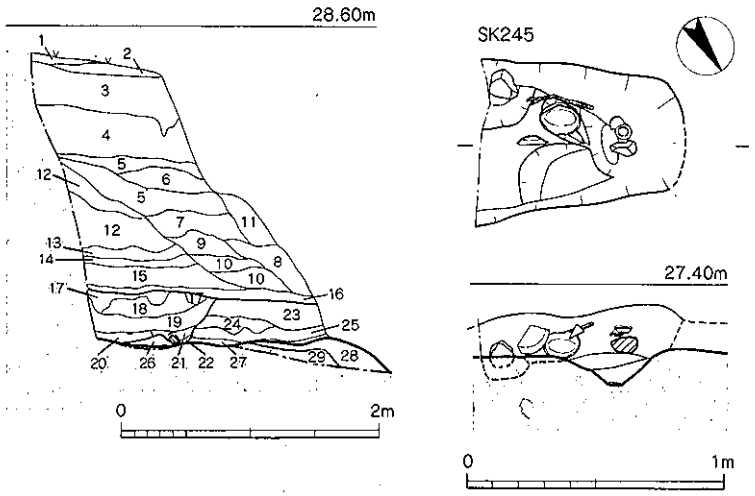


Fig.72　敷粗朶SX252出土状況実測図（1/30）



1. 黒色土（表土）
2. 黄灰色土（表土）
3. 黒灰色土
4. 明黄茶灰色土
5. 淡茶灰色土
6. 明淡茶灰色土
7. 淡灰茶色土
8. 淡灰色粘質土
9. 淡灰色粘質土（8より茶味強い）
10. 明黒茶灰色土（12の二次堆積）
11. 淡茶灰色土（4～5の二次堆積）
12. 明黒茶灰色土
13. 黄褐色粘質土（12がやや混）
14. 黄褐色粘質土
15. 灰褐色粘質土
16. 明灰褐色粘質土
17. 淡橙灰色粘質土
18. 黒褐色粘質土
19. 黒褐色粘質土
20. 淡黒褐色粘質土
21. 暗黒褐色粘質土
22. 暗茶褐色粘質土
SK245 埋土
23. 暗灰色粘質土
24. 暗灰色粘質土
25. 明灰色粘質土（ASO-4ブロック混）
26. 暗青灰色粘質土
27. 灰色粘質土
28. 白色粘質土
29. 灰色粘質土
地山

Fig.73　土坑SK245実測図（1/30・1/60）

掘形内の埋土は，掘削面に繋がる最下層では，暗灰色粘質土や淡橙灰色粘質土等，粘性は強い。掘形が自然の水みちになっていたためと考えられる。その上層では暗灰褐色粘質土や灰褐色粘質土を約20cm程度埋めている。そして，その上部には枝葉や樹木を敷いた敷粗朶SX252を埋設している（Fig.71・72）。この敷粗朶層は場所によっては，２層に亘っている。掘形中央部ではレンズ状となり，厚さ３～５cm程度になる。その上層から，本格的な積土が始まっており，大きく３つの単位に分かれる。まず，敷粗朶直上には白灰色や灰褐色，黄褐色や茶褐色の粘質土を５～10cm程度を単位として，厚さ80cm程度積んでいる。ただし，突き固めたというよりも，粘質土を丁寧に積んでいった状態である。その上層では，灰褐色粘質土を中心とした粘性土を厚さ30cm程度に盛ったように積む。そして，最上層には，暗灰色や明灰色粘質土等をより細かく積んでいる。これら，３つの単位層は，層序的には連続しており，土塁に直交する土層断面を見る限り，大きな時間差はなく，外濠へ向かって傾斜するように積まれていったことが分る。これは，土塁観察の項でも触れたが，築堤当初の基底部が外濠に向かって緩やかに落ちていく傾斜と対応するためと考えられる。また，これら掘形の積土は，新期の積土を積む際には，先端部を削り落としてその上層から新たに積土を積んでいる。このような積土の観察からも，下成土塁を築造して掘形を掘削した後，何らかの理由で木樋は埋設されなかったと考えられる。そして，敷粗朶を埋設しながら，掘形を埋めたと考えられる。

敷粗朶の埋設

土坑

ＳＫ245（40次）（Fig.73，PL.47）

西土塁前面40次調査区で検出した。土坑の検出地点は，その木樋の推定吐水口で，外濠と接する付近となる。土坑は，木樋埋設のために掘られたと考えられる溝状遺構の中央部で確認した。長軸0.75ｍ以上，幅0.60ｍ以上で，深さ0.30ｍを測る。主軸方位は，土塁軸に直交するため，Ｎ58°Ｗである。土坑は木樋掘形と考えられるＳＸ250の端部付近に掘られており，堆積土の暗灰褐色土を切っている。そして，この土坑は，黄褐色土，ブロックが混じる暗黒茶褐色土で埋められている。そのため，この溝状遺構，つまり木樋掘形前面の外濠にかかる付近の廃絶時期の下限を示している。土坑内からは，投棄した状態の土師器３個体分程度が床に貼り付くように出土した。出土土器から，11世紀中頃から後半の年代が考えられる。

SX250の廃絶を示す

観世音寺伝来木樋（Fig.74）

報告するこの木樋は，観世音寺に伝来したもので，現在，九州歴史資料館が借用・展示している。資料は，木樋の底板部材片だが，すでに両端部が切られており，本来の規模がどの程度であったか，不明である。ただ，この木樋底板一枚の長さについては，５次調査では６ｍを越える可能性の高いことが指摘されているが，資料の現在の大きさは，長さ322.0cm，幅87.0cm，厚さ27.5cmを測る。ただ，木樋の一枚枘作りに繋がる部分や鎹が打ち込まれた箇所は明瞭に残っている。器面については，手斧等の工具を使ったと考えられるが，既に風化が進んで鎹以外のキズ痕も多い。なお，この木樋がどの場所で出土したかについては不明である。

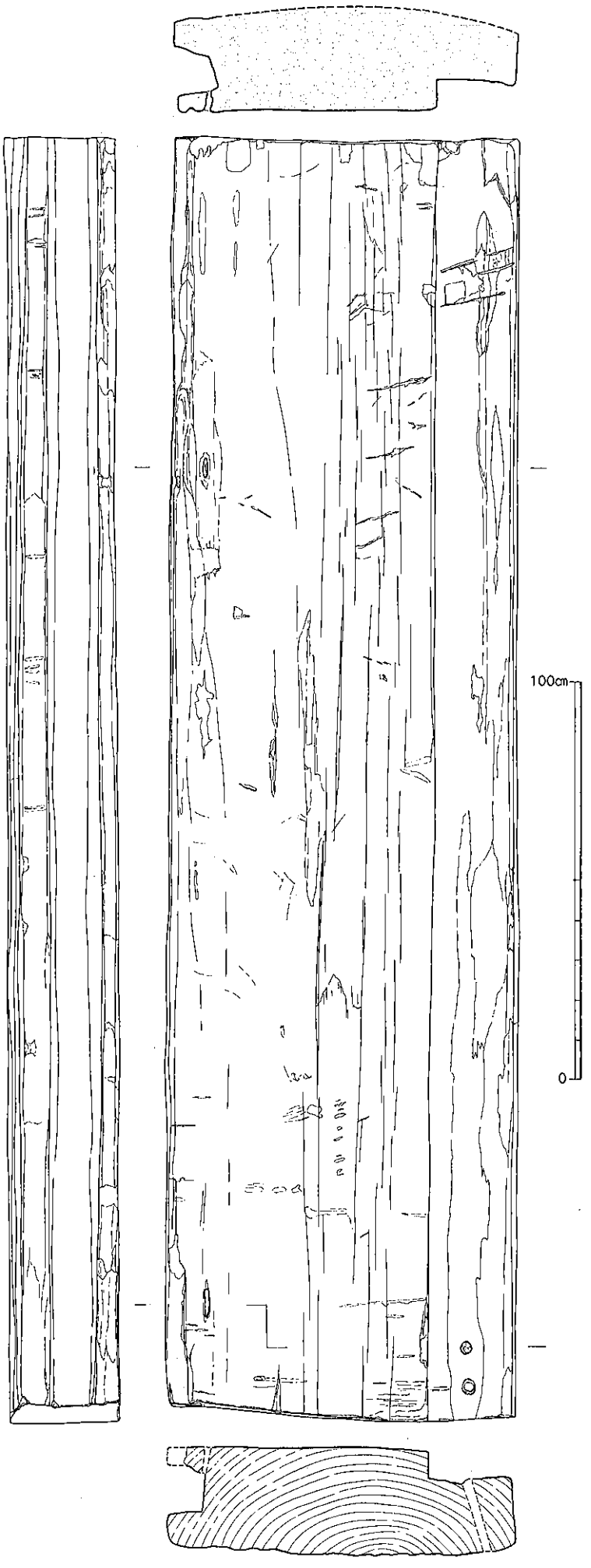


Fig.74　観世音寺所蔵木樋底板実測図（1/15）

（6）濠

1）外濠部

水城前面に防御施設としての外濠は，戦前の研究でも既に想定されていた。1970年以降の調査では，３次調査でその痕跡を確認していたが，明確な外濠の範囲を確定したのは1975年の５次調査である。この調査で，初めて土塁前面に滞水や流水を示す外濠の堆積層を確認し，約60ｍの地点で土手状の高まりを持って立ち上がることを明らかにした。その後，26・32・39・40次調査でも外濠の調査を行っている。このうち，西土塁西門地区で行われた26次調査では，門を通過する官道西側では溝状遺構のみで明確な外濠は確認できず，官道の東側より本格的な濠が始まることが明らかとなっている。さらに39・40次調査では，外濠が複数の溝からなることが分かっており，貯水の具体的な構造を考えるきっかけとなっている。

東外濠部

ＳＸ030（３次）（Fig.75）

３次調査では，下成土塁から外濠部にかけて２箇所のトレンチを設定した。土塁基底部の断割りを兼ねたＢトレンチでは，土塁前面に堆積する黄褐色砂質土層は，基底部際では緩やかに落ちていくが，約3.7ｍ付近で１ｍの比高差を持って急に落ち込む。そして，基底部裾から10ｍのところでさらに大きく落ち込み，淡褐色微砂層が堆積しており，地表から約３ｍの深さとなる。このような落ち込みと堆積する砂層は東のＡトレンチにおいても確認できる。砂層堆積から流水による影響があるが，基底部から10ｍ付近で急に落ち込む状況などから，外濠の痕跡と考えられる。Ａトレンチでは，基底部裾から約60ｍ付近で砂層が急に立ち上がり，シガラミ

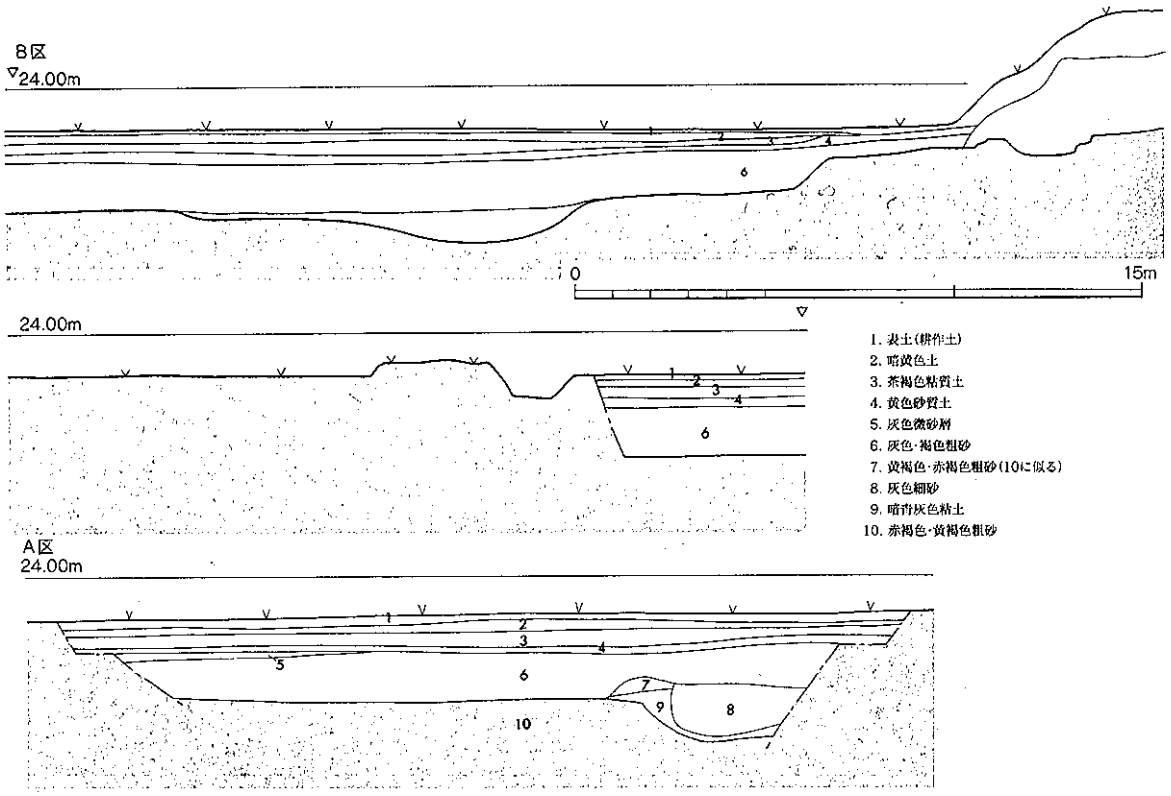
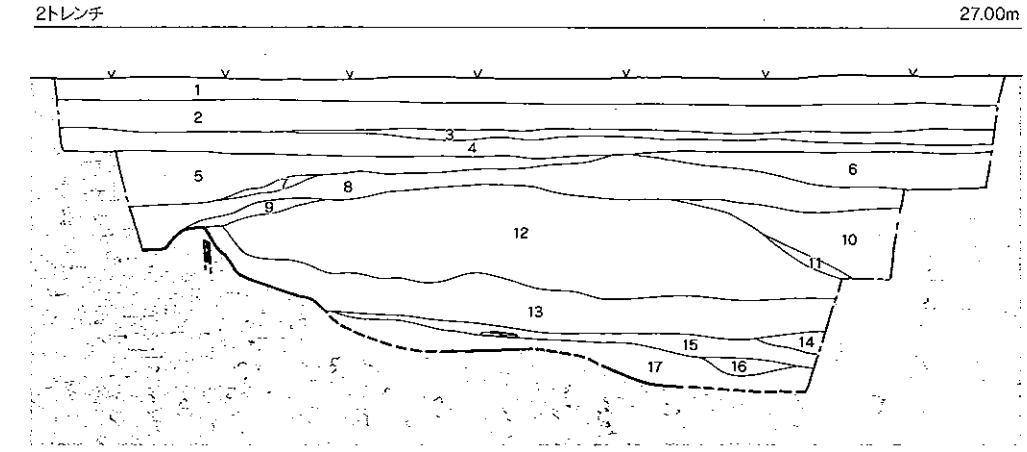
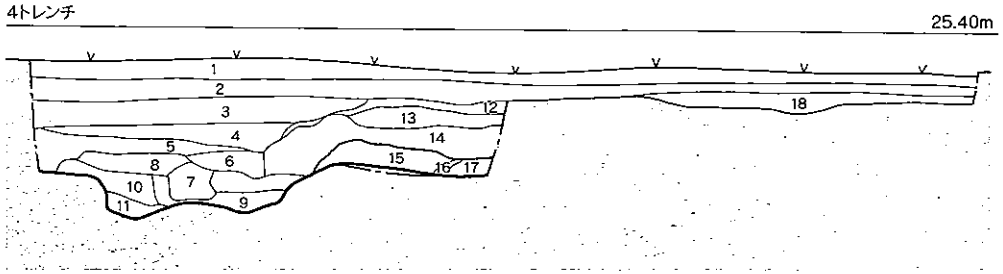


Fig.75　東外濠西端（３次）土層略図（1/200）



2トレンチ

1. 表土
2. 茶褐色土
3. 灰褐砂土
4. 褐色土
5. 灰色土
6. 茶灰粘質土
7. 淡灰荒砂土
8. 暗茶灰粘質土
9. 暗灰荒砂土
10. 暗青灰砂土
11. 黒灰砂質土(青灰砂が混在)
12. 青灰砂質土
13. 黒色粘質土(有機質で腐植物が混在)
14. 12に類似(黒色土が混在)
15. 黒灰色粘土
16. 黒灰色粘質砂土
17. 灰色荒砂



4トレンチ

1. 表土(黒色土)
2. 床土(暗黄褐土)
3. 黄灰色土
4. 灰色荒砂
5. 灰黄色砂質土(砂が多い)
6. 灰色砂(黄色粘土ブロック混入)
7. 暗灰色荒砂
8. 黄灰色粘質土
9. 黄灰色砂質土
10. 淡青灰色土(砂質をおびる)
11. 茶褐荒砂
12. 茶灰粘質土(一部砂質をおびるところがある)
13. 淡灰色砂質土(やや黄色味をおびる)
14. 茶褐粘質土
15. 茶灰砂質土(ややかたい)
16. 茶褐粘土
17. 茶灰色粘土
18. 13に同じ

外濠立上りSX041

3トレンチ

1. 表土
2. 黄灰粘質土(細砂混)
3. 灰色荒砂(礫混)
4. 灰色砂土
5. 暗灰色荒砂(礫混)
6. 2と同質(やや砂が混)
7. 淡灰青砂質土
8. 茶灰色粘質土
9. 黒灰色粘質土
10. 9に灰色荒砂が混在
11. 黒色粘質土(腐植土)
12. 灰白細砂
13. 腐植土(11に類似)
14. 暗茶灰砂礫土
15. 暗黄灰粘質土
16. 茶灰荒砂
17. 2よりやや茶色をおびる粘土層
18. 灰色細砂
19. 茶灰色荒砂
20. 茶褐色荒砂
21. 灰色礫層(砂が少ない)
22. 暗灰色粘質土(やや青灰色をおびる)
23. 11と同質
24. 3にやや茶色をおびる
25. 2に同質
26. 暗灰色細砂
27. 暗灰色荒砂
28. 暗茶灰色土
29. 青灰色砂質土
30. 27に同じ
31. 青灰色粘質土(地山)

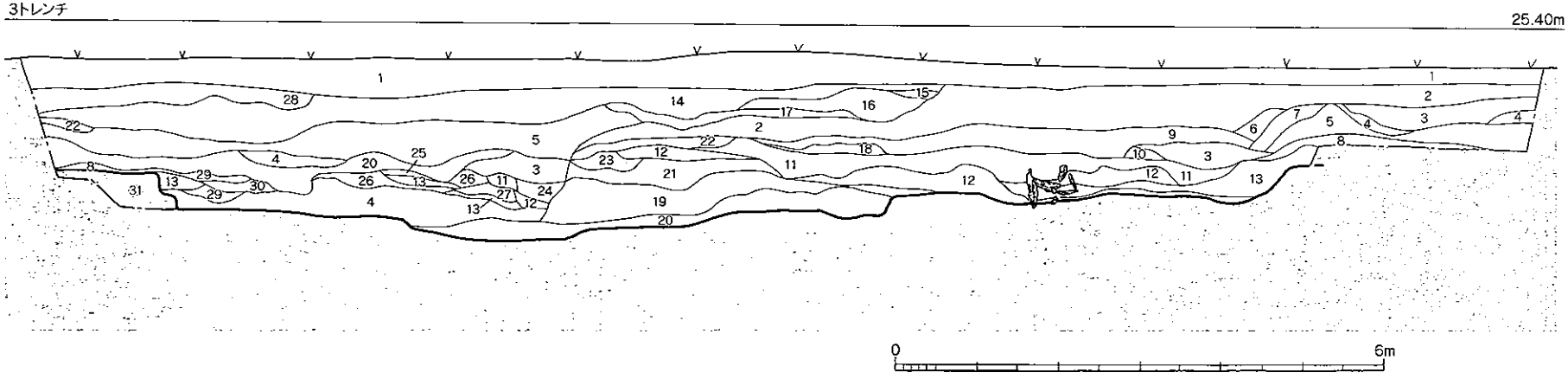


Fig.76　東外濠（5次）土層図（1/80）

シガラミ状の遺構

状の遺構を検出した。木杭と横に打たれた板状の木材を確認したが，周囲に粘土が充填されていた。このシガラミを古代水城の外濠遺構と即断することはできないが，60mの距離については，５次調査の成果と一致する。

ＳＸ040（５次）(Fig.76，PL.48)

東門地区の西側に幅約100mの間に４箇所のトレンチを設定した。１トレンチの状況については，（２）－１）で詳細を報告したが，外濠は幅約４mの平坦面（基底部）の端から始まる。この濠際では，シガラミ状の木片が見られたが，面的には拡がっていなかった。標高は約25mである。２トレンチは，基底部から約10mの付近に設定した。南端の底面の標高は24.90mであったが，そこから北側へは急に深くなり，地表から3.3m，標高23.25m付近が濠底になる。最下層は灰色粗砂で，その上層に黒灰色粘質土や青灰色砂質土等が堆積しており，流水と滞水を示す層と考えられる。３トレンチでは，地表から約２m，標高22.75m付近で濠底を検出した。さらに土塁裾から約68m，張り出した下成土塁平坦部の端から約60mの付近で濠の立ち上がりＳＸ041を検出した。濠底には，有機質を含んだ黒灰色粘質土が堆積しており，滞水状況を示している。立ち上がり肩の標高は24.00mである。そして，立ち上がりの確認を目的として

60m付近で立ち上がり

設定した４トレンチでは，３トレンチと同じく約60m付近でＳＸ041を検出した。この各トレンチの調査成果から，土塁基底部から約15m付近で急激に落ち込み，約60m付近で濠底が立ち上がることが明らかとなった。なお，下成土塁端から最も深い所で，深さ4.75mである。

ＳＸ041（５次）(Fig.76，PL.48)

５次調査３・４トレンチの下成土塁端から約60mの付近で検出した濠底の立ち上がりである。立ち上がりの標高は３トレンチで24.0m，４トレンチで24.2mである。特に４トレンチでは，硬い灰色砂質土と茶褐色粘質土から成る高まりとなっている。ただ，この４トレンチでは，立ち上がりの手前が急に落ち込み，上幅2.5m，深さ0.3m程度の溝状の遺構を確認している。３次調査では，約60m付近にシガラミ状の遺構が存在したという所見があるが，実態としては不明な点が多い。ただ，後述する欠堤部西側の状況を併せて考えれば，約60m付近の高まりを外濠の立ち上がりと見て問題はない。

西外濠部

ＳＸ221（39次）(Fig.78～80，PL.49～51，巻頭PL. 7)

39次調査御笠川欠堤部西側の２箇所に設定したトレンチで検出した大規模な溝状の遺構である。この欠堤部西側では，土塁基底部前面には小さな溝状遺構があるのみで直ぐに外濠の堆積層は確認できない。博多側に緩やかに地形が落ちていきながら，約35m付近で急激に落ち込み，本格的な外濠が始まっている。

残りの良い西側のトレンチでは，上幅15.0m，底幅7.0m，南側の肩からの深さ2.4mとなる。２箇所のトレンチで確認しており，少なくとも西側から東側へ，土塁に並走しながら約15m続くが，その先では大きく南東側へ折れている。ちょうど基底部が台形状に張り出した状態である。これより東では，砂層が南北方向に大きく貫入して，砂層堆積となっている。

溝内の堆積層の上部には，現代まで使用されていた耕作土と床土が幾面かある。その下位で

濠の埋没は13世紀頃

厚さ40cm程度の堆積を持つ淡茶灰色土（５層）が濠内に広く堆積している。出土遺物の上限は，13世紀以降であり，この堆積をもって外濠が完全に埋没したことが分かる。その下位では，暗

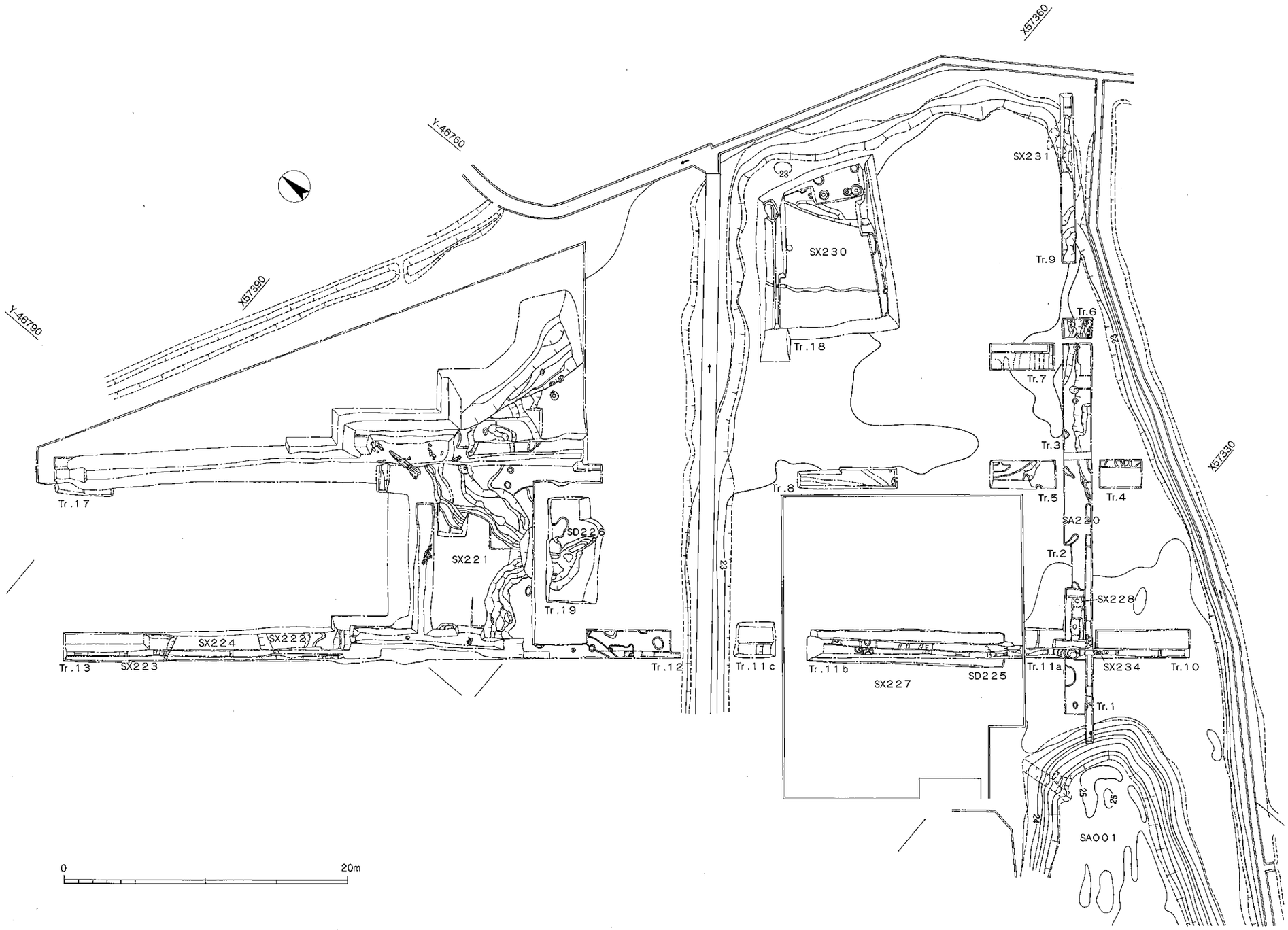


Fig.77　西外濠欠堤部西側（39次）地形図（1/300）

灰褐色粘質土や灰色粘質土が厚く堆積しており，その中に灰色粗砂や白灰色砂が複雑に貫入している。特に残りの良い西側のトレンチでは，暗灰褐色や灰色の粘質土の堆積は，１m近くになる。東側も同様の堆積だが，河川に近いためか全体の堆積は薄い。この粘質土を中心とする層の下位では，粗砂や細砂層の堆積が続き，やがて遺物を含まない粗砂層になる。特に両トレンチの落ち込んだ濠底では，噴砂のように砂が盛り上がったり，落ち込んだりする「パイピング」が見られる（下山正一氏教示）。この付近に流木が集まっており（Fig.80），流水の中心があったことに起因すると考えられる。また，濠底の東西方向の高低差は大きくない。この濠底からは，流木のほかに，瓦や土器等が出土している。土器は９世紀代に比定され，この時期までは，外濠が流水しながら開溝していたことが分かる。その後，粘質土を形成した滞水状態と流水による砂層の貫入を幾度か繰り返しながら埋没していったと考えられる。ただ，堆積層中位の厚い灰色粘質土などにも９世紀代の土器が出土することから，濠の埋没は９世紀以降急速に進行したと考えられる。自然科学分析によれば，濠中位の粘質土にはイネやヨシが含まれることから，この付近は急速に湿地帯となったと想定される。

濠底に流木

９世紀代には開溝

調査では，人力による掘削で濠底を確認したが，築堤当初の掘削面が残存しているかについては，課題である。幾度かの流水によって，洗われた可能性も考えられ，砂層に当初から明確な掘り込みを持つ溝であったかも検討の余地がある。この西側トレンチの落ち始めの標高は21.9m，濠底は19.3m，東側では落ち始めの標高21.8m，濠底は19.5mである。現在の御笠川の河床は19.1mであり，高低差はない。

ＳＸ222（39次）（Fig.79・81，PL.51）

39次調査欠堤部地区西側で検出した。ＳＸ221の立ち上がりから1.6m付近にある外濠内の２条目の溝である。上幅3.0m，底幅0.8m，深さ0.6mとなる。堆積層をみると上部には粗砂と粘質土の堆積があり，下層には灰色砂と粘質土が続いている。ＳＸ221と直接関係するかは検討を要するが，淡灰色粘質土（５層）下位であり，埋没の下限は同時期である。

ＳＸ223（39次）（Fig.79・81）

39次調査欠堤部地区西側で検出した。ＳＸ224を挟んで７m北側に位置している外濠内の３条目の溝である。現状では，上幅8.2m，深さ1.3mで，断面レンズ状に掘り込まれた溝である。淡茶灰色土の下位に灰色や暗灰褐色粘質土，黒褐色粘質土が堆積している。出土遺物はないが，層位的には中世以前に比定され，ＳＸ221と同時期に存在している。南側の立ち上がりの肩は，基底部裾から約61mの距離にあたる。既に外濠の基準幅の60mを超えているが，これは付近の外濠の始まりが，基底部から35mで始まることと関係しているのかもしれない。

ＳＸ140（32次）（Fig.82，PL.14）

32次調査西門地区東側で検出した掘り込みである。この32次調査地は木樋埋設地であり，調査では，既に木樋が抜き取られたことが明らかとなっている。調査の所見では，木樋吐水口に楕円状に掘り込んで，抜かれたと考えられている。現状で楕円形を呈する掘形底面の大きさは，東西・南北幅約６m程度になる。調査区内は砂層堆積で，流水の影響を受けやすかったようであり，埋土は，崩落による粘質土や砂の二次堆積を中心とする。そのため，これが本来のプランであったかは不明である。また，この上部は木樋の抜き取りＳＸ135とも重複する。ＳＸ135については，木樋の項で述べている。

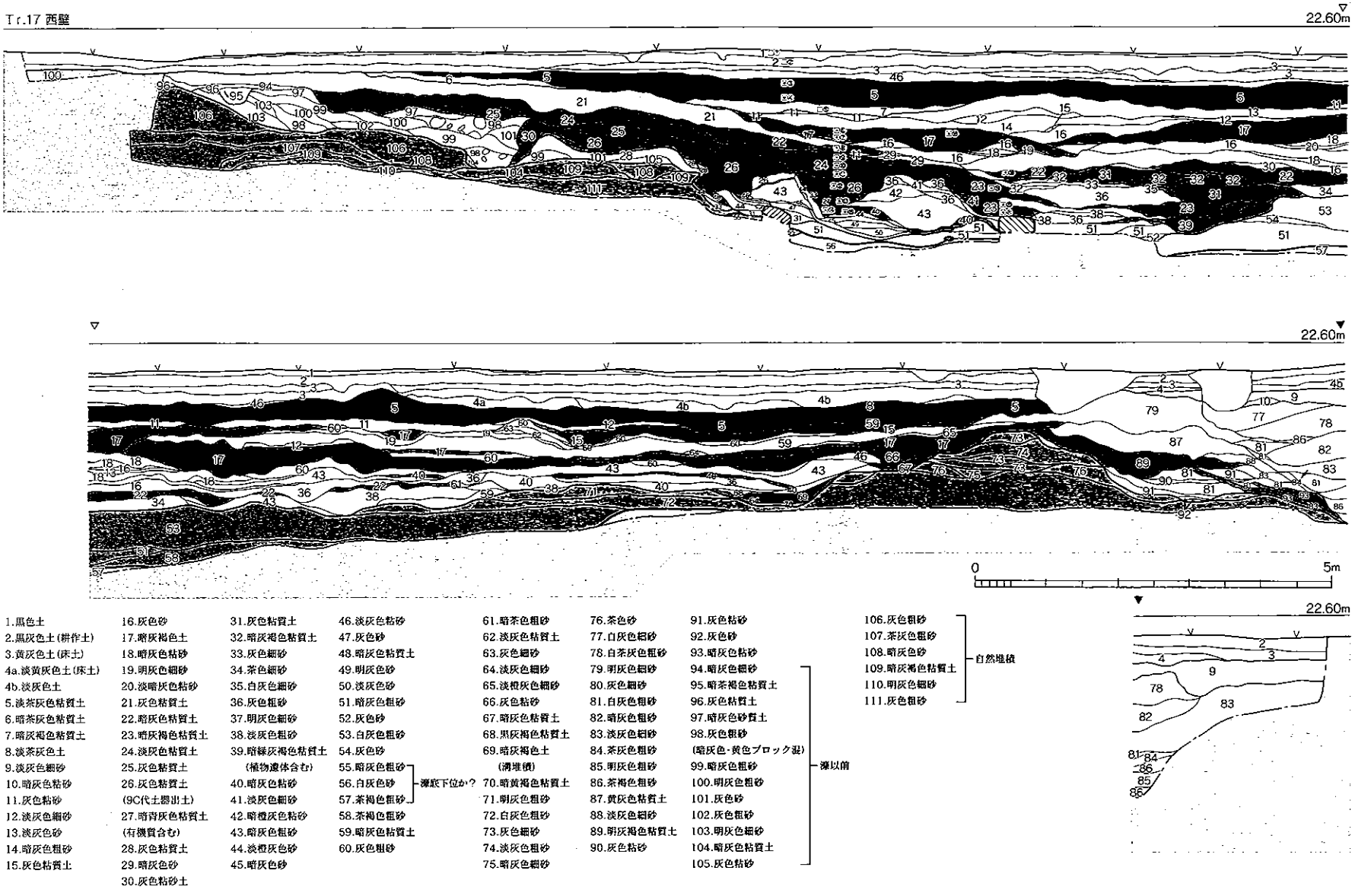


Fig.78　西外濠欠堤部西側（39次）土層実測図（1）(1/80)

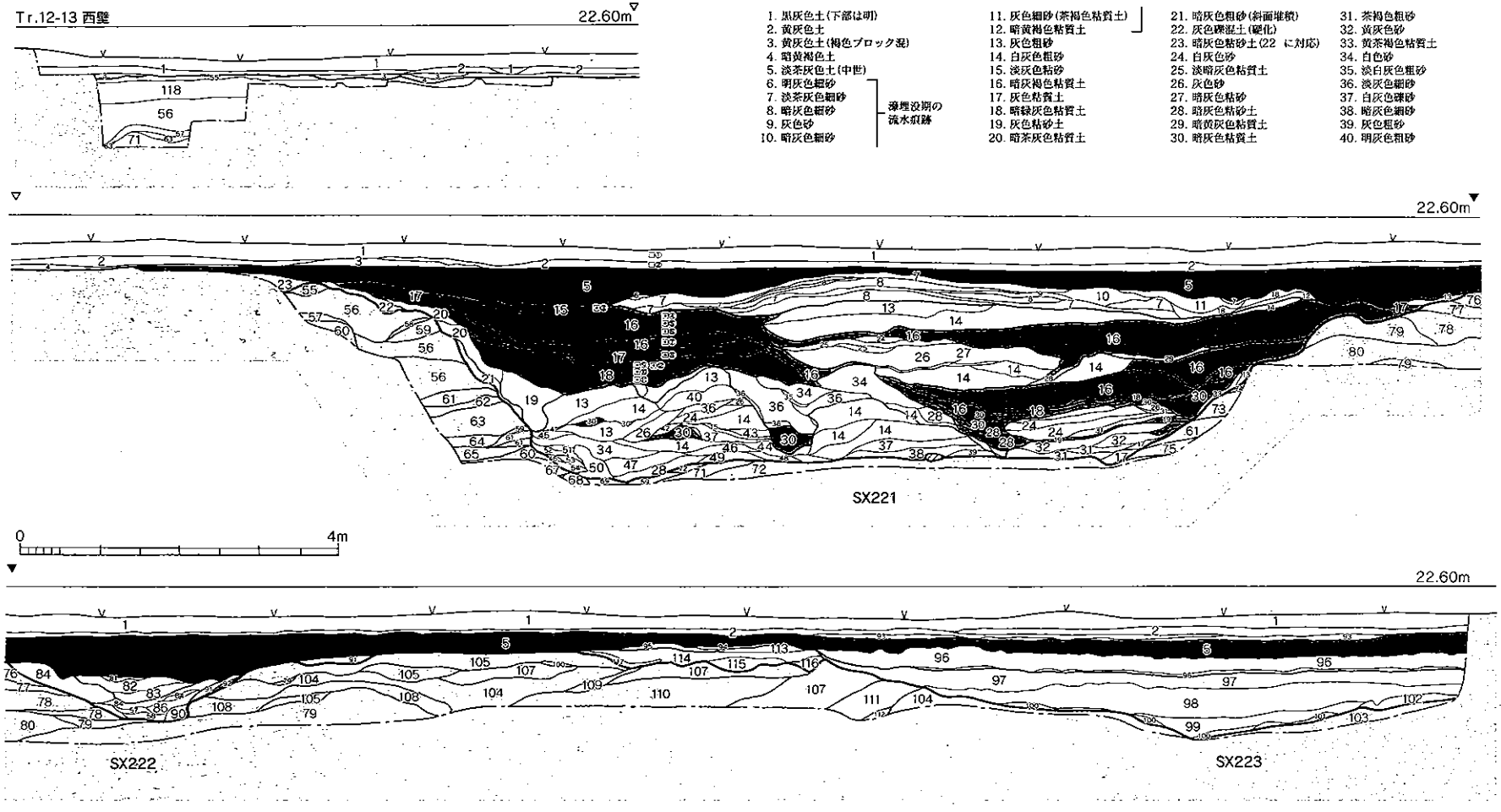


Fig.79　西外濠欠堤部西側（39次）土層実測図（2）(1/80)

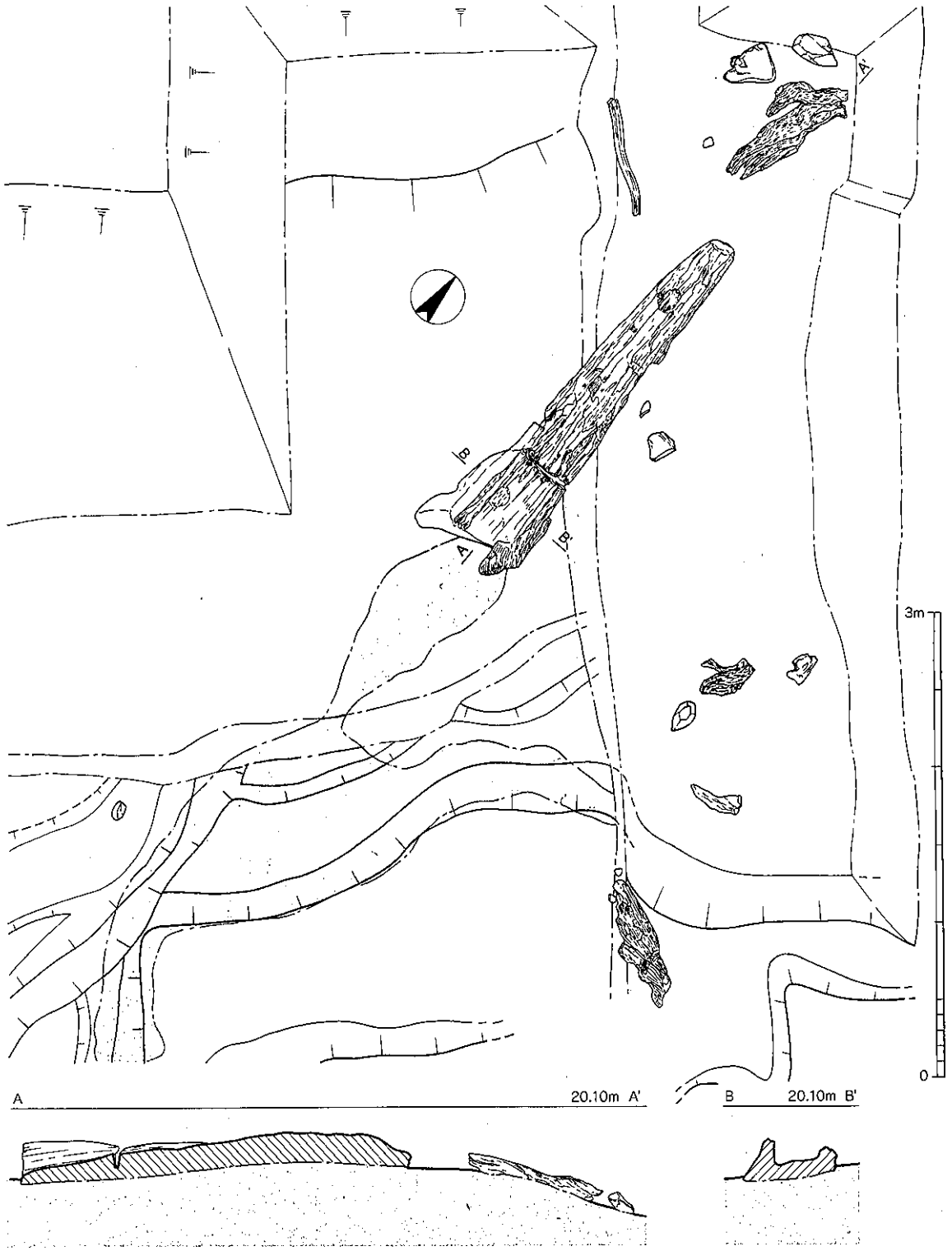


Fig.80　西外濠SX221内最下層木材出土状況実測図（1/40）

ＳＸ240（40次）（Fig.83・84，PL.52・53）

40次調査西門地区東側で検出した。１トレンチ，５トレンチに亘って確認した溝状の遺構である。約15ｍは確実に土塁に並走する。１トレンチでは，土塁裾から延びる6.6ｍの基底部平坦面の北端から急激に落ち込んでおり，溝（外濠）が始まっている。断面レンズ状に掘り込まれている。１トレンチでは，上幅9.4ｍ，底幅4.2ｍ，北側立ち上がりからの深さ1.10ｍである。

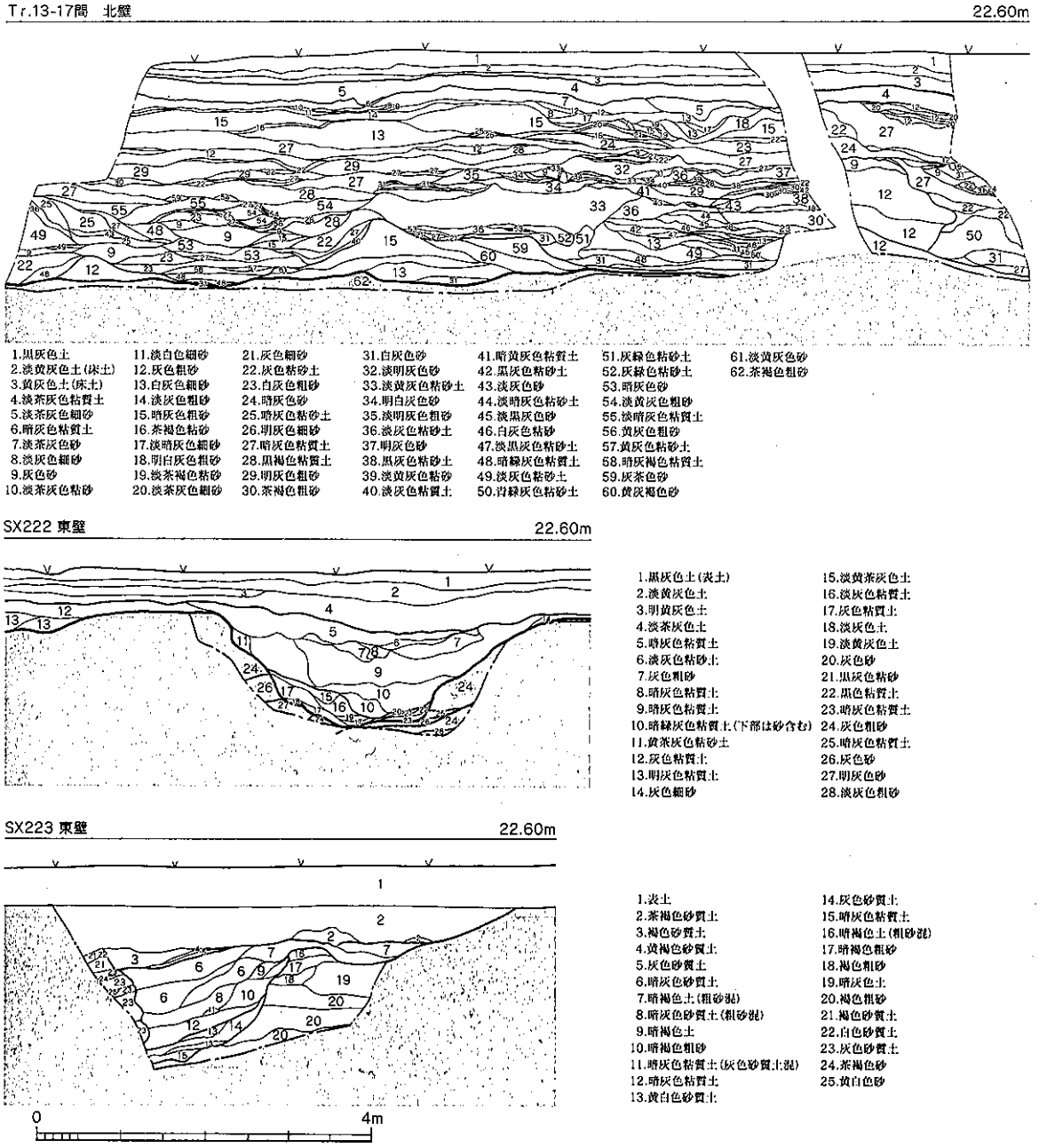


Fig.81　西外濠欠堤部西側（39次）土層実測図（3）(1/80)

５トレンチでは，上幅8.2m，底幅4.2m，北側立ち上がりからの深さ0.8mになる。両トレンチにおける，外濠内の堆積状況は，上部は何面かの水田耕作層であり，陶器の暗渠が埋設されているため，最近まで使用されていることが分かる。下部については，両トレンチで暗灰色粘質土の水田層が存在しており，５トレンチでは中世の遺物が出土している。ただし，両トレンチの最下層には，いずれも黒褐色粘質土が堆積している。５トレンチでは，濠底直上に堆積するこの層から，８世紀代の土器と杭列ＳＸ253・254を検出している。杭の上面が削平されることや，シガラミの状況からこの層は，外濠が機能した時期のものと考えられる。１トレンチでは20cm，５トレンチでは10cmの深さである。また，両トレンチ北側の立ち上がりは，いずれも標高27.4mであり，濠底の標高は１トレンチで26.3m，５トレンチで26.6mとなる。さらに西側の４－２トレンチでは，26.8m前後が濠底となっており，御笠川に向かって傾斜して

濠底に８世紀代の土器と杭列

いることが分かる。このような状況から，おそらく，濠底の掘削によって，水の流れを考慮した傾斜を作り出したと考えられる。

ＳＸ241（40次）（Fig.83，PL.52）

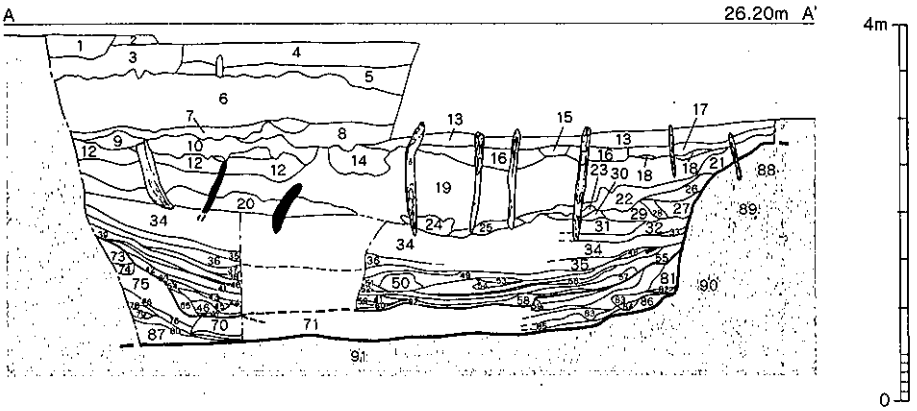
40次調査３トレンチで検出した。ＳＸ240北側の立ち上がりから約12m，基底部から21.2mの地点で再び北側へ傾斜が始まっている。さらに落ち際から北側へ10.8mトレンチを拡張したが，立ち上がりは確認できていない。堆積層は約0.8mであり，上層は砂層，下層は暗灰色を中心とした粘質土が堆積している。最下層には滞水を示す暗灰色粘質土が20cm程度堆積している。その下位の地山層は青灰色粘質土である。時期を示す遺物は出土していない。

ＳＸ242（40次）（Fig.83，PL.52）

40次調査２トレンチで検出した。ちょうどＳＸ240・241の間に位置している溝状遺構である。上幅1.40m，下幅0.90m，深さ0.25mである。上層には黒褐色粘質土が堆積するが，下層は粗砂層である。柱列に切られている。現状では，時期比定する遺物はないが，土塁に並走することや，埋土の状況を見る限り，ＳＸ240・241と近接する時期の可能性が高い。

ＳＸ108（26次）（Fig.28，PL.53）

26次調査西門地区東側で検出した。部分的なトレンチ調査のため，濠幅等は確定できていない。現地表面から約1.6mは現代の客土であり，その下位で粘質土の堆積層がある。このうち，最下層となる青灰色粘質土や灰青色粘質土が外濠に直接関る堆積層の可能性が高い。基底部の端から濠底までの深さは，約2.7mであり，濠底の標高は27.0mである。調査区東側の40次調査で検出した幅9.2mの溝状遺構ＳＸ240に直接繋がると考えられる。



A-A'

SX137上層
1. 暗灰粘土
2. 淡灰土（耕作土）
3. 灰褐色土
4. 暗灰色土
5. 灰褐色粘質土

SX135①層
6. 暗灰色粘質土
7. 淡茶色砂混灰色土
8. 暗灰茶色土
9. 暗灰色砂質土

SX135③層
10. 黒色粘土ブロック混淡黄茶色粘土
11. 黒+淡青灰+淡茶色粘質土
12. 淡青灰粘土混黒色（粘質）
13. 青灰粘土+白色粘土+灰黄粘質土
14. 淡青灰色粘土混淡黄茶色粘土
15. 15の全部が細かく混ざる
16. 15よりブロック大きく粘性高い
17. 15より粘性高い
18. 褐色粗砂

SX135④層
19. 黒色粘質土
20. 19に灰色砂混
21. 黄色粘土混黒色土
22. 19に粗砂混（14に同じか）
23. 21に黄色粘土混

SX135④層
24. 黄色粘土ブロック+灰黄色砂
25. 22に黄色粘土混

SX135⑤層
26. 暗灰色砂質土
27. 26に黄色粘土混
28. 暗灰色土
29. 青灰色粘質土
30. 黄色粘土ブロック
31. 灰色粗砂
32. 黄色粘土混黒色粘質土
33. 灰黄色粘質土
34. 褐色粗砂
35. 淡黄褐色粗砂
36. 黄褐色粗砂

SX135⑥層
37. 灰色粗砂
38. 黒茶色粘土+青灰色粘土
39. 灰色砂質土
40. 淡黄褐色粗砂
41. 淡灰色粘土（64と同じか）
42. 70+71
43. 黒茶色粘土
44. 41に同じ

SX135⑥層
45. 白灰色粘土
46. 黒色粘土
47. 青灰色粘土
48. 暗茶色粘土
49. 黒茶色粘土
50. 白黄色粘土
51. 茶褐色粗砂
52. 青灰色粘土
53. 黄褐色粗砂
54. 茶色粘質土
55. 淡灰色粘土
56. 淡黄色粗砂
57. 淡黄色粗砂
58. 淡黄色細砂
59. 淡灰色粘土
60. 白黄色細砂
61. 灰色粗砂
62. 暗茶褐色砂（硬化層）

SX135⑦層
63. 淡灰色粘土（ブロック）
64. 灰色砂
65. 灰茶色砂
66. 馬糞層塊混灰色砂

SX140a層
67. 灰色・黄色粗砂互層
68. 黄色粗砂
69. 黄褐色粗砂

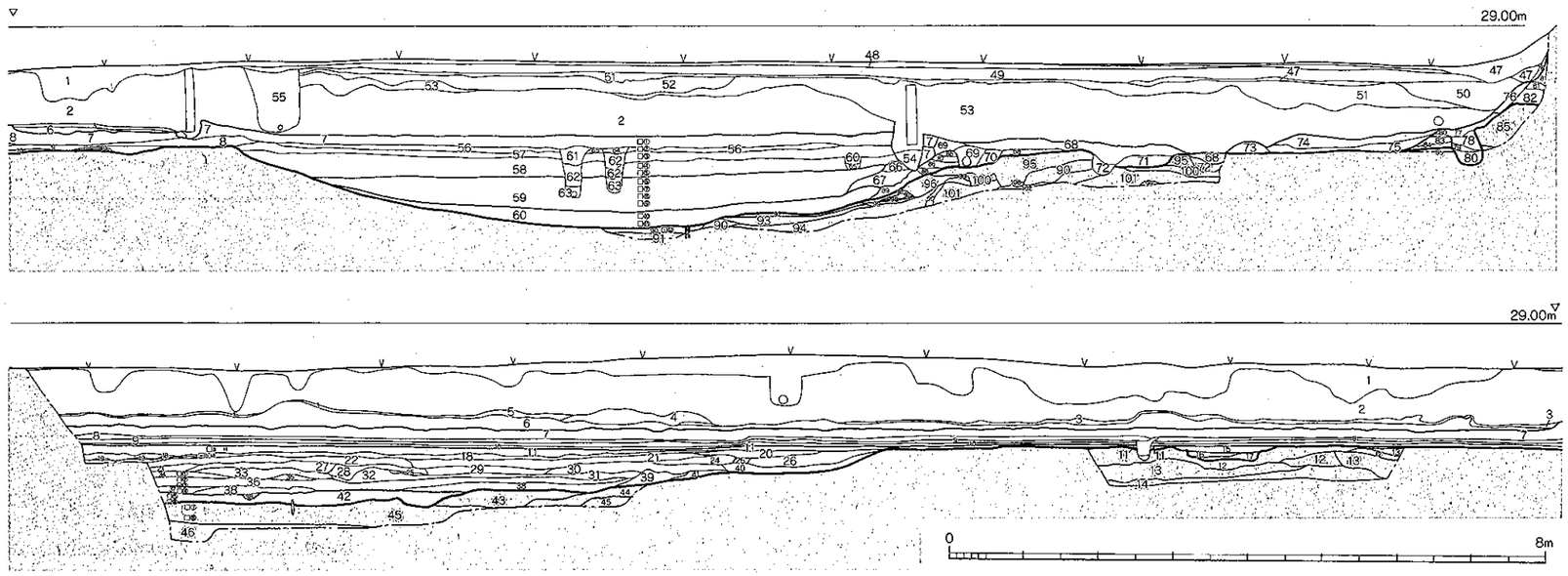
SX140b層
70. 淡青白粘土
71. 灰色粘土混黄褐色粗砂
72. 黄褐色粗砂
73. 黒色粘土
74. 淡灰色粘土（ブロック）
75. 青灰色粗砂層（粘土混）
76. 青灰色粘土
77. 黒茶色粘質土
78. 黄褐色粗砂
79. 灰色粘土
80. 黄褐色粗砂

SX140c層
81. 灰色粘土
82. 灰色細砂
83. 灰色粘土
84. 灰色粗砂
85. 灰色粘土
86. 黒茶色粘質土

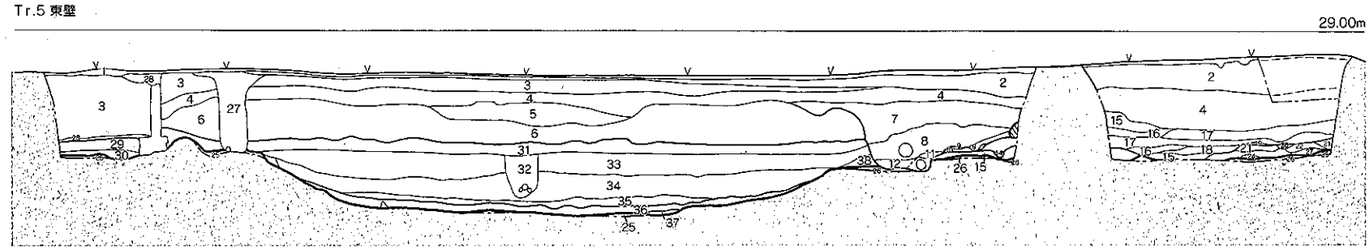
SX140d層
87. 灰色粗砂
88～91. 灰色粘土・黒茶色粘質土（地山）

Fig.82　西外濠（32次）土層図（1）（1/80）

Tr.1～3 東壁



Tr.5 東壁

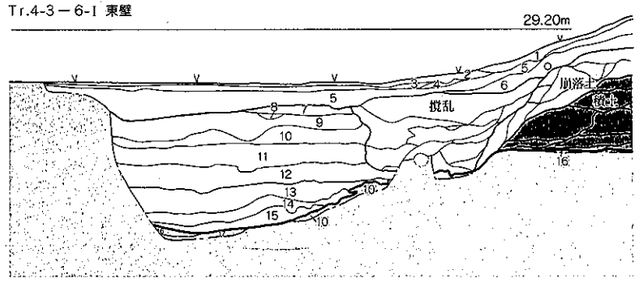


Tr.5

1. 黒灰色土(表土)
2. 橙灰色土(真砂土)
3. 橙褐色礫混土(真砂土)
4. 灰色礫混土
5. 緑灰色土 (真砂土,水の影響)
6. 黄緑灰色土(真砂土)
7. 灰緑色土(撹乱)
8. 緑灰色礫混土
9. 緑色粘質土
10. 淡灰色粘質土
11. 黒灰色土
12. 黒色粘質土
13. 黒色粘質土
14. 黒灰色粘質土
15. 黒灰色粘質土
16. 青黒灰色土
17. 黒色粘質土
18. 灰色粘質土
19. 灰青色粘質土
20. 黄灰色粘質土
21. 淡茶灰色粘質土
22. 白色粘砂土
23. 淡灰色粘質土
24. 青灰色粘質土
25. 淡灰色粘質土(地山)
26. 青灰色粘質土(地山)
27. 黄橙褐色土(カクラン)
28. 黒色粘質土
29. 黒灰色粘質土(Tr1.7)
30. 橙灰色粘質土(Tr.1.10)
31. 暗灰色土(水田面(Tr.1.7)
32. 黄褐色土(暗渠撹乱)
33. 橙茶灰色粘質土(床土Tr.1.58)
34. 暗灰色土(Tr.1.59)
35. 明灰色土(耕水田,腐蝕土)
36. 黒褐色粘質土 (外濠堆積層Tr.1.60)
37. 灰黄色粘質土(濠堆積層)
38. 灰色粘質土

積土状

Tr.4-3－6-1 東壁



Tr.4-3－6-1

1. 黒灰色土(表土)
2. 淡黒灰色土(産屑)
3. 淡灰色土
4. 茶褐色土
5. 緑灰色土(産屑)
6. 暗茶褐色土
7. 灰緑色粘質土
8. 黒灰色土
9. 青緑灰色土(真砂土)
10. 黒色土(水田Tr.5.31)
11. 橙灰色土(床土Tr.5.32)
12. 灰色粘質土(旧耕作土)
13. 黒灰色粘質土
14. 黒褐色粘質土(Tr.5.36)
15. 黒褐色粘質土(青灰色ブロック混)
16. 白色粘質土(地山)
17. 淡灰色粘質土(地山)

Tr.1～3

1. 黒灰色土(表土)
2. 橙色土
3. 黄橙色土
4. 赤橙色土
5. 黄橙色土
6. 灰褐色土
7. 黒色土 ┐水田
8. 黒灰色土 ┘
9. 灰色土
10. 黄灰色土
11. 黒色土(青灰色粗砂混)
12. 青灰色粗砂 ┐地山
13. 青白色粘土 ┘
14. 青白色粘砂土
15. 黒褐色粘質土 ┐溝
16. 灰褐色粗砂 ┘
17. 灰白色粗砂
18. 黄灰色粘質土
19. 黄白色粘質土
20. 灰褐色粘質土
21. 黄灰色粗砂
22. 茶褐色粗砂
23. 黄灰色粘質土
24. 赤茶色粗砂
25. 暗灰褐色粗砂
26. 灰色砂質土
27. 黄茶色粗砂
28. 茶色粗砂
29. 青灰色粘質土
30. 赤茶色粗砂
31. 灰褐色粘砂土
32. 灰褐色砂質土
33. 青灰色粘質土(灰褐色粗砂)
34. 灰色粘質土
35. 暗灰色粘質土(粗砂混)
36. 暗灰色粘質土
37. 灰褐色粘質土
38. 灰黒色粘砂
39. 青灰色粘砂土
40. 灰色砂質土(青灰色粘土ブロック混)
41. 青茶色粗砂
42. 暗灰色粘質土
43. 青灰色粘砂土
44. 青灰色粘砂土
45. 青灰色粘質土
46. 青緑色粘質土
47. 茶色土(表土)
48. 灰色粗砂土
49. 橙色土(真砂土)
50. 黄色土(灰色土混)
51. 茶色土
52. 茶褐土
53. 橙色土・暗茶色土
54. 灰色粘質土(撹乱)
55. 暗茶色土(撹乱)
56. 黄褐色土(床土)
57. 灰褐色土
58. 灰褐色土(床土)
59. 暗灰色粘質土
60. 黒褐色粘質土
61. 灰褐色土
62. 青灰色粘質土(黄灰色・灰色土混) ┐暗渠
63. 青灰色粘質土(枝混) ┘
64. 暗褐色土
65. 青灰色粘質土(枝混)
66. 暗灰色粘質土(赤茶色ブロック混) ┐崩落土
67. 暗灰色粘質土(赤茶色ブロック混ざり) ┘
68. 暗褐色土 ┐
69. 暗灰褐色土 │
70. 暗灰褐色土(黄褐色土ブロック混) │
71. 暗褐色土(黄褐色ブロック混) │撹乱
72. 灰白色砂質土 │
73. 暗青灰色粘質土 │
74. 暗茶色粘質土 │
75. 灰褐色粘質土 ┘
76. 暗茶色土
77. 黄白色粘質土
78. 黄灰色粘土 ┐撹乱
79. 灰黒色土 │
80. 暗灰色粘質土 ┘
81. 黄白色粘砂土 ┐
82. 暗灰色粘質土 │積土
83. 淡白灰色粘質土 │
84. 茶黄灰色粘質土 ┘
85. 黄白色粘質土(バイラン土・地山)
86. 赤茶色土 ┐
87. 茶褐色土 │積土
88. 暗褐色土(白色粗砂混) │
89. 黄白色粘質土(黄色粗砂混) ┘
90. 青白色粘砂土 ┐
91. 黄色細砂 │
92. 白色粗砂・黄色粗砂 │
93. 黄色粗砂 │地山
94. 白色粗砂 │
95. 青白色粘砂(黄色粘砂混) │
96. 黄色粘質土(暗褐色粘質土混) │
97. 黄色粘質土 │
98. 灰白色粘質土 │
99. 黄白色粘砂土 │
100. 黄灰色粘砂土 │
101. 青灰色粘質土 │
102. 白色粘質土 ┘

Fig.83　西外濠（40次）土層図（2）（1/80）

溝

ＳＤ122（26次）（Fig.85，PL.54）

土塁に並走する溝

26次調査西門地区西側で検出した土塁に並走する溝である。ちょうど基底部端から約４ｍの付近にあたる。上幅3.1ｍ，深さ0.5ｍで，溝肩の標高29.6ｍ，溝底29.1ｍである。暗灰色粘質土や灰色砂の互層となる堆積層からなる。上層の６層暗緑褐色土からは，中世と考えられる土師器片等が出土している。

ＳＤ190（38次）（Fig.47，PL.16）

38次調査西門地区南側で検出した。土塁際に並走する溝である。流路状の落ち込みであり，ＳＤ122に連なることから，一連の溝と見られる。

ＳＤ225（39次）（Fig.77・81，PL.54）

39次調査欠堤部西側で検出した。下成土塁際で並走する溝である。上幅5.4ｍ，南側肩からの深さは0.9ｍで，断面レンズ状を呈している。明確なこの溝の堆積層は，上層の60cm程度である。上層は灰色や黄褐色の粘質土で，下層は溝の直接の堆積を示す灰色細砂や粘質土となる。レンズ状に堆積しており，溝が機能した後，滞水状態となりながら埋没したと見られる。基底部土塁際の排水のための溝と考えられる。

ＳＤ226（39次）（Fig.77）

欠堤部西側で検出した。東側の南北トレンチでＳＸ221の落ち際で見られる幅1.8ｍ，深さ

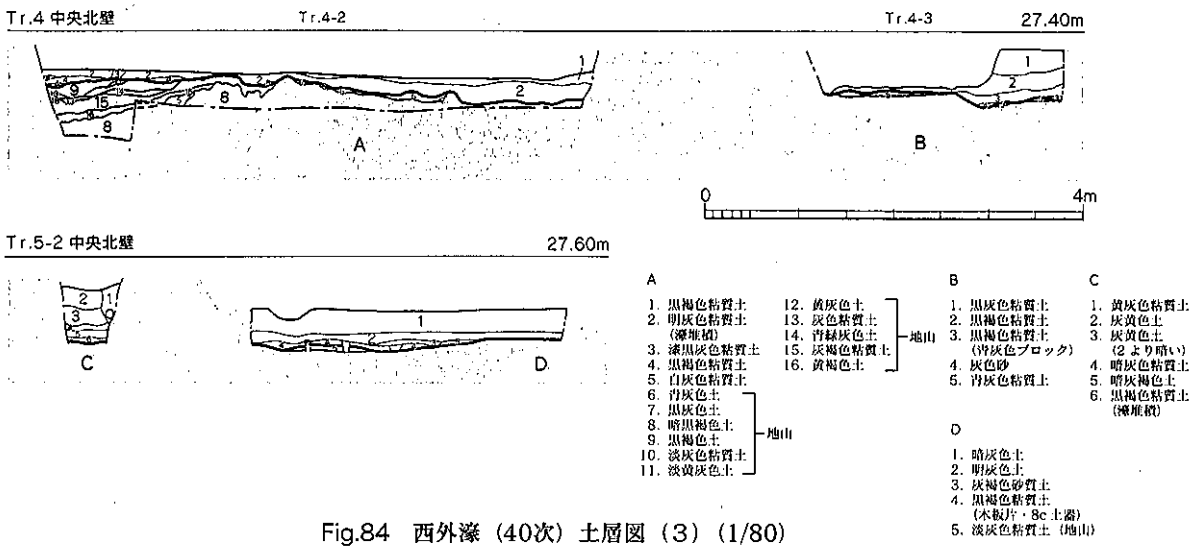


Fig.84　西外濠（40次）土層図（3）（1/80）

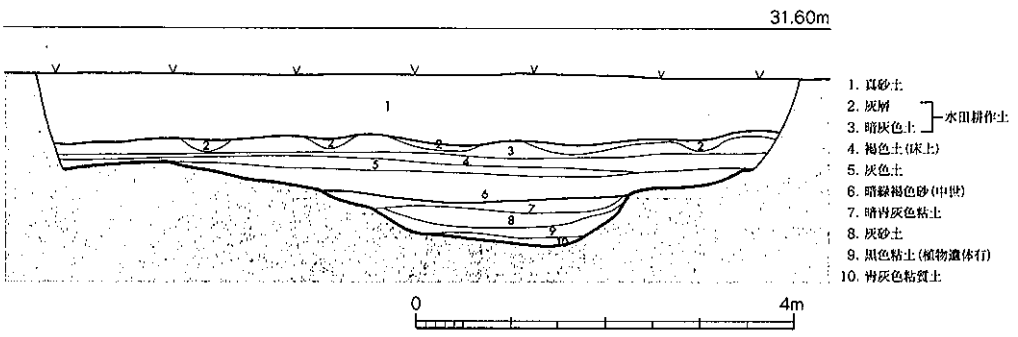


Fig.85　西門地区西側溝SD122土層図（1/80）

0.4m程度の溝状遺構である。ただし，堆積土はＳＸ221と重複することから明確に掘削されたものかは不明である。むしろ，落ち際の削平の可能性も考えられる。出土遺物は無いが，ＳＸ221と同時に存在している。

土手

ＳＸ224（39次）（Fig.77）

39次調査欠堤部地区西側で検出した。外濠ＳＸ221とＳＸ223との間に東西に走る土手状の高まりである。中世の包含層である淡茶灰色土層下位で確認できる，黄灰色粘質土や粗砂層の地山面である。堆積層が間に入ることがないため，ＳＸ221・223等と同時期に存在する。性格不明だが，あるいは外濠間の「道路」として機能した可能性も考えられる。

杭列

ＳＸ136（32次）（Fig.82，PL.56）

32次調査JR西側で検出した。土塁と並走する杭列で10本出土した。ＳＸ134埋土上部で確認したが，杭間の距離は，0.3～1.0mと規則性はない。シガラミ等は存在せず，杭上端部が全て破損しており，上層の整地の際に削平されたと見られる。残りの良いもので長さ1.1mある。ＳＸ137と変わらぬ新しい時期が考えられている。

ＳＸ253・254（40次）（Fig.86，PL.55）

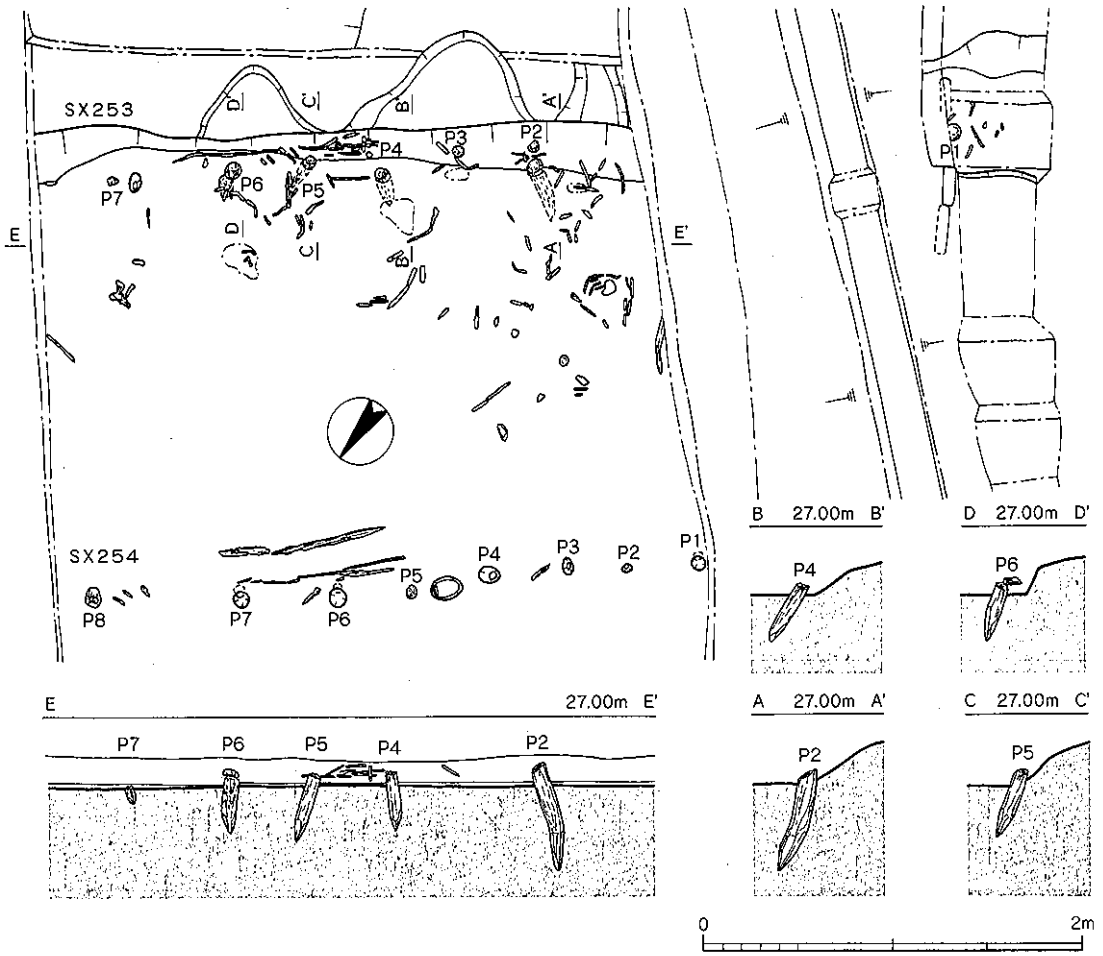


Fig.86　杭列SX253・254実測図（1/40）

外濠ＳＸ240の濠底内で検出した。南側と北側で２条の杭が並走している。残りの良い南側で７本，北側で痕跡である穴を８本確認できる。杭列の間隔は0.4～0.5mに収まるものが多く，一部0.6mとなるものがある。南北杭列間の距離は，2.25mである。この杭列の周りには小枝を巻いた状態が確認できたことから，杭列とシガラミが一緒に機能していたと考えられる。そのため，この南北両杭列の間は濠底の幅とみることもできよう。この他にも記録することができなかったが，西側のトレンチでも杭を確認しており，外濠内に並走する形で配されていたと考えられる。シガラミ内からは，８世紀後半代の土器が出土しており，かつ杭の上部も削平されていることから８世紀代に外濠が機能した際の施設とみられる。

８世紀代の土器と共伴

ＳＸ256（40次）（Fig.87，PL.56）

40次調査で検出した。外濠ＳＸ240内に打たれた杭列であり，６本分を調査した。各杭列の距離は，１箇所のみ1.15mで，他は0.90mである。基本的には土塁側に傾斜しているため，下成土塁際の土留めのために打たれたと考えられる。ただ，杭が積土に接する状況は無く，積土の崩落後，あるいは暗灰色土が堆積した後に打たれたことが分る。積土との関係からみる限り，13世紀以降である。

13世紀後半以降

その他の遺構

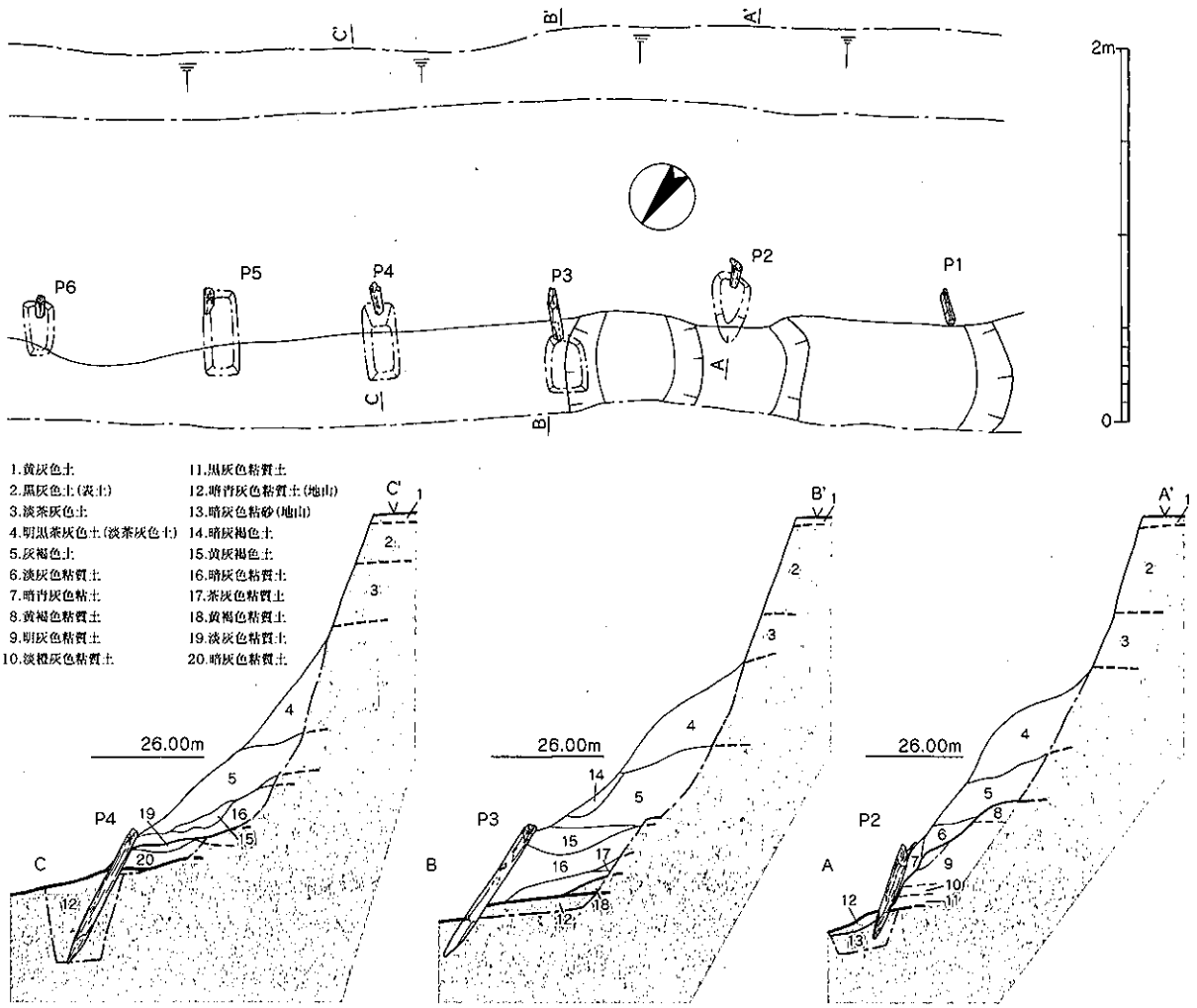


Fig.87　杭列SX256実測図（1/40）

ＳＸ137（32次）（Fig.89，PL.56）

32次調査西土塁西門地区東側で検出した溜状遺構である。樹皮を数層に敷詰めており，その間に杭や板材などの木製品や自然木，木葉等を投棄していた。現状で確認できる規模は約４ｍ前後で，不正形を呈している。明確な掘り

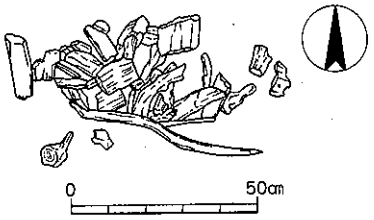


Fig.88　木材集積SX138実測図（1/20）

Fig.89　溜まり状遺構SX137実測図（1/30）

込みはなく，鞍部に敷かれた状態で厚さは10cm程度である。覆土は，黄褐色や黒褐色粘質土で調査区外の南に続いている。軟弱地盤の強化のために敷かれた地形と考えられる。出土遺物から，13世紀頃が上限と考えられる。

軟弱地盤の強化

ＳＸ138（32次）（Fig.88）

32次調査で検出した木片が集中する遺構である。削屑と考えられる木片の投棄された状態で出土した。木片は針葉樹であり，中には舟形に削られたものもある。性格，時期については不明である。

ＳＸ134（32次）（Fig.65，PL.14）

32次調査西土塁西門地区東側で検出した。現表土下約1.3mで確認できる段落ちである，ＳＸ135埋没以降に位置づけられる。上層は近世の遺物を含む耕作土であり，下層は整地層と考えられている。ＳＸ135の埋没が13～14世紀代に比定されることから，それ以後に掘削された段落ちである。

ＳＸ139（32次）（Fig.67）

32次調査で検出した。土塁に直交する形でＳＸ140の北側に延びている。粘質土の地山を逆台形状に切り込んでいる。埋土は，灰色砂で最下層に僅かに粘土層がある。ＳＸ135に切られており，木樋抜き取り以前に位置づけられる。

2）内濠部

土塁後背下成土塁の低地の内濠に関る遺構が確認されたのは，1976年の６次調査である。その後，2008年までに九州歴史資料館で８地点（６・７・44・45次調査他），太宰府市教育委員会によって５地点の調査が行われてきた。ただし，調査範囲が最狭であることや宅地化が進んだ現状から，内濠の構造を具体的に理解することができた調査は限られる。６次と14次調査の２地点で，濠の両肩を確認している。

東内濠部

ＳＤ055（６次）（Fig.90・91，PL.57）

６次調査東土塁の西端基底部下で検出した。土塁にほぼ並行して，東西に走る溝状の遺構である。上幅約10m，下端幅約８m，最深部で約1.5mである。溝底の高低差は東西で約17cmあり，西の御笠川に向かって傾斜している。溝の堆積は大きく２時期に分かれるが，下層の古期は底付近に暗灰色粘質土，黒褐色粘質土などの有機質を含む層が認められる。ただ，砂層堆積によって所々，分断されており，幾度かの流水があったことが分る。南側の立ち上がりは，茶灰色粘質土によって明瞭に確認できた。遺物は各層から出土しているが，層位的に把握することは困難である。この他，基底部ＳＡ001とＳＤ055の間に自然流路があるが，この流路内では，南北方向に走る杭列ＳＡ056とシガラミＳＸ057を検出している。

下層に有機質を含む層

ＳＤ067（10次）（Fig.57・92，PL.10）

10次調査東土塁東門地区南側の基底部下で検出した自然の流路である。幅1.2m，深さ0.5m程度で東西に蛇行しており，一部はＳＥ065付近をとおる。地山上に見られ，砂礫のみの埋土である。遺物は出土しておらず，水城と直接関りのない，時期的に古いものと考えられる。この10次調査区内では，包含層灰褐色粘質土から中世，茶灰色粘質土から奈良～平安時代の遺

物がそれぞれ出土しているが，内濠を直接考えることのできる遺構は確認できていない。

ＳＤ068（10次）（Fig.57）

10次調査東土塁東門地区南側の基底部下で検出した。蛇行しながら，東西に走る溝状遺構である。残りの良いところで，幅約1.2m，深さ0.5mを測る。ＳＫ066を切ることから中世以降と考えられる。

ＳＤ130（27次）（Fig.93・94，PL.58）

27次調査東土塁中央南側で検出した。土塁基底部から約80mの距離にあたり，基底部から２つ目の段落ちの下位にあたる。南側の肩のみを検出したが，幅7.5m以上，深さ1.3mである。砂と粘質土の互層堆積となっている。最下層の砂礫層は厚く，摩滅した瓦片が出土している。

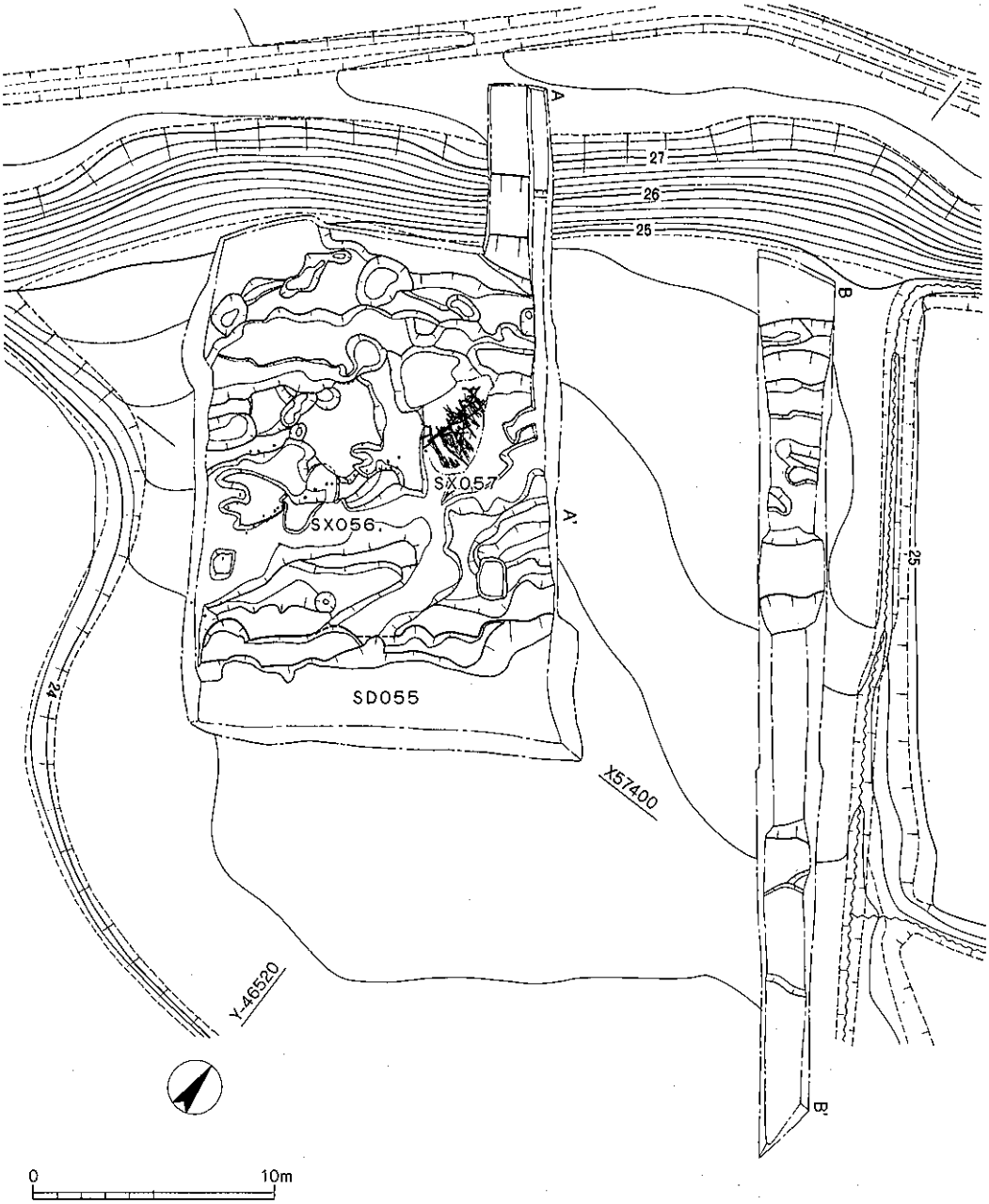


Fig.90　東内濠（６次）地形図（1/300）

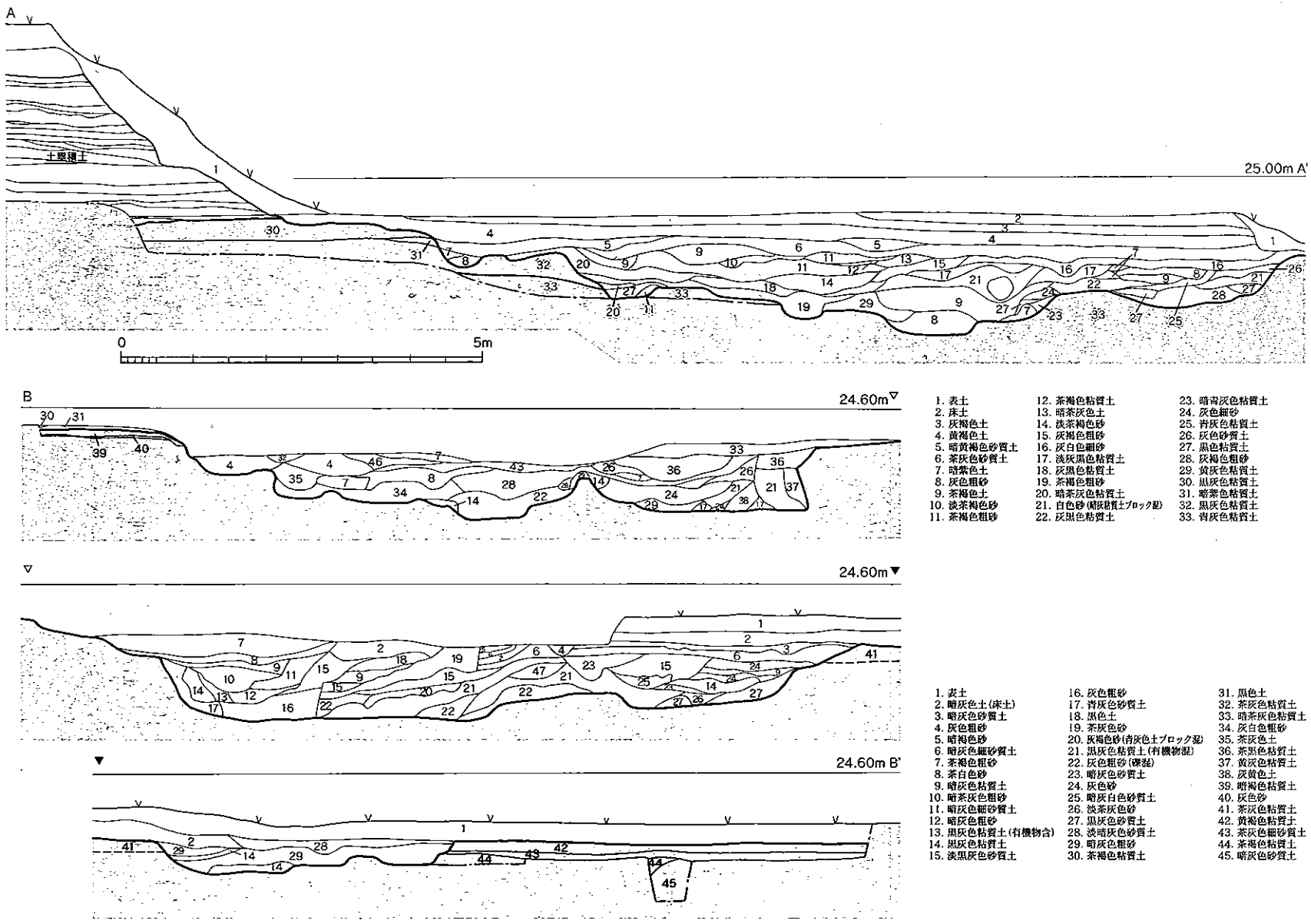


Fig.91　東内濠（6次）土層図（1）(1/80)

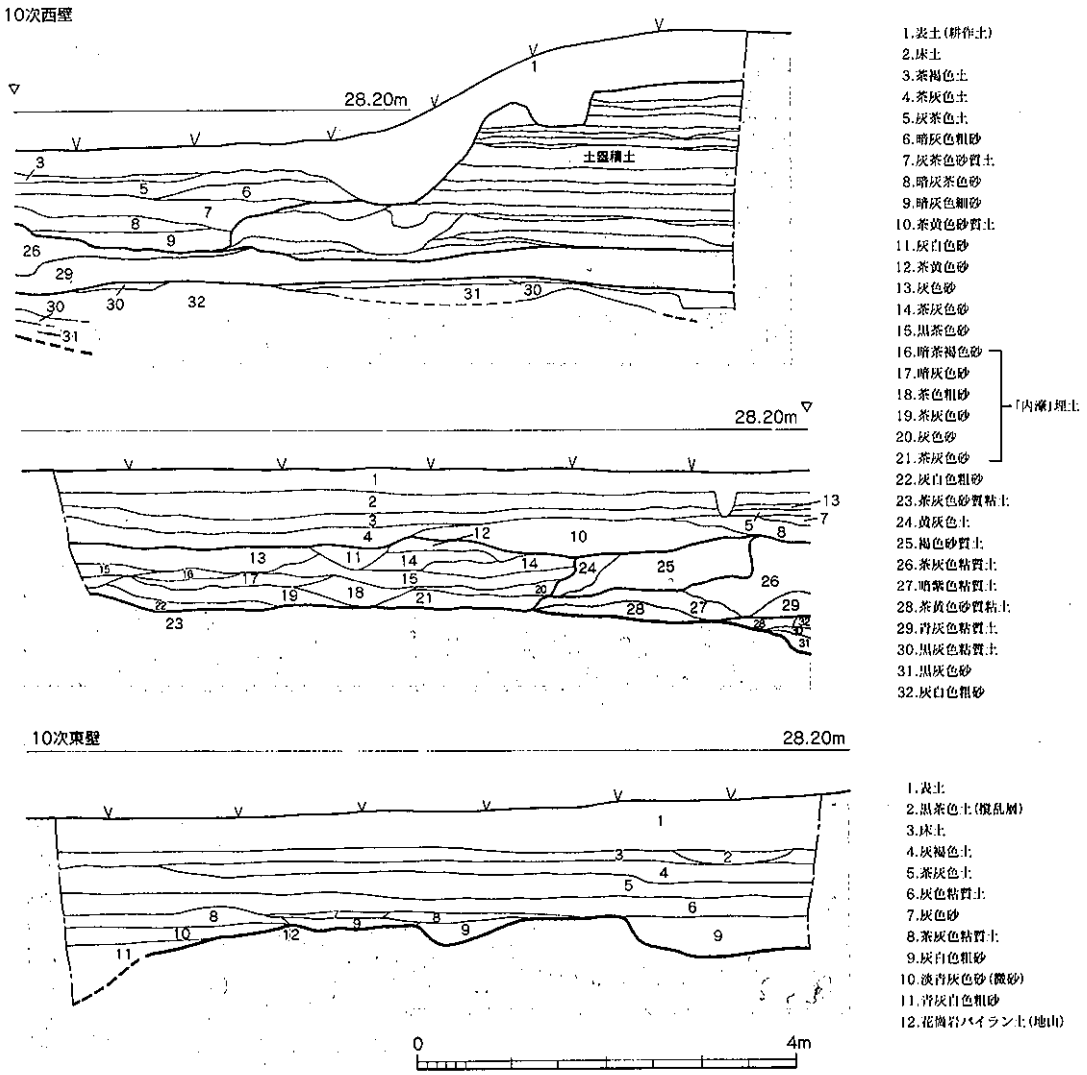


Fig.92　東内濠（10次）土層図（2）（1/80）

西内濠部

ＳＸ235（44次）（Fig.96～98，PL.19・59）

洪水を示す砂礫層

44次調査では，西土塁が途切れる欠堤部西側の内濠部に，土塁に対して直行する３本のトレンチを設定した。東からＡ・Ｂ・Ｃとしたが，全てのトレンチにおいて洪水を示す灰色砂礫層が確認された。特に土塁際となる北端部分では，流路状の洪水堆積層が確認されおり，幾度かの洪水が起こったことが分かる。灰色砂礫層からは13世紀代の土器が出土しており，古代の遺構の遺存は認められなかった。

ＳＤ060（７次）（Fig.95・99，PL.58）

７次調査西土塁のＪＲ線の直ぐ西側で検出した。土塁に並走する溝状遺構の北側の立ち上がりである。そのため，溝幅は確定できていない。土塁からの距離は約62ｍの位置にあたり，６次調査ＳＤ055の距離と同じである。砂層堆積が認められ，８世紀から９世紀代の須恵器片が出土している。

ＳＸ260（45次）（Fig.100・101，PL.60）

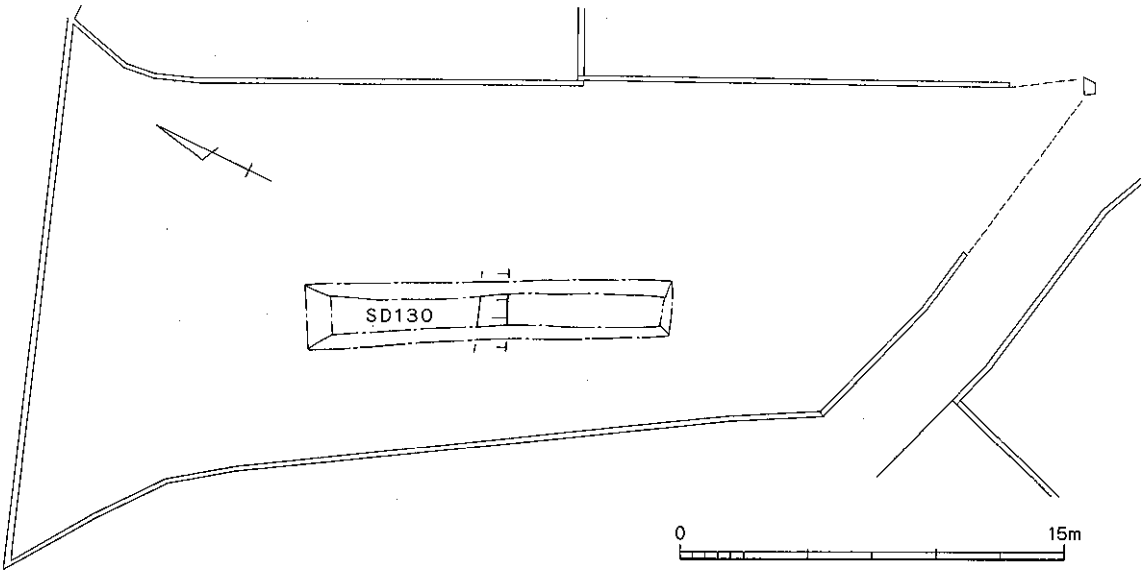


Fig.93　東内濠（27次）地形図（1/300）

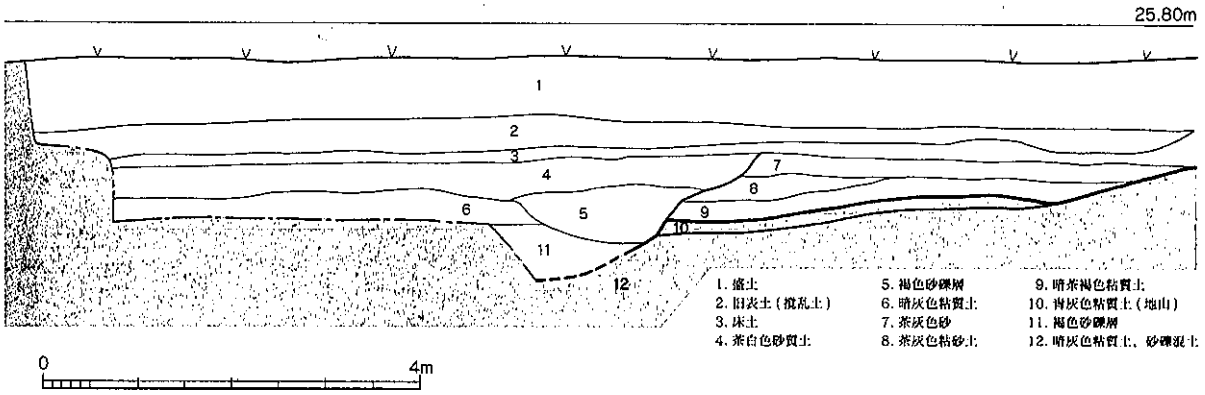


Fig.94　東内濠（27次）土層図（3）（1/80）

45次調査西門地区東側の下成土塁下位で検出した流路状の溝状遺構である。ちょうど土塁に並走しており，幅約４ｍ以上，深さ0.5m程度で，灰色砂や暗灰色粘質土の地山に切り込んでいる。Ａ・Ｂ各地区の調査状況から，少なくとも30m以上延びることが分かるが，西側では細くなっている。近世と考えられる暗灰色粘質土下位で確認でき，灰色や黒褐色粘質土に砂層が貫入する堆積土であり，

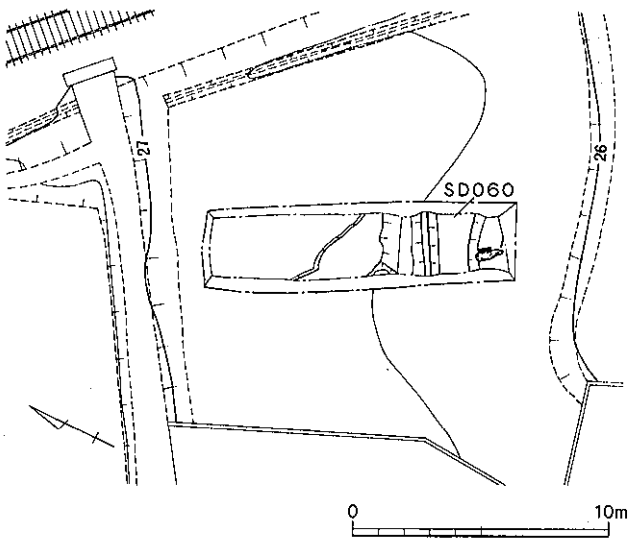


Fig.95　西内濠（７次）地形図（1/300）

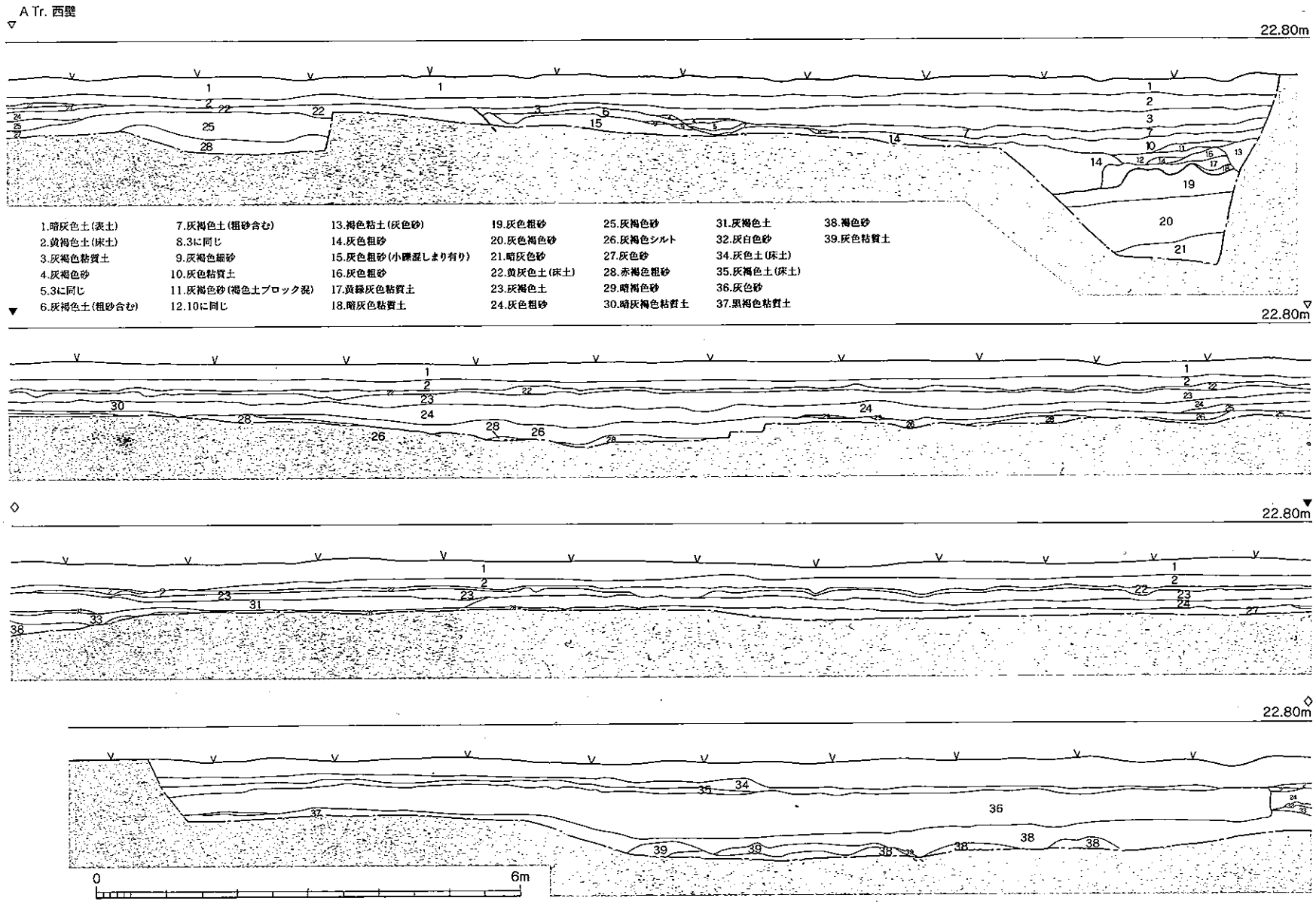


Fig.96　西内濠欠堤部西側（44次）土層図（1）(1/80)

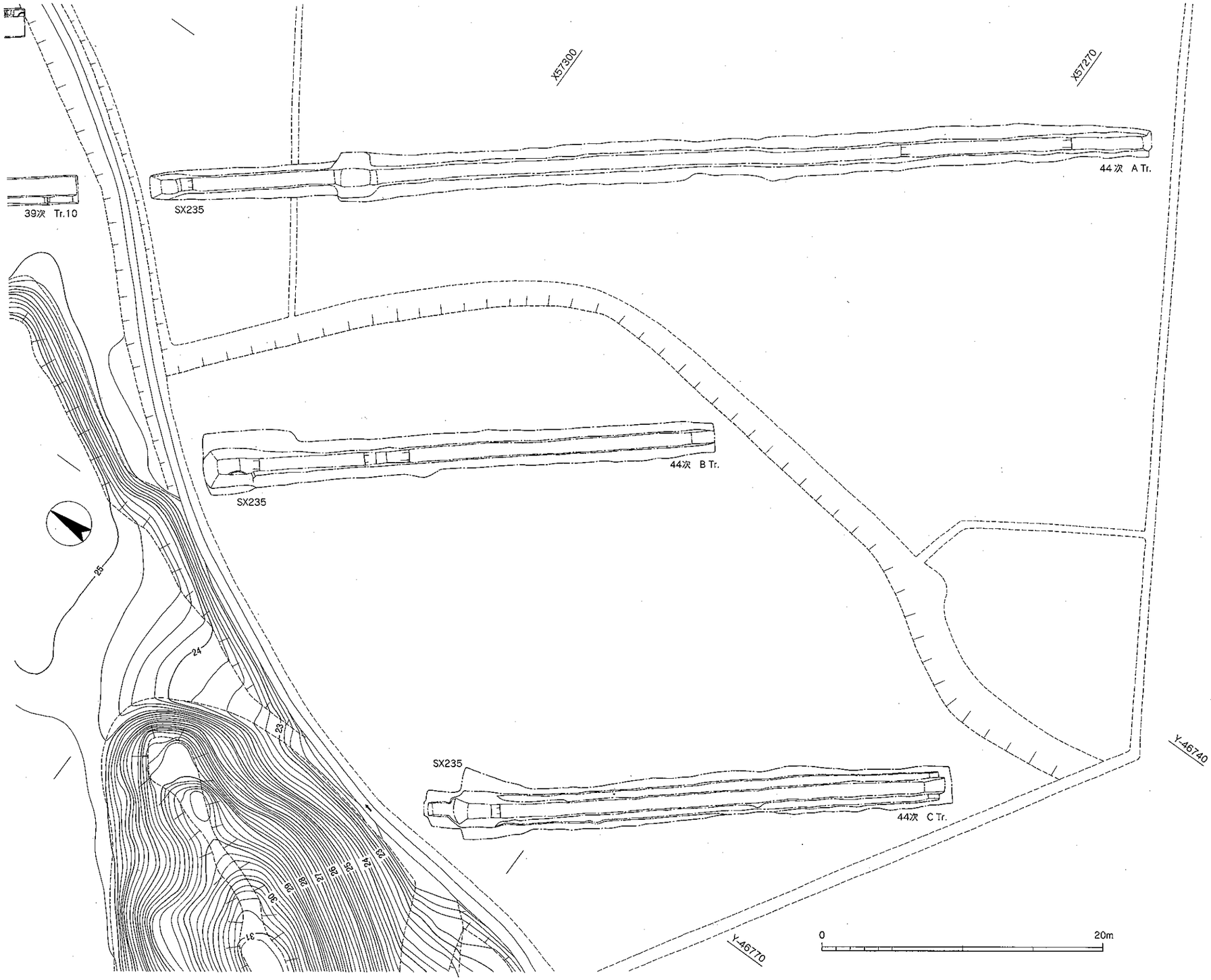
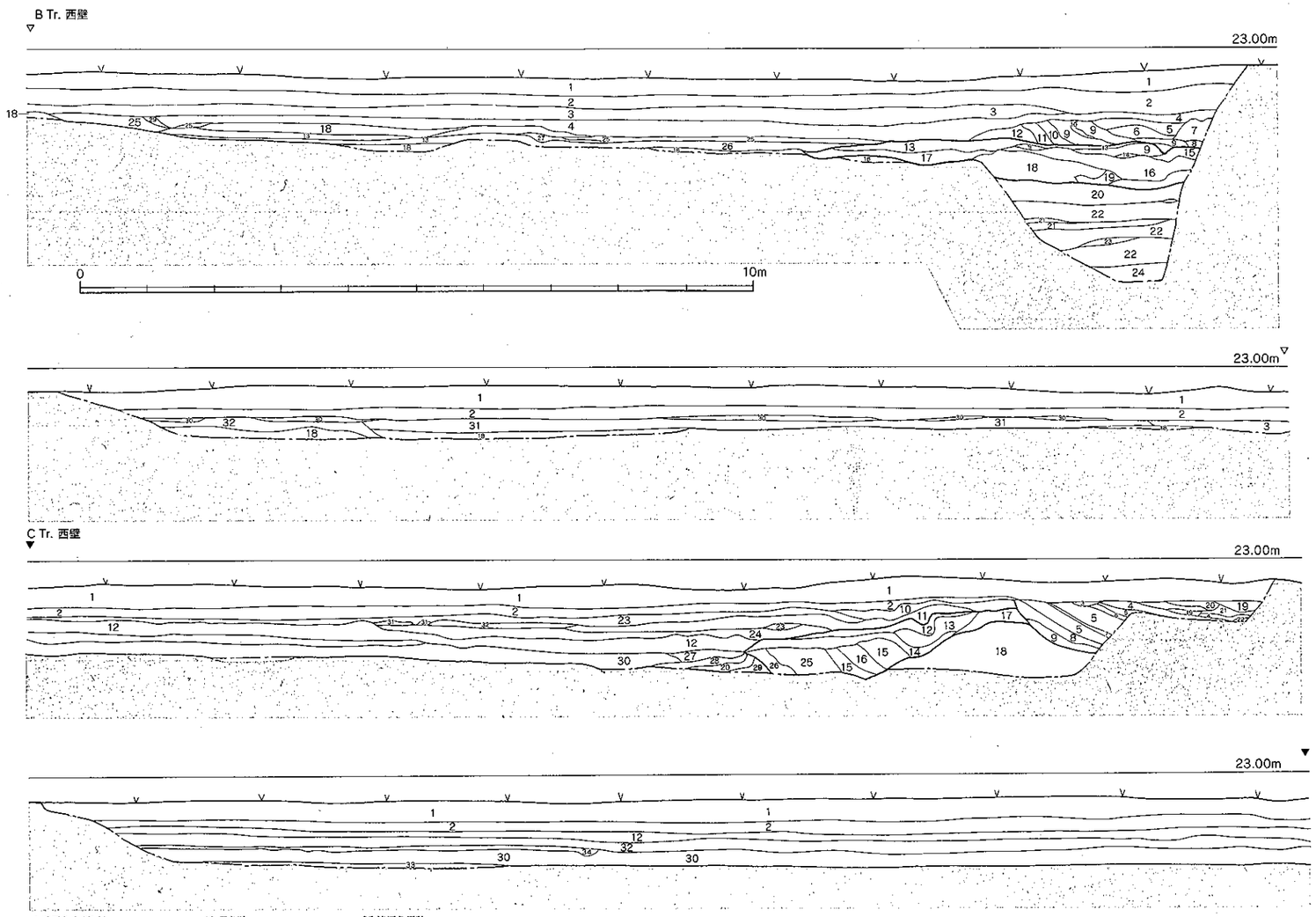


Fig.97　西内濠欠堤部西側（44次）地形図（1/300）



1.暗灰色土(表土)
2.黄褐色土(床土)
3.暗褐色土
4.灰褐色土
5.灰褐色粘質土
6.灰褐色砂
7.灰褐色粘質土(褐色砂ブロック状に混)
8.暗褐色砂
9.灰色土(暗灰褐色粘質土混)
10.黄緑褐色砂
11.灰色土
12.明褐色粘質土
13.灰色砂
14.暗褐色土
15.黄緑灰色砂
16.黄灰色粘質土(暗灰色・灰白土混)
17.灰色土
18.灰色粗砂
19.灰色粘質土(黄灰色粘質土混)
20.灰色礫砂
21.黒褐色粘質土
22.褐色砂
23.黄緑灰色細砂
24.暗青灰色礫砂
25.淡灰色細砂
26.灰色砂(茶灰色粘質土混)
27.灰色粘質土
28.灰色砂
29.茶褐灰色土
30.茶色砂(酸化して硬化)
31.淡茶色砂
32.茶灰色砂
33.暗灰色砂
34.暗灰色粘質土

Fig.98　西内濠欠堤部西側（44次）土層図（2）(1/80)

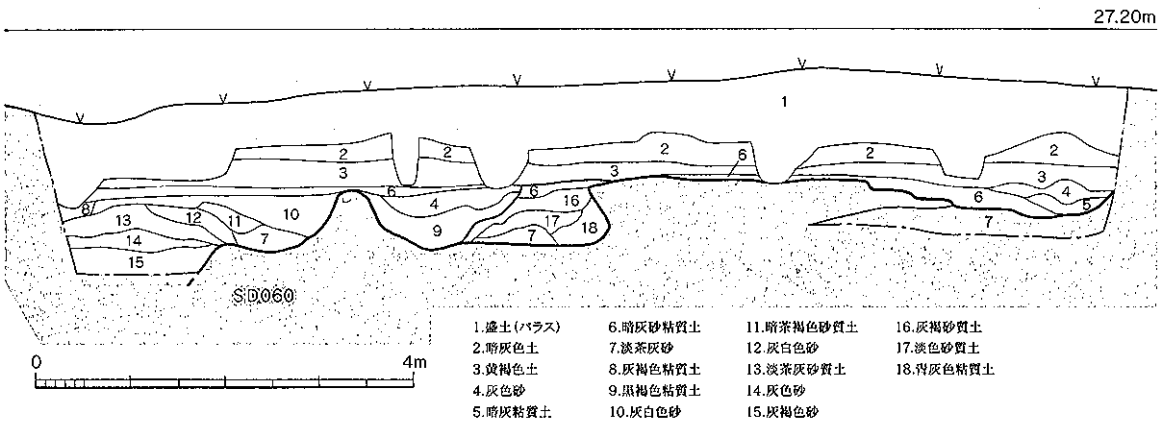


Fig.99　西内濠（7次）土層図（1）（1/80）

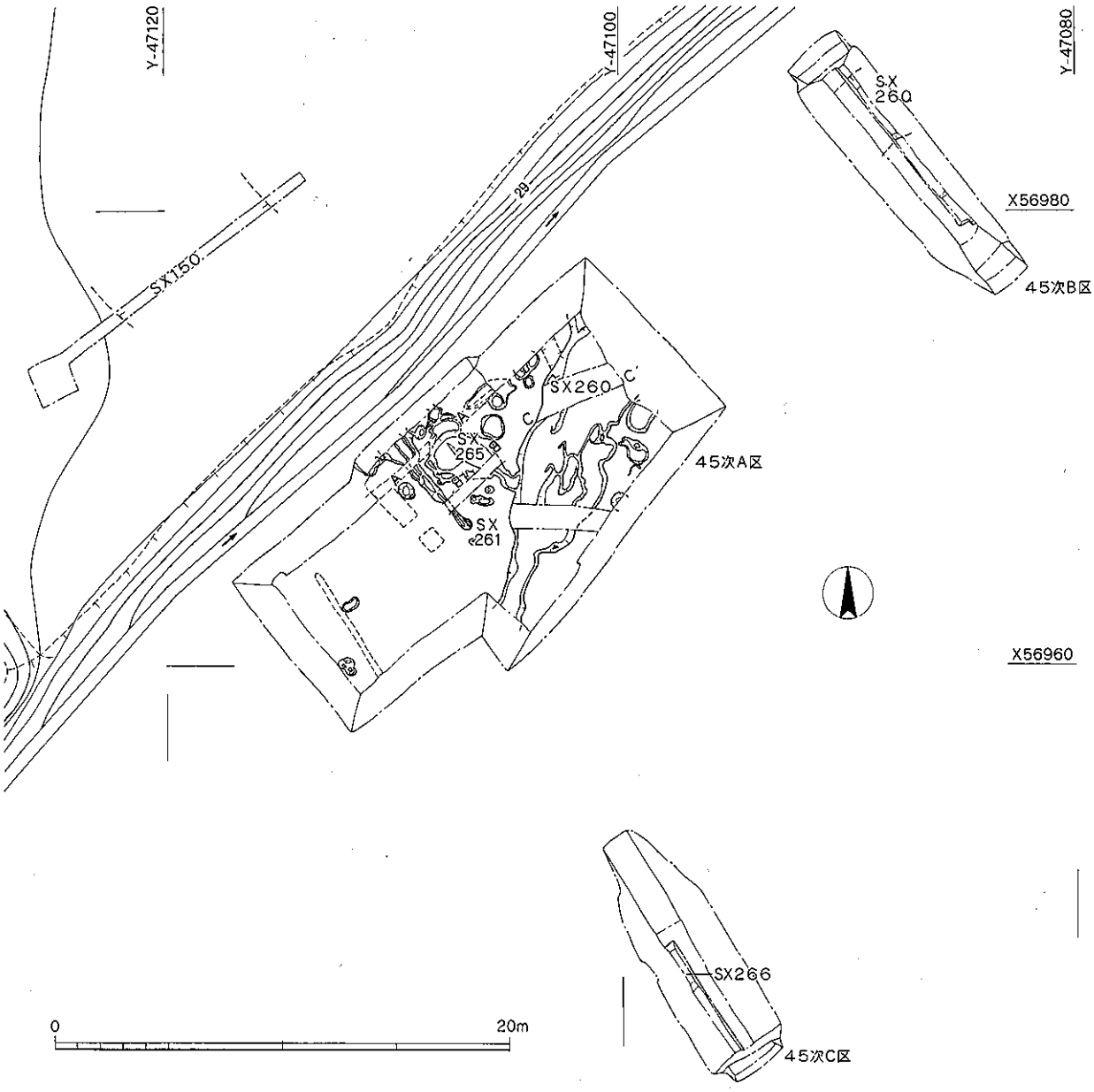


Fig.100　西内濠（45次）地形図（1/300）

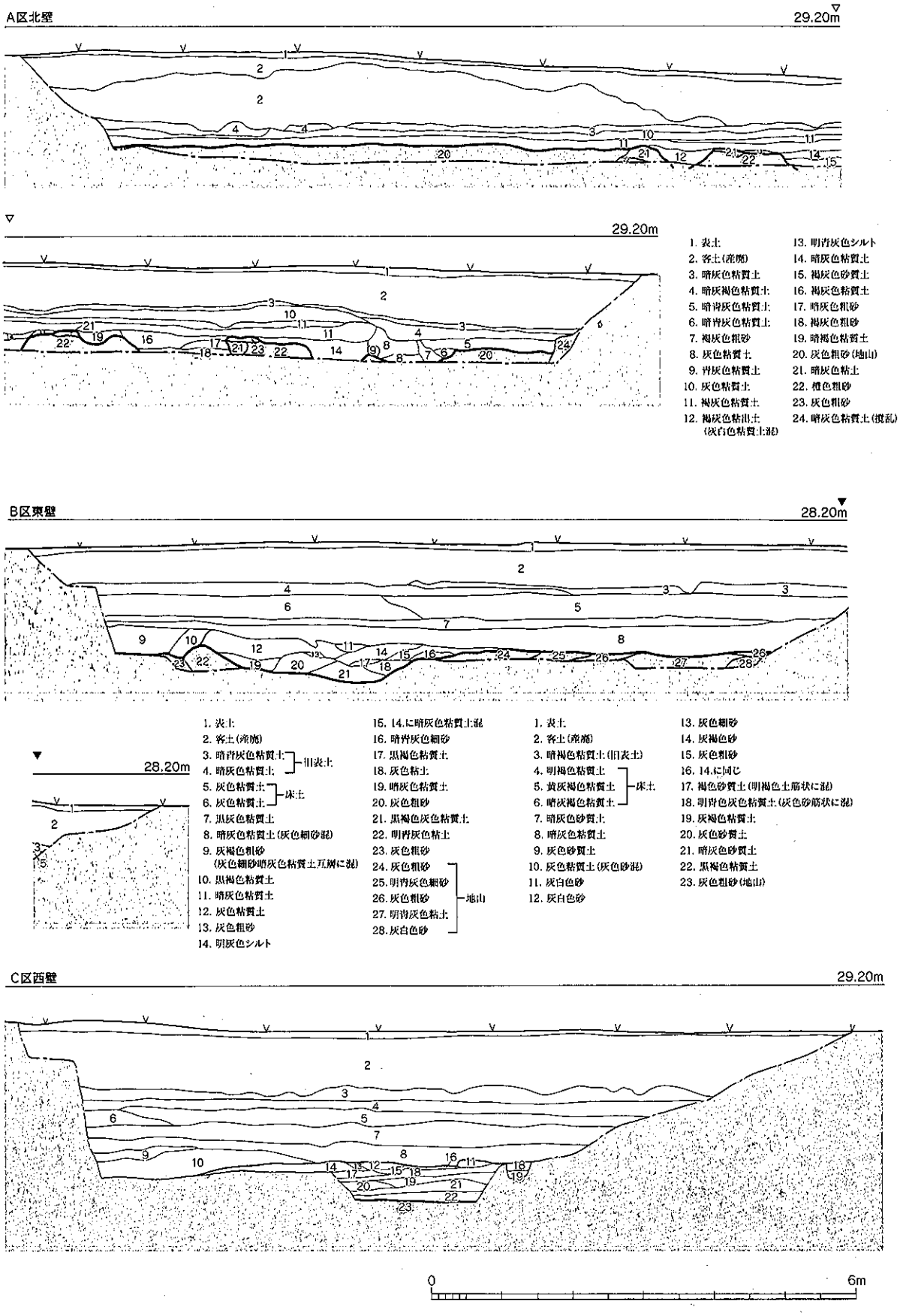
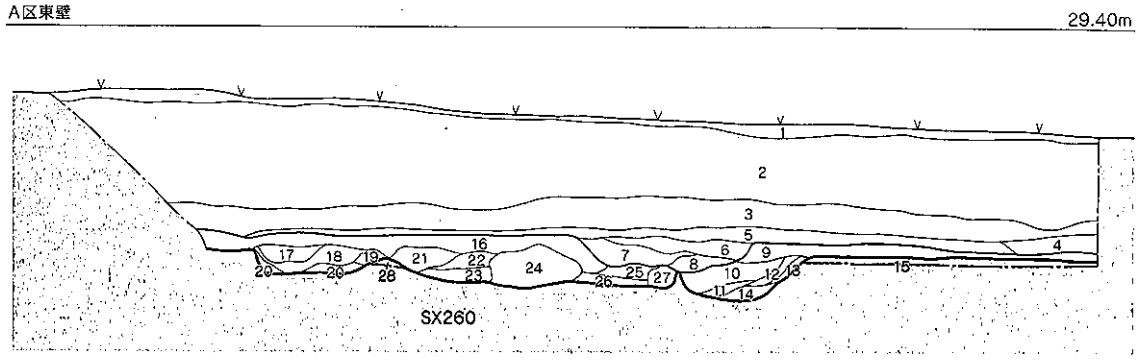
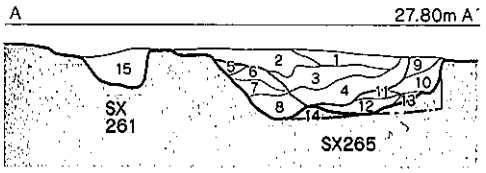


Fig.101　西内濠（45次）土層図（2）（1/80）

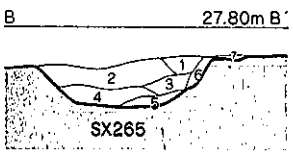


1. 表土
2. 客土(産廃)
3. 暗灰色粘質土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土(明褐色土混)
6. 褐灰色砂質土
7. 灰色粘質土(褐色土混)
8. 灰色粘質土(灰色砂混)
9. 暗灰色粘質土
10. 灰色砂
11. 明灰褐色粗砂
12. 暗灰色粗砂
13. 明青灰色シルト
14. 灰色粗砂
15. 明青灰色シルト(地山)
16. 灰色粘質土
17. 灰白・暗灰色粗砂
18. 灰色粘質土
19. 灰白色粗砂
20. 灰色粗砂
21. 灰色粘質土
22. 灰色粘質土(灰色砂混)
23. 灰色粗砂
24. 褐灰色粘質土
25. 灰色粘質土(灰白色砂)
26. 灰色粗砂(灰色粘質土混)
27. 灰色粗砂
28. 明褐色、灰色砂(地山)



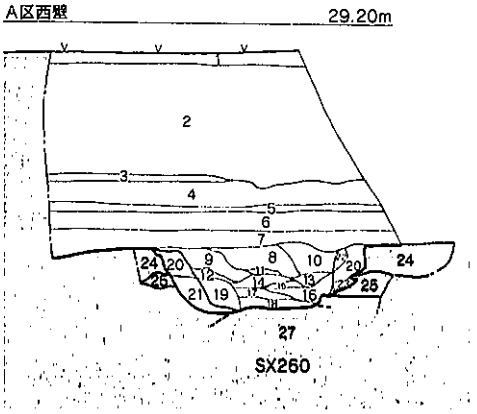
A—A´

1. 暗灰色粘質土(灰白色土混)
2. 灰白色土(暗灰色粘質土混)
3. 灰色粘質土(黒灰色粘質土混)
4. 灰色粘質土(黒灰色粘土混)
5. 1と同じ
6. 灰色粘質土
7. 灰白色砂質土
8. 暗灰色粘質土
(青灰色シルトがブロック状混)
9. 灰褐色粘質土
10. 灰色粘質土(灰色砂と8が混)
11. 灰色粗砂
12. 黒色粘土
13. 灰色粘質土
(灰色粘土と明青灰色粘土がブロック状混)
14. 明青灰色粗砂(地山)
15. 褐灰色粘質土
(灰白色粘質土が小ブロック状混)



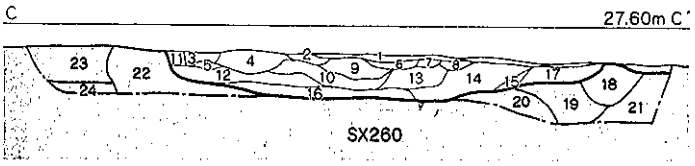
B—B´

1. 黒灰色粘質土
(灰白色・橙色シルトがブロック状混)
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰色粘質土
4. 3に灰色砂質土混
5. 2に灰白色砂質土混
6. 灰色砂質土(灰白色・橙色シルト混)
7. 灰褐色砂質土(包含層)



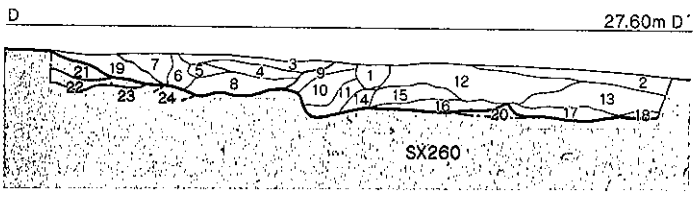
A区西壁

1. 表土
2. 産廃
3. 暗青灰色粘土 ┐
4. 暗灰色砂質土 ├ 旧表土
5. 黄褐色粘質土 ┘
6. 灰色粘質土
7. 暗灰色粘質土
8. 暗灰色粘質土(灰色粗砂ブロック状混)
9. 暗灰色粘質土(灰色粘質土筋状に混)
10. 7に同じ
11. 黒灰色砂質土
12. 灰白色細砂(暗灰色粘質土筋状に混)
13. 灰色細砂(暗灰色粘質土筋状に混)
14. 灰白色粗砂
15. 灰白色細砂
16. 灰白色砂質土(暗灰色粘質土混)
17. 灰色粗砂
18. 灰色粗砂
19. 暗灰色粘質土
20. 暗青灰色粗質土
(暗灰色、灰褐色粘質土混)
21. 暗灰色粘質土(灰褐色粘質土混)
22. 暗灰色粘質土(灰色細砂混)
23. 灰色細砂
24. 明青灰色粘土
25. 灰色細砂
26. 明青灰色粗砂
27. 灰褐色・暗灰色粘土(木質含)



C—C´

1. 暗灰色粘質土(包含層)
2. 暗灰色粘質土
3. 明灰色粘質土
4. 2に灰白色砂がブロック状に混
(木質含)
5. 灰白色粗砂
6. 灰色シルト
7. 5と同じ
8. 灰色砂質土
9. 灰色粗砂
10. 灰色砂質土
(暗灰色粘質土混、木質含)
11. 明青灰色粘土
(暗灰色粘質土混)
12. 灰白色細砂
(灰白砂が筋状に混)
13. 14に灰色砂が混(木質含)
14. 暗灰色粘質土(木質含)
15. 灰色粗砂に灰色粘土混
16. 灰白色粗砂
17. 暗青灰色粘土に灰色粘質土混
18. 明青灰色粘質土
19. 灰色粗砂に灰色粘土混地山
20. 暗灰色粘質土(明青灰色粘質混)
21. 灰色粗砂
22. 明青灰色粘土(明青灰色粗砂混)
23. 褐灰色粘質土(灰色粗砂混)
24. 暗灰色粘質土(灰色砂混)
地山



D—D´

1. 暗褐色粘質土
(近世以降の耕築による撹乱)
2. 暗灰色粘質土(包含層)
3. 暗灰色粘質土(灰色シルト混)
4. 灰白色粗砂
5. 灰色粗砂(黄褐色粗砂が筋状に混)
6. 黒灰色粘質土(木質含)
7. 褐灰色粘質土(灰色粘土混)
8. 5に明青灰色・暗灰色粘土が
小ブロック状に混
9. 灰色細砂(灰色粘土質が筋状に混)
10. 7と同じ
11. 黒色粘質土
12. 暗灰色粘質土
(褐灰色・明青灰色粘土質が
ブロック状に混)
13. 暗灰色粘質土
(褐灰色粘質土がブロック状に混)
14. 灰白色細砂
15. 灰白色砂礫
16. 灰色粘土
17. 16と同じ
18. 灰色粗砂
19. 明青灰色粘質土(灰色粘質土が混)
20. 明青灰色粘土
21. 明青灰色細砂(灰色粗砂が混)
22. 灰色粗砂
23. 明青灰色粘土(灰色細砂が混)
24. 灰褐色・暗褐色粘土(木質含)

Fig.102 西内濠 (45次) 土層図 (3) (1/60)

滞水状態が長かったことが分かる。平面的には確認できなかったが，断面観察により数度の掘り直しが行われたことが分かる。出土遺物は，８～９世紀代を中心とするが，最下層から12世紀前半代となる土師器が出土しており，この時期までは機能していたと考えられる。

最下層から12世紀前半代の土器

ＳＸ261（45次）（Fig.100～102，PL.60）

45次調査基底土塁下位で検出した土塁に直交する溝状遺構である。最大幅0.50ｍで，最小幅は0.25ｍ，最深0.36ｍ程度である。堆積土は，褐灰色粘質土，灰色粘質土がブロック状に混じった状態である。並走するＳＸ265と関連する可能性が高い。

ＳＸ265（45次）（Fig.100～102，PL.60）

45次調査西門地区東側の下成土塁下位で検出した。土塁に直交する，平面不正形の溝状遺構であり，ＳＸ261に並走している。最大幅2.40ｍ，最小幅は0.60ｍ，最深0.56ｍ程度になる。ただし，土坑状に掘られている箇所があり，極端に膨らんでいる。埋土は褐灰色や暗灰色粘質土だが，土坑状に膨らむ付近では，暗灰色粘質土や灰色土にブロック状の混土となる。そのため，一部人為的に埋め戻された可能性がある。この45次調査区は，33次調査区で確認した木樋掘形の南側の延長部にあたる。ちょうど基底部が一段落ちる箇所であり，本来であれば木樋取水部が存在したはずである。周囲には木材片なども見られないことから，木樋取水部の存在は否定的にならざるをえない。そのため，木樋の項で詳述したように木樋掘形掘削後に木樋埋設が放棄された痕跡の一部と見ることができる。

ＳＸ266（45次）（Fig.100・101）

45次調査西門地区東側の基底土塁下南側で設定したトレンチ（Ｃ地区）で確認した。溝状遺構と考えられる。現地表下より約1.8ｍの地点で，流水層や滞水層を約0.5ｍに亘って確認できる。狭い範囲の調査であり，立ち上がりを確認することはできなかった。土塁際で確認したＳＸ260に直接繋がるのではなく，別の溝の痕跡と考えられる。調査区に拡がる暗灰色粘質土下位であり，近世以前であることは確かだが，具体的な時期比定はできない。

自然流路

ＳＸ056（６次）（Fig.90，PL.８）

６次調査基底部土塁ＳＡ001とＳＤ055の間で検出した。幅は中央部で約12ｍ，南へ行くにしたがって，広くなっている。流路底は平坦ではなく灰色砂・茶褐色粗砂から成る砂層が厚く堆積している。この流路内から杭列とシガラミを検出している。

杭列

ＳＸ057（６次）（Fig.90，PL.８）

６次調査ＳＸ056内で検出した。杭列は２条認められ，流路に対してやや南へ傾いている。砂層に打ち込まれているが，時期比定は困難である。

（7）欠堤部

欠堤部

ＳＸ004（1・2・4次）(Fig.103・104, PL. 5・6)

欠堤部では，1・2・4・29・29-2次の計５次の調査を行っている。第１次調査は，欠堤部東の土塁際に大きく３箇所のトレンチを設定した（A～C)。このうち，Bトレンチは L字に設定したため，南北の１区，東西の２区に細分される。調査では，各トレンチを現地表から約２～2.8m程度人力で掘削し土層図を作成した。最下面の標高は19.8m前後である。

Aトレンチは，上層で粘質や砂質の細砂層がほぼ水平に堆積するが，下層では赤褐色粗砂層になり，遺物が多量に出土している。B・Cトレンチでは，上層の淡灰色や暗灰色の粗砂層であり，最下層は小礫の混じる黒灰色粗砂層である。遺構は確認できなかった。掘削トレンチの３m下位で龍泉窯青磁が出土しており，13世紀以降，土塁際で流水があったことが分かる。

13世紀以降の洪水

２次調査では，１次調査の西側に25×15mのトレンチを設定した。トレンチ内は，河川堆積層であったが，現地表から約７mのところで酸化鉄によって硬くしまった層に達しており，地山と考えられる。

４次調査は，２次調査地の西側にあたる。道路橋脚建設中の不時発見であったが，人頭大の礫が多量に出土した。詳細は後述するが，土塁軸の延長線上に位置し，８世紀代の遺物が中心であることから，水城に関る遺構と考えられる。さらに西側の御笠川東岸となる29次調査でも，礫群を確認しており，一連の遺構と考えられる。この御笠川が北流する欠堤部については，河川氾濫による土塁の崩壊，あるいは河川の自然処理等，様々に考えられてきたが，石敷遺構の検出以後，御笠川の処理を行う「洗堰」が想定されるようになった。

石敷遺構

「洗堰」

石敷遺構

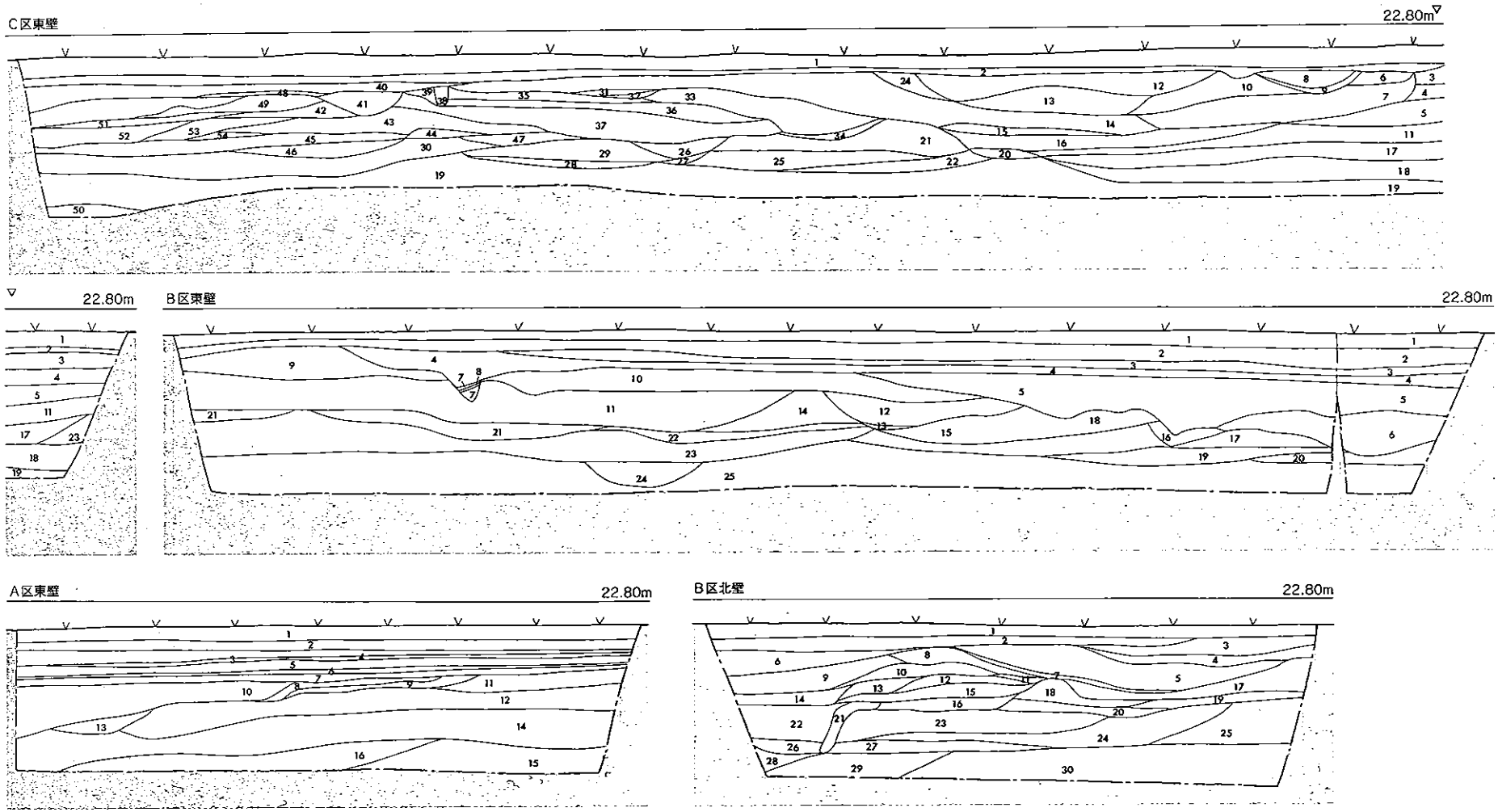
ＳＸ014（4次）(Fig.105, PL. 6・61)

欠堤部御笠川東岸で検出した。東土塁西端からちょうど56m西側にあたる。23×3mの範囲を調査した。人頭大やそれ以上の大きさの花崗岩礫が乱雑に積まれた状態である。広がりについては，北側では土塁中軸線上から16m付近でまばらとなるが，南側では大型で密となっている。そのため，さらに南に広がると考えられる。

使用された花崗岩は自然礫で加工は認めらない。多くは50×50cm程度だが，中には110×60cmの大きさのものある。これらの礫群は灰色砂の上に乱雑に置かれており，多くは一段ないし，二段に積み上げている。さらに石敷の間には，杭ＳＸ013が打たれている。この石敷はトレンチ南端から北側へ向かって次第に高くなり，13m付近で幅2.0m，高さ0.8mに積んでいる。また，この高まりは，土塁軸線に沿って東西に広がっているが，２次調査のトレンチ西南隅で僅かに礫を確認しただけで，北や東に延びていない。現状では，石敷遺構は東土塁西端から40m付近に東端が位置し，そこから西側に拡がっていると見られる。西側の29次調査で裏込め状の礫を確認していることから，約50mの範囲に広がる可能性が高い。この石面の標高は20.6mで高まり付近は21.2mである。

遺物は，石敷内や石の下に入り込むものや，上層の砂層で出土している。石敷に密着する砂層からは８世紀代の須恵器や縄目叩文の瓦が出土している。その上層では，白磁等の13世紀頃

８世紀代の遺物



C区東壁

1. 黒色土(耕作土)
2. 黄褐色土(床土)
3. 黄灰色砂
4. 白灰色粗砂
5. 明赤褐色粗砂(縞状に入る)
6. 淡灰色粗砂
7. 赤褐色粗砂(縞状に入る)
9. 暗灰色微砂
10. 暗灰色砂
11. 赤褐色粗砂(縞状に入る)
12. 暗灰色細砂
13. 暗灰色粗砂
14. 暗灰色粗砂
15. 淡赤色粗砂
16. 粗砂(淡赤色砂混)
17. 黒灰砂
18. 淡黒灰色粗砂
19. 黒灰色粗砂
20. 淡緑色微砂
21. 淡灰色粗砂
22. 灰色粗砂
23. 黒灰色粗砂(黄褐色斑混)
24. 暗灰色粘砂
25. 淡黒灰色粗砂
26. 黒灰色粗砂(淡色微細砂混)
27. 淡灰色粗砂(赤色砂僅か混)
28. 黒灰色粗砂
29. 灰色粗砂
30. 淡茶灰色砂
31. 茶褐色粗砂
32. 淡灰色微砂
33. 茶褐色粗砂(小礫混)
34. 明赤褐色粗砂
35. 茶褐色粗砂
36. 淡灰砂
37. 赤褐色縞斑粗砂(小礫混)
38. 茶灰色砂
39. 茶灰色砂
40. 淡茶色粘砂
41. 灰黒色粘質土
42. 白灰色砂
43. 灰色細砂
44. 30に同じ
45. 暗茶灰色粗砂
46. 淡黒灰色粗砂
47. 暗茶灰色粗砂
48. 灰色砂
49. 黒色粗砂(炭化物混)
50. 濃青灰色粘質土
51. 淡黒灰色微砂
52. 淡黒灰色微砂
53. 淡黒灰色粗砂
54. 淡茶灰色粗砂

B区東壁

1. 黒色土(耕作土)
2. 黄褐色土(床土)
3. 桃灰色細砂
4. 灰色粘質砂(湿赤斑)
5. 斑赤斑灰色粘質土(間に砂層含む)
6. 暗灰色粘土
7. 粗砂(炭化物含む)
8. 淡青灰色微砂
9. 淡灰色粗砂
10. 粗砂か
11. 淡灰色粗砂(赤色の縞混)
12. 淡青灰色粘質土
13. 灰色粗砂
14. 淡灰色砂(礫混)
15. 淡灰色砂
16. 赤色砂(炭化物混)
17. 赤色砂
18. 淡黒灰色砂
19. 灰色粗砂
20. 黒灰色粗砂(粘土縞状に混)
21. 暗灰色粗砂
22. 暗黒灰微砂
23. 黒灰砂(泥粗砂)
24. 暗灰色砂
25. 暗黒灰色砂

A区東壁

1. 耕作土
2. 床土
3. 粘質白灰色微砂
4. 粘質赤褐色微砂
5. 薄灰色砂
6. 粘質淡灰色微砂(炭化物多く含む)
7. 粘質灰色微砂(炭化物は6より少ない)
8. 白灰色細砂
9. 粘質茶灰色微砂
10. 粘質深灰色細砂
11. 淡灰色細砂(炭化物・小礫少ない)
12. 淡灰色粗砂
13. 薄灰色細砂
14. 淡茶灰色粗砂
15. 赤褐色粗砂(遺物多く含む)
16. 茶褐色砂(赤褐色粗砂が帯状に入る)

0　5m

B区北壁

1. 耕作土
2. 黄褐色土(床土)
3. 褐灰色粗砂
4. 褐灰色粗砂(黄褐色粘土帯が入る)
5. 暗褐色粗砂
6. 暗褐色粘質土
7. 淡灰色土
8. 淡黄褐色細砂
9. 暗灰色砂
10. 青灰色粘質土
11. 赤褐色細砂
12. 褐色粗砂(小礫含)
13. 淡灰色粗砂
14. 暗灰色粗砂(9よりやや粗い)
15. 灰褐色粗砂
16. 粘質黄灰色微砂
17. 淡灰褐色砂
18. 灰褐色砂
19. 淡灰褐色砂
20. 淡灰褐色砂
21. 青灰色粘質土
22. 暗灰色粗砂(小礫含)
23. 暗灰色粗砂
24. 黒灰色粗砂
25. 灰色と褐色の砂層(互層)
26. 褐色と黒灰色の砂層(互層)
27. 暗黒灰色粗砂(礫を含む)
28. 暗黒灰色粗砂(27より粗い)
29. 深灰色砂(帯状の赤褐色含む)
30. 黒灰色粗砂(小礫含む)

Fig.103　欠堤部（1次）土層図（1/100）

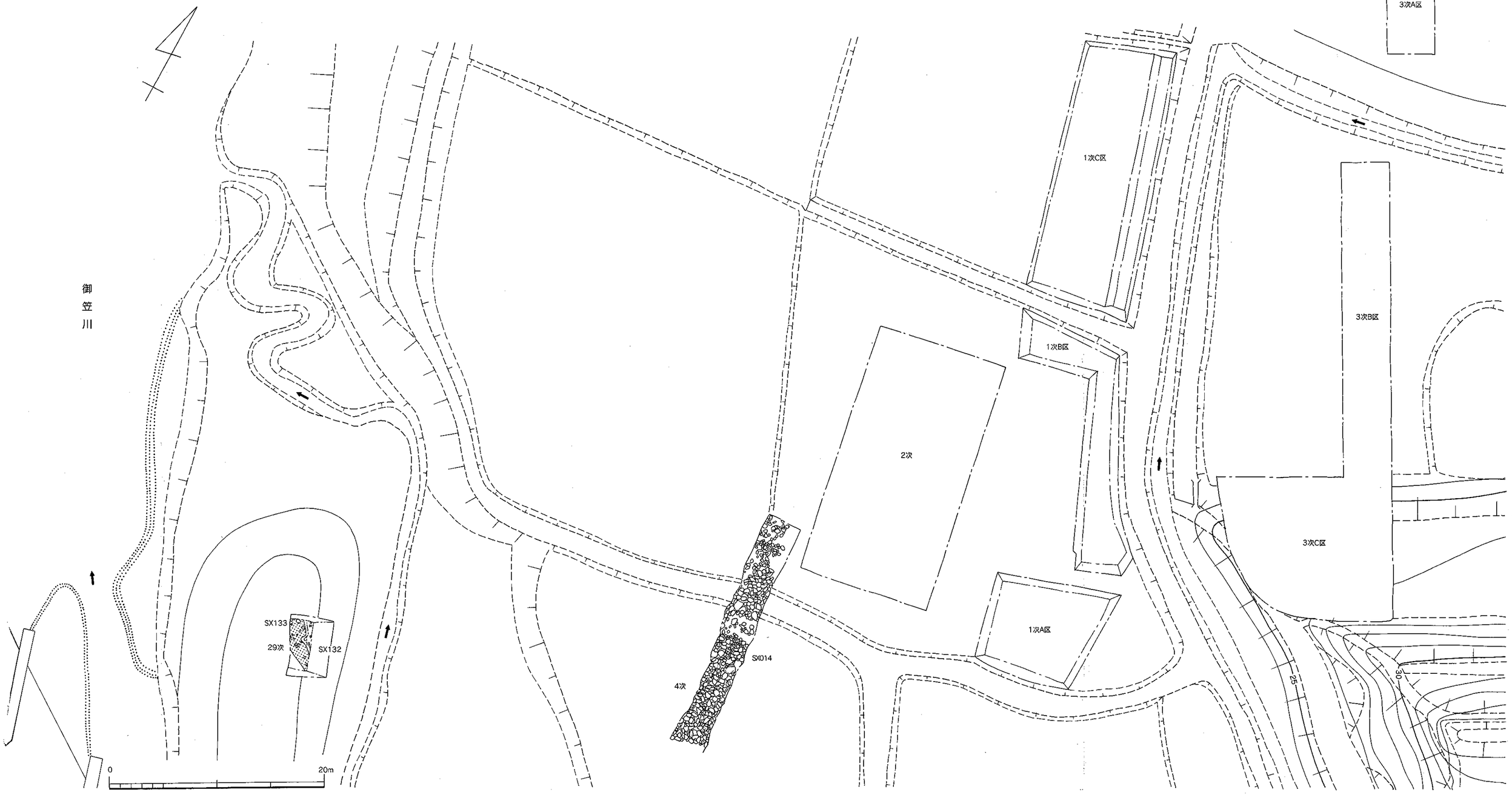
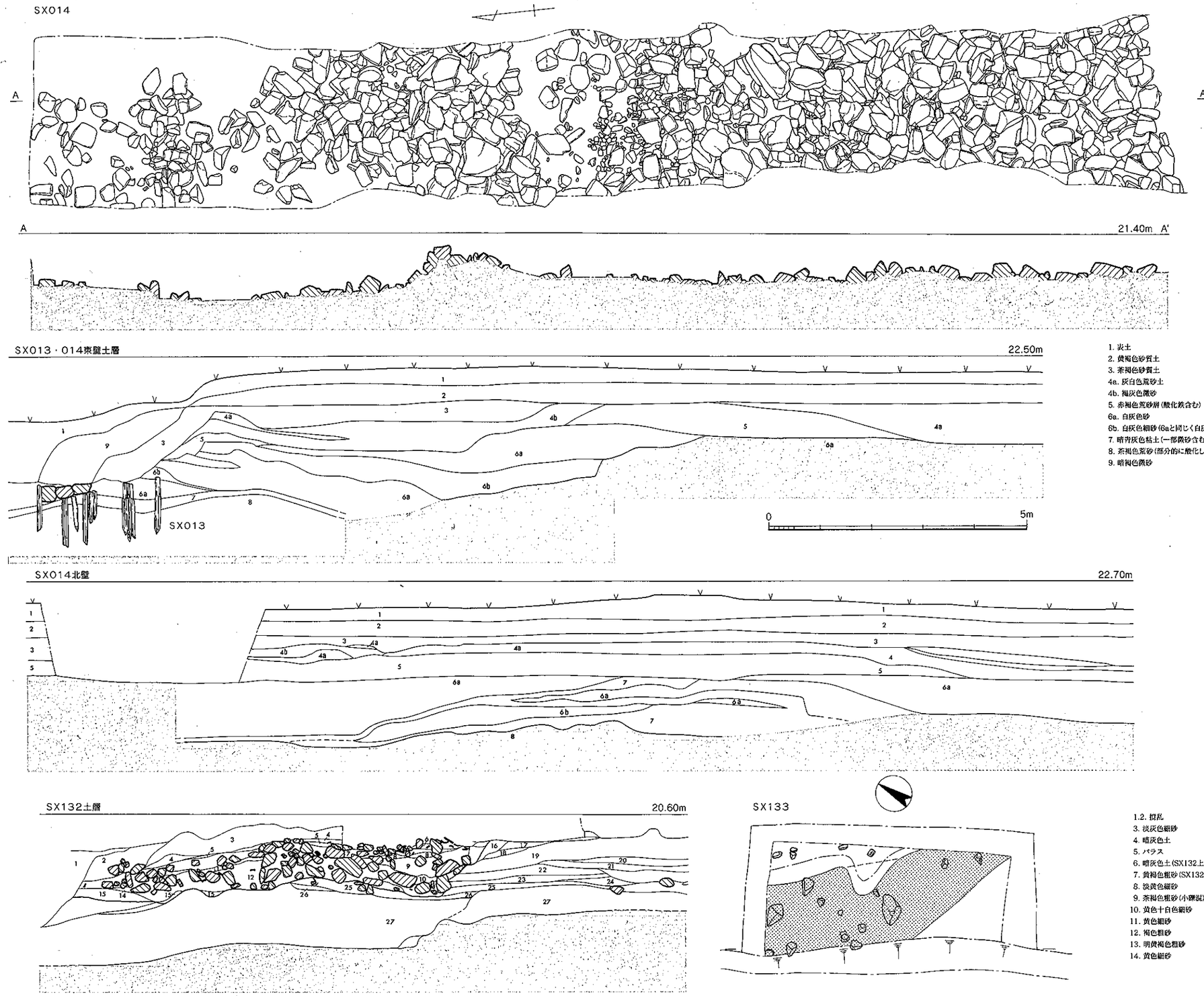


Fig.104　欠堤部地形図（1/300）



1. 表土
2. 黄褐色砂質土
3. 茶褐色砂質土
4a. 灰白色荒砂土
4b. 褐灰色微砂
5. 赤褐色荒砂層（酸化鉄含む）
6a. 白灰色砂
6b. 白灰色細砂（6aと同じく白灰色砂であるが，粒子が細かい）
7. 暗青灰色粘土（一部微砂含む）
8. 茶褐色荒砂（部分的に酸化し赤褐色を呈す）
9. 暗褐色微砂

1.2. 攪乱
3. 淡灰色細砂
4. 暗灰色土
5. パラス
6. 暗灰色土（SX132上層）
7. 黄褐色粗砂（SX132下層）
8. 淡黄色細砂
9. 茶褐色粗砂（小礫混）
10. 黄色十白色細砂
11. 黄色細砂
12. 褐色粗砂
13. 明黄褐色粗砂
14. 黄色細砂
15. 暗青灰色粘土
16. 白色粗砂
17. 淡茶色粗砂
18. 淡黄色粗砂
19. 黄褐色粗砂
20. 白色細砂
21. 黄白色細砂
22. 黄茶色粗砂
23. 茶褐色粗砂
24. 茶色粗砂
25. 明褐色粗砂
26. 青灰色粘土
27. 黄色粗砂互層

Fig.105　石敷遺構SX014・132，瓦溜まりSX133実測図（1/80）

までの遺物が含まれており，この時期までに埋没したと考えられる。

ＳＸ132（29次）（Fig.105，PL.13・61）

欠堤部御笠川東岸で検出した。南北10mの範囲で確認できる花崗岩の礫群である。厚さは，0.5～1m程度である。花崗岩礫は自然礫で，拳大から60cm大までである。石敷の高いところの標高は20.0mで，直接砂層の上に置かれており，礫の間には，粗砂や細砂が入る。特に南側は砂層に乗るように立ち上がっており，この立ち上がりのラインは東に延びている。北側では，砂層に覆われながら礫が落ちているが，本来的な傾斜が存在したのかは不明である。ＳＸ014と比較した場合，礫は積まれた状態ではなく，まばらな印象が強い。ただし，出土遺物を見る限り同時期である。その場合，このＳＸ132を石敷の広がりの西端付近と見ることもできる。

杭

ＳＸ013（4次）（Fig.105）

ＳＸ014の石敷の間に打ち込まれた杭である。40～50cm間隔で打たれており，礫が置かれた砂層下の粘質土まで達している。杭には，角杭と丸杭の２つがある。礫同士の押さえのために打ち込まれたと考えられる。

礫同士の押さえ

瓦溜まり

ＳＸ133（29次）（Fig.105）

29次調査石敷ＳＸ132上面で検出した瓦集中箇所である。ＳＸ132の南の立ち上がり際で確認した。遺物が集中的に出土するが，人為的なものかは判断できない。鴻臚館式軒瓦や縄目叩文の平瓦が出土している。時期的には４次調査出土遺物と大きくは変わらない。

（8）水城堤防内の遺構

1）掘立柱建物

堤防内の掘立柱建物は，東土塁の西側の３次調査，東側の24・35次調査，西土塁西門付近の33次調査，西丘陵部の36次調査において検出されている。いずれも瓦があまり出土していないことから瓦葺建物ではないと考えられる。

ＳＢ021（３次）（Fig.106，PL. 6）

東土塁西北端の３次Ｃ地区で検出されたもので，概報段階ではＳＢ001とされていた遺構である。2.1m×2.4mの１×１間の４本柱の建物である。柱穴は小型の円形を呈する。重複するＳＢ022との切り合い関係はないため，前後関係は不明であるが，周辺から出土した土器から共に８世紀頃のものと考えられる。

ＳＢ022（３次）（Fig.106，PL. 6）

ＳＢ021と重複する梁行１間×桁行２間の建物で，水城本堤にほぼ併行する。概報段階ではＳＢ002とされていた遺構である。桁行は3.0m，梁行は2.1mとやや細長い形状を呈する。柱穴は略方形を呈し，いくつかの柱穴には柱痕の痕跡らしき小ピットが見られる。

ＳＢ080（24次）（Fig.106，PL.62）

東土塁南東部の24次調査で検出されたもので，概報段階においては１×２間以上の特殊な建物と想定されているが，今回再検討した結果，全体の形状は確定ではないが，２×２間（以上）の総柱の建物と判断した。建物の主軸はＮ39°Ｗで，土塁の軸線よりやや西に振れているが，ほぼ併行といえよう。土塁に併行する東西の柱間は2.35m，南北の柱間は1.8mで，北東隅の柱穴を除いて検出した全ての柱穴に柱痕が確認されている。柱穴の形状は円形で，重複するＳＢ100の柱穴に切られるため，ＳＢ080の方が先行するものと考えられる。

ＳＢ090（24次）（Fig.106，PL.62）

ＳＢ080の南側で検出された梁行２間（4.4m）×桁行３間（6.5m）の東西棟で，建物の主軸はＮ33°Ｗで，土塁軸線よりはやや東に振れている。柱穴はいずれも円形で，その幾つかには柱痕も確認されている。柱間は2.1～2.5mとまちまちであり，特に桁行は統一性は見られない。柱穴埋土の状況から考えて，中世以降のものであると考えられる。

ＳＢ100（24次）（Fig.107，PL.62）

ＳＢ080と重複する形で検出された梁行２間（5.4m）×桁行６間（14.88m）の大型の南北棟の建物である。柱間は梁行で2.7m，桁行で2.48mである。柱穴は円形で，最大のもので径1.0m，深さ1.15mと非常に大きいのが特徴である。柱痕は残存するもので径0.2mである。建物の主軸はＮ38°Ｗで，ほぼ土塁軸線に直交する。現状において水城跡で検出された建物の中では最大規模で，かつ大宰府政庁域周辺官衙跡で検出されている建物の中でも大型のものに匹敵する規模であるため，水城を管理するような官衙的な建物が想定されよう。

官衙的建物

ＳＢ141（33次）（Fig.108，PL.63）

西土塁西門周辺の33次調査において，太宰府側下成土塁上で検出された２×３間の南北棟で，梁行3.5m，桁行5.54mで，柱間は梁行で1.75m等間である一方，桁行も1.75mだが，東西一箇所ずつ2.04mと広がる箇所が見られる。建物の主軸はＮ39°Ｗで，西門Ⅱ期のＳＢ120Ｂと

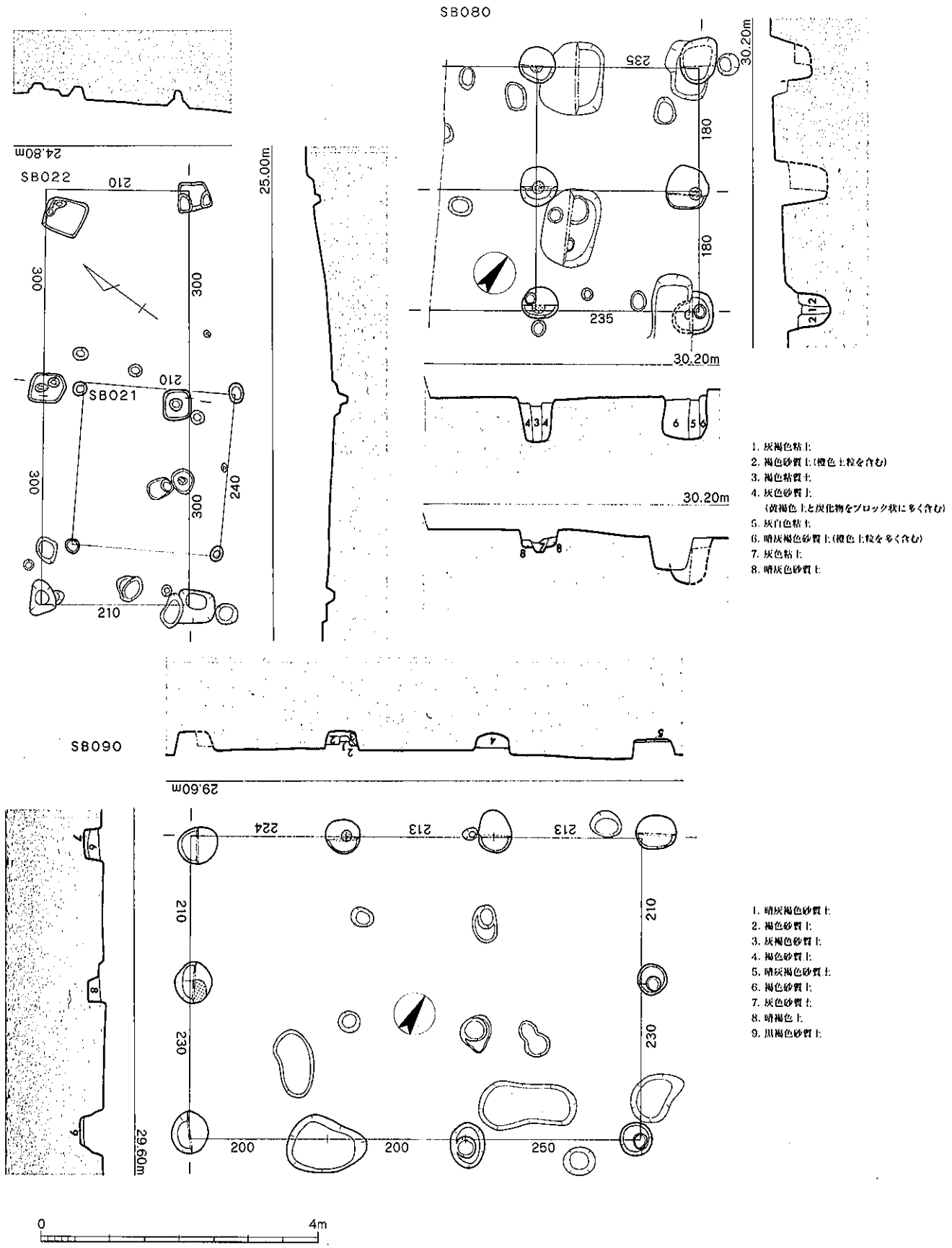


Fig.106　掘立柱建物SB021・022・080・090実測図（1/80）

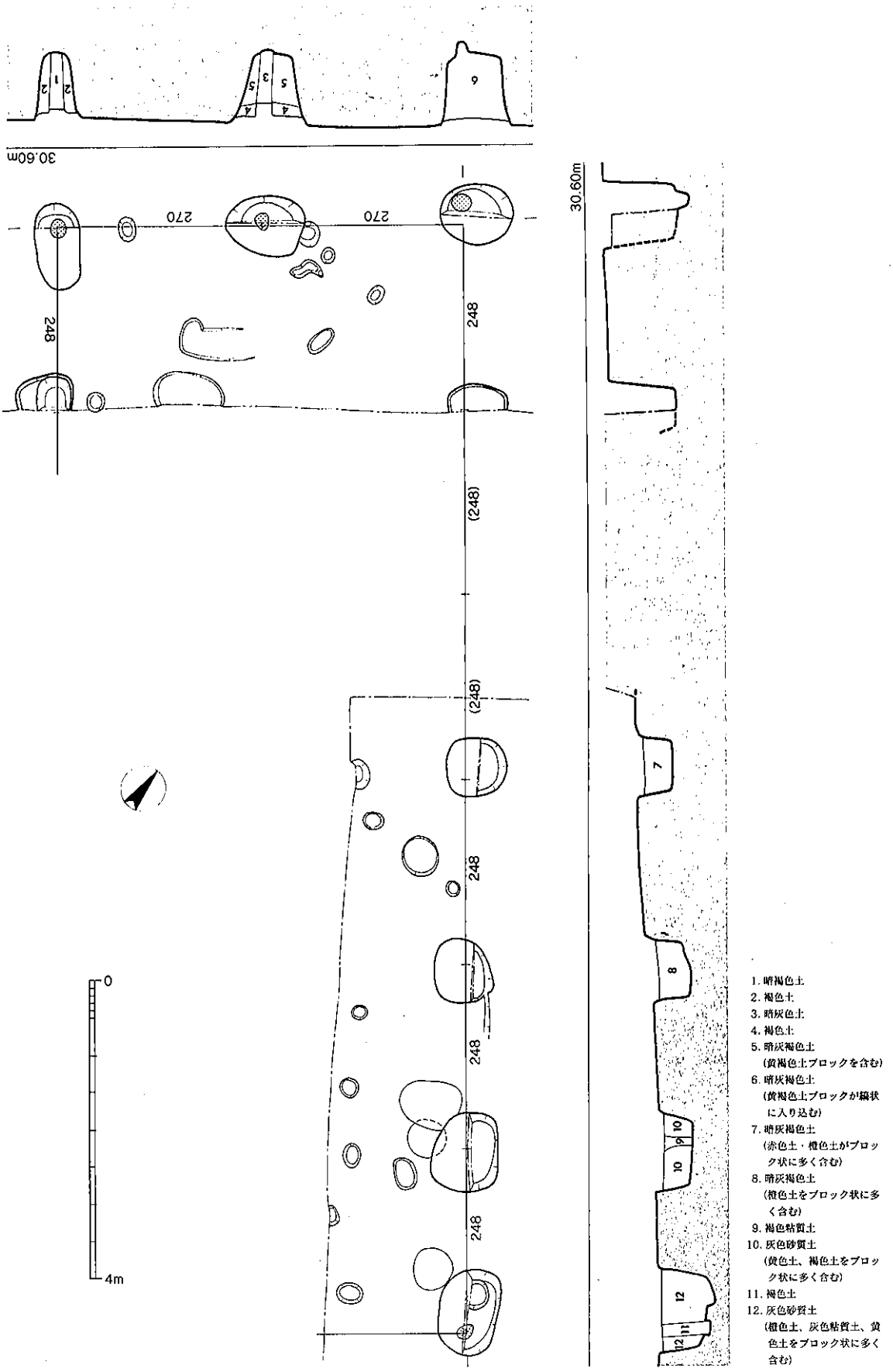


Fig.107　掘立柱建物SB100実測図（1/80）

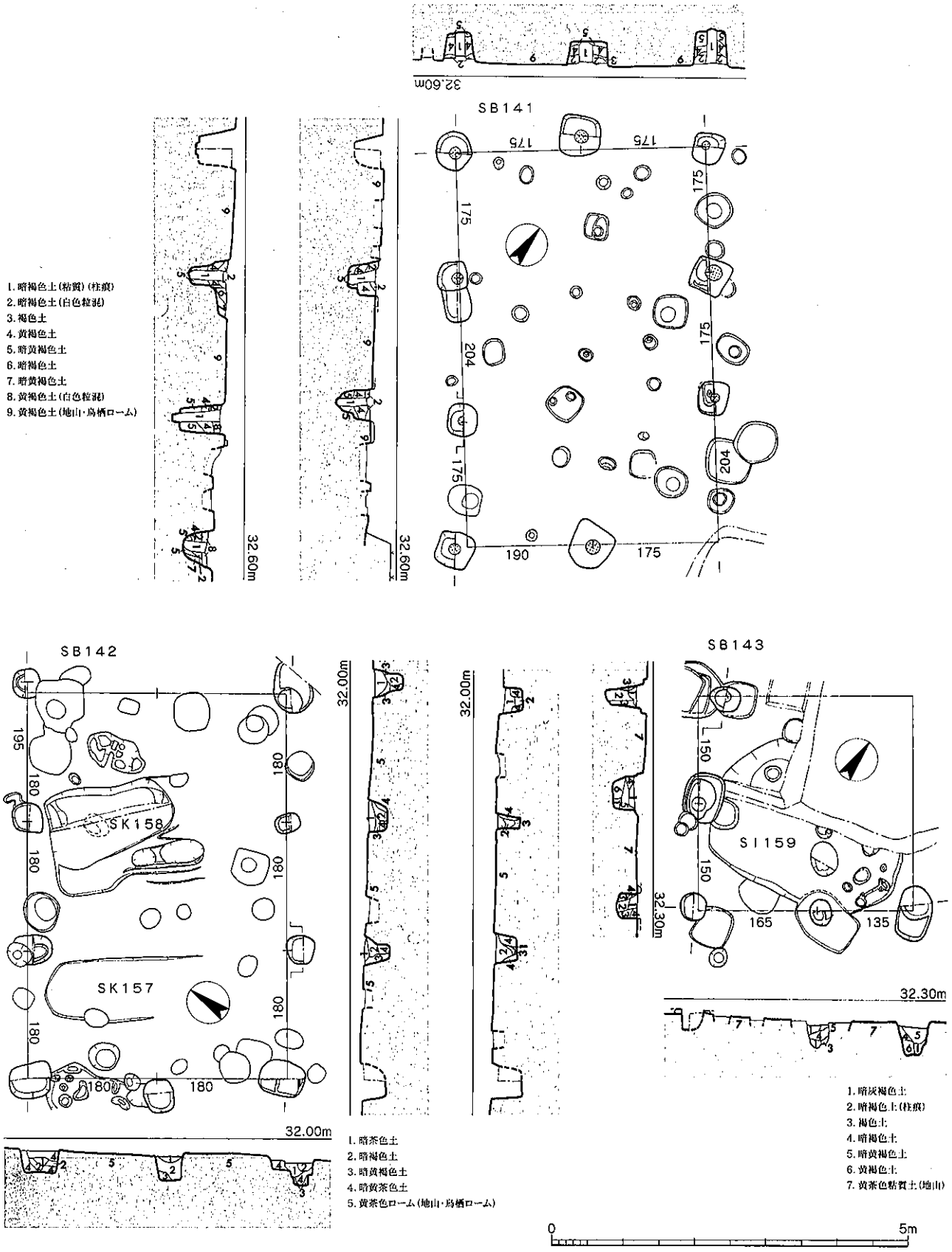


Fig.108　掘立柱建物SB141・142・143実測図（1/80）

併行する。また，西側には併行するように南北方向の柵列ＳＡ147が検出されており，この建物の目隠し塀の役割が想定される。時期については出土遺物がないために断定できないが，建物主軸方向や埋土，周辺の出土遺物から考えて，８世紀代と考えられる。

ＳＢ142（33次）（Fig.108）

ＳＢ141の東側約20mに位置する２×３間の東西棟で，梁行3.6m，桁行5.4mで，柱間は1.8m等間であるが，東側の柱穴のみ検出されていない。建物の主軸はＮ35°Ｗで，土塁軸線にほぼ併行する。周辺で検出されている土坑の年代から勘案して８世紀後半以降と考えられる。

ＳＢ143（33次）（Fig.108）

ＳＢ141の東側に併行して位置する２×２間の建物で，3.0m×3.0mである。柱間は1.5mを基本とするが，建物の中心から北東側は未掘であるため，総柱か否かは不明である。主軸はＮ37°Ｗで，出土遺物から８世紀中頃～後半頃と考えられる。

ＳＢ144（33次）（Fig.110）

ＳＢ142の南西側に位置する２×３間の南北棟で，3.9m×5.4mである。柱間は1.65～1.95mとまちまちで，柱穴も小型の不整円形を呈し，深さは0.65mとかなり深い。主軸はＮ30°Ｗで，土塁軸線よりやや東に振れている。出土遺物から11世紀後半頃と考えられる。

ＳＢ145（33次）（Fig.110）

ＳＢ144の東側に位置する２×３間の東西棟で，3.9m×5.6mで規模はＳＢ144と同規模だが，形状は平行四辺形気味で歪む。柱間は1.65～1.95mとＳＢ144同様，まちまちである。ＳＤ162を切っていることや，西隣のＳＢ144と類似する規格から，ＳＢ144とほぼ同時期の

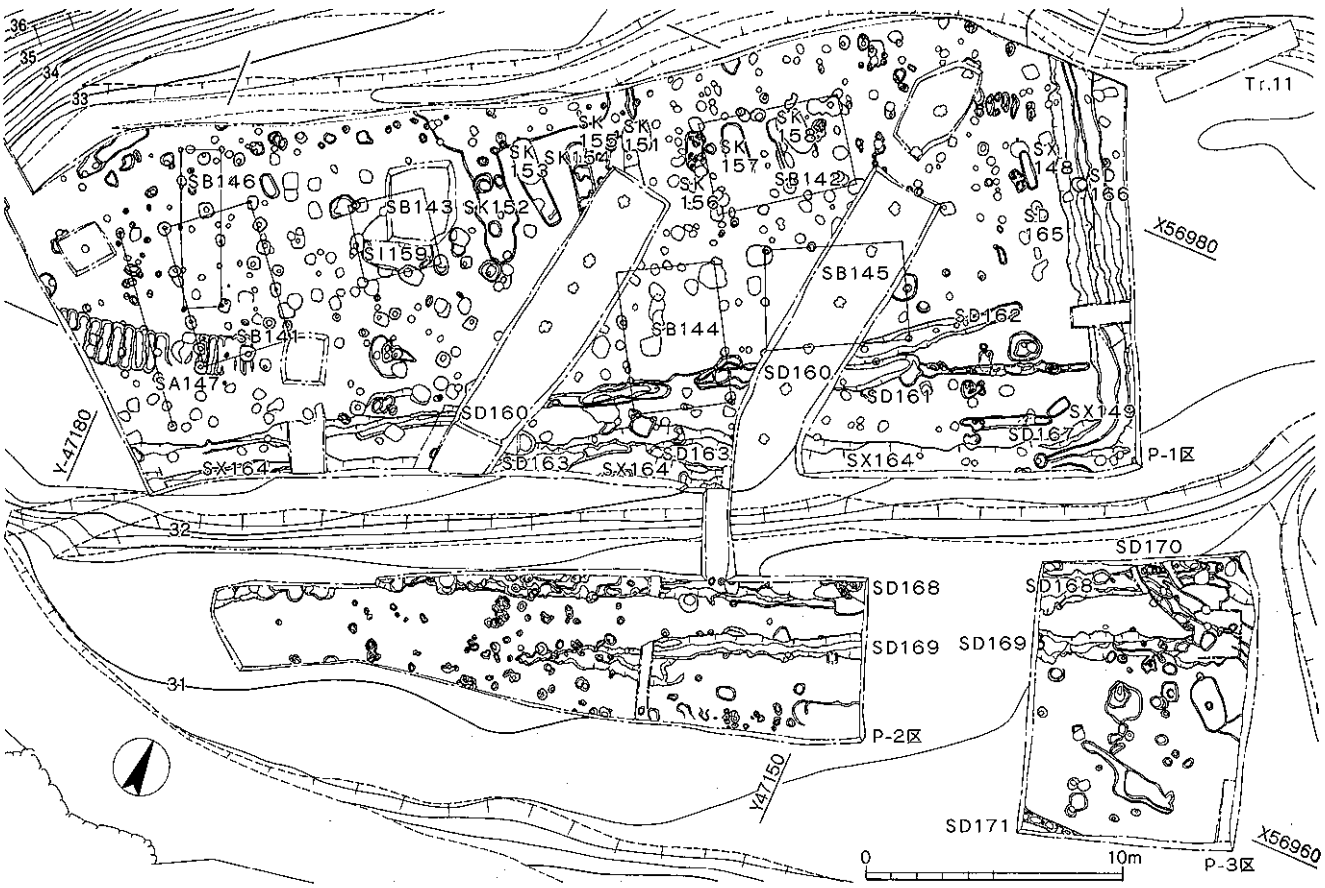


Fig.109　西下成土塁西端（33次）地形図（1/300）

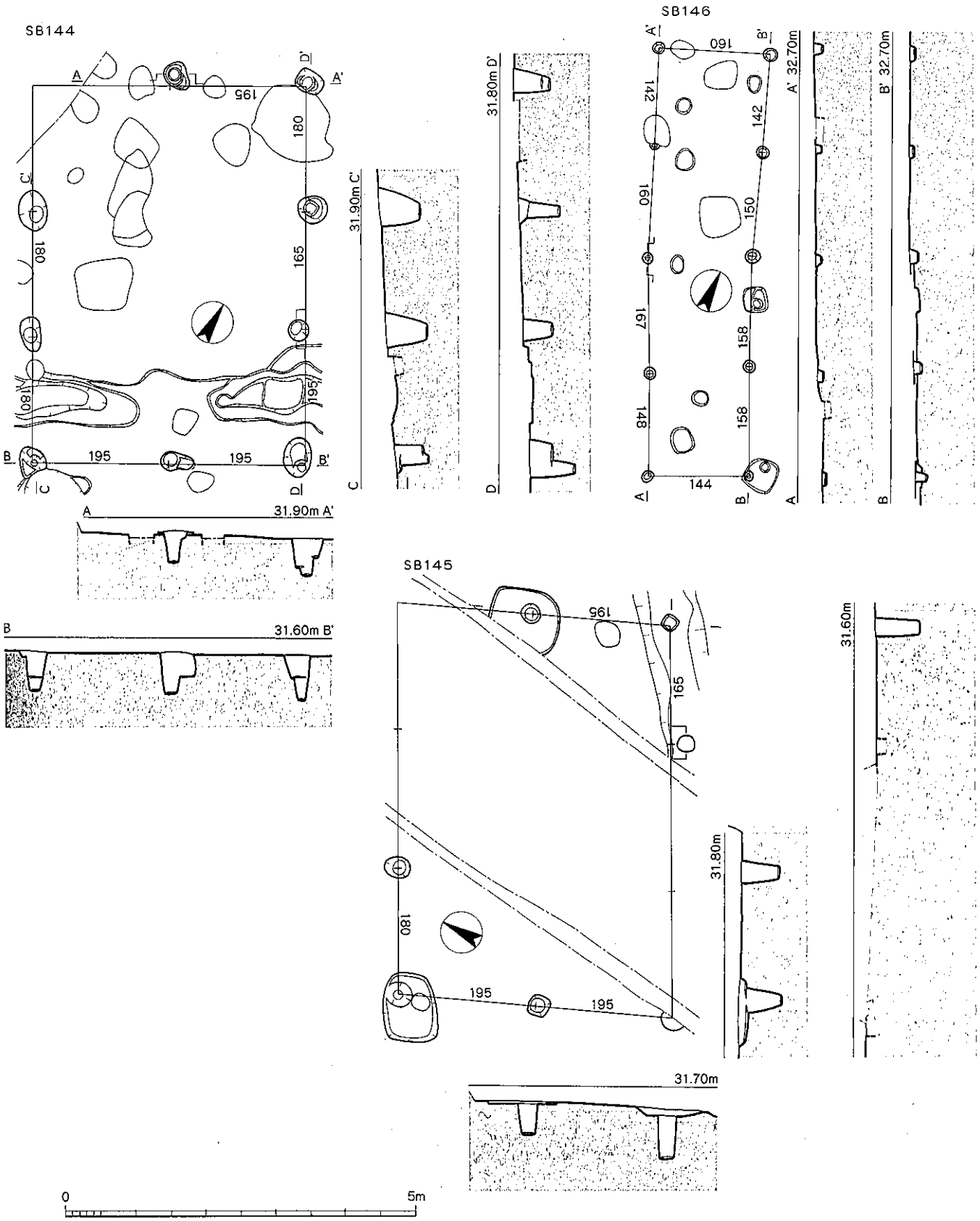


Fig.110　掘立柱建物SB144・145・146実測図（1/80）

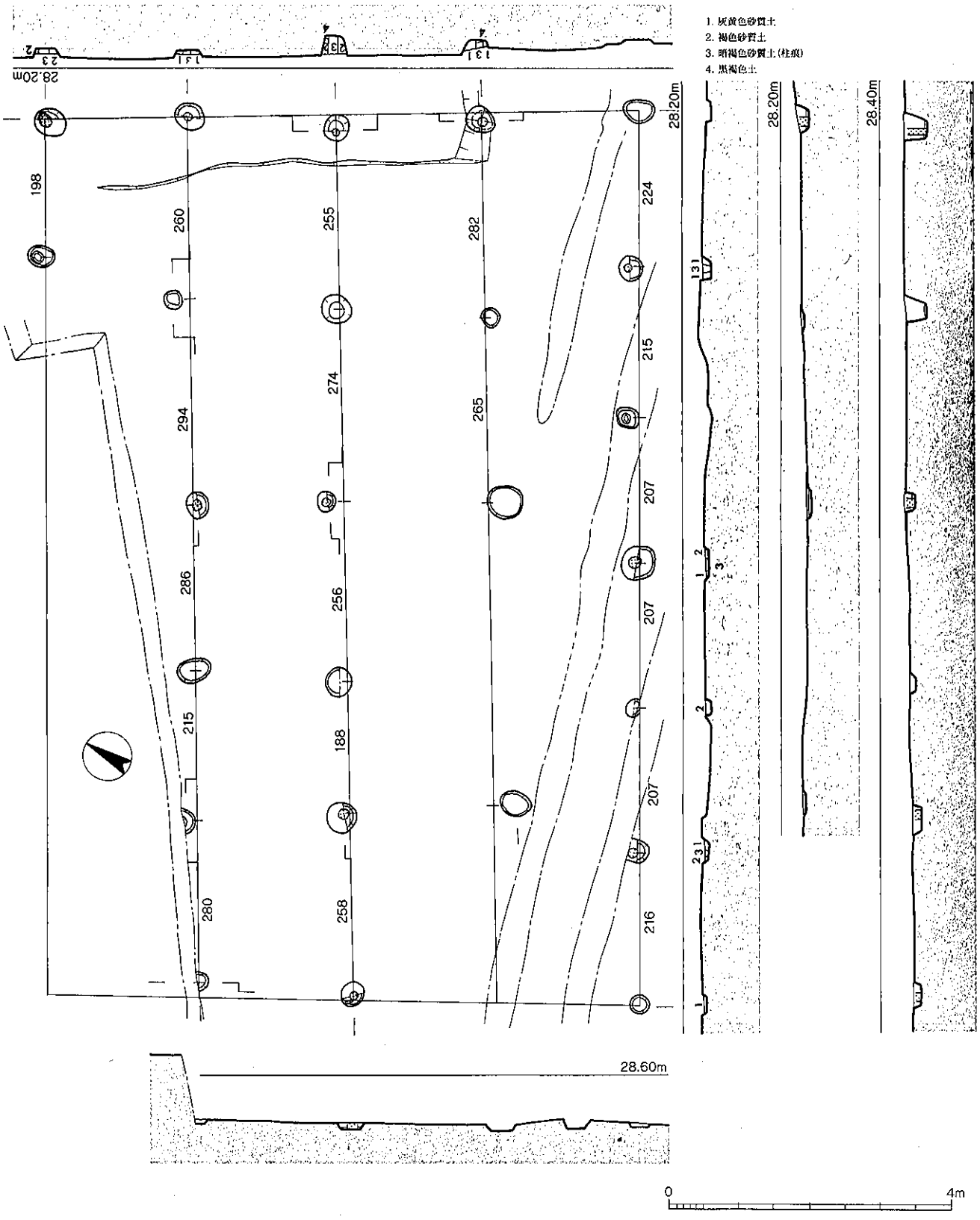


Fig.111　掘立柱建物SB173実測図（1/80）

建物であると考えられる。

ＳＢ146（33次）（Fig.110）

ＳＢ141に重複する場所に位置する１×４間の南北棟で，1.44～1.6m×6.15～6.06mの規模を有する。柱穴はいずれも径0.15～0.2mの小さなもので，柱間も1.42～1.67mと定まっていない。平面プランも正長方形とならず，厳密な規格で作成されたものでないと考えられる。埋土の状況から近世以降の年代を想定することができる。

ＳＢ173（35次）（Fig.111，PL.63）

東土塁太宰府側の35次Ｂ区で検出された４×５間の総柱の建物で，梁行8.42m，桁行12.76mの規模を有する。柱穴は下成土塁積土層の上層に堆積する窯壁片や焼土の混じる整地層の上面から掘り込まれており，形状は円形で，径は0.24～0.48m，柱痕は径0.16mとやや小型の印象を受ける。また，桁行は，南端部のみ６間となっている。建物の主軸はN29.5°Wで，土塁軸線よりは東に振れている。水城瓦窯１号窯31ＳＸ001との距離は約25mと近いことや，建物の範囲に窯壁片等が混じる整地がなされていること，大規模である割には簡素なつくりであることなどから勘案して，瓦窯に伴う工房，あるいは焼成前の瓦の乾燥場と想定できよう。

瓦窯関連の建物

ＳＢ175（36次）（Fig.112，PL.63）

西丘陵部の36次Ａ区で検出された１×２間の南北棟で，梁行3.3m，桁行5.4mの規模を有する。柱穴は後世の削平が激しいと見られ，底面がかろうじて確認できる程度しか残存していない。建物の主軸はN６°Wで，柱間については，梁行は3.3m（11尺），桁行は2.7m（９尺）である。柱穴からは出土遺物は確認できなかったため，年代は確定できないが，隣接する落ち込みＳＸ176から７～８世紀の遺物が出土しており，埋土が類似することから，この建物も８世紀代と想定して差し支えないと考えられる。また，立地や小字名「矢倉」から望楼跡の可能性も想定されているが，その性格については今後さらなる検討を要しよう。

「矢倉」の地名

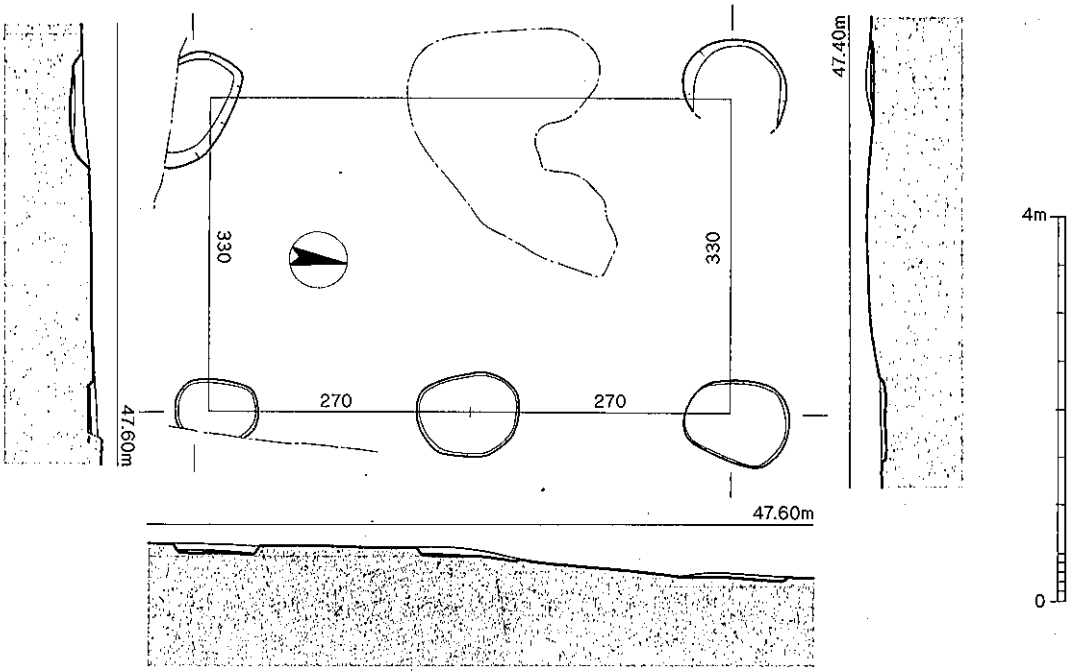


Fig.112　掘立柱建物SB175実測図（1/80）

2）柵

柵は西門周辺の33次と38次で確認されるのみである。

ＳＡ147（33次）（Fig.113）

西門周辺の太宰府側の下成土塁上の33次調査で検出されたもので，南北方向に５つの柱穴を確認している。柱間は1.9mを基本とし，１箇所のみ2.04mである。東側に隣接する掘立柱建物ＳＢ141の主軸と約1.75mの間隔を置いてほぼ併行していることから，ＳＢ141に伴う塀であると考えられる。

ＳＡ208（38次）（Fig.113）

西門周辺の博多側にあたる38次Ａ区で確認されたもので，東西方向に３つの柱穴を確認している。主軸はＮ64°Ｅで，後述するＳＡ209・212・214にほぼ直交する。柱穴は径0.2mと小型で，何れも径0.07mほどの柱痕が残る。柱間は0.84mであり，どのような性格を想定するかは困難であるが，規格的であり，何らかの意向を反映したものであると考えられる。出土遺物から12世紀代のものと考えられる。

ＳＡ209（38次）（Fig.113）

ＳＡ208の北側に位置する柵で，南北方向に４つの柱穴が検出されているが，さらに北側に延びる可能性もある。柱穴は径0.2mと小型の割に柱間は2.18～2.2mと広い。主軸はN30°Wで，後述するＳＡ212・214よりやや西に振れている。白磁碗が出土しており，12世紀代のものと考えられる。

ＳＡ212（38次）（Fig.113）

ＳＡ209の西側に併行する形で，南北方向の４つの柱穴からなるものだが，ＳＡ209同様さらに北側に延びる可能性もある。柱穴は0.3～0.4mとやや大きい。最も北側の柱穴のみ柱痕を確認しているが，径は0.07mと柱穴に比して小さい。柱間は2.05～2.32mとまちまちである。主軸はN25°Wである。

ＳＡ214（38次）（Fig.113）

ＳＡ209の東側に併行する形で，南北方向に３つの柱穴が検出されているが，さらに北側に延びる可能性もある。柱間は2.18・2.3mとまちまちで，最も北側の柱穴のみ柱痕が確認されている。

柵列群は建物の可能性もあり

なお，これら38次で検出された柵群については，それらを一帯のものとして建物と想定することも考えられるが，やはり主軸や柱間のズレは大きく，現状では一連の柵群として扱った。

3）溝

堤防内の溝は建物遺構等が存在する３次・24次・26次・33次・38次で確認されている。

ＳＤ023（３次）（Fig.16，PL.６）

東土塁北西端部３次調査Ｃ区の掘立柱建物ＳＢ021・022の東側で検出された南北溝で，概報段階ではＳＤ003とされていた遺構である。土塁裾から外濠部に向けて6.5m分検出されている。幅は広いところで約0.8m，深さは約0.2m足らずである。

ＳＤ024（３次）（Fig.16，PL.６）

ＳＢ021・022の西側で検出された南北溝で，概報段階では，ＳＤ004とされていた遺構で

ある。約2.8m分検出されている。幅は約0.8m，深さは0.1～0.2m程である。遺構内からは鴻臚館Ⅰ式（223a型式）の軒丸瓦が出土している。この溝はＳＤ023と併せて，掘立柱建物ＳＢ021・022に関連する区画溝もしくは排水溝と考えられる。

ＳＤ083（24次）（Fig.57）

東土塁東側の24次調査北側の調査区で検出された南北溝で，約11.5m分検出したが，一段低くなっている南側の調査区では検出されていない。幅約0.5～2.5m，深さ約0.2～0.4mで，幾つかの溝が切りあっているような印象を設ける。遺構内から土師質茶釜が出土しているため，

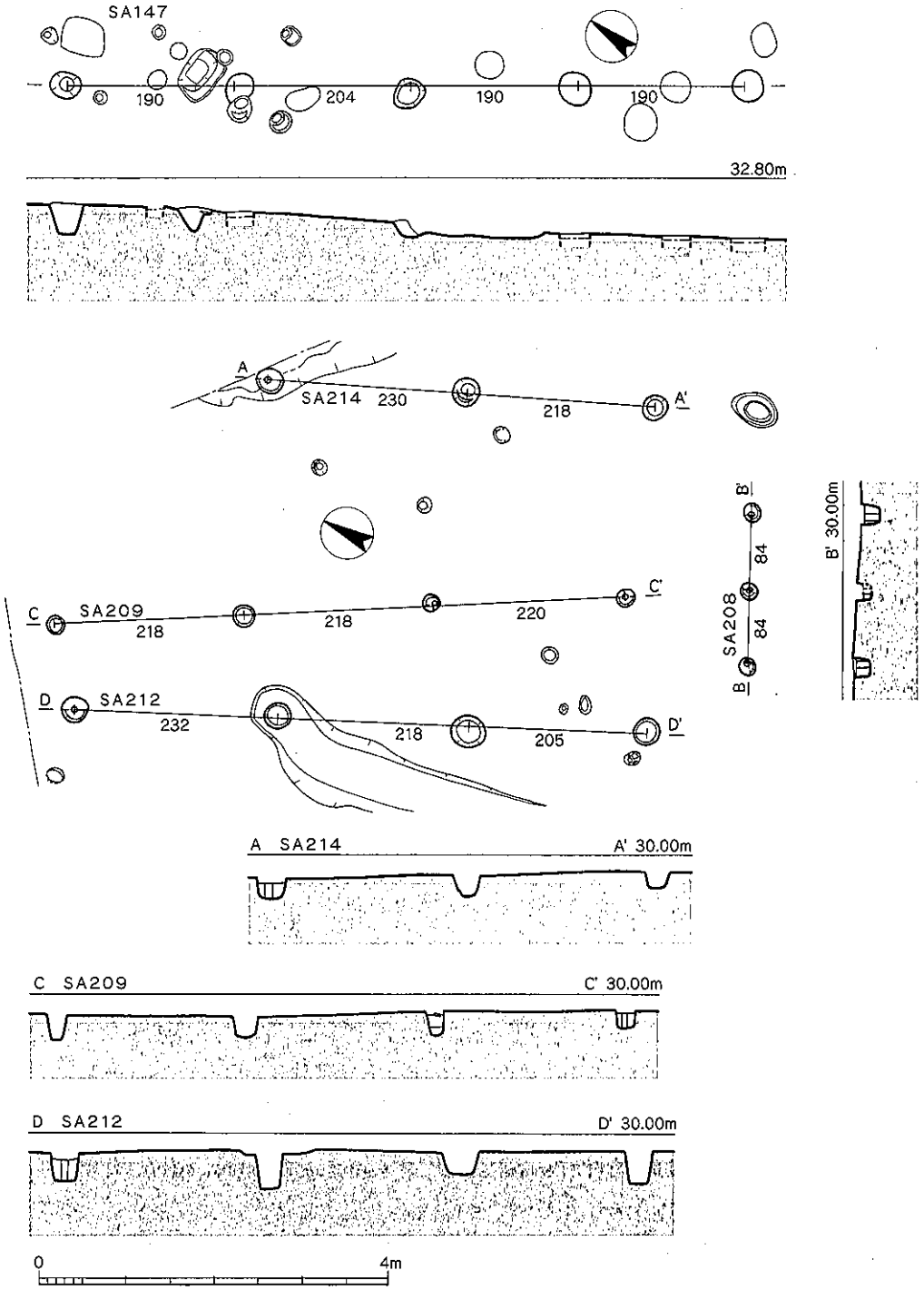


Fig.113　柵SA147・208・209・212・214実測図（1/80）

14～15世紀頃のものと考えられる。

ＳＤ126（26次）（Fig.47）

西門地区北側の26次調査Ｊトレンチで検出されたＬ字型の溝で，土坑ＳＫ123・124を切る。幅0.5～0.8m，深さ0.3mで，東側へ行くほど深くなる。溝の底には灰色の砂層が堆積し，流水したものと考えられる。遺物が出土しなかったため，時期は不明だが，後述するように，ＳＤ283・284・287と対応する位置にあり，同時期（12世紀以降）の可能性が高い。

ＳＤ160（33次）（Fig.109・114，PL.64）

西門周辺の太宰府側下成土塁のテラス上に，土塁に併行する形で検出された東西溝で，東側で，ＳＤ161・162の２条に分かれている。幅は約0.6～0.7m，深さは0.05～0.1m程である。出土遺物には８世紀代のものが見られるが，一連の溝と考えられるＳＤ161からは11世紀後半代の土器も混じるため，最終の埋没はその時期まで下ると考えられる。

ＳＤ161（33次）（Fig.109・114）

ＳＤ160から東側にそのまま継続すると考えられる東西溝で，隣り合うＳＤ162に切られる。西側の3.5m分は幅１mあって，しっかりしているが，さらに東側へ行くと，急激に細くなり，幅0.5m程となる。出土遺物から11世紀後半代の埋没が想定される。

ＳＤ162（33次）（Fig.109・114）

ＳＤ161に併行する東西溝で，ＳＤ161を切ることから，それよりも新しいことが分かる。約７m分を検出しているが，それより東側は途切れている。幅は約１m，深さは0.1～0.15m程である。切り合い関係と上層の層位の年代から，埋没年代は12～13世紀が想定される。

ＳＤ163（33次）（Fig.109・114）

ＳＤ160の南約2.2mに平行に走る東西溝で，東西両側は落ち込みＳＸ164に切られており，残存していない。幅約1.8mとかなり広いが，深さは0.1mとかなり削平されているようである。ＳＤ163を東へ延長すると，わずかに残存するＳＤ167と重なり，一連のものである可能性が高い。北側のＳＤ160との心々距離が2.1m程であり，ＳＤ160・161とＳＤ163・167がそれぞれ道路側溝として機能していた可能性が考えられる。埋没年代は出土遺物から12世紀代と考えられ，ＳＤ160・161の埋没年代と近いことが分かる。

ＳＤ165（33次）（Fig.109）

溝ＳＤ160～163の東側で検出された南北溝で，土塁裾からテラス端部まで約14.5m分検出されており，南端部で，落ち込みＳＸ164を切る形で西側へ直角に曲がっている。すぐ東側にＳＤ166が併行しており，切り合い関係はないため前後関係は不明である。13世紀後半の土層を掘り込んで作られているので，それ以降のものと考えられる。

ＳＤ166（33次）（Fig.109）

溝ＳＤ165の東側に併行する形で検出された南北溝で，ＳＤ165同様，南端部で西側に直角に曲がっている。幅は約１mでＳＤ165とほぼ同規模である。ＳＤ165と共に西側の平坦面を何らかの意図で区画するために設けられた施設である可能性が高い。

ＳＤ167（33次）（Fig.109）

溝ＳＤ161の南側に併行し，ＳＤ163の東の延長に当たると考えられる東西溝で，幅約0.7mの規模を有する。前述したように，ＳＤ161と対となって，道路側溝としての役割が考えられる。

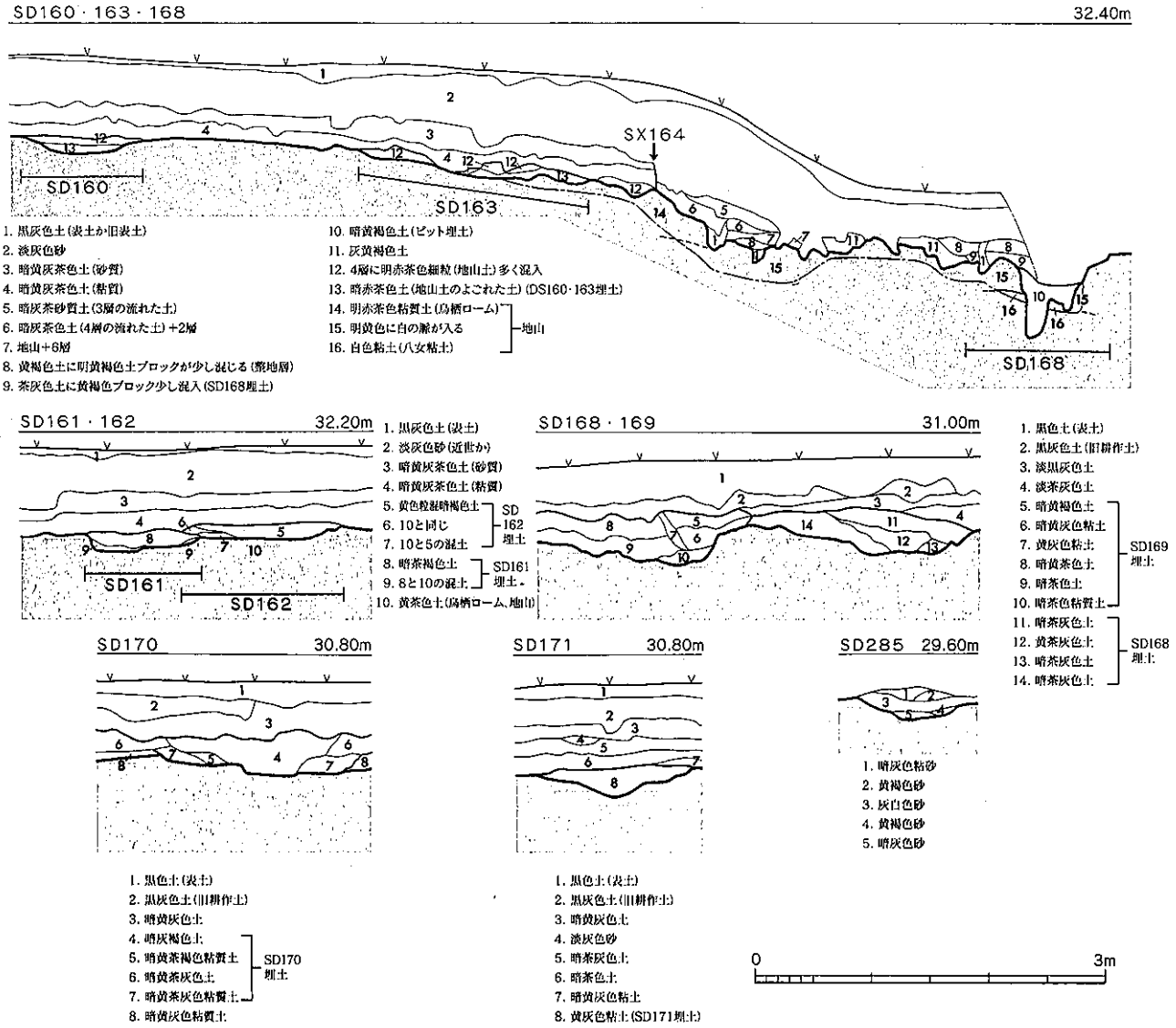


Fig.114　溝SD160～163・168～171・285，落ち込みSX164土層図（1/60）

遺構内からは８世紀前半の須恵器が出土しているが，ＳＤ161と一連のものと考えると，最終埋没は11～12世紀まで下る可能性が考えられる。

ＳＤ168（33次）（Fig.109・114，PL.64）

落ち込みＳＸ164の下段の裾部を東西に併行する溝で，未掘部分を併せ，約40m分検出した。東端部分で，ＳＤ170に切られる。幅は約１m，深さ約0.4m程で，遺構内からは13～14世紀代を中心とする遺物が出土しており，埋没年代を14世紀頃以降に求めることができる。

ＳＤ169（33次）（Fig.109・114，PL.64）

溝ＳＤ168の南側に併行する形で検出された東西溝で，西側は後世の削平により途切れている。ＳＤ168との距離は心々で約2.5mで一定しており，また出土遺物も12～13世紀代と近似することから，ＳＤ168と対となって道路側溝としての役割が考えられる。　**道路側溝**

ＳＤ170（33次）（Fig.109・114）

溝ＳＤ168・169の東端部で検出した溝で，幅0.9m，深さ0.2mで，二段堀状を呈している。

ＳＤ168・169を切っていることから15世紀以降の埋没と考えられる。

ＳＤ171（33次）（Fig.109・114）

溝ＳＤ169の南側で検出された東西溝で，約2.5m分を検出している。幅0.4～0.6m，深さ0.25mで，埋土は黄灰色粘土である。出土遺物は掲載していないが須恵器小片のみであり，古代以降である可能性が考えられる。

ＳＤ191（38次）（Fig.47）

西門地区博多側の38次Ａ区で検出された南北溝で，約7.5m分を検出した。南側は削平のためか途切れているが，北側は調査区外へと続いている。柵ＳＡ212と重複関係にあるが，切り合い関係は不明である。出土遺物から12世紀代頃の埋没と考えられる。

ＳＤ192（38次）（Fig.47）

38次Ａ区のほぼ中央で検出した南北溝で，幅0.6～2.8m，深さ0.1～0.15mと不規則な形状を呈している。溝ＳＤ193・199に切られており，出土遺物から11世紀以降の埋没と考えられる。

ＳＤ193（38次）（Fig.47）

ＳＤ192と重複する南北溝で，6.2m分を検出しているが，さらに北側に続くと考えられる溝状遺構が存在し，それを含めると，約11mとなる。幅0.4m，深さ0.05mで，同じくＳＤ192を切っているＳＤ199やＳＤ194とは方向が同一である。溝の心々での距離はＳＤ199とは2.0m，ＳＤ194とは4.1mで，道路側溝等の関連が想定される。出土遺物からやはり11世紀以降の埋没が想定される。

道路側溝か

ＳＤ194（38次）（Fig.47）

溝ＳＤ193に併行する南北溝で，４m分を検出している。幅0.4m，深さ0.1ｍで，土坑ＳＫ203に切られているようである。出土遺物は掲載していないが11～12世紀代の土師器坏の小片があり，ＳＤ193との関連が窺われる。

ＳＤ199（38次）（Fig.47）

溝ＳＤ193の東側を併行する溝で，7.5m分を検出している。幅約0.6m，深さ0.15ｍで，ＳＤ192を北端部で切っている。出土遺物はない。

ＳＤ283（26次）（Fig.47）

西門地区の26次Ｊトレンチで検出された溝ＳＤ126と併行する形で検出された溝で，９m分を検出している。幅0.7m，深さ0.05ｍで，図には現れていないが，土坑ＳＫ125を切っている。南西側にはＳＤ284が併行し，一部に重複するが，前後関係は不明である。土坑との切り合い関係から12世紀以降の掘削年代が求められる。溝の心々でのＳＤ126との距離は3.9mで，道路側溝などの性格が想定される。

ＳＤ284（26次）（Fig.47）

溝ＳＤ283のすぐ南西側を併行する溝で，規模も類似する。溝の方向から，ＳＤ283と共に，ＳＤ126との関連性が窺われ，溝の心々でのＳＤ126との距離は4.7m程である。出土遺物はないが，土坑との切り合い関係から，やはり12世紀以降に掘削年代が求められる。

ＳＤ285（26次）（Fig.47・114）

26次Ｊトレンチ南端部で検出された溝で，3.2m分を検出している。南西側は官道側溝ＳＤ

101と重複するが，前後関係は不明である。幅0.8m，深さ0.3mで，埋土は灰色もしくは褐色系の砂が堆積していた。出土遺物はないため，年代については不明である。

ＳＤ287（26次）（Fig.47）

26次Ｊトレンチ東端部で検出された溝で，溝ＳＤ126と対称的にＬ字型に屈折する溝である。幅２m，深さ0.2mで，出土遺物はなく年代は不明だが，ＳＤ126と左右対称に屈曲することから，道路側溝であり，なおかつ交差点の角を示している可能性が考えられる。溝の心々でのＳＤ126との距離は6.5mである。ＳＤ126と同時期と考えれば，12世紀以降に掘削年代が求められよう。

交差点か

4）井戸

水城跡の調査では，井戸は以下のＳＥ065の一例しか検出されていない。

ＳＥ065（10次）（Fig.115，PL.65）

東門地区太宰府側の木樋ＳＸ050の取水部の西側約20m地点で検出された木枠の井戸で，幅1.2m，深さ1.2mの隅丸方形の堀形を呈する。井戸枠の残存状況はあまり良くなく，底部に隅柱１本，横桟４本が残存していた。柱は下部にほぞ孔を２個あけて桟木を差し込む型式で，桟木は丸材を縦に半裁したものを使用していた。桟木の長さから推測すると，幅約0.6mの正方形の井戸枠と推定される。恐らく縦板の枠木を使用するものと考えられ，横田分類のII-A類と考えられる（横田1977）。井戸内からは「水城」銘墨書土器が出土している。

墨書土器の出土

5）土坑

土坑は，10・24・26・33・38次で確認されている。特に33次と38次では特定箇所に集中してみられ，時期的にもそれぞれまとまるようである。

ＳＫ066（10次）（Fig.115，PL.65）

10次調査の井戸ＳＥ065の東約６m地点で検出された。径1.9m，深さ1.6mで円形を呈しており，底部には自然木が残っていた。底部の標高がＳＥ065に近似することや，その形状から井戸の掘形であると考えられる。中からは糸切りの土師器坏が出土した。

ＳＫ071（20次）（Fig.115，PL.35）

東門地区の20次Ａトレンチ西側で検出されたもので，概報段階ではＳＫ071と072の２つの土坑として報告しているが，再検討の結果，１つの土坑として報告することとした。

径2.0m，深さ0.5mの円形を呈する。中には人頭大の礫が出土したほか，近世の土師器，陶磁器の他，セメント等も出土した。

ＳＫ073（20次）（Fig.115，PL.35）

土坑ＳＫ071の東約３mに位置し，径３mを越える大きな土坑だが，大半は調査区外であり，正確な形状は不明である。埋土は黄茶色土の単層で，近代以降のものと考えられる。

ＳＫ074（20次）（Fig.115，PL.35）

20次Ｂトレンチで検出された土坑で，径1.3m，深さ0.6mの円形を呈する。暗茶色の埋土で近代以降のものと考えられるが，西側の壁面は水城に関わる古代の積土を掘り込んでいる。その積土は，灰色土と黄褐色系土の互層でやや粗い版築であることが分かる。

積土の存在

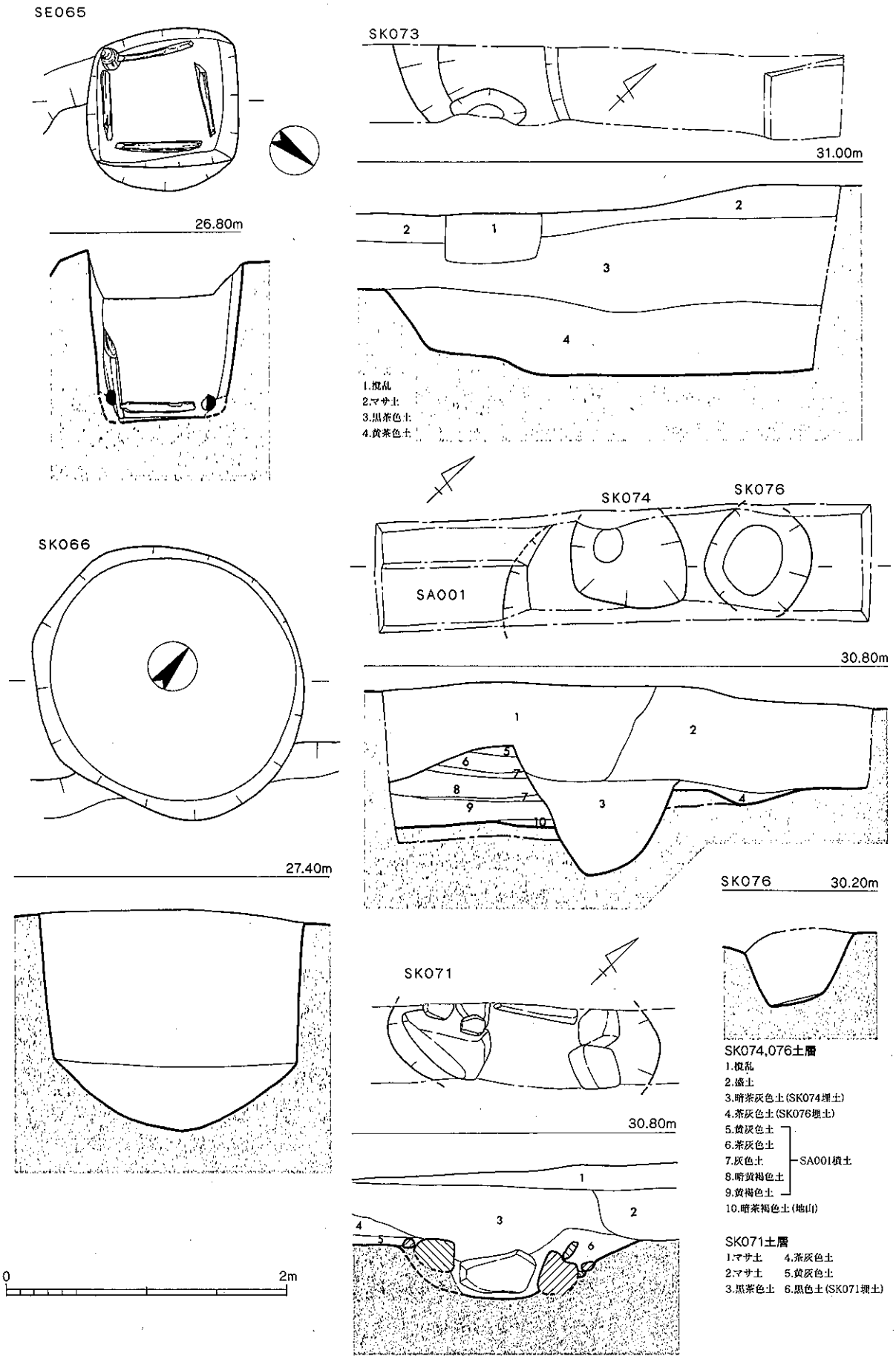


Fig.115　井戸・土坑実測図（1）(1/40)

ＳＫ076（20次）（Fig.115，PL.35）

土坑ＳＫ074の東隣で検出された円形の土坑で，径0.8m，深さ0.5mで，埋土は茶灰色土である。中からは近世陶磁器が出土した。

ＳＫ082（24次）（Fig.116，PL.62）

東土塁東門地区太宰府側の24次調査の調査区南東端で確認された。径0.9～1.2m，深さ0.2mの不整円形を呈する。

ＳＫ084（24次）（Fig.116，PL.62）

土坑ＳＫ082の南西3.0mに位置し，径1.3m，深さ0.4mの円形で，西側にテラスを持つ。中から須恵器の蓋の破片が出土している。

ＳＫ086（24次）（Fig.116，PL.62）

土坑ＳＫ084の南西3.2mに位置し，径0.85～1.0m，深さ0.25mの円形を呈する。この遺構は，北東側に位置するＳＫ082・084と規模も類似し，間隔も3.0～3.2mと一定していることから，何らかの関連性を持つ遺構群と捉えることもできるが，調査範囲も限定されており，建物や柵の柱穴等の遺構として断定することは現段階ではできない。北側に中世以降と考えられる掘立柱建物ＳＢ090があることから，これらの土坑群も中世以降の所産と考えられよう。

ＳＫ087（24次）（Fig.116）

24次調査区南側で検出された楕円形の土坑で，長径1.45m，短径0.6～0.7m，深さ0.3mである。出土遺物が見つかっていないため，時期は確定できないが，周辺の類似遺構の時期から中世以降の所産である可能性が考えられる。

ＳＫ091（24次）（Fig.116）

24次調査区南側で検出された径3.8mの大型の土坑であるが，深さは0.3mと浅く擂り鉢状を呈する。恐らく中世以降の所産であると考えられる。

ＳＫ092（24次）（Fig.116）

24次調査区北側，溝ＳＤ083の西側で検出された楕円形の土坑で，長径1.15m，短径0.65m，深さ0.5mであり，南側にテラスを持つ。出土遺物はないが中世以降と考えられる。

ＳＫ093（24次）（Fig.116）

24次調査区北側で検出された隅丸長方形の土坑で，長径1.4m，短径0.7m，深さ0.3mである。中からは瓦質鉢が出土しており，14世紀以降と考えられる。

ＳＫ094（24次）（Fig.116）

24次調査区北西端で検出された円形の土坑で，径0.6～0.7m，深さ0.4mである。中からは古代の土師器甕が出土しているが，周辺の状況から中世以降とも考えられる。

ＳＫ095（24次）（Fig.116）

24次調査区の掘立柱建物ＳＢ080と重複する形で検出された楕円形の土坑で，長径1.5m，短径1.1m，深さ0.2mである。ＳＢ080との切り合い関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＫ096（24次）（Fig.116）

24次調査区北側で検出された不整楕円形の土坑で，長径1.0m，短径0.35m，深さ0.2mである。出土遺物はなく，性格は不明である。

ＳＫ097（26次）（Fig.117）

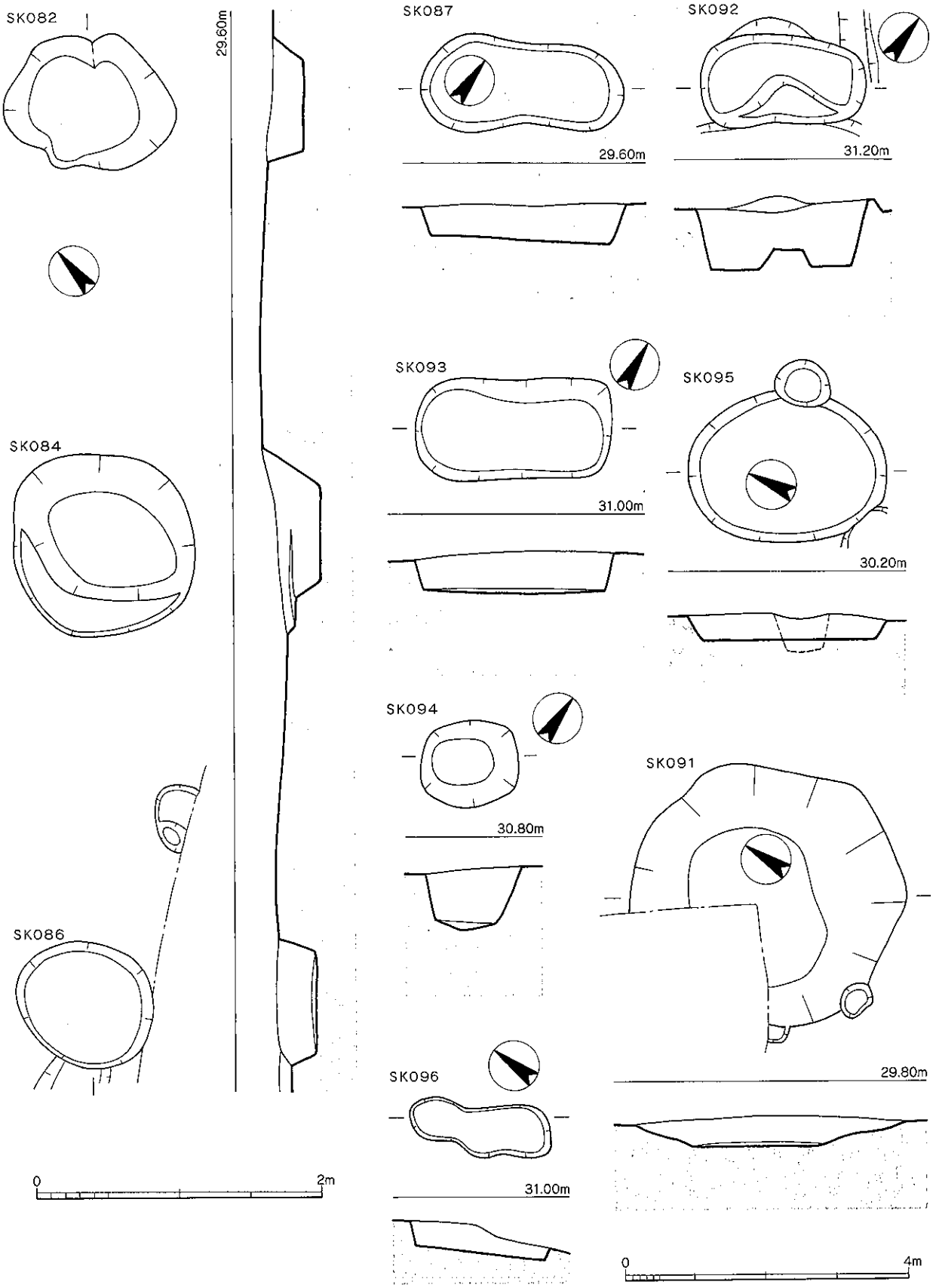


Fig.116　土坑実測図（2）（1/40・1/80）

西門地区26次調査南端部で検出された楕円形の土坑で，南東側は切られているようである。長径1.35m，短径0.7m，深さ0.4mである。

ＳＫ123（26次）（Fig.117，PL.65）

26次調査Ｊトレンチ東側で検出された長楕円形の土坑で，溝ＳＤ126に切られる。長径3.15m，短径1.3m以上，深さ0.55mで，形状，規模，主軸方向共に西側のＳＫ124と類似する。

ＳＫ124（26次）（Fig.117）

ＳＫ123の西側３m地点で検出された長楕円形の土坑で，溝ＳＤ126に切られる。長径2.75m，短径1.7m，深さ0.6mである。中からは須恵器甕の破片が出土している。

ＳＫ125（26次）（Fig.117）

26次Ｊトレンチ北側で検出された不整円形の土坑で，径3.0～3.3m，深さ0.8mで，二段掘りの構造を呈している。中からはヘラ切りの丸底坏の他，墨書瓦器椀等が出土している。

墨書瓦器椀の出土

ＳＫ151（33次）（Fig.117）

西門周辺の太宰府側の下成土塁上の33次調査で検出された不整方形の土坑で，径1.2m，深さ0.3mで，一面が焼けた花崗岩が落ち込んでいる。ＳＫ155を切り込み，中からは須恵器片が出土している。切り合い関係を考えると，８世紀後半頃が妥当と考えられる。

ＳＫ152（33次）（Fig.109）

土坑ＳＫ151の西側６mに位置する不整楕円形の土坑で，長径4.6m，短径1.2mだが，深さは数cmしかなく，はっきりとした形状は不明である。並列するＳＫ153～158と一連の遺構と考えられる。

ＳＫ153（33次）（Fig.117，PL.65）

土坑ＳＫ152の東側に隣接する楕円形の土坑で，長径1.8m，短径0.9m，深さ0.1mで，上面に土器や瓦が集中して出土した。８世紀後半頃のものと考えられる。

土器や瓦の出土

ＳＫ154（33次）（Fig.109）

土坑ＳＫ153とＳＫ155に挟まれて並列する楕円形の土坑で，長径2.8m以上，短径0.8mで，深さは数cmに過ぎない。出土遺物はない。

ＳＫ155（33次）（Fig.109）

土坑ＳＫ154とＳＫ156に挟まれて並列するが，ややＳＫ154に近接した楕円形の土坑で，長径2.1m以上，短径１m，深さは数cmに過ぎない。ＳＫ151に切られるが，出土遺物はない。

ＳＫ156（33次）（Fig.109）

土坑ＳＫ155とＳＫ157に挟まれ，ややＳＫ157に近接した楕円形の土坑で，長径1.5m，短径0.6mで，底面に深さ0.02～0.07mの浅い窪みが多く見られる。出土遺物はない。

ＳＫ157（33次）（Fig.109）

土坑ＳＫ156とＳＫ158に挟まれて並列する楕円形の土坑で，南側は削平のために残されていない。残存する長径2.3m，短径0.9m，深さは数cmに満たない。

ＳＫ158（33次）（Fig.117）

土坑ＳＫ157の東２mに位置する不整楕円形の土坑で，上面に焼土と炭が見られる。長径1.75m，短径1.1m，深さ0.4mである。土器等の出土遺物はない。

なお，ＳＫ152～158は，一定の距離をもって並列する長楕円形の土坑群であり，一連の

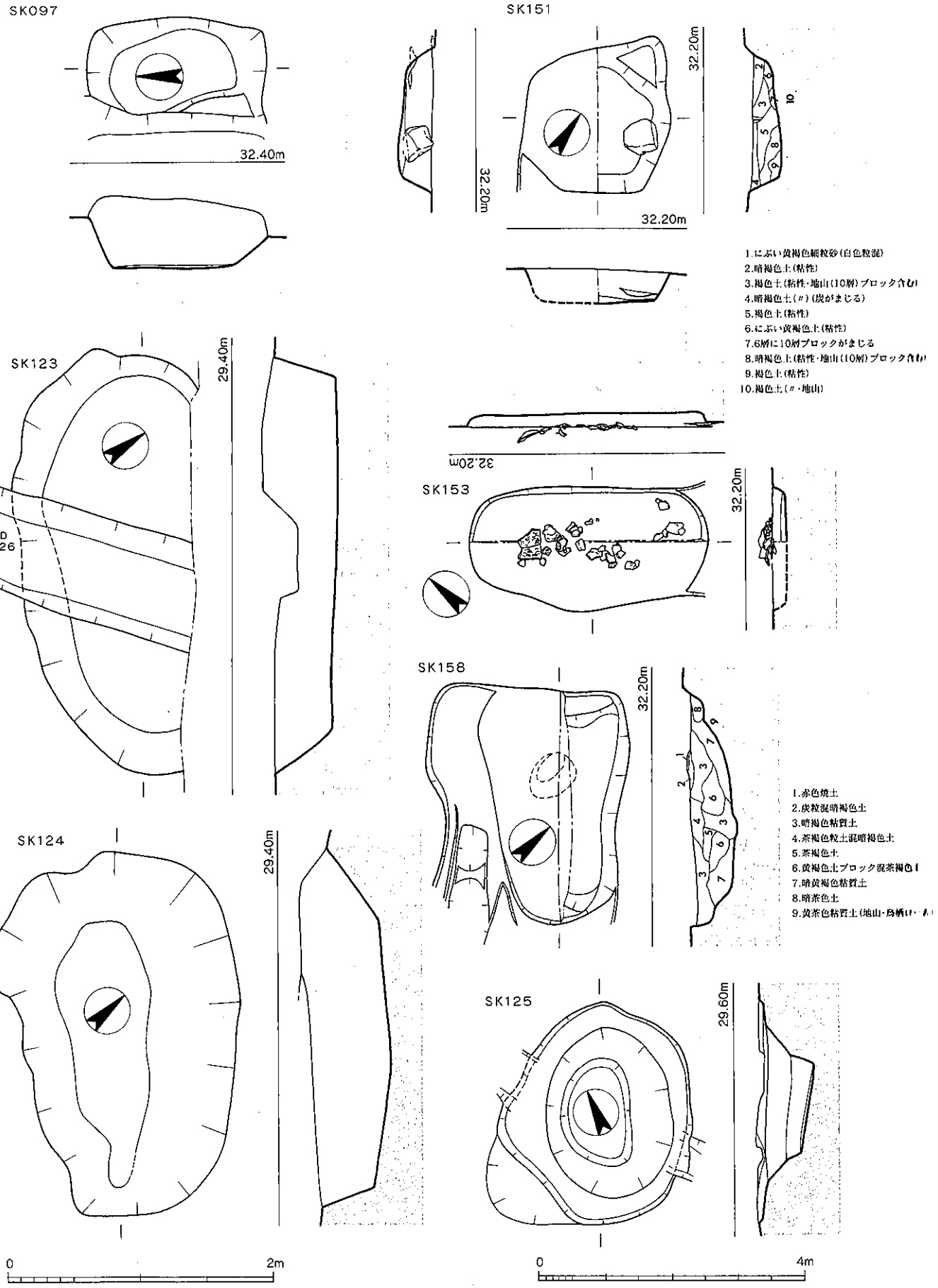


Fig.117　土坑実測図（3）(1/40・1/80)

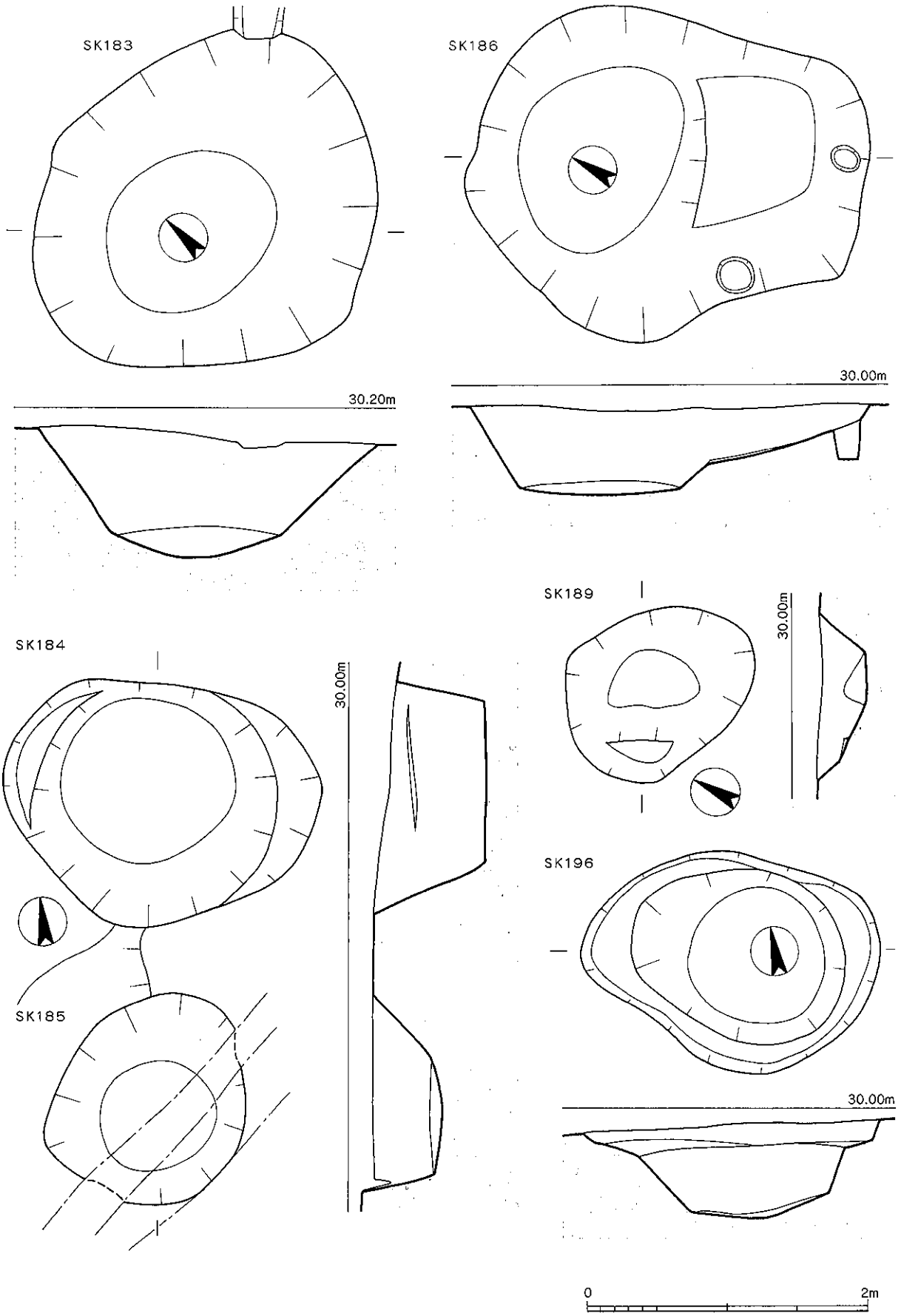


Fig.118　土坑実測図（4）（1/40）

ものであると考えられる。馬繋ぎ場，炊き出し場等の考えも提示されているが，遺構の残りも良くなく，今後の類例を待った上で判断する必要があろう。

ＳＫ183（38次）（Fig.118）

西門地区博多側の38次Ａ区の南西側で検出された円形の土坑で，径2.3～2.7m，深さ0.9m。擂り鉢状の形状を呈し，中からは11世紀代の土師器，黒色土器が出土している。

ＳＫ184（38次）（Fig.118）

38次Ａ区南端で検出された円形の土坑で，径1.75～2.3m，深さ0.8mである。中からは古代の須恵器甕片が出土しているが，土坑ＳＫ202や溝ＳＤ190を切っており，そのことから考えると，12世紀代以降のものと考えられる。

ＳＫ185（38次）（Fig.118）

土坑ＳＫ184の南側に隣接する径1.5m，深さ0.5mの不整円形の土坑で，出土遺物は掲載していない底部ヘラ切りの土師器坏がある。また，溝ＳＤ190を切っているようであり，そのことから11世紀代以降に位置づけられることは確実である。

ＳＫ186（38次）（Fig.118，PL.66）

38次Ａ区の中央部に密集する土坑群の一つで，不整楕円形を呈する。長径2.9m，短径2.4m，深さ0.6mで南側にテラス状の平坦な中段を持つ。中から瓦器椀が出土しており，12世紀代のものと考えられる。土坑ＳＫ187とＳＫ211，竪穴状遺構ＳＸ207を切る。

ＳＫ187（38次）（Fig.119，PL.66）

土坑ＳＫ186の西側に隣接する楕円形の土坑で，長径3.0m以上，短径2.5m，深さ0.55mである。ＳＫ186とＳＫ188に切られ，ＳＫ211と竪穴状遺構ＳＸ207を切っている。出土遺物や切り合い関係から12世紀代と考えて差し支えない。

ＳＫ188（38次）（Fig.119，PL.66）

土坑ＳＫ187の西側に隣接する円形の土坑で，径2.3m，深さ0.55mで，ＳＫ187とＳＫ211を切っており，ＳＫ187よりも新しい位置にあるが，出土遺物はさほどの時期差は見られない。

ＳＫ189（38次）（Fig.118，PL.66）

土坑ＳＫ186の北東側に隣接する不整円形の土坑で，径1.3～1.4m，深さ0.3mである。他の遺構との切り合い関係はないが，近接する土坑群と出土遺物の時期差はさほどない。

ＳＫ195（38次）（Fig.119，PL.66）

土坑ＳＫ186の北側に隣接する不整三角形の土坑で，長径2.9m，短径2.1m，深さ0.7mだが，土坑の東側が非常に明瞭な円形を呈しており，円形土坑と幾つかの不正形な土坑が切り合っている可能性も考えられる。ＳＫ201とＳＫ211を切り，11世紀代の遺物が出土している。

ＳＫ196（38次）（Fig.118，PL.66）

土坑ＳＫ189の北側に隣接する楕円形の土坑で，長径2.15m，短径1.6m，深さ0.65mである。中からは８世紀前半の須恵器が出土しており，その時期の可能性が考えられる。

ＳＫ197（38次）（Fig.120，PL.66）

土坑ＳＫ195やＳＫ196の北側に位置する楕円形の土坑で，長径2.0m，短径1.4m，深さ0.55mである。中からは黒色土器が出土しており，周辺の土坑群とほぼ同時期と考えられる。

ＳＫ198（38次）（Fig.120，PL.66）

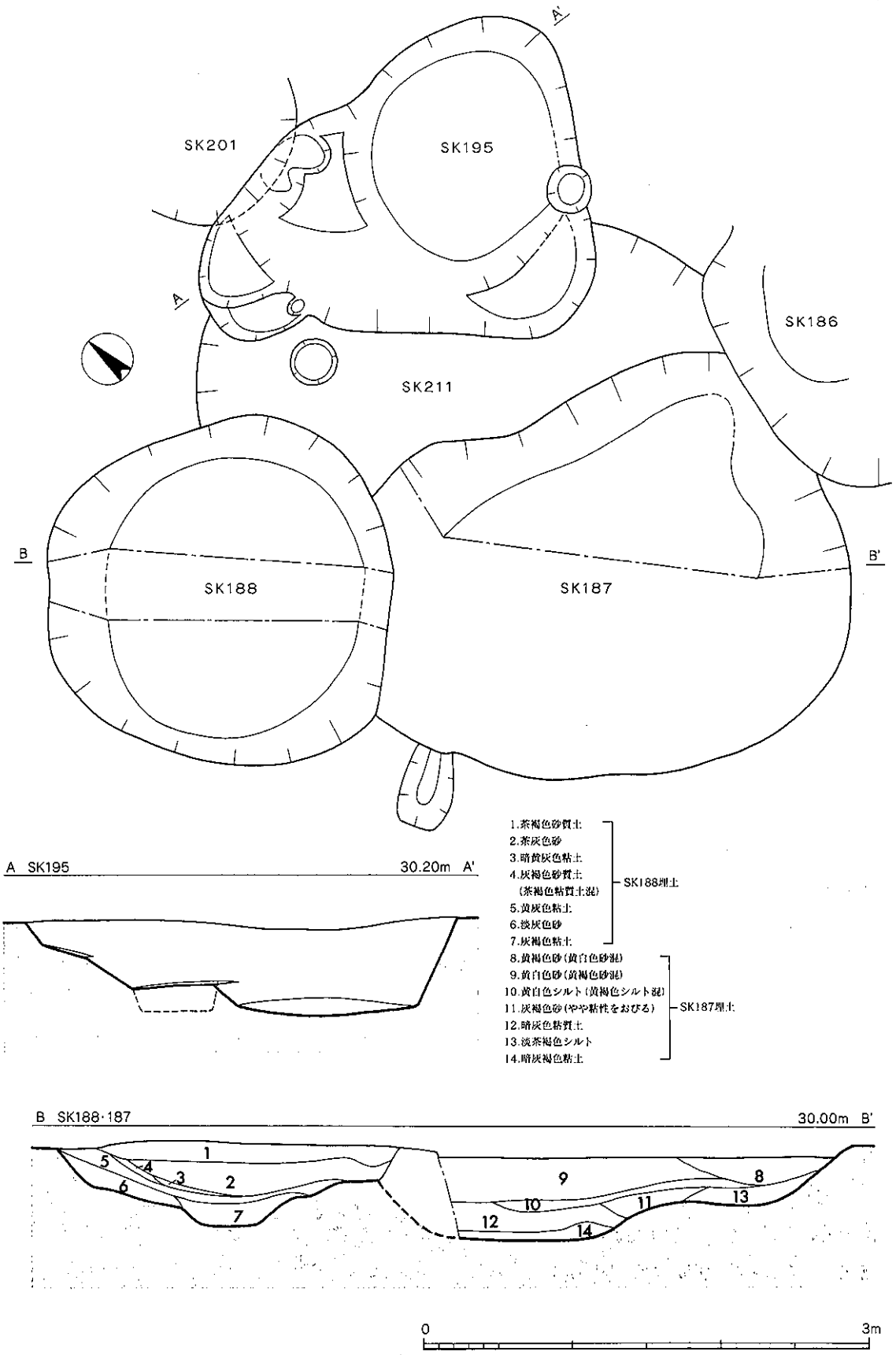


Fig.119　土坑実測図（5）(1/40)

土坑ＳＫ188やＳＫ195の北側に位置する円形の土坑で，径2.2m，深さ0.5mでレンズ状の土層の堆積が見られる。ＳＫ201を切るが，中から11世紀前半代の土器が出土している。

ＳＫ201（38次）（Fig.120，PL.66）

土坑ＳＫ195とＳＫ198に挟まれた位置にある楕円形の土坑で，長径1.65m以上，短径1.4m

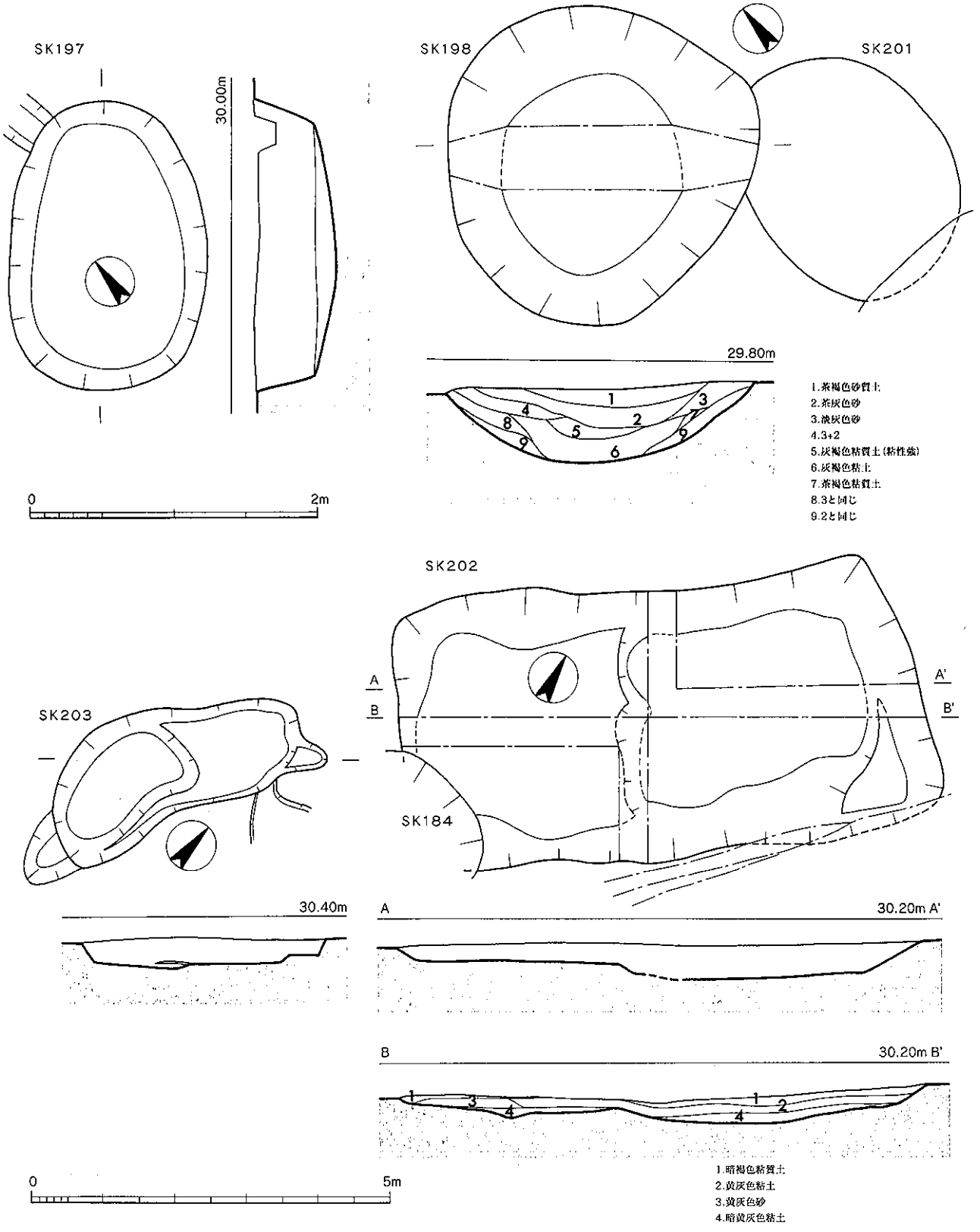


Fig.120　土坑実測図（6）（1/40・1/80）

で，ＳＫ195とＳＫ198に切られる。内部はほとんど未掘のため深さは不明だが，11世紀頃の遺物が出土している。

ＳＫ202（38次）（Fig.120）

38次Ａ区の南東端で検出された長方形の大型土坑で，長径7.2m，短径3.9m，深さ0.5mであり，溝ＳＤ190と土坑ＳＫ184に切られる。遺構内からは８世紀代の完形の須恵器が多く出土しているが，遺構の性格は不明である。

ＳＫ203（38次）（Fig.120）

38次Ａ区西端で検出された不整楕円形の土坑で，長径3.6m，短径1.5m，深さ0.4mである。出土遺物はないが，溝ＳＤ194を切っていることから11世紀代以降に求められよう。

ＳＫ211（38次）（Fig.119，PL.66）

38次Ａ区中央の密集土坑群の一つであり，土坑ＳＫ186・187・188・195の全てに切られる楕円形の土坑である。長径3.5m以上，短径1.5m以上，深さは未掘のために不明である。

ＳＫ273（26次）（Fig.121，PL.40）

西門地区26次Ｂ区の北端部で土坑ＳＫ274と共に検出された土坑で，円形を呈する。北半分は段落ちに切られている。径1.7m以上，深さ0.6mで，底面にピットが確認できる。

ＳＫ274（26次）（Fig.121，PL.40）

土坑ＳＫ273の東側に隣接する不整円形の土坑で，北半分は段落ちに切られている。径1.8m

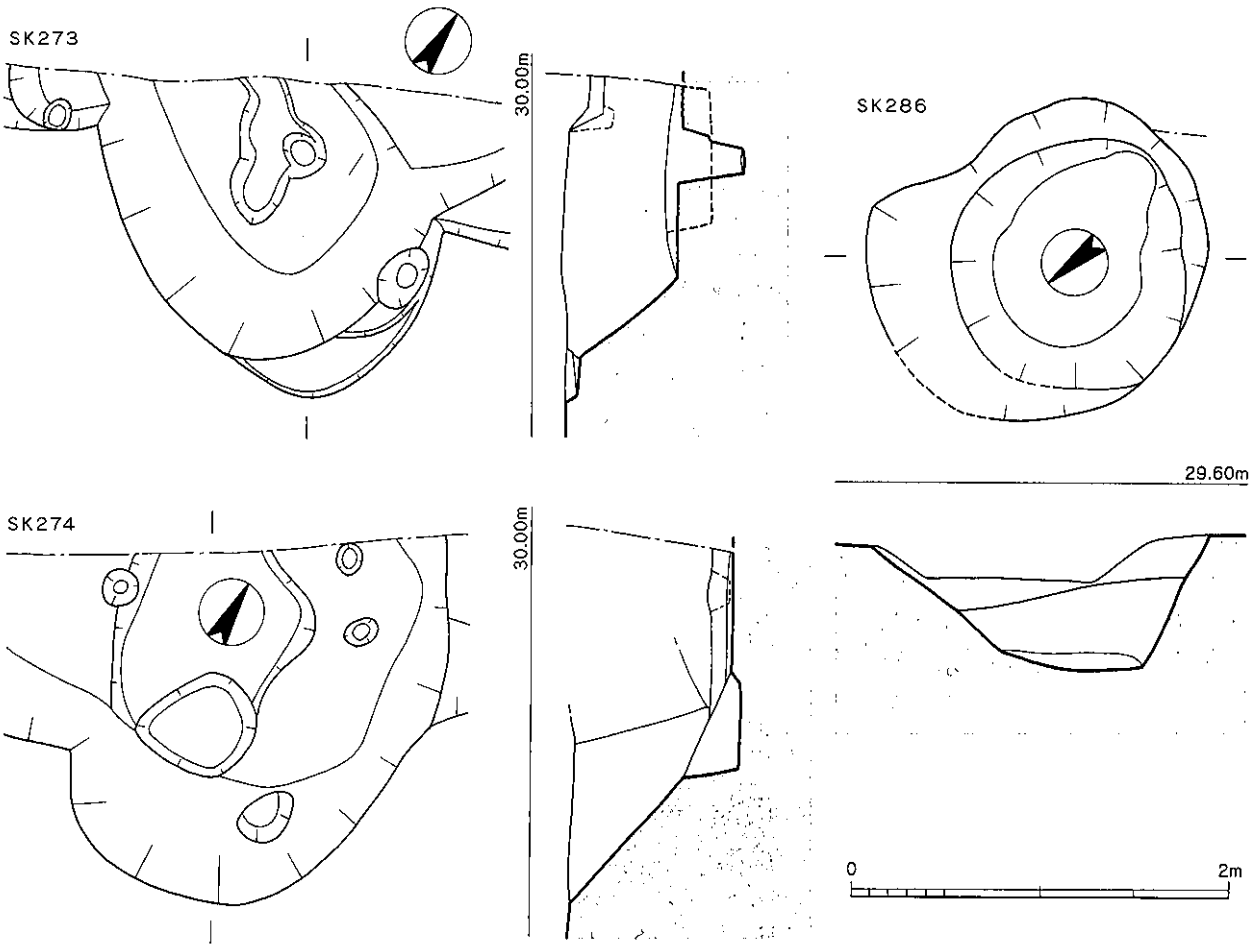


Fig.121　土坑実測図（7）（1/40）

以上，深さ0.8mで，底面に幾つかピットがある。中からは８世紀代の土器が出土している。

ＳＫ286（26次）（Fig.121）

西門地区26次調査Ｊトレンチの中央部で検出された円形の土坑で，径1.65～1.8m，深さ0.8mである。出土遺物はない。

6）経　塚

西門切通し部西側土塁で確認したⅢ期門建物に伴う修築積土ＳＸ281と対になる積土のラインを確認するため，切通し部東側土塁の頂部平坦面にトレンチを設定した際，はからずしも経塚を３基検出した。なお，切通し部付近の土塁頂部には檜等の植林がなされており，ＳＸ111は東半部のみの調査となった。

ＳＸ111（26次）（Fig.123・124，PL.67・68）

切通し部東側土塁の西端に位置する。検出以前は，標石と考えられる石（●印）の一部が僅かに露出していた状態であった。その石を中心として南北にトレンチを設定し掘り下げたところ，周溝とみられる溝を確認したため調査区を東側に拡張した。

当経塚は外部施設として壇状の石組（標石）を有する。石組は30～50cm大の花崗岩割石を方形に一段組んだもので，現状で0.7×1.0mの範囲に集石するが，南東側にも現位置を留めていない石が２個あるため当初の規模は明確ではない。表土を除去すると内径3.7mの周溝が検出されたが，整円ではなく隅丸方形に近い形状をなす。溝は上面幅0.46～1.05mで，深さ0.24mの規模。内部施設の掘形は上面が2.8mの円形を呈するが，底面は長軸1.7mの多角形をなすようである。掘形の深さは石組の下場から0.95mを測る。また，掘形の線は石組が乗る暗褐色土を若干掘り下げて検出しており，土饅頭状の盛土を有していたと考えられる。

土饅頭状の盛土

内部施設は，掘形底面のやや北側を径60cm，深さ40cmほど掘り窪めた後，底石を敷き，５個の石を方形に組み合わせ，内法26cmの小石室を造る。石室底部には湿気抜きのための木炭を厚さ４cmほど入れ，その上に経筒を安置し，小石室の蓋を被せる。さらに，石子詰め状に10～45cm大の花崗岩割石を90cmの高さに積み上げ，排土で掘形を埋め戻している。石積みの途

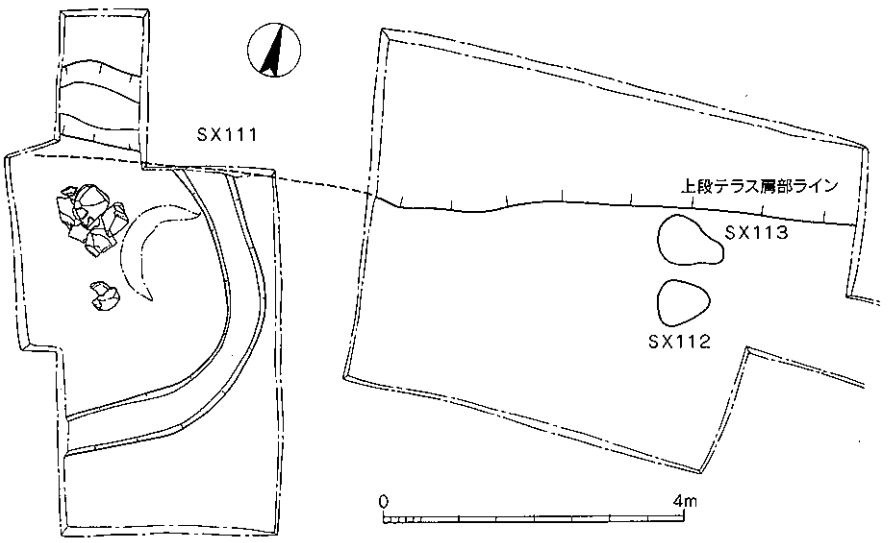


Fig.122　経塚SX111・112・113配置図（1/100）

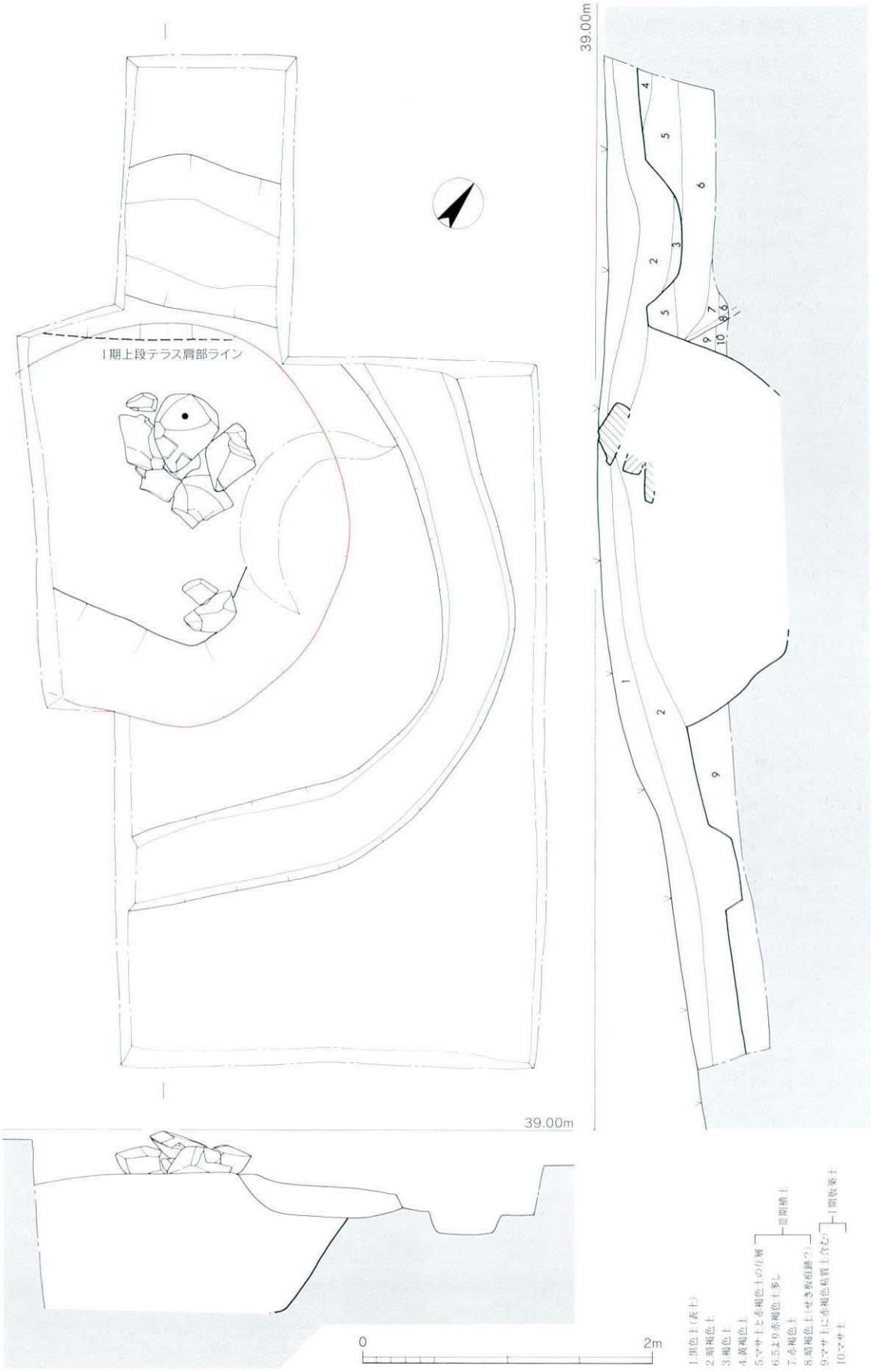


Fig.123　経塚SX111実測図（1/40）

中で短刀２本を副納しているが，鏡・利器は魔除けの意味をもつものとみられる。

経筒は北側に倒れていたが，本来は正座していたものであろう。また，下部の木炭層中からはガラス玉が多量に出土しており，経筒の上に襷掛けしていたものと思われる。

ＳＸ112（26次）（Fig.124，PL.69）

ＳＸ111の７ｍ東側に位置する。表土除去後，立石を検出したため先の石組を想定し，その中央にトレンチを設定し掘り下げたものの，掘形・石積みなどは検出できなかった。周囲を若

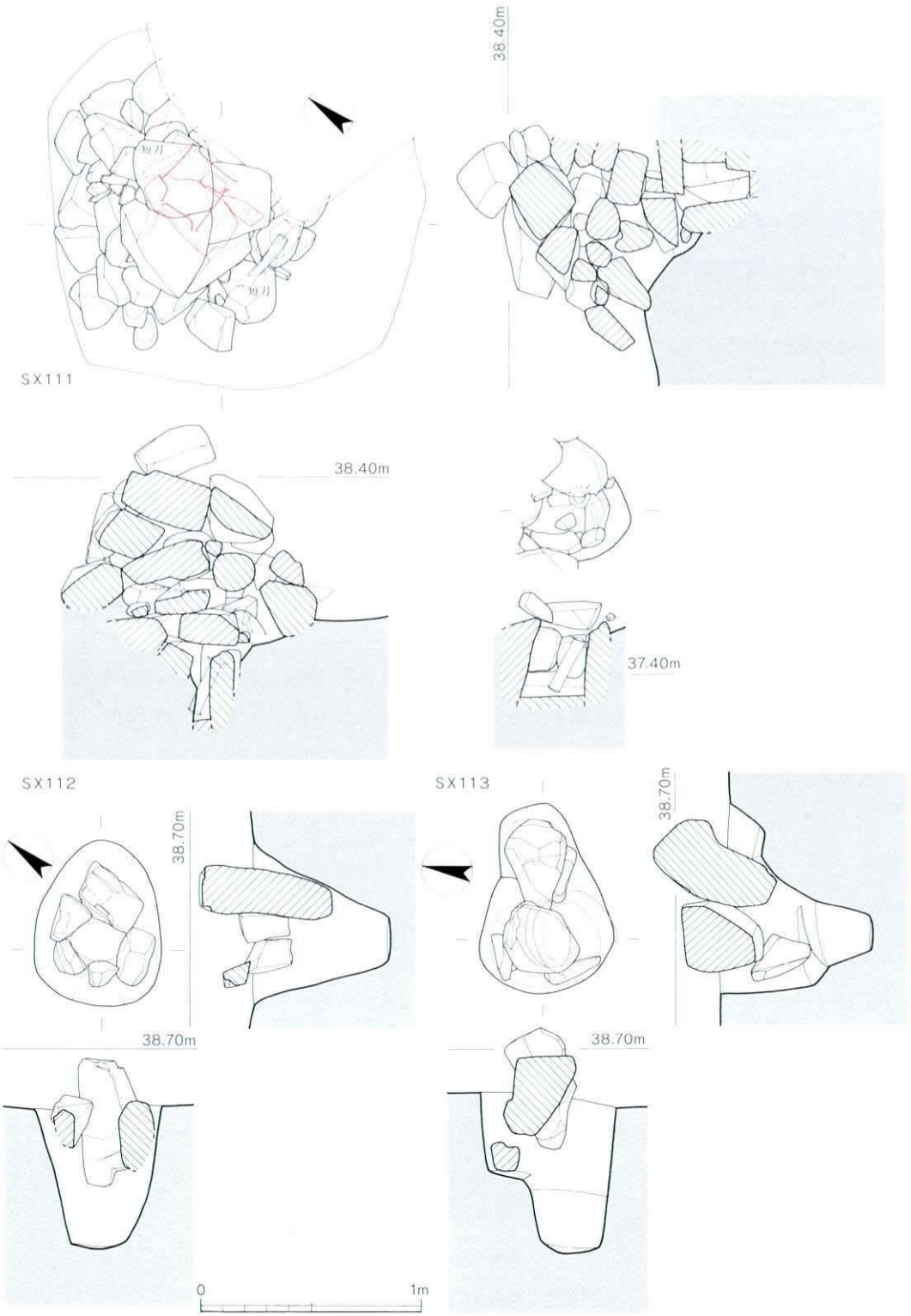


Fig.124　経塚SX111・112・113実測図（1/30）

干掘り下げ再度検出を行い，小石室を発見した。小石室は長さ60cmほどの大きめの石を東側に立て，それを小さめの石４個で繋いでいるが，底面の敷石はみられなかった。掘形は57×75cmの楕円形を呈するが，底面は石の下場より25cmも下がっている。経筒の出土はなく，小石室埋土中からは木炭の細片が出土したのみで，埋土が堅く締まっていたことから早い段階で盗掘を受けたものと思われる。

ＳＸ113（26次）（Fig.124，PL.69）

ＳＸ112のすぐ北側に位置する。掘形は長軸86cm，短軸60cmの不整形を呈し，深さ68cmを測る。掘形内には長さ57cmと36cmの石が残るが浮いた状態であり，経筒も検出されなかったことから盗掘を受けたものとみられる。埋土中からは木炭の細片が出土したのみであった。

7）墓

中世以前の墓と断定できるものは，西門周辺の博多側下成土塁上に２点検出されているのみである。

ＳＸ148（33次）（Fig.125）

下成土塁上段テラス東端に位置し，釘が出土していることから釘を使用した木棺墓と考えられる。長軸方向はＮ41°Ｗで，土塁軸線にほぼ直交している。掘形は長方形で長さ1.5m，幅0.4m，深さ0.3mで，墓坑の南側を中心に木棺を留めた釘が10本出土している。木棺の痕跡や副葬品，骨は見られなかった。埋土中から土器片が出土しており，13～14世紀代を上限とすることが分かる。 **木棺墓**

ＳＸ149（33次）（Fig.125）

ＳＸ148の南約９ｍに位置し，長軸方向がＮ25°Ｅと土塁軸線から大きく振れた埋置角度を呈する。長さ0.9m，幅0.4m，深さ0.3mの長方形の土坑状を呈するが，壁面は直立しており，

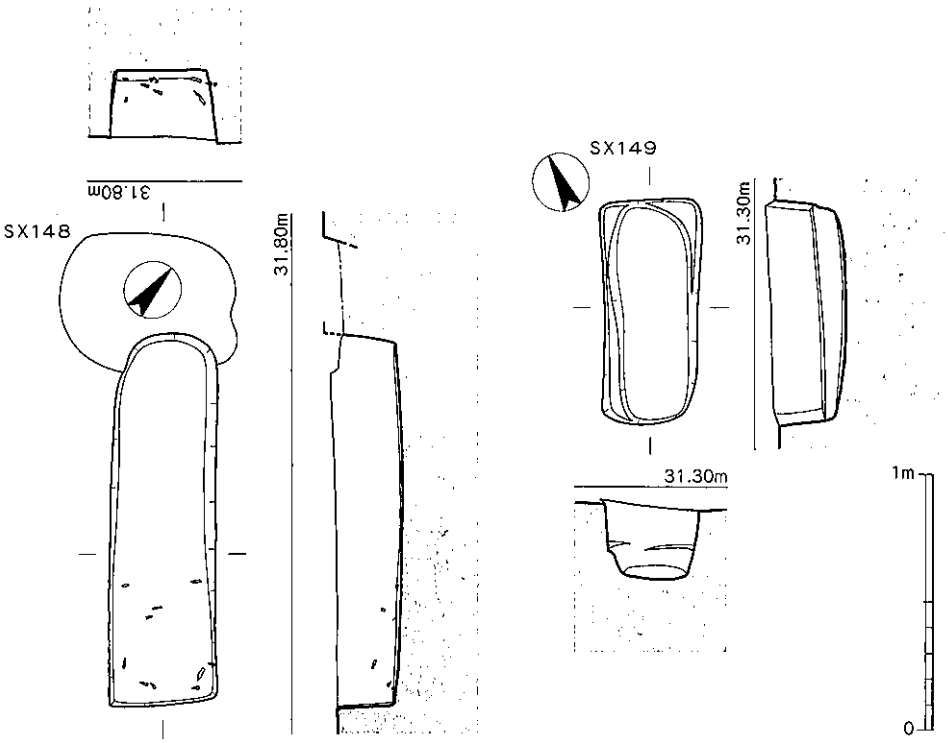


Fig.125　墓SX148・149実測図（1/30）

小児墓坑と考えられる。出土遺物もなく，明確な時期は不明であるが，埋土が淡赤茶色粘質土で古い印象を受けることから，あるいは水城築堤以前，縄文～弥生時代の可能性も考えられる。

8）瓦窯

水城跡では，いわゆる「水城瓦窯」と呼ばれる２基の瓦窯が存在し，太宰府市教育委員会によって，31次調査として調査が行われている。既に詳細については，報告書が刊行されているため（太宰府市教育委員会2003），その報告記述に基づき，概要を再録する。

31ＳＸ001（31次）（Fig.127）

東土塁の太宰府側下成土塁の裾部に築造された平窯で，残存する全長は4.35m，標高差は0.5mであることから，傾斜角は６° 30′である。前庭部・焚口部・燃焼部・焼成部が残存し，奥壁・煙道は既に消滅し，灰原は未調査である。前庭部は縦1.0m，横1.6mの範囲で検出がなされている。焚口部は，開口部で幅0.4m，燃焼部との境界で幅0.5mで，中へ行くほど広がる構造を呈する。燃焼部は焚口部では幅0.5mだが，そこから急激に広がり，焼成部との境界では，幅2.0m

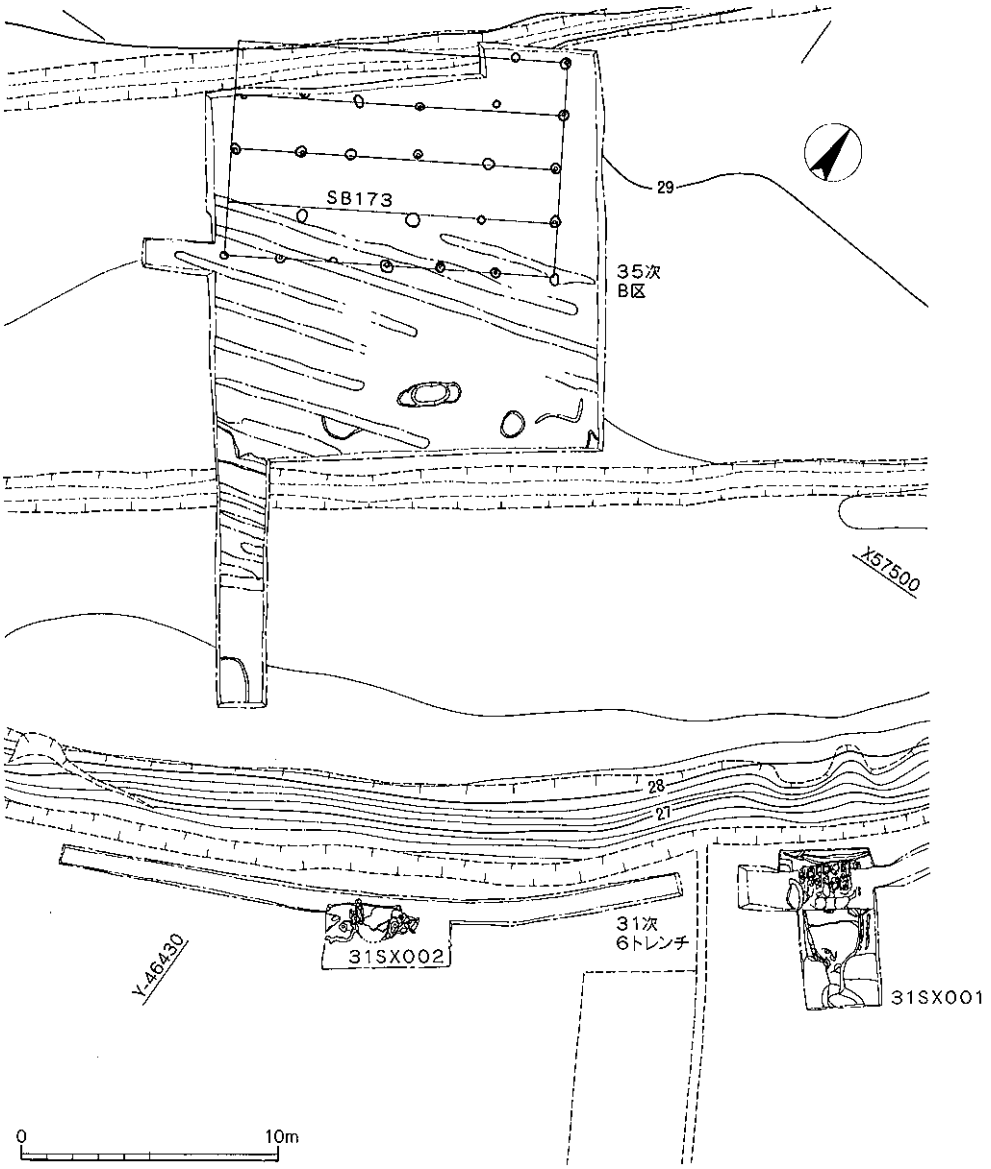
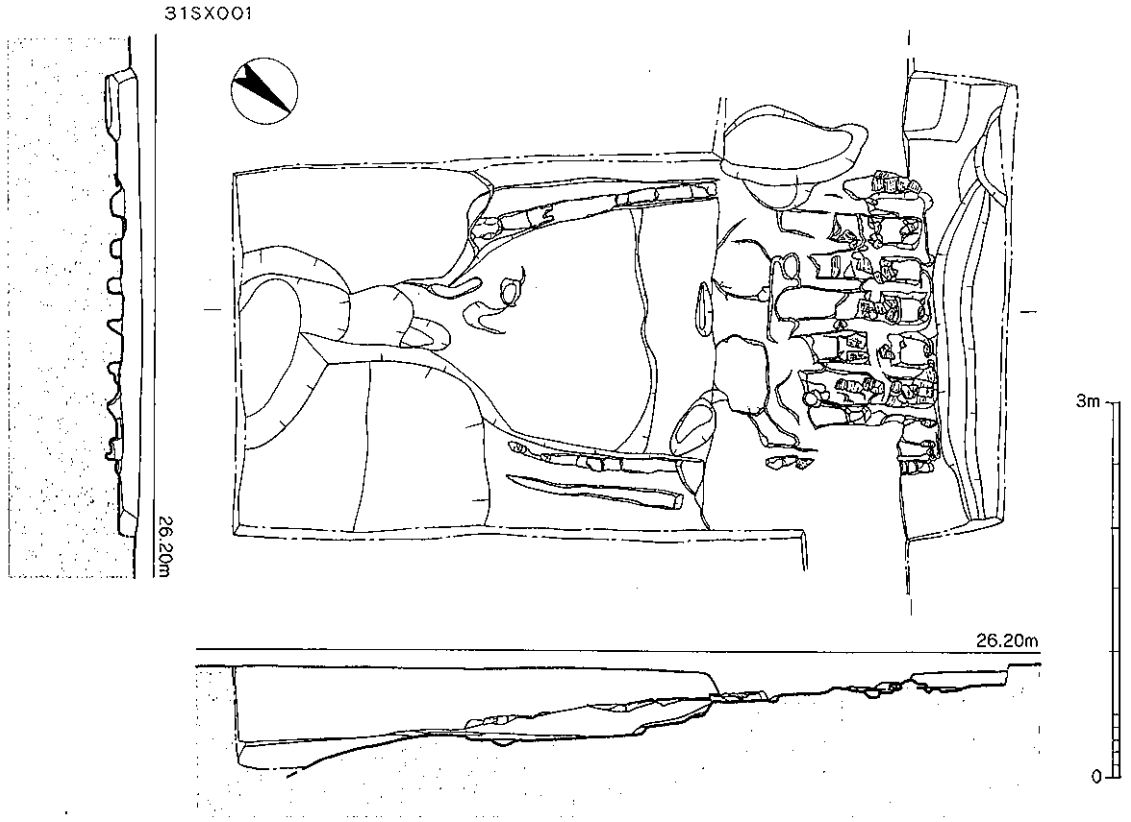


Fig.126　東下成土塁後面（31・35次B区）地形図（1/300）



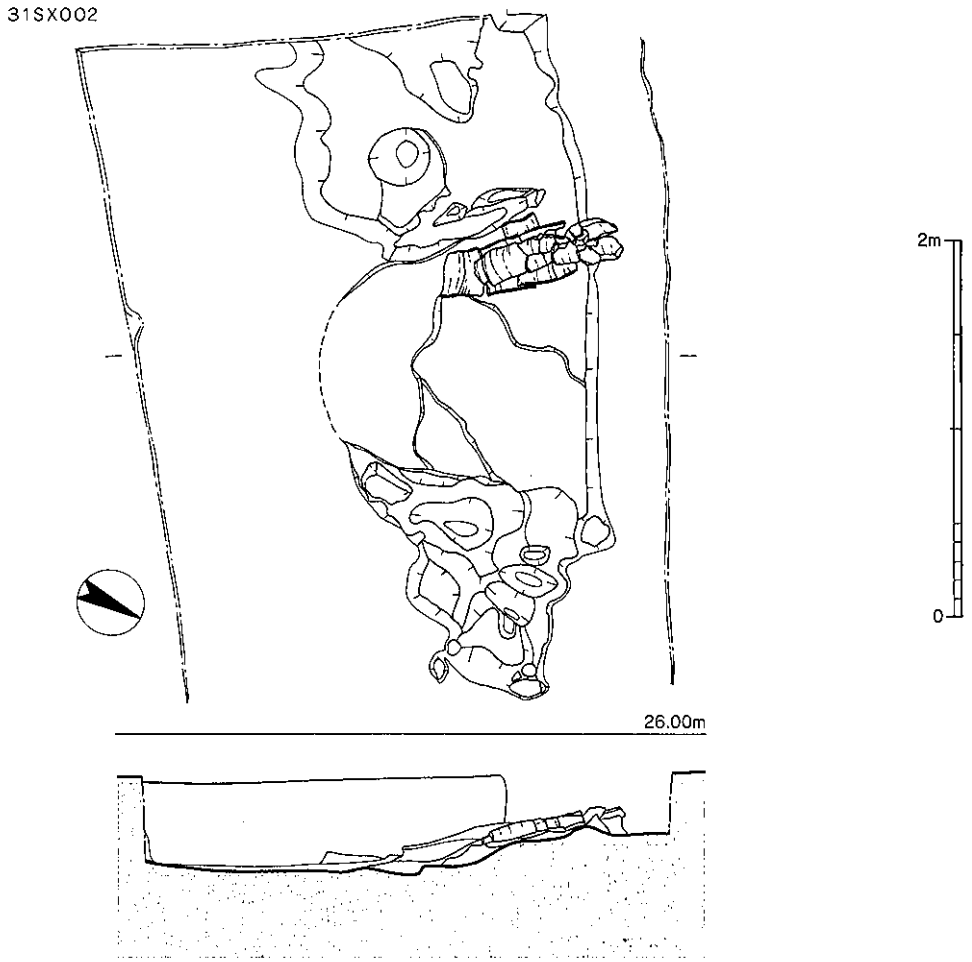


Fig.127　瓦窯31SX001・002実測図（1/40・1/60）

となる。両側の壁面は無文塼を支柱として粘土を貼り付けて作られ，酸化・還元層はこの無文塼の外側にまで及んでいる。燃焼部の北側には段差が形成されている。焼成部は，燃焼部との境界に径0.5mの２本の分焔柱を持ち，その距離は0.7m程である。その分焔柱の奥から，焼台を窯の長軸方向に６列配したロストル構造をなしている。

ロストル構造の平窯

31ＳＸ002（31次）（Fig.127）

31ＳＸ001の約15m西側にあたる下成土塁裾部に構築され，31ＳＸ001同様，煙道を土塁側に向ける平窯である。燃焼部と奥壁･煙道のみが残存しており，他の部分は既に消滅している。31次調査では燃焼部分の調査が行われており，その所見を以下に再録する。燃焼部は幅約２mにわたって検出されており，西側の壁面の立ち上がり部分に下に平瓦，上に丸瓦を組み合わせた導水管状の施設が検出されている。瓦窯に伴うものか否かは不明である。

なお，これら２基の瓦窯は，31ＳＸ001の焼成部で出土した須恵器蓋から，８世紀後半が下限と考えることができる。

９）その他の遺構

粘土採掘坑

ＳＸ205（38次）（Fig.128，PL.70）

西門地区博多側の38次調査Ａ区南西部で検出された土坑状の遺構で，上段部は径1.2～1.5mの範囲を楕円形に掘り窪め，その下段部分，すなわち地山が粘土層となる部分を，平面多角形状に直に落として，深さ0.3mにわたり掘り取っている状況が窺われる。このような特殊な形状から粘土採掘坑と推測される。溝ＳＤ190を切っていることや出土遺物から12世紀代のものと考えられる。

ＳＸ206（38次）（Fig.128）

ＳＸ205の南側に隣接して検出されており，上面の1.3～1.9mの範囲を楕円形に0.1mほど掘り下げ，その下段部分を平面多角形状に直に落として，深さ0.5mにわたり地山層を掘り取っている。出土遺物からみても，ＳＸ205とさほどの時期差はない。

竪穴状遺構

ＳＸ207（38次）（Fig.128，PL.70）

38次調査Ａ区の南側中央で検出された遺構で，東西８m，南北９m以上の方形状の竪穴状遺構である。深さは0.75mで地山層を検出しており，その地山の形状が小さな凹凸が大量に検出されたため，調査担当者は粘土採掘坑との所見を出している。しかし，非常に大きな平面プランを持つことなどから，必ずしも粘土採掘坑とも言い切れないために，今回の報告では性格不明の竪穴状遺構として報告する。今回，再検討を行う中で，この遺構は竪穴住居跡で床面の凹凸は貼り床を外した状態かとも考えたが，時期が12世紀以降に求められることなどから，必ずしも成案を得ているわけではない。切り合い関係としては土坑ＳＫ186・187，溝ＳＤ190に切られているが，出土遺物からはさほどの時期差は見られない。

【参考文献】
横田賢次郎1977「大宰府検出の井戸」『九州歴史資料館　研究論集』３　九州歴史資料館

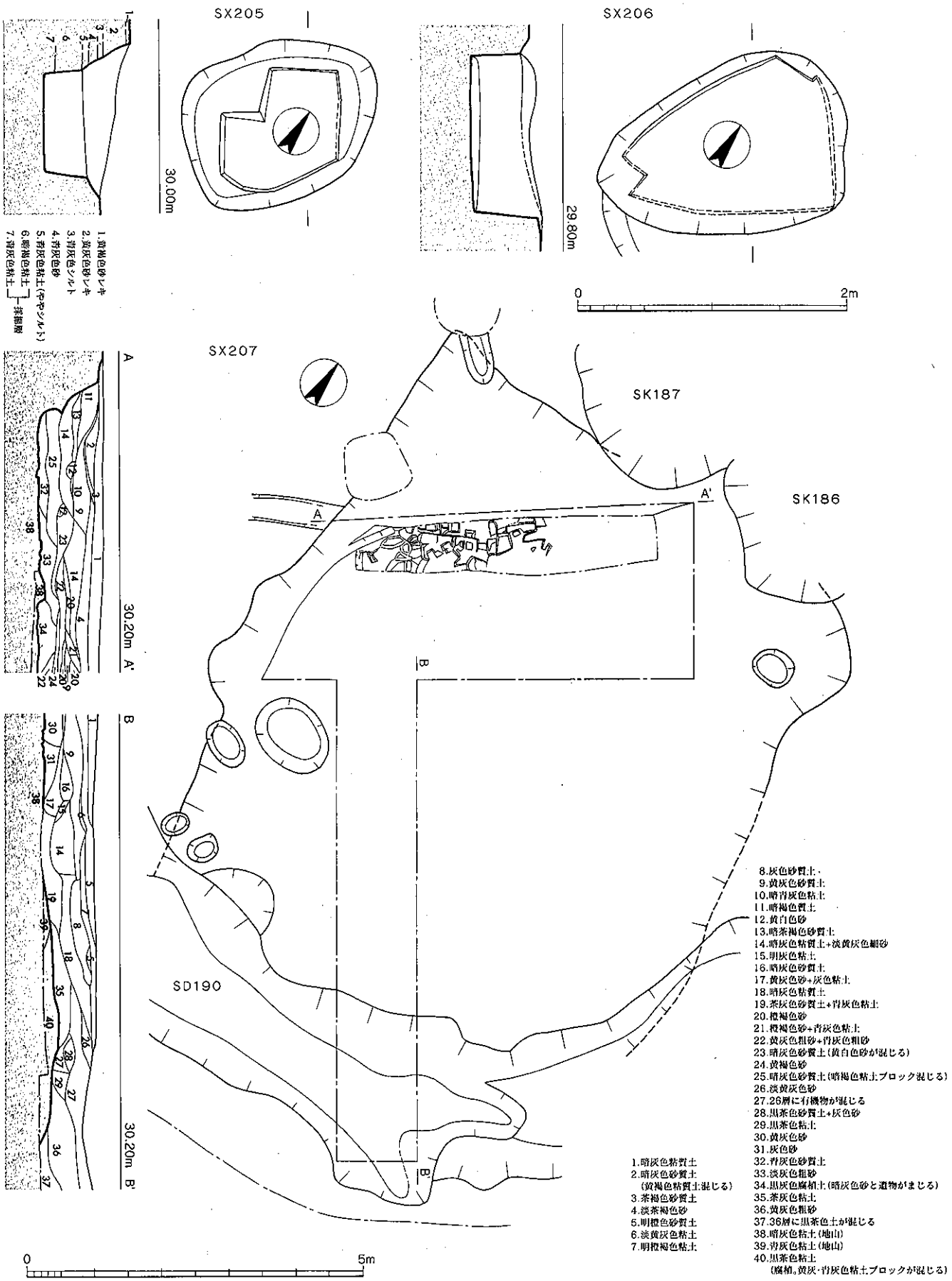


Fig.128　粘土採掘坑SX205・206，竪穴状遺構SX207実測図（1/40・1/80）

（9）水城築堤以前の遺構

a.縄文時代の遺構

竪穴住居跡

ＳＩ159（33次）（Fig.129）

第33次調査において，上段テラスに設定したP-1区の西側で検出した。樹木の保全のため，全体の約2/3の検出に止めている。平面プランはやや隅丸の長楕円形で，東西方向の長軸約2.7m，南北の短軸約2.1mを測る。検出面から床面までの深さは約0.2mで，床面から壁面への立ち上がりは擂鉢状に近い。ピットの配置に規則性はなく，主柱穴は不明である。床面中央のやや南側で検出したピットは径0.45m，深さ0.28m程度で，埋土は粘性が強い。なお，埋土の土層観察で，住居内にレンズ状に落ち込む堆積状況が確認できたことから，住居の上部が削平を受けていることが分かる。住居跡出土の土器群は埋土（6層）から出土した。遺物から後期末～晩期初頭頃と考えられる。

b.弥生時代の遺構

竪穴住居跡

ＳＩ177（36次）（Fig.129，PL.70）

Ｂ区南部で検出した。南西側1/3程がトレンチ外に広がるが，完掘していない。平面形は円形で直径約5.5m，床面までの深さは残りのよい南壁側で0.48mを測る。主柱穴は3基確認したが，その規則性から調査区外にさらに2基が想定され，5本柱になると考えられる。柱穴は長径約0.4mの楕円形で，深さは0.7～0.8mと腕を伸ばしても底に届かないほど深く掘られている。床面中央には長軸0.83m，短軸0.47mの楕円形土坑と，それを挟んで対になる2つの小ピットを検出した。いわゆる松菊里タイプの住居である。楕円形土坑からは黒曜石の剥片と木炭が出土したが，壁面や床面は全く被熱しておらず，屋内炉ではないと考える。床面はほぼ水平で，灰白色土による貼床を施しており，特に主柱穴間は固く締められていた。出土遺物は黒曜石の剥片十数点と，甕と思われる弥生土器の胴部小片が1点出土したのみである。

貯蔵穴

ＳＫ174（36次）（Fig.129）

Ａ区北西部で検出した，いわゆる袋状土坑である。平面形は不整円形を呈し，上面で径1.45～1.68m，底面で径1.55～1.59mを測る。現状の深さは0.93mで，床面はほぼ水平となる。壁面は上部に向かって窄まる。埋土は赤褐色砂質土を主とし，壁面の崩落土と思われる地山の花崗岩バイラン土も含まれる。出土遺物は石斧の細片と思われる石器片が出土したのみで，土器は出土していない。貯蔵穴の形状から，弥生時代前期末頃のものと考えられる。

土坑

ＳＫ178（36次）（Fig.129）

Ｂ区南部で検出した。ＳＩ177を切る。平面不整円形で，南半部は調査区外に延び，規模は不明である。北～東側にテラスを持つ。床面の深さは0.74m。遺物は出土していない。

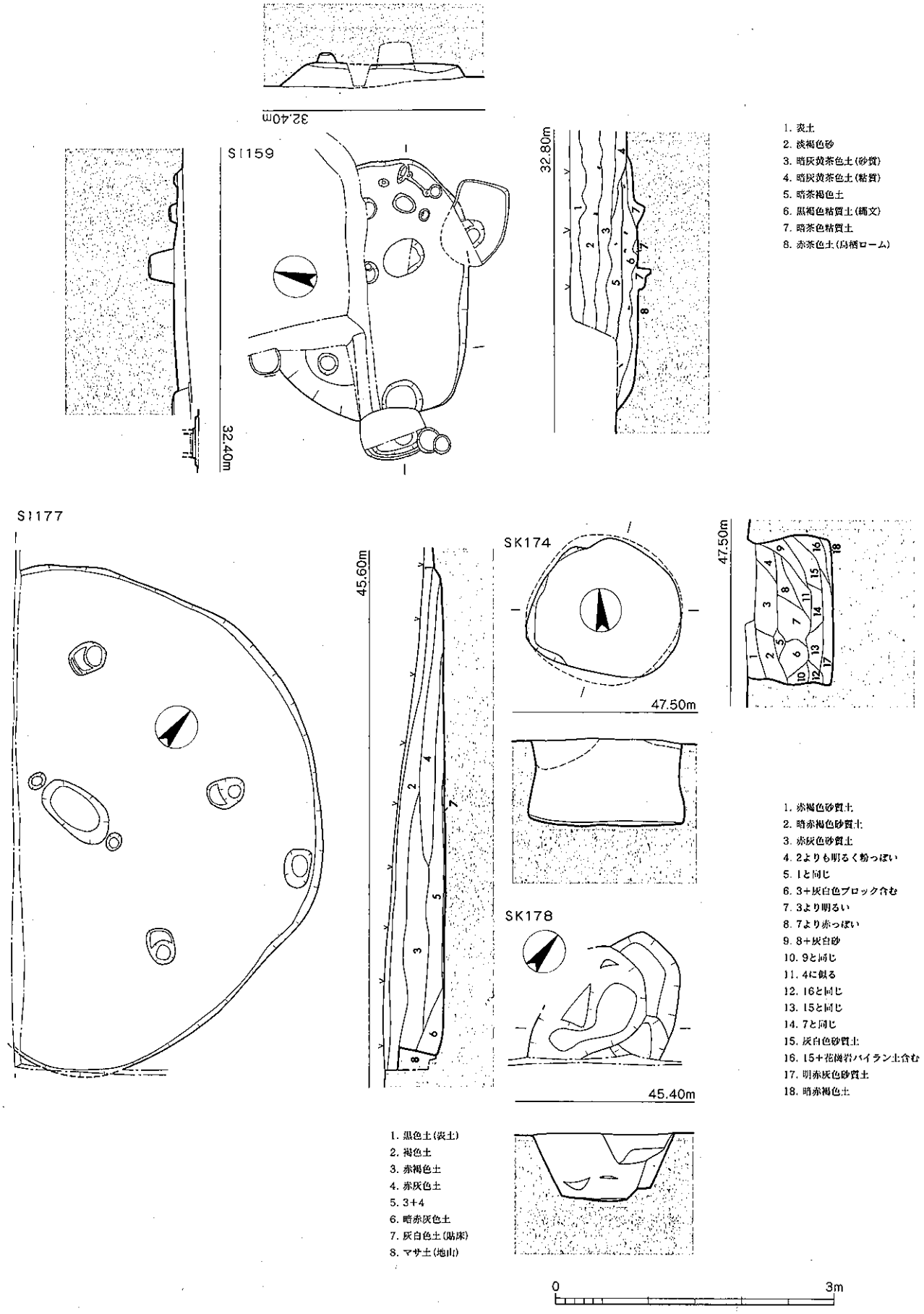


Fig.129　水城築堤以前の遺構実測図（1/60）

報告書抄録

ふりがな	みずきあと
書名	水城跡
副書名	
巻次	上巻
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小田和利・杉原敏之（編集）・岡寺　良・一瀬　智
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818-0118　福岡県太宰府市石坂４－７－１　℡ 092-923-0404
発行年月日	2009年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
水城跡	太宰府市大字水城1-1外	40221	210050	33 31 16	130 29 50	691127～090224	10,250㎡	学術調査 環境整備 道路建設 住宅建設 水道工事 災害復旧
	大野城市下大利4丁目1-1外	40219	190130					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水城跡	防塁	飛鳥～平安	土塁・柱穴列・門・石垣・官道・木樋・排水施設・濠・杭列・石敷遺構・掘立柱建物・井戸・瓦窯・経塚・土坑・溝・墓・粘土採掘坑		
	集落	鎌倉～室町	掘立柱建物・土坑		
		江戸	掘立柱建物・土坑		
		弥生～古墳	竪穴住居・貯蔵穴・土坑		
		縄文	竪穴住居		

要約

水城跡は、『日本書紀』天智天皇３年（664）の条に、「筑紫に大堤を築きて水を貯しむ。名けて水城と曰ふ」とあるように、７世紀後半に唐・新羅の侵攻に備えて築造された防塁遺跡である。大堤は全長1.2km、高さ約７ｍの土塁とその前面に幅約60ｍの濠を備えた他に例を見ない遺跡である。

福岡県教育委員会及び九州歴史資料館では、1970年の福岡南バイパス建設に先立つ第１次調査を端緒として、主に平成５～20年度まで大宰府史跡発掘調査年次計画に基づいた国庫補助事業により、水城跡の調査を通算27回行った。調査の結果、土塁・濠の構造や、西門跡の３期にわたる変遷などの成果を上げている。

本報告はこれら一連の水城跡の調査における総括的な正式報告書であり、本書（上巻）は、検出遺構について報告している。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 20	登録番号 03

水　城　跡

－上　巻－

平成21年３月31日

発　　行　　九州歴史資料館
　　太宰府市石坂４丁目７番１号
印　　刷　　株式会社　三光
　　佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1